

笑わない彼にもどうか幸運を。 スマイルプリキュア！

新生ブラックジョン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は笑わない。そして自分が幸せだなんて思いもしなければそうなれるとも考えない。ただ無気力で、無愛想で――

ところが、何故だろう。思いがけない出会いを経て、数々の経験をして、彼の中で変化が起きる……。のだろうか。願わくば、彼にも。笑わない彼にもどうか幸運を。灰谷真澄は5人の個性的な少女の共通したある秘密を知りながら、それに度々巻き込まれていく。度々”。

※pixivでも同時投稿しています。

目次

1	ハッピーマイウェイ	1
2	サニーサイドアップ	19
3	ピースサイン	38
4	マーチングバンド	57
5	ビューティヘアー	74
6	君の名はキュアキャンディ	93
7	嘘みたいな本当の話。	112
8	隠し味の秘密	130
9	小さな世界	149
10	新しい力	167
11	修学旅行騒動記	187
12	修学旅行騒動記	208
5.7	特別編 序章	227
一章		230
二章		242
三章		256
終章		268

1 ハッピーマイウェイ

新学期を晴れて迎えた学生達は恐らく期待に胸一杯膨らませて登校する者も居ただろう。今までの付き合いをそのままに、クラス替えを経て新たな仲間巡り合うなんて事もあるんだろう。その日、周りよりやや遅れて今年初めての登校だった。空は何処までも青く澄みきっていて春先の陽気も手伝ってか目蓋が重い。今朝、家を出る直前にチラリと見たニュース番組の占いコーナーをふと思い浮かべる。

——素敵な出会いの予感！そんなあなたのラツキーカーはピンク！・・・自分の星座は割りとランキングの上位にあり、担当するアウンサーは確かそんな事を言っていた。皮肉だ、実にそう思う。ピンクなんて自分の趣味じゃないし「素敵な出会い」なんてそもそも望んじやいない。学校までの道程ってのは気が重い。そう言えば、このままのペースで歩いていくと確実に遅刻すると思われる。ま、それでも一向に構わないのだけれど。

「ハッピープー！」

角を曲がって大通りに出たところでそんな声が聞こえてきた。道端に1人座り込んで誰かは制服姿で辺りをキョロキョロと見回している。取り敢えずスルーしとくに限るだろうと見なかつた事にして足早に進む。ところが——

「うわあー！ゴメンなさいー！」

「っとー！」

立ち上がって歩き出した彼女は盛大に俺の背中へと衝突してきた。転ぶ程でも無かつたので気にせず又歩き始めると、その女の子は心配そうにわざわざ丁寧な謝ってくる。

「・・・別に、平気」

「ホントに？良かったあ」

これ又心底安心した様な表情して大袈裟なものである。

「早く行けば」

「え」

「遅刻するよ」

携帯を取り出してディスプレイに表示される時間を見る限り、走りでもしないと間に合いそうにない。急いでる様なので一応教えると彼女は弾かれた様に走り出す。が、そのままさっさと行くかと思つたら唐突に立ち止まって振り向く。足踏みしながらこちらをジッと見詰めてくる。

「あもう、急がないの？」

「・・・疲れるし」

何かと思えばこちらを心配していると言わん程にそう声を掛けてきた。どうでもいい。だから何だって言うのか、別に死ぬ訳じゃない。けれど彼女は急いでいた割には中々行くこうとしない。

「何か」

「うん、やっぱり急いだ方が・・・」

「はいはい、解ったよ」

イヤに絡んでくる。仕方ないので急ぐフリくらいはしておこうと小走りをして見せる。そうして、彼女の方も納得してくれたのか漸く前を向いてあつという間に追い抜いていつてくれた。やがて目的地だった七色ヶ丘中学校の校舎を前に、より一層憂鬱な気分になりながらそこに足を踏み入れた。チャイムが鳴り出してどうにか教室に辿り着き、席に座ると間も無くして担任が姿を現した。挨拶や出席確認が何時も通り済んで、後はこのまま澁みなく授業が始まると思われた。しかし佐々木先生はそこである事を告げる。

「———それでは、転校生を紹介します」

何気に黒板の方へ顔を向けたところ驚かされた。と言つても、別にこの二年二組に転校生がやって来たからとかそういう言うんではない。自己紹介を促された「彼女」つてのが、ついさつきここまで来る道すがら出会ったあの女の子だったのだ。いや、間違いない。自分の席は廊下側の一番後ろ、端っこので教壇から遠いけれど。会った程でしかも、あの特徴的なヘアースタイルといい見間違うなんて事ない。・・・マゼンダ色をしていて、チョココロネみたいなツインテールの髪型。

制服からしてこの学校の生徒とは思ったけど。まさか転校生とは。ま、至って興味も何もないんだが。

「・・・自己紹介して下さい」

「っあ、ハイ！」

先生に促されてその場に硬直している。余程緊張しているんだろう、中々名前すら言い出しそうにない。一応、黒板には「星空みゆき」とあるからそれを見れば問題ないだろうが。

「まだあ？」

その時、痺れを切らしたある生徒が堪らず声を掛けた。

「へ？」

「じこしょーかーいー！」

「はっハイ！ええーつと、星空みゆきですつ。あの、ワタシツ・・・——ととつ兎に角、宜しくお願いします!!」

「・・・それで終わり？アカン、オチ無いやん。よっしゃ！ウチが代わりに自己紹介したる！」

その口調、イントネーションからして関西臭満々な1人の女子生徒がいきなり席を立てて転校生の隣に並ぶ。・・・いや、たかだか自己紹介程度にオチ要らねえのでは。てか、代わりに自己紹介ってなんだ。そして転校生の方も明らかに戸惑っている。

「せやなあ。見た感じおつちよちよいやけど芯は確りしとる。ほんで、星を見るんが大好きな弟がおつてえ、せやなあ・・・名前は、」
「星空ミタロー！」

陽気な関西娘渾身のボケにクラス中から笑いが巻き起こる。ヘアピンをした赤髪でショートヘア、日野あかねが盛大に転校生をダシに笑いをかつささう。

「あかね。星空さん困ってるでしょ」

気を良くして更なる笑いを得ようと盛り上がる彼女に待ったを掛ける別の生徒。

「そうですよ。それに挨拶は自分でしないと」

「ハイハイ。丁度ええから、あの2人を紹介するわ」

同調して至極全うな事を指摘する誰か。日野はそんな2人のクラ

スマートを各々、指し示して丁寧に紹介した。

「あつちが、緑川なお。スポーツ万能で、おまけに義理堅くって情に脆い。女番長って感じやなあ」

「ばっ番長?!」

「・・・ほんで、こつちのお嬢様が青木いのか。クラス委員で生徒会・副会長。勉強も出来て、おまけに男子にモツテモテ！」

「モテモテ・・・!?!」

「ほんで、ウチは日野あかね。去年大阪から引越して来たから転校生の気持ちはようわかんねん」

実に彼女らしい紹介文句に戸惑う女子達。緑色の髪をポニーテールした爽やかそうな印象を受ける緑川に紺色のストレートヘア、かつ揃った前髪は確かにお嬢様然とした雰囲気を持つ青木。と、序でに自分の自己紹介まで済ませる正しく生粋の関西人、日野。

「・・・ああ、眠い」

佐々木先生が感謝しつつ戻るように言うと言野はクラスメイト達とハイタッチなんかしながら席へ戻っていく。何がメルシーボクウだ。うるさくて眠れやしない。

「気にしないで下さいね。あかねちゃんは星空さんの緊張をほぐそうと思ってふざけただけだから」

「その娘は黄瀬やよい。めっちゃ泣き虫で、ちよつとツツコんだだけですーぐに泣いてしまうねん」

「よっ余計なこと言わないでよ!・・・泣いたのは、たったの三回だけだもん!」

少なくとも三回はお泣きになったと認められた一番前の席に座っていた女子。やっと騒がしいのも収まって居眠り出来ると思ったら最後の最後でまた騒がしい。黄色い髪の毛に白いカチューシャをした黄瀬。再びクラスに笑いが巻き起こった。・・・やれやれ。

「それってどんなん? 星空さんにとつてのハッピーってどんなんかなあって」

「ええつと、口では説明しにくいんですけどお・・・ハッピーってこうなんか、この辺がキラキラして胸がワクワクして——んー、兎に角

ウルトラハッピー！って感じの事なんです！」

要するにアレだ、本人にも上手く伝える事が出来ない訳だ。そこ曖昧なんだ。自己紹介はこうして終わり、皆が歓迎して温かく迎え入れる。

「ハッピーか。んなもん何処にあるんだか」

思わず口から出たその言葉は拍手に沸いた教室の中では誰にも聞こえなかった。それ以上に誰もこちらには気づいてない。さてと、退屈なホームルームが始まった事だからさっさと一眠りしよう。まだまだ先は長い。

目が覚めると同時にチャイムが鳴る音を耳にし、教室にある壁掛け時計を見て今の状況を知る。小さく欠伸して立ち上がろうとした所、ずっと同じ姿勢で寝ていたのが災いして肩や首回りが何となく痛い。

「もう帰るん？なんやったら学校なか案内しよか」

「ありがとう。でも日野さん部活でしょ？私1人で大丈夫」

「そっか。ほな、また明日な」

「うん。さよなら」

「バイバイ」

「——さてと」

「うわー！」

あれ、何だろ。この感じつい最近ありましたよーつと。肩から鞆ぶつけられて立ち止まると転校生と思いきり顔を合わせる。

「・・・あれ、確か朝に——」

「何々、星空さん。知つとんの？」

日野は転校生・・・星空さんの反応を見て知り合いか何かと思ったらしい。どうでもいい。構わず廊下に向かうと今度は佐々木先生がやって来て不意に呼び止められた。

「あら、灰谷君。星空さんを案内してあげてるの？」

「はい？」

初耳だ。振り向いたところ確かに彼女が着いてきている。何故。

「それじゃあ、お願いね」

「いや・・・ええ」

先生は笑顔で申し付けてさっさと歩き去る。この流れは、どうしてもそうしなきゃいけない感じなんだろうか。はあ、迷惑この上ない。

「・・・うおっしやあ！学校の中を探検だー!!」

「つちよ・・・」

「あ、アハハハハ——」

「何張り切ってるんだか。・・・はああ、止めてくれマジで」

突然の大声に全く望まない注目を浴びたところでさっさと面倒ごとは済ませてしまおうと考え、その場にも居づらいから向こうも何も言ってこないし学校案内をする事にした。

「ほわあ・・・広い音楽室」

「はああ」

「ここが理科室」

「ふあーあ・・・」

「ここが図書室か。誰も居ない図書室ってなんか不思議」

イチイチ反応する彼女を連れ回し、最後に行き着いた場所は図書室。実を言うと少し秤気になる本があつてざっと見てみたかったというのが本音である。

「ありがとう、学校案内付き合ってくれて」

「あー、うん。別に・・・」

「灰谷君、だっけ。本好きなの？」

「・・・いや、まあ。暇な時読むけど」

手に取って適当にページを捲り終えてそれを戻し、又別の一冊を本棚から引き抜く。すると星空さんも側に寄ってきて後ろから手を伸ばした。女の子らしいフワツとした香りが僅かにする。イカン、意図せずに嗅いでしまった。

「私も絵本とか大好きなんだ。何時もハッピーエンドで終わるお話とか」

「へえ」

詰まりはおとぎ話とか童話とかそういう類いか。俺とは違う。第一、彼女には悪いが俺達の歳で絵本も無いだろう。．．．一先ず確認が済んだので後はこのまま様子を見てから適当に切り上げるべきだろう、そう考えて彼女に声を掛けようとした。

「何、なんだろうこの光」

奥の本棚へ歩いていった背中を追い掛ける。何かを見つけたらしく足を止めている。これは――

(「ふしぎなとびら」)

そのタイトルの所謂「児童書」的な物を星空さんは手にしている。いや、それより気になるのは僅かに本棚の奥から漏れてくる光。星空さんは本をいきなり手渡すと光の源を探って本棚に並べられたそれらを弄り始めた。本を退かすと不思議な事に光が移動する。何となく気味が悪いと感じて止めようかどうしようか迷っていると事態は予期せぬ方向へ行った。――その瞬間一体何が起こったのか全く理解出来なかった。本棚全体が光り出したと思ったら、俺達は身体ごと宙へ僅かに浮いてそのまま光の中に吸い込まれていくのを感じた。そこはまるで異次元への扉だった。

．．．全ては夢か幻か。何処か遠くから声が聞こえる。最初は声という事だけで後は不鮮明だったが、次第にそれが何なのか明確になっていった。

「．．．．．くん．．．たに．．．．．くん．．．はい．．．灰谷君！」

「――っだあ！」

気を失っていたらしい俺を心配してなのか、彼女が顔を覗き込んでいた。――あービックリした。

「ねえ大丈夫？私心配だよ」

「っ全然！もう良いから。．．．て、ここは」

「私もよく解らないんだけど、確か学校の図書室に居た筈だよ。アハハハ．．．」

笑ってる場合か。目が覚めたらすっかり見知らぬ場所までワープしてるとだぞ。見渡す限り緑。地面は草地で遠くには木が生えていて、それでいて何て言えばいいか……。木の根が張り巡らされたとても表現するか。明らかに異様な場所に今自分達は立っている。「まさか、本当に異次元……」
「凄い。何処だろ、ここ。——綺麗……!」
「は」

「……これ、周りの壁全部に本が並んでるんだ!すごい!!」

確かによく見ると巨大な本棚がズラツと並んだ感じだ。こんな時に何をしゃいでるんだか、こっちは今にもパニック起こしそうになってんのに。だがしかし、一旦冷静になって考えてみよう。学校の図書室で本棚を弄くったら突然眩しい光に呑み込まれて、気付くところな所にやって来た。……本棚か。

「おい、ちよつと待て。やたらと弄るんじゃ——」

「キャンデイ!?!」

「はっ?きやんでいー?」

何を言ってるのかさっぱりだが直ぐに彼女を引き剥がさないと。また変な事が起きたら困るし。……が、その判断は遅かった。

「キャンデイが見えないよ!!」

「やつ止めてくれー」

カツチャン!

「ま、またあ〜?」

馬鹿ヤロオオオ!何しやがんだー!!……………
こうして再び光の中へ。

「うわああー!」

「ととっ!?!」

雪崩れ込む形で星空の両肩を掴んでしまい、恐る恐る目を開けた時そこには何の変哲もないただの路地があつた。至って平凡な街中。待てよ、外へ出られたのか。俺と星空さんとで互いに見合い、後ろに視線を向けた所そこに本棚が。

「商店街の」

「本屋さん?!」

「・・・助かった」

異次元を脱したらしい。それにはつい安堵する。あれは一体何だったんだろう、やはり幻か。

「——は！キャンデイー！」

だからその、さつきからキャンデイ、キャンデイってのは何なんだ。そんなに食べたいのかあんたは。てゆうか俺達上履きのままじゃねえか。勘弁してくれよ。で、そーゆー俺もついつい彼女の後を追っ掛けていたり。

「オオカミが！オオカミがあ！・・・クルウ〜!?」

やっと追い付いた、あれそのぬいぐるみは何だ。は？何、今喋って

「灰谷君、居たよ！この子はキャンデイー！」

「・・・あー、そう。だから」

さつきからずつとこの調子。端からはどう見えるんだか。少なくとも俺は、星空さんが不思議キャラか何かだと密かに感じていた。後、スゲー勝手なマイペースガール。彼女はその手にふわふわでモコモコした毛並みの縫いぐるみを抱えている。目はパツチリ、黄色くて大きな耳。雲みたいに白い体、ファンシーな見た目。女の子とかが好きそうだ。

「空からオオカミが来たクルウ!!」

「え？そんなの来るわけ・・・」

「しっ喋った。今コイツ喋った」

「うん、キャンデイはしゃべ・・・えっ?!」

「だよな！今ぬいぐるみがさ！」

「じゃなくて！ホントに何か居るし!!」

揃ってパニック、大パニック。もう何も噛み合わない。星空さんは空の方向いて何かを見て・・・おや。確かに何か居る。

「世界よ！最悪の結末・・・バッドエンドに染まれ！白紙の未来を黒く塗り潰すのだあ!!」

何処からかそんな叫び声が出たと思えば、辺りに言い知れない異様な雰囲気が始めた。明らかに空模様までがおかしい。快晴だった空には途端に満月が浮かび上がっている。夜空だ。時間の進み方が急に早まったんでなければ何だろう。そしてそれだけではない。

「ウルフルンが全ての世界をバッドエンドにしようとしてるクル!」

「バッドエンドって?」

「悪い未来の事クル!」

「悪い未来?」

「ほぼそのまんまじゃねーか。・・・ってか、これどういうことだよ」

周りを見て気付いた。満月が浮かんだこの夜空の下、そこに居た人達がみんな突然、その場に経たり込んで小さく眩き出した。おしまいだ、頑張っても無駄——そんなネガティブチックな事を囁いている。おまけにその人達からは変な色の禍々しい印象を受ける煙の様な物までが発せられていて、とてもじゃないが近寄りがたい。それに・・・

「何か、気持ち悪いな。——くそ」

「灰谷君?」

「大変クル!皆からバッドエナジーが出てるクル!」

さつきから聞き慣れない言葉を続けるのは人間の言葉を話すぬいぐるみ・・・的な何か。ああ、兎も角重々しくて頭もクラクラしてきたな。

「止めてクルー!!」

「ちよちよっキャンデイ・・・!」

「・・・何だアレ」

「——お前もこの世界に来ていたのか」

ぬいぐるみ的な生き物が呼んだ事で空中に浮いていたオオカミ的な何かがこっちに気付いて降りてきた。『オオカミ的な』とは顔立ちなんかを見ると絶対そうだけど、でもそいつは二足歩行・・・てい

うか完全な人間スタイルで袖のないレザースーツとジーパンを着こんで人間ぼくしている、でもやっぱり完全な人間ですら無い何かだからだ。他に表現のしようが無いではないか。

「世界をバッドエンドにしちゃ駄目クルウ!!」

「何それ、どういう事?」

「ウルツフツフツフ…未来は全てバッドエンドになる。頑張っても無駄なだけだ」

「違うクル!無駄なんか絶対ないクル!頑張ったらきつとハッピーになれるクル!!」

きつとハッピーに。本当なんだろうか。あれ、何考えてるんだ俺は。

「フンツ、ほざいてろ」

「——きゃっキャンデイの言う通りだよ!」

「…星空、さん」

「私だつて今日、自己紹介上手くいかなかったけどめげずに頑張ったからクラスの皆が助けてくれてなんとか出来た!…どんな事も最後まで頑張り抜くの。そしたら、何時か絶対ハッピーになれるんだからっ!!」

「何時か…それって何時の話だよ」

「何だお前?グダグダ言つてねえでソイツを寄越せ。…喰つてやる!」

俺の呟きは彼女達には聞こえていない。…オオカミもどきが言う「ソイツ」とは星空さんが抱えたぬいぐるみだろうか。

「私、決めた」

「はあ?お前、俺様が怖くないのか?」

「怖いに決まってるでしょ!」

「じゃあ何でソイツを庇うんだ」

「解んない。でもこんなちっちゃな子がいじめられてたら誰だつて守ろうと思うよ…!」

「いじめ…守つて、くれる…?——何で」

駄目だ、さつきから頭がボーツとしてきて辛い。本当にこの空模様

のせいなんだとしたら。

「震えてんじやねえか。だったらお前から喰ってやるよ！」

「逃げてクルウワー!!」

「はあっ灰谷君も!!」

「・・・えっ、何」

星空さんは俺の手を掴むと猛スピードで駆け出した。つられてこちらも走り出すが、後ろからあのオオカミもどきが一緒になって走ってくる姿を見ると納得はした。こりやあ早いとこ逃げ切らねばならないと直感した。

「キャンディを置いて逃げるクル！」

「そんなの出来ない！でも怖いー!!」

「おっ追い付かれる」

「いやああ!?!」

「このままだと君達も食べられちゃうクルウ!!」

そうだよな、そこには俺も含まれるんだ。こういうのを絶望的だと言うなら正にそれだ。

「でもでも頑張る！私決めたんだもんっ私もキャンディの言うこと正しいと思うからア!!」

「クルウ・・・!」

「てめえらのやる事、全部無駄なんだよお！」

「星空さん！」

顔から地面に倒れ伏してやがてオオカミもどきも追い付く。一先ず彼女に手を貸して立たせるが、もう駄目かもしれない。このまま、奴の言う通りなら喰われてしまう。

「・・・諦めないよ！私、頑張るって決めた事は絶対に！最後までやるんだもん!!」

オオカミもどきの言葉に彼女は直ぐに又起き上がって強く反論した。

「それが私の・・・それが私の・・・ハッピーなんだからああああ!!」

オオカミもどきの鋭い爪が振り掛かる。その時もう目を閉じる事しか自分には出来なかつた。けれど、そこで思ってもみない出来事が起きた。彼女が叫んだ瞬間、あの本棚の時以上の強い強い光が発した。

「何なの、これ——」

「もしかしてチミが・・・!」

「何、コレ」

「ッスマイルパクト」クルウ!」

「へ?」

「チミは伝説の戦士プリキュアになったクルウ!!」

光の中では何が起きていてどうなっているのか、堪らず顔を伏せていた為に解らない。聞こえてきたやり取りを耳にして暫くしてから顔を上げた時、そこに居た彼女の姿に心底驚いた。

「キラキラ輝く未来の光!キュアハッピー!!」

星空さんの姿は見違える程に変化していた。服装から髪型に至るまで全て別人と思うくらいに。制服は胸元に大きく目立つリボンが目を引く、ピンク色をしたそれはそれは派手なコスチュームに。髪の毛もそのマゼンダ色が一層明るく、三つ編みの様に長い毛の束になっていた。本当に僅かな間だったが辛うじて自分は彼女が星空さんであると、同一人物だと理解する。

「プリキュア、見つけたクルウ!!」

「・・・キャンディ、とか言うその生き物が大喜びしている。

「——なっ何なのこれ?!かっ可愛いイイ!!」

「・・・いや、そうじゃなくて」

「見て見てー!凄いやね?!ね!!」

あー、解った、もう解ったから。こんな事になって何をはしやぐん

だ君は。そんなに見せつけんなよ。しかし確かに驚いた。

「何だか知らんが、返り討ちにしてやるぜ」

「あ、星空さん。あいつ来るぞ」

「わああー！！あつそうだ！オオカミと言えば！」

「……で、これは？」

「三匹の子豚」じゃ、オオカミさんはレンガのお家を吹き飛ばせなくて……ハッピーエンドよ!!」

「成る程クル!!」

ああ、そういう事！成る程、かくれんぼみたいに人ん家の塀に飛び込んで身を寄せたと思つたら——

「んな訳ねえよアホ」

「ウルツフツフ！そいつの言う通りだぜ。……出でよ！アカンベエ!!」
オオカミもどきは赤い球体を頭上高く掲げる。すると邪悪なエネルギー？が寄り集まっていく様な光景を経て、自分達が逃げ込んだ民家の塀が突如意思を持った巨大な怪物へと変化して襲い掛かってきた。三角屋根に煙突、レンガ造りの家から赤と黄色の縞模様をした細い手足が生えた珍妙な出で立ち。赤い鼻を持った白い化粧の様な顔、それは道化師……所謂ピエロの様な表情をしている。何だコレ！実にふざけた姿をしている。だがこんなんでも襲われちゃあこつちは一溜まりもない。

「こいつはアカンベエ。ピエロ様のお力でキュアデコルのパワーをバッドエンドに変えて生み出した怪物だあ！」

……とオオカミもどきは得意気に説明していたがちんぷんかんぷん。星空さんは迫ってくるそいつを前に背を向けて駆け出し——

「うわああああー……!!」

た、つもりが勢い余って大ジャンプ。

「てゆうか、もう飛んでるじゃねーか！」

これがそのプリキュアの力って奴なのか。人間には絶対に不可能な跳躍力でグングンお空へ。……あれ、俺置き去りか。いやいや、今度はやあんと物理の法則に従ってみるみる落下してくる。待てよ、死ぬぞコレ。

「だっ大丈夫か・・・!?!」

「うええ、何とか——」

追い掛けてった怪物を突飛ばし、その上に見事着地。上手くクツシヨンになったからどうにかってどこか。

「つてなに今の? スーパーパワー!?!」

「プリキュアは世界を守る戦士クルウ!」

「おお! 解った! これってテレビのスーパーヒーローね!」

「えええ?! そんなんじゃないクル!!」

「任せて! 私やってみる。で、次は?」

「今任せてって言った秤じゃねえか」

「ねえ、灰谷君! 私、次どうしたら良い?!」

「しっ知るかよ。このお馬鹿ちゃんめ」

てゆーか呼ぶんじやねえよこんな時によお。悪夢なら今すぐ覚めてくれ。

「ふあああ! 怖いよー!」

自分がアカンベエの上に乗ってたことに今更気付いて又全力で逃げ始めた。戦えねえんじやん。

「何だあいつは。・・・アカンベエ!」

「うわああ追い掛けてきたよ!! ああ」

「ハッピーシャワーでアカンベエを浄化するクルウ!」

「何それ?!」

「プリキュアの癒しの力クルウ!」

「格好いい!・・・解った、やってみる!」

・・・あ、止まった。まさか本当に戦う気になったんだろうか。

「ハッピーハッピー! ハッピーシャワー!!」

攻撃、攻撃?——ええつと、これ攻撃なんだよな? うえー、全然何も起きねえじやん。オオカミもどきも困ってんで、反応に。あ、猫騙し?」

「はあ・・・はあ・・・何してんの。駄目じやん」

「・・・て、ちよつとどうなってるのよ!?!」

「こつちが聞きたいよ」

「ハッピーシャワー！ハッピーシャワー！ハッピーシャワーああ!!」

「止めとけよ、もう」

「・・・うん」

あそこまでカッコつけたらそりやあ収まるもんも収まらないよなあ。でも悪足掻きが一番良くない。何事も諦めが肝心だよ。

「そつそんな事言つたつてえ・・・!」

「諦めちや駄目クル！気合いが足りないクル!」

「絶対ウソ！私チヨーやる気だったもん！だから今チヨー恥ずかしいもん!!」

「何でも、良いから・・・!誰か何とかしてくれえ」

「アカンベエ!!」

「うわああ!!」

「灰谷君!!」

追っ掛けてくる怪物の長い舌が直ぐ側を掠め、地面にそれが接触して足元を掬われる。俺は盛大につつ転んだ。もう、いよいよ駄目だ。「ダメダメ、ハッピー。逃げてばかりじゃハッピーも逃げちゃう・・・!——灰谷君、大丈夫?!」

「つまあ、何とか」

「ゴメンね、巻き込んだじゃって。・・・あんな悪いオオカミさんに、絶対負けたくないッ!!」

彼女が叫んだ瞬間、腰から下げられたポーチらしき物が淡い光を放ち始める。

「スマイルパクトに気合いを込めるクルウ!!」

「・・・そつか!——んー気合いだつ気合いだつ気合いだつ気合いだつ気合いだつ気合いだああ!!」

どつかで聞いた様な掛け声を発した星空さん・・・ハッピーのポーチへ光が渦を巻きながら収束していった。

「何これ!?力が吸い込まれていく・・・!力が抜ける!」

「休まずに力を込めるクル!」

「茶番は終わりだ!アカンベエ!」

オオカミもどきの指示を浮けてアカンベエも動き出す。そして、

ハッピーは遂に渾身の必殺技を撃つ。

「プリキュア・ハッピーシャワー!!」

両手を使って大きく描いたハートマークからエネルギーを生み出し、彼女はそれをアカンベエを狙って叩き込む。それは見事に命中して怪物をあっという間に消し去った。跡形も無く、レンガは元あった場所へ塀として戻る。

「・・・何コレっ、もの凄く疲れたア・・・!!」

こっちも疲れた。2人して暫くの間、その場に経たり込んでいる内にオオカミもどきは何処かへ消えてしまった。周囲を見渡すと通行人達も何事も無かった様に又歩き出しており、星空さんも元の姿に戻っていた。

「はい、大丈夫?」

「うん」

彼女だつてよっぽど疲れてるだろうし、今さっきあんな目に遇って普通じゃいられないだろうに。でも立ち上がる手伝いをしようところらに手を伸ばす。笑顔で。俺はその差し出された彼女の手には頼らず、1人だけの力で腰を上げる。目の前にあった公園のベンチに向かうと改めて一息つく。

「ところで、色々説明して欲しいんだけど」

「プリキュアになって、キュアデコルを集めるクル。そして、キャンデイの世界を救って欲しいクル!」

「ええ!?全然解らないけど楽しそう!」

「何でだよ。・・・俺には関係ないけど」

「灰谷君?もう帰っちゃうの?」

「ああ。それじゃあ」

「えっと、またねー!」

出来ればごめん被りたい。・・・商店街を過ぎ去って住宅地に差し掛かり、ふと今朝の占いを思い出す。その結果が頭を何度も過った。素敵な出会いの予感!ラッキーカラーはピンク。あ?ピンク?

「ふざけんなよ、おい」

次に浮かび上がったのはあの星空さんの変身した、キュアハッピーとかいう伝説の戦士の姿。涙流しまくりで叫びまくって、必死に戦ってた彼女。ああ、そーゆー……………。

「そーいや、上履き——」

商店街に出る前は学校の図書室に居たのだ。自分の足先を見てその事に気付いた俺は靴を取りに元来た道を引き返した。

続

2 サニーサイドアップ

クラスメートの男子達がボールを追い掛けてグラウンドで汗を流す中、今、俺はというと校庭の片隅に1人座り込んで空を眺めている。右手に巻かれた包帯を見た体育教師の判断により、今日のサッカーを見学扱いにして貰った為だ。・・・出会った稗の転校生と共に謎のオカミもどきに襲われ、挙げ句その星空さんが突然プリキュアなる戦士に変身して戦うというとても信じがたくカオスな出来事を目の当たりにした昨日に原因がある。どうやら転んだ時に手首を痛めてたらしく、帰宅する頃には僅かだが腫れと痛みを伴った。母さんのやや大袈裟な手当てのお陰に他ならない、堂々と授業一つサボれるという思いがけない幸運に密かに恵まれた。いやあ、ツイてるな。――に、しても。街のど真ん中であんな騒ぎが起きたというのに今朝から実に平和なもんだ。今になってみれば全部が嘘に思えてくる。とは言え、この手首の怪我が何よりの証拠だが。

「おはようー!」

教室に着いて早々、唯一挨拶してきた星空さんは笑顔でこちらを見ていた。極めて素っ気無くしてホームルームが始まるまでの間、何時も通り机に突っ伏していると彼女は話を続けた。

「・・・怪我、してるの。大丈夫?」

「別に、何でもない」

右手の包帯に気付いたらしく、心配でもする様に彼女は見ていた。本当に大した事ないんだけどな。

「それでさ、昨日は大変だったね。私も色々ビツクリしちゃったあ」

色々。そんな言葉で片付けられる様なものじゃない。これ以上無いつてくらいヤバイ目に遇ったんだぞ。ところがこの星空さんときたら、笑いながら簡単に済まそうとしているのだから。勘弁してくれよ、ホント。てか当事者としての自覚ないのか。

「なんかね、キュアデコルを集めてキャンデイの世界を救わなくちゃ

いけないらしいの。それでプリキュアって——あれ、灰谷君。聞いてる？」

待てよ、そんな話してまさか俺を巻き込む気じゃないだろうな。つたく、そうだとしたらこれ以上この転校生に関わるのはきつと良くない。……という訳で徹底して避ける事にする。只でさえクラスの誰とも関わるつもり無いこの俺が、その中で唯一の要注意人物として認識しよう。で、関わらない様にと細心の注意を払う。

「よっしや！星空さん！」

男子が居るグラウンドと反対のコートでは現在女子がバレーボールの真っ最中。別に見たかった訳ではないが、ただじつとしてるだけってのも退屈だね。彷徨いてここまでやって来てしまったという。——そこで、偶々目にした星空さんは突っ立ってあたふたしながら降ってくる白い球を迎え入れる。……顔面から。決定的瞬間、メツチャ痛そう。

「ナイスや！」

「止めるよ！」

「ええ！」

その前の黄瀬のレシーブから思わぬトスへと繋がり、それに日野が動く相手チーム側の緑川と青木も反応してガードを固める。なかなか白熱した戦いが展開している。日野は跳躍と共に叫ぶ。

「日野ちゃんん……スペシャルアタアック!!」

という名の必殺技を炸裂させ、又しても彼女のチームは点を取る。何でもバレー部のエースアタッカー候補らしい。確かに独壇場と化してる。あ、星空さんぶつ倒れた。——ガサガサガサ……ん、何だこの怪しいの。

「クルウ!？」

「あ」

目の前を横切った不自然な葉っぱの塊を試しに取っ払うと、そいつはあの時のぬいぐるみ的な生物。何故。

「こんなとこで何してんだよ」

「つみゆきだけじゃ心配だからプリキュアを探しに……——って、

チミには関係ないクル」

何か誤魔化した気がする。ま、そーいや放つから関係ないし興味ないもんね。変な奴。

「ウロチヨロすんなよ。．．．見つかったら大変だぞ」

「ありがとクルウ」

別に礼を言われることじゃねえけど。葉っぱの塊はまたモサモサ移動する。俺も取り敢えずグラウンドに戻るとしよう、先生に見つかったらどやされるからな。

「あれ、灰谷君！」

日野と黄瀬が彼女へ手を貸して立ち上がらせる。げえっ、気付かれました！呼ぶな、手なんか振るんじゃない。しまったあ、他の女子もこっち気付いてる。グラウンドの隅っこで大人しくしてりやよかった。あ、後顔が赤い、ボール直撃だったもん。幸い、ここから見た限りでは鼻血は出てなさそう。さ、とつとと退散しよう。

待ちに待った昼休み。いやーどつと疲れた、殆んど寝ただけだ。教室で自分の席に留まり、さっさと弁当を平らげて一息着いてると、ある事が過って教室を出た俺は別の場所へ足を伸ばした。そこはあの図書室。怪現象と言うべきか、奇妙な体験をした所にわざわざ来たのは半分怖いもの見たさもあつたかも知れない。再度、自分の目で確かめたかった。一番奥にある本棚、何の変哲も無い筈だが昨日はここから別の場所まで一気にワープしてしまった訳だ。だとすると

「何にも無い、か」

しんと静まり返った図書室で、昼休み中に1人訪れて我ながら何をしているのか。あの時光った本棚に近付いて、試しに本を一冊手にとってみる。．．．やっぱり何ともない。光ったりもしないし何も起こらない。その場を後にする序でに外に少し出る事にした。学校内にある自販機で飲み物を買おうかと考えて一旦外に向かう。敷地内のある階段下に来るとそこは妙に騒がしい。．．．あれ、待てよ、この声は嫌な予感。

「プリキュアの事は秘密クルウ！」

「なんでえ？」

出た、要注意人物。後、何かさつきウロチヨロシてた生き物も居る。まだ徘徊してやがったんだ。関わらない、関わらない。

「それに、誰でもプリキュアになれる訳じゃないクル！」

「ええ、じゃあどういう人がなれるの？」

「『そり』は——」

「それは？」

「そりは……」

「それは……!？」

「知らないクル」

ズコー！聞いて損したあ。つて、そうじゃない。変に焦らす間に聞き入ってしまった。ところで、こいつらは何をしてるんだ？

「——でも、ドジでおちよこちよいな私でもなれたしなあ」

「確かにそうクル」

「つて。そこは否定してよねー……キャハハハつえ！日野さん?!」

因みに今、階段の所からこっそり下を覗く形で俺はそこに居る。日野と、後は黄瀬……？も増えた。騒がしいなあ、こいつら。しかし、あれかももう仲良くなってるのか。楽しそうにじやれてるな。転校生は必死にあのお喋りな生き物を隠そうとしてる。見つかったら大騒ぎになりかねない。

「……そうそう、さつきの『ギリプラ』やねんけどーウチ、パスするわ。今はバレー部の事で頭一杯やねん。絶対、エースアタッカーになりたいからな！」

これは詰まるところ、星空さんが日野をプリキュアにならないかと誘ったって事なんだろうか。しかし日野の方は興味ないみたいで断った、そういう状況ってことか。待て待て、俺は一体何を納得してんだ。関わりを持たないようにしてんの。しかも盗み聞きみたいな真似までして……。昼休み後、そんなこんなで残りの授業も乗り気って無事放課後を迎えた。さつきと帰ろうかと鞆持つて教室を一

番に出たら思わぬ相手に呼び止められた。え、俺何かしましたか。まさか授業中の居眠りに気付かれてしまいましたか。ハイ、先生、ごめんなさい。

「大丈夫？ほら、クラスの皆とはどうかしら」

「はあ、まあ別に。どうってことは——」

どうやら違うらしい。あー、ホツとした。でもこの時間は何だろう。特に問題もないし、どうってことはないのだけれど。佐々木先生は何処か探るような、そういった具合で慎重に言葉を選びながら話している、何だかそんな雰囲気だ。勘違いか？

「昨日は星空さんに学校を案内してあげたんでしょ？まだこつちに来て、彼女も色々大変だろうし……」

「……はい」

「友達が出来ることはとても良い事だから、灰谷君も頑張つてね。何かあったら先生に気兼ねなく相談して」

先生はそう言って去っていった。要するに新しいクラスに馴染めそうかとかそういう事。だとしたら、どうもしないな。というか先生、確実に何かを勘違いしてますよ。まあ、新学期早々にあつた春の遠足も完全にすっぽかしたしな。担任としたら気掛かりなんだろう。最近まで割りと長いこと、学校来てなかったし。でもなあ、だからって転校生と仲良くなりたいたい訳じゃない。あー、どうでもいい。……帰ろうとしたら外は当然だが周囲に大勢の生徒がごつた返す。仲の良い友達とお喋りしながら帰っていく奴も居れば運動部なんかは体育着に着替えて早速練習に励んでいる。——待てよ。何やら背中から嫌な気配。もしや。

「灰谷君。今帰るの？」

「ああ」

出たー！目下、避けるべき要注意人物になりました転校生・星空みゆきさん。が、こちらも徹底して無視すれば良いのだ。

「ねえねえ、聞いてよ。私ね、キャンデイに言われたから新しいプリキュアを探そうとしてただけど……」

「無視だー無視っ」

「それで、私今日思ったんだ。運動神経抜群の日野さんに優しい黄瀬さん。2人だったらピツタリだし、プリキユアになつて欲しいなあつて。でもキャンディは誰でもなれる訳じゃないって言うの。確かにそうかも知れないけど——」

“ドジでおつちよこちよい”なお前でもなれたつて話。聞いたよ、俺には関係ないつつの。まだ着いてくるのか。

「灰谷君はどう思う？やっぱ日野さんか黄瀬さんだと思う？…あ、でも日野さんはバレー部があるから無理って断られちゃったんだ」
「……………」

「灰谷君？…おーい！聞いてるー？」

「——つたく、うるさいな」

「え、今よく聞こえなかった。ゴメン、何て…」

「俺が知るかよ。プリキユアがどうか、日野がー黄瀬がー、とか！んなもん知るか。俺には一切関係無いから。じゃあな」

我ながらついつい声をあげてしまった。本当に鬱陶しい、実際に、気を取られて逃げるように歩いていた俺は通り掛かった。そこは校内の体育館側のコート、こんな所へ用は無かつたんだが。どうやらバレー部が現在使用している様で、足を止めて見てみるとあの日野の姿もある。すると星空さんはコートを囲む石段に鞆を置いて試合風景を食い入る様に眺める。彼女は拳を振り上げて熱心な応援を始めた。ボールが高く打ち上がり、鋭いスパイクが決まる。日野は咄嗟に反応した様だったが間に合わず阻止に失敗する。その後も、自分にはよく解らないがらしくないと言うべきかミスが続いて思うように点を入れられず、それどころか反撃すら儘ならない、そんな印象を受けた。星空さんもやる気満々で応援していたが拍子抜けといった具合。側に居た他の女子生徒が話している。

「今のエースって日野さん？」

「うーん…どうだろ。あたしはユカがエースだと思うなあ」

と言った彼女の視線の先で仲間とハイタッチする少女。片や、日野は下に俯いて顔を上げようとさえしない。

「日野さん、大丈夫かな」

星空さんがポツリと呟く。まあそういう時もあるだろうな。誰だって調子が悪くなったりするものだろう、一般的に考えると。現に体育の時は、あの同じスポーツが得意そうな緑川なんかを相手にして活躍していたみたいだし。去り際に振り向くと星空さんはまだ見ていくつもりなのか石段に座ったまま。コートに立つクラスメートの姿を見詰めている様だった。これ以上、しつこく付きまとわれなくて良かった。暫くして、後は寄り道もなく真っ直ぐ家に到着した。先ず玄関先から冷蔵庫に直行して取り出したジュースのパックから自分のコップに中身を注ぐ。気疲れして喉が渴いた。

「ちゃんとうがい手洗いしてね」

リビングに母が入ってくる。忘れてた、と、それらしいリアクションで言われた通りそれらを済ませ、ジュースを飲み干した俺は自分の部屋で即行寛ぐ。何時もみたいに漫画読んで昼寝、晩飯時まで時間を潰すという非常に有意義な過ごし方。因みに宿題があれば大抵後回しだ。

「悪いんだけど、ちよつと買い物行ってきてくれる。夕飯の支度もあるし、あの子も友達の前に行ってるし」

ノック数回、こちらが了承してドアが開く。もう一眠りかと考えていたら母が部屋に入ってきた。あの子つてのはこの家の長女で我が妹である。成る程、どうりで家の中が静かだと思ったら居なかったのか。母から頼まれたお使いで商店街まで一走り。大体この時間帯の店先は何処も、夕飯の材料を買いに訪れた主婦で賑わっていて活気に溢れている。えーと、確か大根一本だったな。八百屋に向かうと店主が威勢よく出迎え、それらしい立派な大根を選んだつもりで購入する。夕方、日も傾きかけてすっかり辺りはオレンジ色に染まっている。最短ルートだと、少なくともそう思ってた河川敷を通り掛かった。

「げえ、最悪っ」

前に行く通行人のシルエットが明確になっていくと、それが見覚えある特徴的な髪型をした例の彼女だと気が付いて、直後にこちらは歩くペースを急激に低下させる。学校に居る時ならいざ知らず、何故その外でもあいつに出会すのだろうか。偶然というものの恐ろしさをこ

の瞬間だけで嫌というくらい痛感した。大袈裟に聞こえるかも知れないが苦手意識を多分に持っているこちらとしては寧ろ、これは妥当な表現であると思う。星空さんはまだこちらに気付いていない。

「ええい、面倒だ」

一旦、引き返そうかとも考えたが素通りしようかと再び歩き始める。星空さんは何かに気を取られているのか川の方に向かって叫ぶ。……いや、正確には電車が行き交う高架下の辺りへ手を振っている。その時、星空さんは大きく体勢を崩した。足を踏み外してよろけた彼女は俺をも巻き込みながら河原の土手を転がり落ちていく。側を横切った際に咄嗟に掴まれた事で2人仲良く地面に。イツテェ！もうやだ。「ちよつ大丈夫かや!？」

「……大丈夫じゃねえ」

「イタタタ——へっ、はいたに、くん」
「降りろお」

何処に乗っちゃってんだよ、おい。女の子にのし掛かられる状況、別に嬉しくもなんともない。何で俺が下敷きなんだよ、退けよ。

「あんたも平気か?……ええつと、確かおんなじクラスやったな。えー……」

「灰谷君だよ、日野さん」

「ああ、せやったかな。おかしいな。ウチ、クラスメート皆の顔と名前は覚えてるつもりやったけど。堪忍や」

彼女は思い出そうとする素振りをして、諦めたらしく顔の前で両手を合わせて苦笑いを浮かべる。まあ別に仕方ない。何せ今のクラスになって登校したのが昨日で初めて。口を利いた事もないし、興味もない。そういや、担任が寄越した名簿の写しにざっと目を通したぐらいだったな。で、これって一応は名乗つといた方が良いのか。

「……灰谷真澄」

「灰谷」

「真澄」

名前を聞いた2人がこちらを見詰める。別に覚えなくても構わな
い、一応は最後にそう付け加えておいた。だって本当に覚えて貰わな

くても良いし。

「改めてよろしくね」

「ウチもや。日野あかね」

「——ああ」

意図しない自己紹介、まさかだったな。服に付いた汚れやらを落として袋を拾い上げる。よし、大根はどうやら無事だ。すると星空さんが唐突に口を開く。

「日野さん、元氣出して！泣いてるとハッピーが逃げちゃうよ。スマイル、スマイル！」

「・・・ウチ、泣いてへんけど？」

「えっ、でも。さつき地面にポタポタポタって——」

「それ汗やで」

「汗?!なあんだ、てつきり試合の事で落ち込んでるのかと・・・」

日野の様子が気になって声を掛けたのか。とんだ人騒がせだな、まあでも勘違いで良かったんじゃないか。

「ウチは落ち込んだりせえへん。今必要なは特訓や、特訓！」

「それなら私も手伝う！」

「お節介じゃないの」

「ええ、そうかな?だって私、日野さんの力になりたいなああって——」

「ウチは誰にも頼らん！」

「ほら」

「・・・て、何時もなら言うんやけど。お願いしようかな」

日野はニツと笑って星空さんの提案をあつさり受け入れた。以外だ。星空さんは相手の言葉に大張り切りでボールを頭上高く投げ、彼女を加えた形で日野のスパイク練習が始まった。アスファルトにボールが打ち付けられる乾いた音が響き渡り、橋脚には痕が残る。何故そこまですて付き合うのか解せないという気持ちのまま、なんとなく眺めていると星空さんに呼ばれて我に返る。

「灰谷君も日野さんの応援して！」

「えー」

「ほなっ、頼むわ！」

「俺、関係ないんだけど」

すっかり巻き込まれてる。夕暮れの中を特訓つてどこぞのスポ根ドラマだよ。日野が橋脚に向かつて、壁当てで打ち込むボールを何だかんだ取りに行く羽目に。次第に星空さんまでが額に汗して練習は続けられた。まるで自分の事のように彼女は必死だ。誰かの力になりたいという気持ちはあってもおかしくないだろうけど。昨日今日知り合った秤の相手にそこまでするものだろうか、普通。星空さんはどんな事を考えてるんだろう。・・・あ、そう言えば買い物帰りだった。こんな事してる場合じゃないんだけど、ボールが次々あちこちへ飛んでいく。はあ、これは長い寄り道になりそう。

「見に行こうよ、日野さんの試合」

「行かない」

顔合わせるなりこの調子。勿論、即答して話は早々に切り上げる。彼女は頬を膨らませ、あからさまに不機嫌そうな顔をする。何故だ。「だって、バレーの特訓付き合ってくれてたし。日野さん、一生懸命だったんだよ」

そんな事を言われたってさ。付き合ってたってあんなもんは俺の意思じゃなかったし。ていうかこっちは何にも手伝った覚えはないぞ。誰が積極的なもんかよ。大体、日野なんてただのクラスメイトでそれだけだし。・・・て、星空さんに言っちゃった。口を突いて、珍しく言葉が溢れ出た。

「そっか」

「星空さん。そもそも俺達だって友達でも何でもないじゃん、いい加減しつこいから。じゃ」

それらは至極真つ当、こっちは当たり前の事を言っただけ。ここまですっかり、明確に言っておけばもう安心。星空さんだって流石に理解してくれるだろう。だって本当の事だもの。

「・・・待って！」

「あ？」

「あの、えっと、確かにそうだよ。私達まだ出会った稗だし、灰谷君の気持ちちゃんと理解してなかった。ゴメンね、無理矢理付き合わせちゃって」

「いや——」

「それじゃあ、また明日ね。私、日野さんの所に行ってくる」

その日の放課後、鞆を手にした星空さんはバレー部が試合形式の練習を行うコートに今日も足を運ぶ。後から教室を出た時によく解らない、言い表しようのないモヤモヤとした何かを抱く気で昇降口に立った。これはどういう状態か納得がいかないまま、溜め息と共に家路に向かって歩き始める。……けれど。不意に違和感めいて立ち止まった。おかしい、雰囲気。やけに静か過ぎる。周りに目をやると大勢の生徒が地面に経たり込み、小さな声でブツブツ呟いている。こちらが近付いていっても相手からの反応はない。そして全身から澱んだ色のオーラを発していた。

「何やったって無駄なんだ」

「結局無意味……」

「もうおしまいだ——」

耳を澄ませるとあちこちからそんな声が聞こえてくる。なんてネガティブで後ろ向きな、これは所謂バッドエンド的結末を臭わせる言葉の数々。待てよ、この状況ってそういう事だよ。確か商店街で怪物に襲われた時の——。

「人間共の発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピエーロ様を蘇らせていくのだああ!!」

オオカミもどきが高く掲げた一冊の本へと真つ黒なエネルギーが雪崩れ込む様にして注がれていく。やつぱり。また奴が現れたという訳だ。ああ、空は満月が浮かぶ青っぽい夜空に変わって禍々しい空気が辺り一杯に満ちている。それに伴って俺も次第に気分が悪くなり、重々しい環境下でどうにか立つのがやっとといった具合。しんど

いな、けどその割には動けなくもない。走ろうと思えばそれも、まあ可能だ。

「みゆき！プリキュアになって戦うクル！」

「ええ・・・!?」

「——人間の絶望した顔ほど愉快なものはない。見ろ、あの絶望の顔を。努力など無駄なだけに馬鹿な奴らだっ」

この空間に捕らわれた生徒達の俯いた表情を見て嘲笑う。意地の悪さが滲み出る笑みを浮かべてオオカミもどきは吐き捨てた。なんて奴だ。

「無駄なんかじゃない！目標に向かって頑張ってる日野さんを・・・私の友達を馬鹿にするなんて、絶対に許さないんだから!!」

「友達・・・」

「みゆき。その息クルウ！プリキュアに変身するクル！」

バッドエナジーとやらを発している日野の前に立ち、オオカミもどきを見据えながらコンパクトの様なアイテムを取り出す。あれを使つて変身するんだろうか。

〈Ready?〉

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

〈Go! GoGo Let, go Happy!!〉

なんだなんだ。星空さんは光輝くパフを手にして自らの体を叩いていく。それによって制服姿の上からピンクを基本としたコスチュームを身に纏い——ちよつと待て。あの時もこんな風になつてたのか。最後に髪の毛が光つて色も形も変化し、彼女は頬をパフで叩くとポーズを決めながら名乗りを上げる。

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「また現れたなプリキュア!——出でよ、アカンベエ!!」

オオカミもどきの言葉から赤い玉に邪悪な気が宿り、生み出された怪物は又してもデカイ。これは、バレーボールか。

「アカンベエ!」

「やつぱり、怖いかも・・・」

「しっかしまあ、趣味ワルツ」

「頑張るクルウ！皆に希望とスマイルを取り戻すクル！」

ボールを体にしてピエロっぽい顔、サポーターを巻いた細い手足がそこから生えるといった珍妙な見た目のアカンベエ。怖いっちゃ怖いかもな。

「・・・希望のスマイル。うん、怖いけど頑張る！」

アカンベエは大きく息を吸い込み、口から大量のバレーボールを弾丸の如く吐き出してキュアハッピーを狙った。こりや逃げるしかないか、あ、転じた。よく転ぶな君は。あー危ない！吹き飛ばされたが上手く切り返して反撃を始める。よし、いいぞ。って何で応援なんかしちゃってんの。

「ハッピーシャワーで浄化するクルー!!」

「うん!・・・って、どうするんだっけ？」

「忘れたのかよ！」

「あつ、灰谷君。どうすれば良いんだっけー!!」

「俺に聞くんじゃないよ」

「ッスマイルパクト」クルウ!!」

「そうでした！」

こんな大事なことでよく忘れられるな。ハッピーは思い出した様で、その場で直ちに気合いを込めていく。スマイルパクト、だったか。それに光が収束していく。順調な様だ。最後の一押しでより強く叫び、必殺技を彼女は放つ。

「プリキュア・ハッピーシャワー!!」

大きなハートマークをキャッチして撃つ渾身のエネルギー波。それは標的目指して直進していく。・・・直進して、あれ？

「嘘お!!」

いや、こっちの台詞ですよハッピーさん。彼女の必殺技はアカンベエを横切ってお空の彼方へ。あ、外したんですね。『必殺技』なのに。マジ？

「っ疲れた——」

「頑張るクル！もう一回クル！」

「もう一回?!もう、しょうがないなあ」

「日野！」

「何や、このでつかいバレーボール・・・！」

そりや驚くよな。自分が今見てる光景が信じられなくて戸惑ってるに違いない。日野だつてこんなのが現実とは思わねえよ。

「——てゆうか、星空さんなん?！」

「・・・あつ、ハイ!——ハツ、返事しちゃった!それは秘密なの!」
「ええつそれ、そうですつて言つてる様なもんやん!てかその怪物なんなん?！」

パニックになつても致し方無い、ハッピーはあつさり引つ掛かつたな。日野、ナイス指摘。

「兎に角逃げてえ!!」

「何だ、あいつ」

「日野——」

「え、何。——うわっ!」

彼女に興味を示してオオカミもどきが降ってくる。ハッピーは捕まってるし、これはどうすれば良いんだ。

「さつき、こいつを友達とか言つてたなあ?・・・下らねえ。友達だの一生懸命だの、バッドエンドの世界にそんなもの必要ないんだよ」

「友達は下らなくなかないよっ!——楽しい時、嬉しい時、友達が居れば二倍も三倍もハッピーになれるし、悲しい時、辛い時は側に居てくれる!・・・とつても大切なものなのおっ!!」

「友達、か」

何時も一緒に笑い合つてどんな時も同じ瞬間を共に出来るなら、それはきつとその人にとって何物にも代え難い存在になるのだから。・・・まー、俺はそういうのとはずつと無縁だしこの先も多分——。

「つまりお前は友達が居ないと何も出来ない弱虫野郎つて事か。・・・止めだ、アカンベエ!」

怪物は手の中のハッピーを握り潰そうと力を込めた。そこに、余りに小さなバレーボールが跳ね返った。アカンベエにとつては痛くも痒くもない、しかしそれを打った本人は至つて真剣。

「何のつもりだあ？」

「・・・ウチの友達に、何してくれてんねん!!」

たった1人、日野はアカンベエに向かって奴の足先にしがみつく。ハッピーの逃げるように促す声もどこ吹く風とばかり、夢中になってハッピー・・・星空さんを助けようとしている。なんて無茶な。

「——星空さんは、ウチを励まして応援してくれたんや!・・・次は、ウチが助ける番やああ!!」

「そんな弱つちいの助けてなんになる」

「弱つちい」やと?!ウチの大切なもん、馬鹿にするんは絶対許さへんで!!」

「日野さん!!」

「人間ごときがアカンベエに勝てると思ったか？」

「関係、あるかアアいつ!!」

アカンベエは振り払おうと脚を振り上げる。不味い、もう駄目かも知れない。俺は思わず顔を背けてしまった、だが——

「何や?!」

「クルウー——!君が2人目のプリキュアだったクル!!」

一筋の光がその場に降り注いだかと思えば、アカンベエを押し退けながら日野をその中に包み込んでいった。あの生き物の叫ぶ声が聞こえた。マジかよ。

「ぬっぬいぐるみが喋った!てか何や、その「キュラプリ」って。星空さんが言うとした奴か!」

「「プリキュア」は、世界を悪から守る伝説の戦士クル」

「伝説の戦士、クル?」

日野は当然ながら異様な状況の下に奇妙な生き物が発する言葉の意味を何一つ理解出来ない。それでも、彼女は言われるままに変身の為のアイテムを受け取る。

↑Go! GoGo Let, go Sunny!↓

日野は指を弾いて、手にしたパフへ炎を発現させた。着火した火の

粉をその身に纏うように服装を変化させる。髪は鮮やかなオレンジ色に染まると上部に丸く纏め上げたものになり、コスチュームはハッピーと似ている様でいて相違点もあり、腕のカバーとブーツは長くて背中には布飾りが備わって基本カラーはオレンジだった。

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

日野もまた、星空さんへ続いて伝説の戦士プリキュアに変身してしまった。俺もハッピーも、あのオオカミもどきも皆驚いている。名乗りは実に日野らしい。

「何やこれ！ホンマに変身してもうた！しかも太陽サンサン、キュアサニーってメツチャ恥ずかしいやーん!!」

まあ確かにチヨイ・・・いや、まあまあハズいよな。でもそもそも自分で名乗ってましたよ？キュアサニーさん。でもハッピーにはウケが良いらしいぞ。

「・・・せやな。確かに太陽が似合うんは、このキュアサニーかスーパーヒーローぐらいなもんや!」

「自画自賛」

何だよやっぱりノリノリかよ、しかも誰に対して決め顔してんだよ。

「灰谷君！日野さんがプリキュアだよ！キュアサニー！凄いよねー!!」

「うわあっ灰谷！ええ、そこに居ったんか!?あかん、見られてしもたー!!」

「あ、うん・・・ねえ」

いやいや、俺の事は全く無視してくれて構わないから、居ないものと思つてスルーしてくれ。つて、そりゃあ無理か。

「——行け、アカンベエ!」

「・・・うわあああ!!」

思い切りジャンプして落下してくるアカンベエに対して悲鳴をあげるハッピーとサニー。早く逃げろよ!あー、潰れるッ。

「あれ、日野さん!？」

「何やよう解らんけど!・・・受け止めてしもた!」

「何ッ?!」

「何がっ、アカンベエ・・・やああああ!!」

スゲエ・・・!自分より遥かに巨大なアカンベエを持ち上げただけじゃない、それをグルグル振り回して放り出すんだから。投げ飛ばしてアカンベエを遠くまで叩き付けた。プリキュアってヤバいな、力が凄まじい。

「サニーファイヤーで浄化するクルー!」

「なんやそれ」

「スマイルパクトに気合いを込めるクルウ」

又かよ、イチイチやらないといけないとか不便じゃね、やつぱり。サニーはその場に踏ん張って力を込め始める。そうそう、何か力が抜ける感じらしいな。ハッピーもそうだった。スマイルパクトにはどうやら順調にエネルギーが収束しているようだ。

「何か、火の玉が出たけど!?これ、どうせいっちゅーの?!・・・なあ!」

「いや、知らん知らん」

・・・ですからね、こっちに助けを求められても困るのよ。何の答えも浮かばないからね、聞く相手を間違えてますよ。

「一緒にやった秘密の特訓だよ!」

「————それや!」

何かを閃いたという顔だ。サニーは頭上に現れた火の玉目掛けて走り込み、高くジャンプして力強く腕を振り下ろす。それは正しく、彼女が得意とするバレーボールそのもの。

「プリキュア・サニーファイヤー!!」

放たれた豪速球が炎の渦となってアカンベエを襲う。キュアサニーによる必殺技を前に怪物は跡形もなく消滅していく。浄化の力にアカンベエは倒される。残されたバレーボール、と——
「何や、これ・・・めっちゃバテる・・・!」

力が抜けて膝から崩れる彼女、ハッピーが駆け寄る。・・・何か空から降ってきてサニーが受け取った。こうして、オオカミもどきは姿を消して無事に生徒達も元に戻り、周囲の澱んだ空気も無くなつて何も無かった様に全てが修復された。星空さんと日野はコートの上に居て、俺もそこに近付いていく。

「“あかね”でええって。・・・もう、友達やしな。——これからよろしくな、みゆき」

「うん！よろしくね、あかねちゃん！」

2人のそんな声を聞き、笑顔の星空さん達を前にして俺は足を止めた。・・・友達。そこには確かに関係を築き始めた同級生の姿があった。余りに眩しくて背中を向けるしかなく、その場を人知れず歩き去った。

続

3 ピースサイン

空を見上げているともう何もかもどうでもよくなる、それまでの事なんて全部忘れてしまおう。青空へ浮かぶ雲の形を眺めると段々気が遠くなっていく。ああ、このまま何処かに飛んでいってしまいたい――

「なあー、何でこつちこつちこうへんのー?」

・・・無理か。何だよ、折角人が感傷というか黄昏というか、浸ってたのに。昼食の手を止めていた俺に対し、その同じく離れた場所に居た関西娘が声を掛けてくる。放つといってくれないかね、全く。

「はあ・・・」

「おーい、元気無いのー?そういう時こそ、スマイルスマイル!だよー」

「――つたく。可笑しくもないのに笑えるかよー」

「ほんなら、ウチが一発笑わせたるか!な!」

いやいや、結構ですつてば。・・・ホント、早くここから逃げ出したい。教室で昼飯食おうとしてたら、星空さんが声を掛けてきた。で、そこにあの日野も加わって、正に断ったにも関わらず強引にここまで連れてこられたとそういう事なのである。屋上にある備え付けのベンチに仲良く座るのもしゃくだし、2人から極力離れた所にポツンと居た。昨日の今日でハッキリ言った筈なんだが、あの星空さんは懲りずに関わろうとしてくる。きつとあの能天気さだから忘れてしまったに違いない。はー、やれやれだ。

「あんまりシケた顔しとつたらあかんでー」

「そうだよ、ハッピーが逃げちやうよー」

「うるせーよー」

飯くらい黙って食えないのか。俺は弁当の中身を摘まんで口へ運ぶと、再び頭上を向いて空を見始める。

「凄い!黄瀬さんっ」

「うわあああ!?見ちやダメえー!」

「むつちや上手いやん!」

そうしていると又騒がしくなり始めた。何々、今度は近くに居た黄瀬に絡んでるのか。しかしなんちゅー声出しとんねん。いけね、関西弁移った。黄瀬は見事に体を丸めて縮こまる。

「それ、自分で考えたの？」

「うん、私……こういう絵を描くのが好きなの。でも、子供っぽいよね」

「ううん、そんな事無いよ。私だって絵本が大好きだし」

「やよいにこんな特技があったなんて知らなかったわ」

「クラスの皆にも見せれば良いのに」

「——は、恥ずかしいよ。どうせからかわれるもん。2人共、皆には言わないでよね！」

そうこうして彼女、黄瀬は星空さん達に念押しして屋上から去っていった。俺もさっさと弁当食ってここから立ち去るとしよう。

「どうしてみゆき達と一緒に食べないクル？」

「あ、変な生き物」

「変な生き物じゃないクルウ！キャンディクル！」

「……キャンディ。別にどうでも良いだろ。……じゃあな、ご馳走さまっ」と

日野とあのキャンディ？とか言う生き物ともこれ以上関わらない方が良さそうだ。つて事は、要注意人物が2人、正確には1人と一匹追加となる。あー笑えない、実に。

「皆さん、お静かに。校内美化習慣のポスターコンクールまで残り僅かです」

何でもクラス委員から大事な話があるとの事。クラス対抗だというそのの何でも我が二組だけがまだ代表を選んではないという状況らしく、午後の授業が終わってやっと解放されるかと思いきや、帰りのホームルームが急遽行われた。話し合いにより決まるまで下校は望めそうにないな。クラス委員の1人である青木の口調からして今日中に決めなければいけない雰囲気伝わってくる。だが、その彼女の呼び掛けに対してクラスの反応はイマイチ。因みにこの俺も話し

合いなんて最初から上の空。一応眠気には耐えて、辛うじて意識を保ち続けてはいるが。

「誰でも良いんじゃないやなあーい」

(左に同じ)

「じゃあ、あんたがやりなさいよ」

「つやだよ・・・!」

緑川が隣の席の奴を睨む。彼と同じ以下同文。頼まれても出来ればお断りしたい。・・・しかしあれだ、このままじゃ何時まで経ったって決まりそうにない。その内、クラス全体で大規模に押し付け合いが起きるのも時間の問題だ。佐々木先生もやっぱり今日中でなければ間に合わないと思っししている。

「推薦でも構いません!」

青木の言葉に教室中がより一層しんとした。ヘタに目立って注目を浴びたくないという心理が働いたのだろう。激しく同意だ。が、突然星空さんが反応を示した。そして沈黙の中、彼女は堂々手を上げる。まさか自分がやろうというのだろうか。ま、これですんなり決まればそれだけ早く帰れるしいつかな。

「黄瀬さんが良いと思います!」

何と。皆も同じ反応を示す。何故彼女が? どうして。純粋な疑問の声があちこちから沸き起こって軽くザワついた。それに何より――

「ええええー!?!」

「ウチも賛成!」

「えええつ・・・!!」

黄瀬本人が一番ビククリしている。しかも星空さんに続いて日野までが推薦した。離れた席だが、振り向いた黄瀬の慌てふためく表情が窺える。うわあ、カワイソ。でもって、他に意見もないらしくてその呼び掛けに誰もうんともすんとも言わなかった。よく見ると何人かはそっぽ向いてる。ははあ、押し付けようって魂胆だな。うん、実は意義なし。黄瀬には同情するけど。

「黄瀬さん、引き受けて下さいますか?」

「……コクリ」

「はい、では黄瀬さんをお願いします」

パチパチパチ。という訳で校内美化習慣のポスターコンクール、二年二組代表は黄瀬に決定しました。……あー、やっと帰れるぜ。本人も断らなかつた、いや、断れなかつた？し。一件落着だ。

「星空さん、どうして私を推薦したの……？」

「だって、黄瀬さん絵が上手いじゃない」

へえ、そうだったんだ。俺また、てつきり彼女を生け贄にしたんだと秤……おっと口が過ぎたかな。

「やよいなら、きつと優勝出来る！」

……きつと優勝、ね。あんまり期待持たせるのもどうなんだか。そう言つてビリとかだったらどーすんだよ。

「……な、灰谷！」

「いや、知らねえよ。絵なんて見たことないもん」

「ほな見せたるわ。やよい、さっきのスケッチブック貸してー」

「えっ、何？」

黄瀬が鞆から取り出した一冊のスケッチブックを引つたくる様に手にし、日野は帰ろうとする俺に向けて中身を披露した。

「どや、中々のもんやろ」

「日野が描いたんじゃないだろ」

「あああつ！ダメえ!!」

黄瀬は顔中真っ赤っかにしてそれを奪い返す。だから、なんて声出しててるんだ。裸見られたみたいなりアクションすんなよ。……ま、確かに結構絵心ある方じゃん。上手い。

「……大体、2人は何も知らないからそんな事が言えるんだよ」

俺達は廊下を歩いて美術室に顔を出した。何やら人だからが出来ていて盛り上がっている様子。

「どれどれ？」

「あ、あれとちやう」

「いや、何で俺まで着いてこなくちやいけないのよ、ったく」

「蘇我君は美術部の部長で、コンクールで入賞したこともある天才」

・・・となんとやらは紙一重ってか。筆振り回してアートは爆発だとか叫んでやがる。何がおおーだ、テメーら。

「ミカワさんは少女漫画を描くのが得意な学校のカリスマ」

ベレー帽姿で真剣に黒板へ、落書き・・・おっと失礼。素敵な絵を描いていらっしやる。漫画家みたいだな、成る程。

「ナルシマ君は、女子を美人に描くのでモテモテ」

大勢の取り巻き、女子ばっかの中に鉛筆をそれらしく構えるナルシスト君・・・じゃなくてナルシマ君ね。ふうん、確かにモテるみたいだな。って、さつきからどーでもいいつつうの。

「確かに、強豪揃いやな」

「・・・とんだ強豪達だな。で、何で俺までライバルを偵察せにやならんのだ」

「私なんか、絶対ムリだもん」

「やる前から諦めるなんて勿体無いよ!」

「あ、無視」

「頑張つてやってみようよ」

「でも・・・私泣き虫だし自信無いし、本番に弱いし——」

何もそこまで言わなくても。すると日野が取り消しの為に青木の下に向かおうとした。確かに本人が嫌がってるもん無理矢理やらせるのは違うだろう。俺は早く帰りたくて押し付けたけど。

「待って!あかねちゃんっ」

「え」

「黄瀬さん。私ね、本で読んだ事があるの。絵は心を映す鏡だつて」

「どういうこと?」

星空さんは引き止めると語り出す。何かそれっぽい本でも読んだのだろうか。

「黄瀬さんは確かにちよつぴり泣き虫かもしれないけど・・・とても優しく思いやりたつぷりで、だからそんな格好いいヒーローの絵が描けるんだと思う」

「みゆきの言う通りや」

ほう、よく知りもしない相手にそこまで言えるかね。・・・どうし

て解るんだらう。

「確かに結果は解らないけど。もし、黄瀬さんが少しでもやってみた
いなら——」

「……私、やってみたい」

黄瀬の眼差しが変わった気がした。さつきまで自信の無さが窺い
知れる目をしていたのに。そんな彼女の瞳に決意が表れた気がする、
いや、実際そうだった。はつきりと自分の意思でそう口にしたのだ。
星空さんの言葉が黄瀬の背中を押した、のか。

「私達も手伝うね！」

「——ふたりともお、ありがとう……！」

「ええ!?あわわわわ……!?」

「ほんまに泣き虫やなあ」

うん、否定のしようもない。……
で。

「右手でピースサイン、足はもうちょっと前！上体を右に捻って——
——そのままストップ！」

やっとこれだというポーズが定まったらしく、黄瀬は画板に挟
んだ画用紙へ鉛筆を走らせ始めた。モデルは星空さんで、今彼女は屋
上でモツプ片手に決めポーズをしている。何でモツプが居るんだら
う。

「だから、何で俺まで付き合わなきゃいけないんだ」

解せない、すごぶる解せない。ここに居る必要ねえじゃん。

「……灰谷くうん。少しだけ変わってえ……！」

やだよ、絶対お断りします。黄瀬が描き始めて何分経つたらう。星
空さんは小刻みに体震わせてこつちを見てくる、辛そうに。ぜーった
い嫌だね。しかも鞆から勝手にキャンデイが出てきて誤魔化すのに
苦労した。星空さんが。ちゃっかり絵のモデルに加わってやがる。
黄瀬は絵に集中してるからか、あのぬいぐるみが喋る事に関しては深
く突っ込んでこない。……さて、早いとこ帰ってしまおう。

「お待たせー！」

げえつ、日野が帰って来た、不味いな。てか何処に行ってたんだ。

「ああ！灰谷！逃げたらあかんでっ。あんたも手伝いや」

「いや、だから何で・・・」

「乗り掛かった船って言うやろ？ついでやついで」

「何がついでだよ、無理矢理その船に引きずり込んだのはお前らだろーが。・・・あー関わりたくないのにい。」

「差し入れ持ってきたで」

そういう訳か。日野が袋から取り出したのはソースが香る熱々のお好み焼き。関西人らしい、しかしマジでお好み焼きとは。紅生姜と青海苔が程よく載った、ソースにマヨネーズ、その上に鰹節が踊る美味しそうな生地。正しく大阪風。

「ウチの家、お好み焼き屋さんやってんねん」

「へえ！」

どうりで作りたて感ある。自宅の店で焼いてきたんだな。確かにこれは、うん。

「はい」

「え」

「あんたの分。食べないん？」

「美味しいよ、あかねちゃんの好み焼き」

「・・・うん」

「しつかり食べて絵のモデル、頑張らな！」

ああ、結局それ・・・その後、4人で美味しくお好み焼きを平らげてポスターの絵を描くためのモデルも確りやらされた。このポーズ、マジで恥ずかしい。おい、笑顔なんてどーでも良いだろ。晒し者じゃねえか。あ、今誰かそこに居なかったか?!

「集中しいや！」

「腕下がつてるよ！」

「うるせえ・・・！」

「ほれ、スマイルスマイル」

「・・・だから、そういう状況じゃねえだろつつうのっ」

こうなったら差し入れの分は働いてやるよ！放課後はあつという間に過ぎていった。後、長時間に渡る変なポージングのせいで翌日は

体の節々が痛んだ。お陰で筋肉痛だよ。こうなったら何がなんでも完成させろよ、黄瀬。——それからというもの。黄瀬は学校でも隙を見ては少しずつポスターを仕上げていったようである。昼休みも食事を後回しで1人黙々と色を塗っていた。気付くと俺も、星空さんや日野程では無いが頑張っている黄瀬の姿が目につく。で、珍しく本に熱中して誰も居なくなつた教室の中、夕暮れ時の光を浴びていた時だった。廊下の方から3人が顔を出した。

「完成したんだよ！」

「やよい頑張つてたもんな」

「・・・うん」

「『校内美化ヒーロー・クリーンピースマン』」

実に黄瀬らしい絵だった。彼女はやや赤くなりながら手にしたポスターを俺に見せてくれる。ははあ、モツプ持たされたのはこの為だったのか。キャラクター性があつて個性の強い、クリーンピースマンというヒーロー。隅にはしっかりとキャンディも描かれていた。

「——良いんじゃないかねえの」

「ねーそうだよね！」

思わずそんな感想が漏れた。星空さんと日野はまるで自分の事のように喜んでいて、そんな印象。後は提出して作品として貼り出されるのを待つ秤。けど、そう上手くもいかないもんだ。黄瀬のあの時の背中が忘れられない。結果の発表と共に各作品が張り出された日の事だった。

俺は別にいいって言ったんだけど、今朝来て早々に星空さんと日野に捕まって連れていかれた。校内の一番、人目につくと思われる学年の掲示板前。校内美化促進の目的だろう、クラス対抗のポスターコンクールの結果発表が大々的に行われていた。人だかりを作るのは恐らく参加した代表の友人とかが主だろう。後ろの方では掲示板に貼り出されている筈のポスターを中々見る事が出来ないという有り様。しかし星空さん達が人混みを掻き分けて出来た道をすんなりと進み、

代表達の個性が各々発揮されたポスターを目にした。

「あ、黄瀬さん！」

「どうやった？」

彼女は黙ったまま2人から掲示板に視線を移す。銅賞・・・成島。あ、あのモテモテの奴。続いて、銀賞。名前を見た限り男子か。色使いが女子っぽい。そして、金賞・・・蘇我。流石は美術部の部長といったところ、堂々のトップ。入賞経験もまぐれじゃなさそうだな。で、クリーンピースマンは――

「努力賞」

星空さんが先に見つけた。努力賞・・・惜しくも入選ではないがその名の通り頑張りを認められた証しであるだろう。まあ、認識としては落選じゃないだろ。一応、フォローのつもりでもある。黄瀬は申し訳なさそうに俯いた。

「折角、3人に手伝って貰ったのにごめんなさい」

「でも、努力賞だって凄いなと思うよ！」

「そや！ウチはやよいのポスターが一番輝いて見えんで！」

「うん！」

えっと、俺も直接フォローした方が良くいんだろうか。あ、日野は小突いてくるし、星空さんもチラチラ見てくる。うわあ、こういうの気不味いなあ。ヘタな事言えねえし。

「・・・ど、努力賞も賞だろ。な」

ぐううわあああー、月並みな事しか言えねえ！フォローにもなつてねえじゃん。

「「そうそう！」」

「・・・3人共、ありがとう」

「そんなの、負け惜しみだよ」

いやいや、俺が言ったんじゃないぞ。振り向くとそこには爆発野郎こと蘇我部長率いる男子軍団が居た。因みに偉そうな事垂れてるのは蘇我部長・・・の取り巻きその1。うん、名も無きモブキャラ君。ま、俺もクラスとかでそんな感じだし人のこと言えた義理じゃないが。嫌味つたらしいなあ。

「誰が見ても、蘇我部長のポスターが一番芸術的で優れているさ」

「そんなふざけたポスターと比べられちゃ困るよ」

・・・うん、そりやあね。芸術的なんだろうね、部長なんだし絵も上手いんだろうきつと。でも、あんたらマジで性格悪いな。この俺がそう思うんだから間違いない、うん。だって初めて見た時から何か気に食わなかったもん。ああ、こういう奴らって何処にでも居るんだよな。めんどくさい。

「ちよつと！あんたらなんやねん！」

「そうだよ！黄瀬さんだって頑張って描いたんだから！」

星空さんと日野は必死に庇った。そりやそうだ、実際その姿を見ているから。誰より近くで応援もしていたし。黄瀬はちゃんと努力してた。・・・あれ、俺なんでこんなまともな事言ってるの。

「・・・止めて、2人共。もういいの」

ビリッ！

「黄瀬さん?!」

彼女は貼ってあった自らのポスターを無理矢理剥がすとそのまま何処かに走って行ってしまった。——そう、この時の背中つたらそれらもう・・・。

「何してんねんっ行くで！」

「1人にしとけよ」

「けどっ——」

「行こう。放つとけないもん」

しゃーない、俺達は後を追い掛けて外まで飛び出した。こういう時って1人になりたいもんだろ、それを他人がとやかく言うのはどうなんだ。でも、何か気になるんだよな。ま、見つけたら2人に知らせりゃいいか。

「やっぱり、私の絵なんて・・・」

あー、居た。あっさり見つけてしまった。取り敢えず、ここはあの2人に任せて・・・

「——ハハッ！泣き虫、弱虫！」

「誰！」

「つと、マジで誰だ？」

呼びに行こうとしたところ突如、見るからに只者じゃない容姿をした変な奴が現れた。は？あれって……鬼、か。赤鬼だ、身体中真っ赤で角生えてて、確り金棒まで持っている。まるで昔話、それこそ絵本の世界から飛び出してきた様な存在だ。

「お前なんか努力したって無駄オニ！」

あ、やっぱり。〃オニ〃って言ったぞ、オニって。まてよ、あれがもし本物の鬼だとしたら。

「っそんな事、解ってるよ……！でも、絵を描くのが好きだったから……！」

鬼の言葉にポスターを抱き寄せながら涙を浮かべる。すると、赤鬼が何かを取り出してそれを頭上高く掲げた。

「世界よ！最悪の結末……バッドエンドに染まるオニ！白紙の未来を黒く塗りつぶすオニ!!」

その台詞には聞き覚えがある。あいつはあのオオカミもどきの仲間か。……赤鬼は本を開くと呪文めいた言葉を叫びながら、別に取り出した絵の具のチューブらしき物を握り潰す。その真っ黒くなつた手のひらで白紙のページに触れた。黒い絵の具がベツタリへばりつく。すると――

「ハハハッ！人間共の発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピエーロ様を蘇らせていくオニイイ!!」

空には暗黒が渦巻き、満月では無く赤みを帯びた……夕焼け空が一带に広がった。そして、周りに居た生徒が次々に膝から崩れ落ち、ネガティブな言葉と共にエネルギーを発した。それは赤鬼の持つ本に注がれていく。同じだ、オオカミもどきみたいにバッドエナジーとやらを集めている。黄瀬も倒れてしまう。俺も気持ち悪い。又かよ。

「黄瀬さーん！あ、灰谷君！」

「よう……」

「はっ?!なんや！」

「赤鬼さん!？」

「〃アカオーニ〃だ！オニツオニイツ!!」

2人は全く違う敵を前に驚く。自ら、そう名乗ると金棒をブン回して強烈な突風を巻き起こした。あんなの喰らいたくないな、勘弁してくれよ!・・・と、その赤鬼の顔面に何かが張り付く。

「クリーンピースマン? 下らんオニイ!」

黄瀬のポスターだ、赤鬼はグシャグシャに丸めてそれを捨てた。

「なんて事・・・!」

「そのポスターは、やよいの努力の結晶なんやで!!」

「努力だど? そんなもんぶっ壊してやるオニ! —— 出でよ、アカンベエ!!」

「アカンベエ!!」

うわあ。この怪物の姿にはドン引かずにいられない。クリーンピースマンを思い切り不細工にした様なピエロの化け物。お腹出てるのが更に嫌。

「みゆき、あかね! 変身クルウ!!」

「うん。黄瀬さんのポスターをこんな姿にして、許せない!」

「せや、ここは一発ガツンとやつたるか!」

頼もしい、いいぞいいぞ。2人はスマイルパクトを取り出した。

↑Ready? ↓

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

↑Go! GoGo Let, go!! ↓

同時に変身した彼女達は眩い光の中でコスチュームを纏う。別に何にもいやらしくないしそんな感情も湧かない。ピンクとオレンジ色のコスチューム、各々名乗る。

「キラキラ輝く、未来の光! キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー! キュアサニー!!」

「お前らがプリキュアか。捻り潰してくれるオニ!! 行け、アカンベエ!」

戦いが始まり、赤鬼の指示を受けて動き出した。アカンベエは手にした武器と思われる、クリーンピースマンが所持していた様な巨大なモップを振り回す。ハッピー、サニーは回避して反撃する。やはり凄い、身体能力が高い事に加えて打たれ強い。まともに攻撃食らっても

先ず無傷でいられるんだから。

「っ強いな・・・！」

「もう！こうなったら!!」

「よっしや、ウチも！」

2人は立ち上がると例の気合い込めをする。必殺技で早々止めを刺す気らしい。ちゃんと当たりさえすれば良いんだけど、あれ。スマイルパクトへとエネルギーを収束し、ハッピーが両腕で大きなハートマークを描いた。

「プリキュア・ハッピー・・・きやつ、シャワー!!」

きやつ？ああ、敵の攻撃を寸前にかわした。でもその一撃ときたら不発。又かよ!!必殺技つつつてんだろーが！

「うええー！?!こんしんのイチゲキがあ・・・！」

「面白い顔すんなよ、いちいち。ああでも、まだあいつが居るか」

「ハッピー！」

「ハッハ！間抜けオニい！」

これは言われても仕方ないかもな。だがしかし、プリキュアは1人じゃない・・・行けえ、サニー！——俺なんでこんな応援しちやってんだろ。

「ハッピーがあかんねやつたらウチがやらんと！」

てな訳で追撃だ。サニーのスマイルパクトから炎の力が溢れ出し、頭上に現れた火の玉目掛けて一気に走り込む。得意なバレーボール、これなら彼女がやってくれるだろう。

「プリキュア・サニーファイヤー!!」

豪速球の火炎の渦がアカンベエ目掛けて飛ぶ。これは！……………シュウウ！——はい？ええつと、サニーファイヤー！……………あれ？

「なっナンデヤ!？」

「ちやーんと力を込めてないからクルウ！」

だからさ、そのシステム止めない。こういう事になるんだからさ、アホなの？君達。あんだだけ戦えんのにどうして肝心の必殺技が使えないんだよ。そりゃあ戦ってんのは俺じゃないから文句言える立場

でもないけどね。だって期待させられてこんなんじや浮かばれないよ？

「アッカンベェ!!」

必殺技の発動は容赦なく2人の体力を奪った。怪物は口から禍々しい色のエネルギーを放つ。・・・え、こっち来る。

「危ない!!」

「アカン!?」

その瞬間、ハッピーが俺の前に降り立って庇うように両手を広げた。サニーは俺を守ろうとして向こうに背中を向ける。：爆発。地面に体を打ち付けて倒れる2人、こちらは後ろに転がって咄嗟に取った受け身が衝撃を和らげた。イテテ、まさかこっちに飛んでくるとは。

「おーい、平気かー!?」

「ハッピー、サニー!!」

「アツハハハハ！弱い奴が幾ら努力したって無駄オニ！」

「——無駄かどうか、私にはまだ解ないけどッ」

無事だった、ハッピーとサニーはどうか立ち上がった。余計なダメージを与えさせてしまった。

「一生懸命描いた黄瀬さんの努力を馬鹿にするのは・・・許せない!!」

「えっ、何これ!?」

「黄瀬さん!!」

ハッピーが叫んだ直後、突如として黄瀬が意識を取り戻す。今ある状況が呑み込めずにあたふたしている。

「えっ、その声——もしかして星空さん?！」

「わああ！ゴメン！それは秘密なのー!!」

「だからっ、そんなん言うたらバレバレやろお!？」

「あ、そっかー!」

デジャヴ感満載のやり取り、どうしてそう見事にどツボに嵌まるのが得意かなあ。後さ、関西弁もかなーり特徴的だからね。アカンベエが又動き出す、早くなんとかしないと。

「アカンベエ!!」

「何っ、うわああっ?!」

「黄瀬!」

動きの予測がつかない、今度はそっちに狙いを定めるのかよ! ヤバい!

「——黄瀬さんには指一本触れさせない・・・!!」

「星空さん・・・!」

「あっかん! 灰谷! やよいを頼むう!!」

「あっちくしょう! 来いつ」

「え、今の・・・」

「早く!」

敵から距離を取って戦いの行方を見守る事しかこちらには出来ない。アカンベエはモップにしがみつくとハッピー達をも振り回した。ヤバい、これは負けちまう。赤鬼には容赦なく止めを指示した。アカンベエがモップともう一つ・・・ちり取りか、その二つを柄で合体させて高速でぶん回す。

「もう、駄目だ——」

「・・・怖い、怖い怖いっ。でも」

「黄瀬」

「2人は私の、私の大切な・・・!」

彼女はハッピー、サニーの下に走る。なんて無謀な、戻れよ。でも黄瀬は泣きながら必死に走った。彼女はきつと恐怖で一杯一杯の筈。けれど2人の下に向かっていく。

「黄瀬さん・・・!」

「何だ、お前は? 弱虫は引っ込んでろオニ」

「——私は弱虫だけど、直ぐ泣いちゃうけどっ。・・・2人は私が勇気を出す切っ掛けをくれた、大切な友達だもん!!」

そっか、本当はポスター描きたかったんだな。今の彼女の言葉で直感した。あと一步の勇気が出なくて、それで星空さんと日野のお節介が後押しになったんだな。

「2人を傷付けるのだけは・・・許さないんだからあああッ!!」

ピカーーー!! ってこれは! まつまさか。そうだ、この展開は、あれだ。黄瀬が、あいつが――

「何これ!?!」

「スマイルパクトクルウ!」

「キャンデイ? っておもちゃじゃなかったの!?!」

「そんな事はいいクル! 早くキュアデコルをスマイルパクトにセットして……………」

手っ取り早い説明を受けた黄瀬はアイテムを手にした。キャンデイに言われた通りに彼女はスマイルパクトへそのキュアデコルとやらをセットする。

「Ready?」

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

「Go! Go! Go! Let's go Peace!」

コンパクトから軽快な音がする。飛び出したパフを黄瀬は手にし、リズムカルに両手を打ち鳴らした。

パンパンパパン!

光を纏って制服姿から一変し、やはりハッピー達と基本構造を同じとしている様な黄色を基本としたコスチュームを身に纏う。バチバチいいながら胸元にリボンが備わり、髪型も一瞬で変化する。黄瀬やよい、プリキュアとなってその名を――

「ピカピカぴかりんじゃんけんポン♪キュアピース!!」

頭頂部で結び上げられた明るい色の扇状の髪、燕尾服の様な飾りが施された黄色のコスチューム。第三のプリキュアが誕生した。へ? ピカピカぴかりん? 何じゃそりや。

「キュアピースかわいいー!」

「どうでもいいだろ、そこ」

「じゃんけんポン♪何やそれえ」

「3人目のプリキュアだと?！」

「これが、私?すごーい!!本物のスーパーヒーローみたい!」

反応は人各々。あ、この場合ヒーローでなくてヒロインだろ。敢えて冷静に指摘してやったぜ。しっかし黄瀬までプリキュア化すんのかよ、どうなってるの。

「アカンベエー!」

「おお!」

怪物を前にキュアピースの初陣だ、両者睨み合いが続く。ピース、勇ましく構えてアカンベエを睨み付ける。対し、アカンベエ戦闘意欲上々で凶器を振り回……なんか実況中継っぽくね。凶器って。
「つうわあああー!」

逃げたー!あいつ逃げたあ!マジか、この期に及んで敵前逃亡でありますかつ。さっきの決意は何だったんだよ、しかもこの件も見覚えあるぞ!

「逃げちゃだめえクル!プリキュアは伝説の戦士クル!」

「そんな事言われたって!怖いんだもん!!」

そうだな、元々こんな状況でそんな説明だけされてもな。それに変身したって中身は黄瀬のままだし。よし、俺も一緒に逃げよう。アカンベエ追い掛けてくるから!!

「だからっ何でっ!俺、関係無い筈っ!」

「わあああー!やだああー!……」

「誰か何とかしろよっ」

ドテーーー!!

転んだ、転びましたよあいつ。これも見たことあるぞ!早く立てバカ!

「ううっ嫌あああー!」

バチバチ……ビリビリイ!!

何ですと。え、今この娘何した?何したあー?!雷、落雷だよな!?!は?泣いただけで雷落としたの?!

「何が起こったオニ?!」

「キュアピースの浄化の力は雷クル!」

「雷クル?!」

えええ、コワっ!マジかこいつ。ワンワン泣いて逃げる癖に、泣き虫とか弱虫とかいう割には雷食らわすの!えげつなあ。泣く子も黙るでなくて泣いて黙らせちゃうのかよ。・・・ハハ、ヤバ。

「スマイルパクトに気合いを込めるクル」

「これの事?」

「うん」

「いっくよー!」

立ち直ったピースはスマイルパクトを手にエネルギーを収束していく。どんな技繰り出すんだ。

「プリキュア・ピースサンダー!!」

掲げたピースサイン、チョコキ?に落雷が生じた。本人も驚いて声をあげる。そして発声と共に回転を加えて勢いを増し、両手の指先から強力な雷撃を発射した。アカンベエに命中して爆風と共にそいつは姿形を消してしまう。キュアピースによる必殺技、それは雷攻撃での浄化。アカンベエはキュアデコルというアイテムを代わりに残した。クリーンピースマンのお化けは晴れて召されましたとき。ピースはピースサインしたまま疲労困憊で固まってしまっている。赤鬼は悔しそうに捨て台詞を吐いて姿を消す。空模様が元に戻ると俺の体調も良くなり、他の生徒も意識を無事取り戻した。

「ああ、ビックリした——」

いやビビったのはこっちよ。泣いて落雷招来とかどーゆー原理だよ。

「灰谷君、大丈夫?」

「はあ、お陰様で」

「黄瀬さんも今日から私達の仲間だよ」

「よろしく頼むで!」

「私が、伝説の戦士プリキュア・・・!やる!だって、ずっと憧れてたんだもん、世界を守るスーパーヒーロー!」

だからヒロインだろ、勝手に盛り上がるなよ。スーパーヒーローオタクだな、黄瀬。星空さんはそんな彼女に拾い上げたグシャグシャになっちゃったポスターを手渡す。日野も何故か申し訳なさそうな表情だった。

「・・・良いの。私、皆と一緒に居て解つたの。本当に欲しかったのは、勇気と後——あ、あの星空さん」

「何?」

「み、みゆきちゃんって呼んでもいい?」

「——勿論だよ! ”やよいちゃん!”」

「つよろじぐ、みゆぎちゃん・・・!!」

「何で泣いとんねん?」

本人は否定したがバツチリ泣いてた。でもそれは決して恐れとか弱さからくるネガティブな意味合いでなく、感激して感極まった為に込み上げた嬉し涙だった。

「あつ、あの!」

「何」

「その・・・えつと・・・灰谷君もポスターに協力してくれてありがとう。こつ、これからもよろしくね」

「・・・ああ」

ご丁寧にも彼女は俺にまでそんな事を言った。何をどうよろしくされるのかは解らないが、ま、星空さん達と友達になれそうで良かったんじゃないか。ところで、こんな事があつたのにこれから授業とかしんどいな。早退しよつかな、でなけりや保健室に行くか。あああ! 殺生な!

続

4 マーチングバンド

プリキュアが3人になった。俺はその現場全部に意図せずというか不覚にも居合わせ、お陰でこの前なんてマジで死にかけた。周囲の様子はっていうとこれがまあ平和そのもの。やっぱりのアカンベエとかいう怪物が倒されると環境が元に戻って、しかも何事も無かった様に街の人々は立ち直る訳だ。目撃者は居ないし大した騒ぎにならないってのはあいつらプリキュアにとって都合いいな。．．．なんて、俺には関係無いことだけど。学校で唯一のんびり出来る、待ちに待った貴重な時間となる昼休み。今日は珍しく教室を出て中庭に来ている。わざわざこんな所まで来たのは言うまでもない。特に、星空さんは最も接触率が高い。次いで日野も鬱陶しい、黄瀬はまあ除外で良いだろう。用心に越したことはないからこれまでの経験からこの場所を選択させて貰ったぜ。教室に留まるのは危険だから移動する必要性があった。で、屋上は既に來てるから候補を幾つか検討して、ここ、中庭だ。隅の方に空いたベンチに腰を落ち着け、鞆から弁当を取り出した。孤独上等、気分上々。いただきます——

「灰谷君」

「偶然やなあ。こんな所におったんか」

「あ、1人なの？」

「．．．えーえー、どうせ1人ですよ。それが気に入ってるんですけどね」

「良かったら灰谷君も一緒に食べようよ」

「折角、中庭に出て来てんねんから。そうしいや」

ちっ、ありがとよ。ここでごねて断るのも段々めんどくさくなってきたから大人しく従いますよもう。中庭中央の東屋的な所まで移動する。屋根があつて陽射しが遮られるから夏場なんかいいかも知れない。あー失敗だった、深読みした秤に。3人はキヤツキヤと何がそんなに楽しいんだ。あ、弁当の中身？へえ、これってキャンディだ。黄瀬が自分で作ってきたらしい、女子力あるな。キヤラ弁つて言うんだっけ。日野が一口貰うと美味しいらしくて感激する。でもさ、ここ

まで完成度高いと逆に食べづらくね？あ、キャンディは自分で自分の顔食う気なんだ。・・・別に良いけど。

「ちよつとあなた達。悪いけど移動してくれない」

「ここはあたし達の場所なの」

こちらに近付いてきた女子2人組、第一声がそれだった。曰く、何時もここでこの人達はお弁当食べてるから曰くそーゆー訳で指定席になってるから我々にはさっさと退いて欲しいのって事らしい。実に理不尽、でもって威圧的だよな。

「何よ、文句ある」

こわあ、何にも言ってますせんけど？落ち着いて下さいよ。喜んでお譲り致しますから、ややこしいのは勘弁ですから。

「・・・退くから、今」

「何言うてるん、ちよい待ち。——そんなん、早い者勝ちと違うんですか」

相手のその睨む様な目付きを前にして直ちに立ち去ろうと決めた一方、日野はそんな俺を呼び止めるや臆せず反論した。傍ら、星空さんと黄瀬は何も言い出せずにおろおろするばかり。上級生らしい2人組は更にその事を持ち出してあからさまな態度を取る。しかし日野は尚も負けじと言い返す。確かに不本意だが余計な争いに巻き込まれるのはもつと勘弁だなあ。・・・ん、また誰か来た。

「あの、先輩」

「・・・緑川さん！」

「例え先輩でも、後から来て場所を横取りするのはおかしいと思います」

「横取りだなんてっ」

「中庭は皆の場所です。先輩達の言うことは、少し筋が通っていないと思いますー！」

ビシィツ、決まったな。いや、実に真つ直ぐでド直球な正論が炸裂。まあ確かに誰の目にもこれは明らかだし、ぐうの音も出ないという奴か。こうなるともう相手は言葉に詰まってさっきまでの強気はどこ吹く風だ。

「そうだね」

「入江生徒会長!!」

え、おいおい生徒会長って。話が段々大きくなってきたぞ。あ、2人組メロメロじゃん、解りやすい猫被りだなあ。女ってこういう時の変わり身早いんだ。そうして2人組はあっさり引き下がってくれたんだが、この天の助けとも思える援護射撃には星空さん達も感謝しきりである。まあ、何はともあれ穏便に済んで良かった。

「緑川さん、ありがとう!」

「お陰で助かったで!」

「あたしは当たり前のこと言っただけだよ。じゃ、部活の自主練あるから行くね」

気分爽快、風の如く颯爽と現れてはまた去っていく。よっ、さっすが女番長!頼もしいね。

「何ブツブツ言うてるん?」

「別に」

「何や、あれやで。自分、男やろ。あーゆー時は率先して助けしてくれな」

「えー」

「・・・ま、ええわ。ほな、お弁当食べよか」

で、我々を助けてくれた緑川は。ユニフォーム姿でグラウンドを駆け抜け、その足の速さときたら正に駿足。女子サッカー部に於いて一年生から既にレギュラーというのも頷ける。周りにはそんな彼女を一目見ようと多くの下級生が集まって黄色い歓声を上げていた。どうやら同性のファンが多いらしい。星空さんが何かを思い立ったらしく、こうして放課後に覗きに来た。え、俺?勿論、関係無いんだけどね。じゃあどうして居るかって言ったら、何があったかはもう説明も面倒だから敢えて省くよ。試合中、緑川によるゴールが決まると女子共が凄まじい歓声を上げた。星空さんまで感激しちゃってる。

「凄い凄い!ね、凄いよね!」

「解った、解ったから叩くの止めるよてめえ。痛いよ」

興奮しやがって、落ち着けい!でもってこいつ、堂々宣言しやがん

の。

「私、4人目のプリキュアは緑川さんが良いと思う！ううん、緑川さんしか居ない！」

「何処から来るんだその自信・・・」

「えっ、だってピツタリだもん。やっぱり緑川さんだよ！」

「いや、だから——」

「せやな、ウチもそう思う」

「うん。なおちやんなら強いプリキュアになりそう！」

ええつと4人目、オイオイこれ以上増えるっての？マジか。しかも緑川が良いって、どうしようっての。プリキュアになって下さいってお願いすんの。そんなんで良いのかよ、てかなれんのか。何か違う気がする。

「ヨッシャー！突撃やー！」

と思った瞬間、大勢のファンが緑川氏を取り囲んで星空さん達を阻む。まるでプロのスター選手じゃん、差し入れまで貰っている。残念だね、これ近寄れないよ。

「諦めろよ」

「ええっ、諦めちゃうの？」

「まさか！出遅れたけどっ緑川さあーん！！」

星空さんは構わず向かっていく。実にご苦労な事である、あの中に飛び込むなんて。

「まー、後頑張れよー」

「えっ帰っちゃうの？」

「だって俺、関係無いもん。・・・悪い？」

「べ、別に」

おどおどしながら黄瀬は視線を逸らした。あれ、何だコイツ。——ああ、今日も疲れた。昼休みの一件といい何かドツと疲労が襲ってくる、そんな感覚だ。でも、それでも構いやしない。何故なら明日は休日だ。昼頃まで寝てたって文句は言われないし、きつと何の邪魔も入らない。有意義に過ごすぞ。先ずゴロゴロする、でゴロゴロする。うん、実に完璧だ。漫画読むかゲームでもするか。

布団の中に潜んでもうどのくらいになるのか、今朝に目が覚めて時間を確認すると大体平日の起床時間と変わらない。だから二度寝してやろうと再び目を閉じたのだけれど………眠れん。どういう訳かすっかり目が覚めちまった。うーん、暇だ。ゲームでもやるか。髪もボサボサで着替えもせず、本体を起動させてコントローラーを握る。——あれえ、何か違う。よく解らないがこれじゃない感が半端ない。どうして。起きてからずっとモヤモヤした気分で落ち着かない。腹も減らないし、どうしちやつたんだ。俺はふと普段着に着替えると外へ出掛けた。別に行く宛もない、特別な事は何も無い散歩。そう言うしかない。言い様のない気分で少し足を伸ばしてみた。住宅地を過ぎて人混みを抜け、で、川沿いに近所というか又一般住宅が並ぶ道に差し掛かる。何してんだろ、俺。

「ああー！」

「あー……」

うそーん、こんな事ありますう？……星空みゆきさん。因みに今日は休日とあって、ピンク色の私服姿。いや、もうここまで来ると軽く恐怖を感じるんですが。何でこんな形で——。あれ、更にもう一人居る。

「どーゆー状況」

「私、まだ転校してきた秤だから迷子になっちゃってえ。そしたら、偶々通り掛かってくれて」

星空さん、そういう訳で困ってたらついさつきバツタリ出会したらしい。彼女、緑川に。こちらも緑色の私服姿で、何やら両手にビニール袋を抱えている。買い物帰りなのだろうか。どうでも良いけど大ききからして随分買い込んだらしい。

「灰谷君はどうしたの？何処かにお出かけ？」

それについては聞いてくれるな、何となく複雑だから。

「えっと」

「ああ、緑川さん。同じクラスの灰谷君だよ。ほら、昨日も……」

「灰谷君？……ええっと——」

そうですね、うん。お互い初対面みたいなもんだし、まあ実は昨日会ってるけど。氣い遣わなくていいんでホント。寧ろ、目立たない様に普段から意識してるんですよ。いや、マジで。

「良かったら持つよ、手伝わせて」

「本当に大丈夫？重いよ」

「へーきへーきっ!?!・・・ぜんぜんダイジョーブう!」

「説得力ねえよ。大丈夫じゃないだろ、それ」

「はっはは・・・待ってー・・・!」

「——仕方無い」

その場で別れようと考えたが、三つもあったその袋を一つ持ってやる事にした。これを緑川の家まで運ぶのか。・・・確かに重い。こんな抱えて歩いてたのか、彼女。で、そのまま荷物持ちとして緑川に彼女の家まで着いていった。星空さん、今にもぶっ倒れそうな気がする。

「2人共ありがとね。もう家、そこだから」

何だ、意外と近くだったな。一般的な住宅地の並びに建つ一軒家があつてその前で俺らは足を止める。

「あ、あのね。私、緑川さんに話があつて会いに来たの。——実は、私とあかねちゃんとやよいちゃんね・・・」

「バァン!!」

「うおっ、何だ」

「はい、整列。上からけいた、はる、ひな、ゆうた、こうた」

『ごーんにーちわー!』

「こっこんにちわ!」

玄関先へいきなり集まってきた小さな男女、緑川の紹介が始まるとその子供達はきちんと並ぶ。えー、詰まるどころ全員兄弟。下に5人とか緑川家は大家族なのか。へえ、テレビとかで見た事があるけど生で見たのは初めてだ。・・・そっか、あの買い物量もこれなら納得がいくな。

「お姉ちゃんのお友達の星空みゆきちちゃん、それから・・・灰谷君。じゃ、荷物運んで」

『はぁーい!』

流石、長女。6人兄弟の一番上だけあつて確りしつけてる。統率がとれてるっていうか、弟も妹も皆素直。

「じゃ、そろそろ帰る——」

「ありがとね、星空さん、灰谷君。良かったら、お昼食べてかない?」

「ええっ良いの!?!そうしようよ、灰谷君」

「いや、ああ、うん」

思つてもみない突然のお誘い。・・・しまった、了承してしまったぞ。待て待て、休日にクラスメートの女子の家にお呼ばれして昼飯ご馳走になるとか何処のリア充だ。別に嬉かねえけど妙に意識しちまうな、うわ、変な汗出てきた。

「お邪魔、しまーすう・・・」

よし、落ち着け。何でもないんだから、別に気にすることじゃないし。買い物袋を手に取り上がり込んだ俺達は奥まで着いていく。緑川はエプロンをして台所に立ち、慣れた手付きで早速支度に取り掛かった。まな板でネギを切つて非常にテキパキと卵を割つてかき混ぜ始める。うん、星空さんもだけど俺も感心。緑川の両親は今留守にしてるらしく、それで彼女が兄弟の面倒を見ながら料理までするんだとか。

「お姉ちゃん、遊ぼ」

すると、ゆうた君だったかが星空さんに声を掛けた。ツインテールの髪型をしたひなちゃん?が手を引っ張つて連れていく。へえ、人気だな。

「あ、こらー!」

「平気平気。私、子供と遊ぶの好きだから」

なら適任だ、因みに俺は遠慮しとく。さてと、こうなると何をしたらいいのやら。黙つて昼飯を待つか、それとも緑川の手伝いとかをすれば良いのか。うーん・・・何気に見回すと家の中は実に生活感が溢れている。クレヨンか何かで描いた動物の絵が貼つてあつて、食器棚の中には如何にもうんと年下の子供が使いそうなカラフルなのとか、キャラクターが描かれた小さな皿もあつた。

「灰谷君って下の名前は何て言うの?」

「は、真澄」

「へえ、よろしくね。——おつかしいなあ。クラスメートなら大体知ってるんだけど・・・ホント、ゴメンね」

「別に。てかこつちこそ悪いな、家に上がり込んでさぞ迷惑だろうに」

「ううん、全然そんな事ないよ。お昼出来るまで待っててね、ちよつと時間掛かるから」

確かに兄弟や自分の分、加えて俺と星空さんの分まで作るとなるとさぞ負担になるかも知れない。それにきつと、手伝おうとしたところで寧ろ邪魔になるだけだろうな。台所を離れて隣の居間に向かう。おもちゃなんか散乱していて、ちっちゃい子が居る家にはありがちな光景だ。外には洗濯物が干してあって隅には物置、後三輪車が放置されていた。——で、子供達の相手をしている筈の星空さんはっていうと・・・

「じゃ、次お姉ちゃん鬼ね!」

「よーしっ追い掛けちゃう・・・ボフツ?!」

「当たったらガオーって鳴くの!」

「そういう鬼っ!?!」

「確り、弄ばれてんな」

顔に座布団ヒット!それーそれー・・・ポイポイポイ・・・すっかりいい標的になってます星空さん。ボールやらなんやら投げつけて、緑川家の子供達は実に容赦ない。どうやら彼女1人では手に余るみたいだけど、これは助けた方がいいかな。いや遠慮したのかな絶対、うん。

「あそこにも鬼が居るぞー!」

「なにっ」

「わああ、ねずみ色の髪の毛したオニー!」

「待てよ、何でも既に鬼判定なんだ?」

もうルールなんてあつて無いようなものかも知れない、ここは今や無法地帯なんだ。あー、頼むから勘弁してくれ。大人しくお絵描きと

かせめてままごとにしてくれないか。長男を筆頭に妹、弟たちが今にも飛び掛からんと臨戦態勢。イカン、このままじゃ巻き添えだ。

「コラー!! 2人をいじめちゃ駄目でしょ!」

「うわっこっちも鬼だー!」

遂に長女の雷が落ちた。ふう、取り敢えず助かったよ俺は。で――

――おい、星空さーん、生きてるかーい。

「だっ大丈夫うーく……!」

「いや、だから大丈夫には見えねえって」

その後、俺達は緑川が作ってくれた昼飯を御馳走になった。居間にテーブルを用意し、兄弟達と仲良くそれを囲む。これは新鮮な光景だった、何せ自分の家では3人の食事だからな。

「お兄ちゃんもなお姉ちゃんの友達?」

そう尋ねてきたのは長男であるけいた君、だったか。いやあ、友達つつうかただのクラスメイトだよな、ほぼ初見の。だからこうして彼女ん家で飯食ってんのがマジ信じらんない。

「別にそんなんじゃないよ――!」

「解った! カレシなんだー!」

「ブフツ! んでだよ……」

「こらこら、違うって! おんなじクラスなんだよ。何処でそんな事覚えてくるんだ?」

全くだ。危うく口の中の物を全部ぶちまけるとこだったぜ。だが、

今度は次女の……はるちゃんって娘が。

「じゃあみゆきお姉ちゃんのカレシさん?」

「ええっ!?! ちっ違うよ!」

「もう、はるまで……ゴメンね、ホントに」

「別に。アハハハ……」

これ喜ぶべき? なあ。恋愛系フラグみたいなのが立っただって期待しちやったりすべきなんだろうか。ああ疲れる、このやり取りは心底疲れる。――でも、不思議だった。いつの間にかあのモヤモヤとした何か吹っ切れた感じがする。どうしてだろう。しかしあれだ、飯うまいな。

昼食まで御馳走になってすっかり居座る形となった午前中から早くも時間は過ぎて午後。俺は流れる的に星空さんや緑川兄弟らと共に河川敷まで足を運んでいた。

「片付けまで手伝って貰っちゃってありがとね」

「こちらこそ。お昼ご馳走さま、美味しかったあ！」

3人で土手の上に並んで座り、やんちゃな兄弟達が仲良くサッカーをする光景を眺める。何か腹一杯になったし休日のものんびりとした穏やかな空気感もあって平和そのもの。だからか、目蓋が重いな。

「緑川さん偉いなー、兄弟の面倒ちゃんとみて」

「そんなの当たり前だよ、一番上のお姉ちゃんだもん。それに、弟たちと一緒に居ると楽しいし。あたし家族が大好きなんだ」

あの弟たちと暮らしてりや確かに退屈はしなさそうだ。星空さんと遊んでいる姿を見ただけで、あんなのが毎日繰り広げられているんだと思うとうるさ——じゃなくて、賑やかなのは確かだな。

「・・・うん、やっぱり決まり！」

「え？」

「あのね、一緒にやって欲しい事があるの」

恐らく例の話を切り出す気ではない。だから誘ってなれるもんでもないと思うんだよな、プリキュア。さて、俺はもう特に用も無いから帰るとするか。んで取り敢えず昼寝すつか。

「おーい！ごめんっ、遅なっただわー！」

「あかね、やよいちゃん？」

「げっ、何故ここに」

「あれ、まーた偶然やなあ。灰谷もおったん」

「お待たせー」

「私が呼んだの。皆で遊べば、もっとウルトラハッピーかなーって」

「・・・余計な事してくれるなよ」

日野と黄瀬が息を弾ませて現れた。一体いつの間に呼んだのかは知らんが、この展開ってか面子を見ると又しても大変な事に巻き込ま

れる予感しかしないんだが。

「俺たち兄弟の固い絆を見せてやる！」

「ウチらだって、チームワークで負けへんでー！」

オオー！じゃねえーよ。ちよつと待て、ホントに待て。何故この俺も頭数に入ってるよ、え？これからサッカーするんすか。

「細かいこと気にしない！灰谷君も一緒に楽しもうよ」

「しんどい、パス」

「そないに言わんと。ほらっ、しゃんと背筋伸ばしや」

「が、頑張ろうね」

いやいやいや、気にするから。後、普段から猫背気味なんで無理ですよ。参ったな、こういうノリとか諸に苦手なんだから。．．．でもなー、皆やる気になってるしスゲー断りづらいじゃねえか。

「絆だとお？下らないオニイ!!」

そうそう下らない．．．いや、何もそこまでは思っていないけど？——あれ、誰か今「オニ」とか変な語尾付けました？

「世界よ！最悪の結末．．．バッドエンドに染まるオニ！白紙の未来を黒く塗りつぶすオニ!!」

その赤鬼の手によって空には暗雲が渦を巻き、途端に夕焼け空に変化させてしまう。まだ夕飯時には早いんじゃないか、さつき昼飯ゴチになったばかりなんだぞ。それは世界をバッドエンドとかにしようと言う善からぬ奴、或いは迷惑な敵。途端に緑川家の兄弟、姉妹達は膝から崩れ落ちてネガティブ発言を並べ立てた。

「全然楽しくない．．．」

「．．．帰る」

「家族、そんなもの何時かはバラバラになる——」

「おい、さつきまで固い絆って言ってたのに」

「アカン、あいつの仕業や！」

「また、あの赤鬼さん！」

いや、いちいち敵に「さん」を付けるのはどうなんだ。赤鬼は本を

片手にあの禍々しいエネルギーを集めていく。あれに一体何の意味があるのかは知らんが、良くない事なのは確かだな。あー、ハイハイ。ピエーロ?なんだそりゃ。

「緑川さん!」

ドンツ!

「良い子はいねがあー!」

「それを言うなら、泣く子はいねがあ?や!」

「突っ込んでる場合じゃねえだろ」

「お、ウチの突っ込みに更に被せてくるんか!やるやん」

「・・・しまった」

ええい、どうでもいいからお前ら変身しろよ。・・・そうそう、そのコンパクトみたいな奴使ってさ。パフパフって。

↑Ready?↓

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

↑Go! GoGo Let, go!!↓

光を、火の粉を纏い、リズムカルに手を打ち鳴らし——各々コスチュームを纏って伝説の戦士とやらに変身していく。

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりんじゃんけんポン♪キュアピース!!」

「ピカピカぴかりん?じゃんけんポン?前はチョコキだったのに、今回は「パー」オニ!?じゃんけん負けたオニ——!!」

ええーそうなの!あれ、毎回やる度にわざわざ変えるんだ!絶対要らねーじゃんつ。

「どういうことや」

「今日のぴかりんじゃんけんはパーでした!」

「面白ーい!」

「キャンディはチョコキだから勝ったクルウ!」

「どの辺がチョコキ!?」

お魚啜えたどら猫を裸足で追い掛ける主婦と張り合おうってか、知るか!どうでも良いよ!あ、赤鬼がアカンベエ出してくるぞ。しか

も、どうやらじゃんけんに負けた腹いせに。迷惑だなあ！

「アカンベエー！」

ゴールポストから生まれた怪物はネットで出来た翼で空を飛行する。それで頭の天辺がパカッと開くと弾丸みたいなものを発射した。ハッピーは咄嗟に動いてその場に静止する。攻撃先には緑川達が居てそれを庇ってハッピーは瞬時に気合いを込めるとハッピーシヤワーを繰り出した。サニーとピースも向かう、しかしアカンベエは全くの無傷で……

「うわあああー！！！」

「ハッピーー！」

攻撃を防ぐ事は出来たが、ネットに絡め取られて彼女は事実上捕獲されてしまう。残りの2人は助けようとしたが反撃された。俺は橋脚の陰に1人避難しながらその様子を窺う。赤鬼は満足そうにふんぞり返り、金棒を担いでゲラゲラ笑った。

「こんな奴放つといて、自分達だけで逃げたら良いオニー！」

「……そうはいかへん！ウチらの絆は——まだそんなに固ないけど——！」

「ええっ」

「これからかたーい絆になるんや！だから絶対に逃げへん！！」

赤鬼に対してそう断言して見せるサニー。ピースも納得の様子でウンウン頷く。……ん、緑川？

「絆——」

「おーいつ、早く逃げろー！」

「……灰谷君。これ——」

「緑川さんー！」

「へ、星空さん？……何、これ」

驚きますよね、実に、ええ。その気持ちはよく解るけど、今は兎に角そこから逃げるべきだぞ。あ、でも他の兄弟達を何とかしないとイケないんだ。緑川は状況が呑み込めていないので殆んど放心状態にある。でもな、ハッピーが星空さんだつて直ぐ気付いちやっただ。まあ名前呼べばそりや気付くね。これは後々説明がめんどいぞ。

「——ハッ！ごめん緑川さん、私が星空さんは秘密なの！」

「つて！それ言うたらバレバレやーん?！」

「へえ?あかね!やよいちゃん!？」

ものの見事に自滅するプリキュア共。ほーらー、だから関西弁とかバリバリ解りやすいんだつて。ピースまで正体バレたじゃんか、いやいや、俺が心配する事じゃねえけど。だつて部外者だしな。

「何が絆オニ!!仲間?家族?...そんなもの、最後は全部バラバラになるオニ!——だつたら今、バラバラにしてやるオニ!」

サニーの言葉を全て真つ向から否定し、赤鬼はアカンベエを動かした。怪物は空から再び襲い掛かり、サニーとピースへ攻撃した。いよいよ不味い、アカンベエは更に緑川一家に狙いを定めている。その時、ハツピーの悲鳴にも似た叫びが轟いた。くそ、こんなのつてアリかよ。

「——だあつ!!」

緑川が立ち上がった。目の前のサッカーボール目掛けて強く蹴り込む、ボールは真つ直ぐにアカンベエの額を捉えて命中する。やるう!

「緑川さん?!」

「家族はバラバラになんかならない!——私達家族の絆は永遠に消えない!!」

「なんだお前?やつてしまえ、アカンベエ!」

「あんた達が何処の誰かは知らないけど、もし私達家族の絆を絶ち切ろうつていうのなら.....あたしが戦う!!」

迫り来る敵、家族を守ろうと無謀にも立ち塞がる彼女。けれど、そこで奇跡つてのは突然起きるもの。どうやら星空さんが言った通りになったらしい。あの光は間違いない、緑川が4人目なのだ。もう完全確定、彼女が新たなプリキュアに選ばれたんだ。

「Ready?」

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

「Go! GoGo Let, go March!」

変身アイテム、スマイルパクトから飛び出したパフを手にした緑川

はそれを使って大きく三角形を描く。光を纏ってコスチューム姿となり、風が吹き抜けて彼女の髪型が変化していく。ポニーテールとツインテールの合わさったトリプルテールは鮮やかな緑色でコスチュームは他のプリキュア達と似た形状でありながらグリーンを基本カラーとしている。

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

ハッピー、サニー、ピースと続いてマーチ。直球勝負とか正しく彼女らしいのではないか。いや髪スゲーフワフワしてんな、断じて触りたいと思わんけど。

「カッコいい・・・!」

「じゃんけんが大違いやなあ」

「ふう〜!じゃんけんだって可愛いもん」

あれえこいつ、今自分で認めたぞ。はあ、もう四度も見ると新しいプリキュアも大して驚かないもんだな。んじゃ、そろそろアカンベエ倒して貰わないと。この空の下に居ると本当に具合悪くなるんだよな。

「——大切な家族の絆。守って見せる!!」

ビュン!!

うおっ?!はええ、滅茶苦茶はえ!!只でさえも速い緑川だからプリキュアに変身したら尚更速い。一瞬で駆け抜けたと思えばスゲー突風が吹き抜ける。

「ちよつと、待ってええ・・・!!」

こっちの台詞だよー!。何処まで行くんだ、止まれよっ。あ、危ない!

ズドオオンツ!!

言わんこつちやない、自滅だ。速いのは結構だけど止まれないのはどうなんだ。ああ!赤鬼尻餅ついた、ざまあみろ。煙もくもく、マー

チが粉々になつてないことを祈る。

「はあー、ビックリしたあ」

平気なのかよ！無傷つてのは流石プリキュアだな。ハッピーとかもだけどき、すんげえ頑丈じゃん。怖いよ、あんた。いや、サニー。タフどころじゃないから。アカンベエは旋回して攻撃を仕掛ける。次々に降り注いで爆弾の雨霰、だがマーチの俊足が難なくそれを突破する。最早、橋脚すら走り抜けて強烈な踵落としを見舞う。ハッピー達も手を貸すまでもなくて棒立ち。

「緑川、スゲーな」

「・・・あ、灰谷君。って見られちゃったの!?嘘っ」

見ました、見てました、一部始終。てか見せつけてくれたのはそっちだけだ。

「大丈夫やで、みんな知つとるから」

「そうなの!ど、どうも」

「・・・うん、そーゆーワケだ」

「いいから早く!マーチシユートでアカンベエを浄化するクル!」

キャンデイの指示を受けてマーチはスマイルパクトに触れる。力を込めるつてのは必殺技の為に必要な事で、これをやらないとまともにヒットさせるのさえ困難という謎仕様。大変に不便だから要注意なのだ。そして、スマイルパクトから溢れた風が勢いよく吹き渡つてマーチは必殺技を繰り出そうと大きく右足を振り上げた。目の前に現れたエネルギー状の球をサッカーの要領で蹴り出す。サニーとは違うタイプで豪速球をアカンベエに叩き込む。

「プリキュア・マーチシユート!!」

痛そう、実に痛そう。あれ本当に浄化の力なんだろうか、だってもうフツーに死ぬよ?あんなの直撃したら。プリキュアの技つてどれもこんなんだよな。・・・アカンベエは倒され、赤鬼の奴は何かパンツが汚れたとか意味解んない文句言つて消えた。それに合わせて空も元に戻り、更に伴つて俺の体調も回復した。

「蝶々デコルクル！」

「それ、毎回毎回落ちてくるけど要るの？」

「キュアデコルはとつてもとつても大切な物クル。アカンベエを倒してちゃんと集めないといけないクル」

こちらの質問にキャンディはそう答えた。へえ、まあ知らねえけど。こうして危機は去り、改めて緑川は星空さん達の仲間に加わる事になって嬉しそうにしていた。

「みゆきちゃん、あたし達良いチームになりそうだね。弟達を守ってくれてありがとう、あたしも皆の力になりたい。それに、なんか皆と居ると楽しいし。仲間に入れてくれる？」

「もちろんん!!」

と、そんなこんなで訳だ。すると緑川は今度、俺の方を向いて爽やかな笑顔を向けた。え、何。

「真澄」も仲間なんですよ、よろしく！」

「うえ、う——」

いきなりだったから変な声を出してしまった。仲間？そう見えたのか。

「なんや自分、何か言いや」

「そだよ。なおちゃんがよろしくって——」

それは解つてますから黄瀬さんよ。だって別に仲間って訳じゃねえんだもんよ。

「良かったね、真澄君」

「反応しいや、真澄」

「あ、えっと、ま・・・真澄、くん？」

お、なんだなんだそのノリ。寄ってたかって辱しめる気なのかい、マジかよこいつら。それに対して何て答えたら良いか解らず、俺はただ沈み行く夕陽を眩しいながら何処までも見詰め続けた。直後、緑川の一番上の弟が蹴飛ばしたボールが星空さんの顔面に直撃して大騒ぎとなった。これってオチって奴？

続

5 ビューティヘアー

人間の悪意がもたらす悲劇だとか不幸みたいなものは現実の世界に限った話ではなく、例えば創られた物語の中に於ても登場人物達にある日突然降り掛かる。それがどんなに理不尽であつても容赦なく襲つてきて悲しみに包み込む。ただ、おとぎ話や童話と現実との明確な違いと言え、それはやはり最後にはハッピーエンドを迎える事じやないだろうか。継母達に意地悪されてこき使われ続けたとある女性が最後には王子様と結ばれたり、毒リンゴを与えられて永遠の眠りに落ちた筈の彼女がやっぱり王子の口付けを経て蘇つたり。ファンタジーの世界にはやはりバッドエンドなんてものは似合わないだろう。まあ創作された物語なんて作者次第でどうにでもなる訳だが。けど、俺が生きるこの現実という世界じゃ決してそう上手くはいかない。前がそうだった様に今やこれからも未来永劫ハッピーエンドとは無縁かも知れない。そんなんだから常に後ろ向きだし何にも興味が向かない。周りが何かを頑張つていても斜に構えてまともに協力さえ出来ない。つくづく損な性分だ、この俺、灰谷真澄という人間は。

「あー遅刻遅刻〜」

別に走るわけじゃない、ただ言ってみただけ。いや、本当にこのままのんびりしていたら絶対ホームルームまでに間に合わないんだけど、まあ遅刻したとて死にやあしないから。朝から走つてクタクタになるくらいなら後で先生に注意される方がマシ。なんならそれで済めば安いもんだぜ。——まーそう思うのは俺ぐらいのもので彼女は一生懸命に走つてるけど。

「真澄君〜！急いでよお！間に合わないよー!?!」

「だから勝手に行けよ」

うっかり道程を同じにした為に出会すというハプニングに見舞われ、今朝から騒々しくてかなわない。星空さんは1人七色ヶ丘中学の正門に飛び込んでいった。そうそう、俺なんかは構わずさっさと行く

んだ。こっちは悠々と重役出勤するんだから。・・・て、急いでたんじやないのかあいつは。星空さんが学校の花壇の側で話し込んでる相手はうちのクラス委員にして生徒会の副会長だったか、青木れいかだ。遅刻ギリギリだから注意でもされてると思っただが、それにしただって穏やかな様子だ。

「行きましょう、星空さん」

間も無くしてチャイムが鳴る。担任も教室に移動するだろう、冷静にそう考えながら1人昇降口を目指した。けれども途中で2人に見つかつて――

「おはようございます。さあ、急いで下さい」

「ほらほらあ、走ってってばー」

「いや、廊下走ったら駄目だろ」

「そうですね、でも速やかに教室に行きましょう」

注文が多いなあ。ここはクラス委員の手前、それらしくしといた方がいいのか。でもって取り敢えず、すんなり間に合ってしまったのでホームルーム前に教室に入ることが出来た。初っぱな、授業は古典かあ。これがさ、途中から記憶ないんだよねえ。青木の朗読する徒然草がどうも心地良い眠気を誘うなどか思ってたらもうグツスリ。休み時間、ふと目が覚めると星空さんと日野、黄瀬、緑川が楽しそうに会話する姿が目に入った。こちらを時折、チラチラ見ていた様など一瞬思ったがきつと気のせいだと考えて又机で転た寝を決め込む。やがて昼休み頃になり、体が覚えてしまっているんだらうかこの時だけはすっかり目が冴える。すると教室を出る日野が通り掛かりに一言、

「真澄、中庭行くでー」

とかこっちは何にも約束してないのに否応無しだった。星空さん筆頭に女子の4人組グループが形成され、そこにこのこと男子が1人混ざるという大変特異な構図。そりゃあね、男子と女子のグループ同士とかだったらまだ解らなくもないんだらうけど。これじゃあなんか、品のない言い方すると――

「「「ごちそうさまー」」」

「はやっ」

俺まだ全然食べ終わってない。緑川は自分が持つスマイルパクトを取り出して、キュアデコルだったかそれを使ってアイテムを出現させた。へえ、そんな事出来んだなあ。キャンデイがおめかししてと言うと、ヘアゴムみたいな物であれば耳なのか、違う形に結び直す。

「皆、ちゅうもーく！」

「今度は何だよ」

「私、5人目のプリキュア見つけちゃったかもー！」

「——さては青木か」

「え、れいか？」

「あーっ先に言わないでよー！」

チョロい。たまたま今朝見掛けたから適当に言ったただけだったのに、ざまみろ。へえ、我がクラスの誇る学級委員とは大きく出たものだ。って、まさか本気で誘うつもりなのかなこの人は。

「それでね。やっぱり、最後のプリキュアは責任感があってえ」

「「うんうん」」

「賢くって、優しくって！」

「クルクル」

「・・・水の妖精さんみたいな人〜！」

最後のは訳わかんねえからスルーしとくけど、要するに今言った条件に当てはまる人物が青木れいかになる訳なんだな。ほう、賢い人かあ——

「ホントだ、このチームって知性の欠片もねえもんな」

「あ、コラー！自分何言うたっ」

「プクラー」

しまった、つい口が滑った。黄瀬、その表情は可愛さアピールなのか？・・・・・・青木れいか、品行方正かつ文武両道を地でいくその5人目候補を訪ねて放課後辺りに押し掛けようと相成った。だから、俺は関係無いし。まあ候補と言ったって勝手に決めた事であって本人次第なんだけどね。——張り詰めた空気の中、ここ学校内の一室で青木は一点の的を見据えながら弓に矢をつがえた。彼女は弓道部に所属してるみたいで、それをまざまざと見せつけられたと

「うか勝手に見ていた俺達はスゲーと声を漏らした。日野、黄瀬、緑川もここへ来てから益々納得して、こりやもう青木しかいないと感じている様子。」

「二一一緒にプリキュア、やって下さい!!」

「って早速話を切り出した。俺は胡座で彼女らは横一列に並んで正座し、てゆうか土下座かこれ。：あ、何？は、日野さん？ええ、俺も頭下げんの。何でやねん！」

「・・・伝説の戦士プリキュアですか。信じがたい話ですが、皆さんが嘘をつく様には見えませんね」

「そりやあ信じろってのが無理だわな」

「せやかてえ。——嘘なんかついてへんって！」

「私達、本当にスーパーヒーローなの！」

「うわ、今の一言で一気にきな臭くなった。ま、元から荒唐無稽つつうか、アレだけど。」

「青木さん、これ見て。こんなへんてこりんな生き物見たことないでしょ？」

「と、星空さんが差し出したのはキャンディ。うん、確かに俺もコイツ見た時は心底驚いた。喋るし動くし——」

「・・・随分と珍しいからくり人形ですね」

「人形じゃないクル！」

「あらーっ、そう来たか。確かに意思の疎通が図れてもそうゆうもんだって言ってしまったら誤魔化せるしな。いや、今時からくりて。」

「ね、信じて貰えた？」

「不思議な事が起きているのは間違いないみたいですね」

「てか、いっそのこと目の前で変身するのが手っ取り早いんじゃないやねえの。百聞は一見にしかず的な。」

「あの、あなたもプリキュアなのですか？」

「いやいやいやいや」

「真澄君はその、何て言うか——」

「ウチらがプリキュアだって知ってはいんねんけど・・・」

「厳密にはプリキュアじゃなくて、ね」

「そうそう、友達でただの目撃者？」

「・・・二つ修正する、先ず友達じゃねえから。後、目撃者つつうより被害者だからな。戦いに巻き込まれた、ひ・が・い・しゃっ」

「・・・と、まあこんな風にちよおつと素直じゃない友達なんや」

何さらつと片付けてやがんでためえは。人を面倒なツンデレ野郎みたいな言い方しやがったな、おいコラ。

「そうなんですか。成る程」

あーきつと誤解されて納得されたに違いない。ずーつと俺の主張は無視だよ。

「お願い青木さん、私達と一緒にプリキユアやって下さい！」

彼女の言葉に青木は実にそれらしく、彼女なりに真剣に吟味したんだろう。思案して、真つ直ぐに星空さん達の方を見ながら返答した。

「折角ですが、今は少し忙しくて――」

「「ええええ！」」

「本当に、すみません」

「忙しいって、何で？」

そんなの幾らでも思い付くだろ、例えば部活とか勉強とか、でも一番は生徒会の仕事っぽい気がするけど。到底ヒマでは無いんだろう。ここは素直に諦めて退散としますか。

「毎年、生徒会の主催で隣の小学校の生徒さん達に童話の読み聞かせ会をしているんですけど・・・」

胴着から着替え終える青木を待ち、彼女の後に続いてある場所に向かう道すがらその本人は忙しいとした理由を俺達に打ち明けた。そこには先輩や副会長と呼ぶ下級生がおり、2人は各々生徒会の役員を務める書記の倉田と会計の寺田だと青木の紹介を受ける。生徒会室の中にまで案内されたのは初めてだ。で、青木というかこの生徒会全体が抱える悩みつてのが生徒会長が現在病欠している事なのである。何でも風邪を拗らせたとかで熱が中々引かないらしく、明日あるという催しというか活動に支障をきたしている様だ。男子生徒、倉田は困った様子でその事を青木に尋ねる。

「明日の準備、どうしましょう」

「大丈夫。副会長として、私が何とかしますから」

「読み聞かせ会って何をするの？」

「生徒会の4人で役を分けて、童話を読むんです」

緑川の問いに、机にあった一冊の本を手に取りながらそう答える。同じ町内であり、隣に位置する小学校の生徒達を毎年こっちの中学校へ招いて行っているという童話なんかの読み聞かせ会。今年は「白雪姫」をやるつもりだったみたいだ。成る程、確かに忙しそうだ。会長が居ない今、全責任が副会長に掛かってる訳だから中々厳しい。

「白雪姫?」

「出た」

タイトルを耳にした星空さんがグイと前に身を乗り出した。絵本とかが大好きだって公言してただけにまー目の奥キラキラさせちゃって、余程だな。

「皆が楽しみにしているので、何とか成功させたくて——」

「・・・ねえ皆!青木さん達の手伝いをしない?」

「良いねえ。朗読だけじゃなくて、紙人形とか作ったら小さい子は喜ぶよー!」

「それ良いなあ!絵やったらやよいが得意やし」

「と、得意という程じゃないけど・・・」

「それ出来ないかな?裏と表で違う絵を描いたりして、クルクル回して!泣いてるとか、笑ってるとか!」

何か勝手に盛り上り出したぞ。アイデア閃いて適材適所な役割分担して、今年は一味違う読み聞かせをしようという方向に話が纏まった様だ。書記と会計の2人も乗り気になり、青木は手伝って貰うのは悪いと言いた気だったが星空さん達に押されて最終的には承諾した。で、そんな時の青木の表情がチラリと映ったんだけど嬉しそうに見えたんだ。

「画用紙に風景も描こうか」

「良いねそれ!」

「それに、貼る段ボールも貰いに行かなな」

早速準備の為の相談が始まった。・・・こうなるともう、俺なんて

居ても居なくても同じだな。そこから出ていこうとして星空さんが尋ねた。

「真澄君、何処行くの？」

「帰るんだよ」

「へ、手伝ってくれへんの！」

「関係無いから」

「ねえ、何時もあんな感じ？」

「えっと、そうなのかな」

緑川に尋ねられ黄瀬は戸惑った様な口調で返していた。俺は1人さっさと帰る為に外へ出る。早々と中学校を後にして何時もの道程を歩いていると信号待ちの所で確かに見覚えのある背中を見つけた。コソコソつと足音を立てずに近寄り、ピンクの今時なランドセルを背負ったそいつの頭をパシッと叩いてみる。

「なあああお兄ちゃん！ビックリしたなあっ、止めてよ」

「今帰るかよ。あんま寄り道すんなよ」

「そっちこそ。最近やけに帰りが遅くありません？」

「気のせいだろ」

生意気そうな物言いのそいつは妹の優輝だ。信号が青に変わった途端、ツインテールに結わえた茶色い髪を揺らしながら俺の先を行く。実を言うときつきの読み聞かせ会の話に出ていた、隣の小学校に妹は通っている。兄妹は互いに近場の学校へ登校しているのだ。まあ大概、優輝の方が早起きだからあいつが家を出てから大分たって俺が今日みたいにギリギリになって登校するのがお決まりのパターンになっている。

「ねえ、明日なんだけとお兄ちゃんの学校にお邪魔するからね」

「は」

「えっとね、何か体育館かどつかで本の読み聞かせがあるみたいだから、それで」

「あ、そう。本でどんな？」

「知らなーい。ひまりちゃんがどうしてもって言うから行こうかなって」

ほほう、こりやなんて偶然だろ。——その日の晩。風呂上りに何気なくリビングの隅に置かれた古い型のパソコンを起動し、検索エンジンを用いて白雪姫について調べてみた。幅広い分野の紹介が何処かの誰かによる文章で成される某サイトにアクセスし、そこに書かれた俺の知らない白雪姫に関する記述を読み耽り始める。大体、主人公である白雪姫に嫉妬した王女が魔女だったかに扮して毒リンゴ食わせて永久に眠らせてやるぜ的な展開で、しかし最後には突如現れた王子がキスして目覚めさせるみたいなオチだったとうつすら記憶している。だが調べていくと、白雪姫もグリム童話の例に漏れず元は中々残酷な描写というものが目立つ内容だったみたいで、詳しいことは省くけど刺客がどうか内臓がとか穏やかでない単語が目につく。そういや、眠ってる見ず知らずの女性に王子がいきなりキスとかもどうなんだろうって話なんだが。そこはファンタジーという曖昧で都合が良い表現でフワツとさせとくのが一番なんだろう。語る相手を子供達とするなら脚色して夢があるストーリーにした方がきつと良いんだ。でもな、関連で表示されたシンデレラも中々スゲー。意地悪な義理の姉は何としてもガラスの靴履きたさに自らの足を削ぎ落としたとある。女の執念でそこまでさせるんか。星空さんは嬉しそうに絵本読んでんだろうけどこれを考えるとなあ。

「何見てんのー?」

「うおっ!」

「変なもの見てるんじゃないの」

「んでもねえよ。変なものってなんだよ」

「——おやすみ」

あ、誤魔化したな。一体兄がパソコン画面に噛りついてる姿を見て何を想像したのか。最近の小学生も中々侮れないからな、あいつなんて結構あれでましたとこあるから変な知識とか持ってそうだ。第一、仮にそんなもん見るとしたらこんな堂々と母親のパソコンで探したりするかよバカ。

「アホくさ」

電源を落として自分の部屋に入る。俺も大概にしとかないと。さ

て、星空さん達はあの後読み聞かせ会の準備に大忙しだったんだろうけど間に合うのかねえ。別に関係無いけど若干気にはなるかも。

翌日、土曜日の真つ昼間に俺は念のためにわざわざ制服を着て玄関先で靴紐を結んでいた。後ろから妹がやって来て首を傾げるのも構わず、俺は家を出て中学校に向かう為に出掛ける。読み聞かせ会当日であるから、後を追い掛ける様に優輝もやって来る。優雅に読書でもしようと考えてさつき鞆の中を漁って気付いた。読み掛けの小説を寄りにもよって机の中に置きっぱなしにしてしまっていた事に。そいういや、日野が何読んでるのか聞いてきたから無視したらしつこく絡んできたのでつい中に突っ込んだまますっかり忘れてしまったんだ。後もうちよつとで読み終わるし、どうせなら今日さつきと読んでしまいたいと感じて足を運ぶ。

「じゃあね」

「おう」

解放されている裏門の方から回り込んで学校内に入った俺達は読み聞かせ会の場である体育館と自分のクラスとで行き先を各々別れた。休日の学校なんて好き好んで訪れるって事は無いだけに、当たり前だが平日の風景とは異なって校舎内に生徒が人っこ一人見掛けなというのは極めて新鮮だな。上履きに履き替えて教室へと向かう前に、急に変な気が起きてしまってじつくり構内を練り歩いてみた。本当に不思議な感覚だ、休日ってだけの事なんだけどな。何処も閑散としていて、多分職員室に行けば先生が何人かは居るんだろうけど無人の建物に迷い混んだ感じだった。さてと、無駄な事してないで本を取りに行こうか。やっぱり教師も生徒も見当たらない二年二組の扉を開け、廊下側から最も近い自分の席で中を覗き込む。・・・よし、あつたな。さあ、帰ろうか。——ん、これは何だ。行きは全く気付かなかったのだが、廊下のある地点で変なものが落ちていている事に気付いた。

「人形——」

と言うべきかも知れない。それは手に取ったところ、段ボールをベースにイラストが描かれていて持ち手にと割り箸が刺さった紙人形みたいな物と見受けられる。待てよ。昨日の生徒会室での星空さん達の会話を蘇らせた。こいつはあれじゃないのか、読み聞かせ会で使う筈の人形ではないのか。緑川のアイデアで始まり、星空さんが更に思い立って表面と裏面で絵を変えるとかいう話をしてなかったか。「これってあれだよな、白雪姫だろ」

黄瀬が描いたんだろう子供受けしそうなイラスト、見る限り主役となるお姫様だろ、これ。え、何でこんなもんが落ちてるんだよ。：：落としていったんだな。多分、体育館に移動する際に気付かずに。俺が偶々忘れ物を取りに来て、偶々これを拾うとは因果なもんじゃないか。しやあない、きつと困ってるぞ。

「行くしかねえじゃん」

寄りにもよって主役を落とすか。まあ“七人の小人”とかなら1人くらい欠けたとて誤魔化しが利きそうなものだがな。流石に白雪姫さんとなると“始まり始まり”もしないだろうに。という事で寄り道していこう。ああ、俺ってなんて親切なんだ。

「それアカンやん！」

「どうしようっ」

「困りましたね、何処かに落としてしまったんでしょうか」

体育館には既に小学生達と教員だろうか、大人の姿もある。勿論、妹も仲の良い友達と並んで座っている。そそくさ通り過ぎ、舞台裏に回り込んだ。

「ほらよ」

「真澄君！どうして？」

「偶然、全くの偶然。——で、これ」

「人形！」

そうそう、そのリアクションね。想定内だな、やっぱり落とし物にさっきまで気付いてなかったと見える。

「ありがとう！助かったよ！」

「良かったあ、これで読み聞かせ会が出来るね」

「れいか」

「はい。灰谷君、ありがとうございます」

「よっしゃ、やるで！」

こうして青木筆頭の生徒会役員と星空さん達が集まって白雪姫の読み聞かせが始まった。副会長の出だしを受けて今しがた届けた人形が城の背景を前に動かされる。上から日野が紙吹雪を落とし、緑川が背景を固定してその壇の下に星空さんと黄瀬さんが人形の動かし手を務める。舞台には既に語り役が座る椅子を含めてそれらが用意されていた。中々凝った造りではないだろうか。物語は滞りなく進む。

「〴〵そこでお妃さまは言いました」

「〴〵鏡よ鏡。この世で一番美しいのはだあれ？」

お決まりの件に差し掛かり、俺はそこで背後に何者かの気配を感じて振り向いた。え、誰――

「お、本物の魔女だ！」

「スゴイ！」

あ、そういう演出なの？緑色のローブみたいなのを着た背の低いお婆さんがこちらには目もくれずに舞台上に姿を見せた。それを見た小学生達が感激したように喜ぶ。でも他に物語の登場人物に扮した人は居ないっぽいしな、何で魔女だけリアル三次元だ？しかもフードから覗いた顔付きがやけにリアルだったりする。特殊メイク？

「ヒツヒツヒツ……さあ、お前達。美味しい毒リングは如何かな？」

「誰？」

「てか、自分で毒リングって言うてるし」

「保護者の方ですか？お席に案内します――」

あの笑い方とかホント雰囲気あるなあ。でも星空さん達も何か不思議がつてるというか戸惑った様子だ、変だな。てか他に生徒会役員の人が居たのか。いや、何か違うぞ。青木が中断して舞台袖に連れていこうとした。しかしお婆さんはその手を振り払い……

「白雪姫が幸せになるなんて嘘だわさ。本当はバッドエンドになるだわさ!!」

「——あ、もしかしてあの人……！」

何い、まさか例のアレか。お婆さんは本当に悪い魔女でしたっつか、おまけにオオカミもどきや赤鬼に続いてあいつも。

「世界よ！最悪の結末……バッドエンドに染まるだわさ！……白紙の未来を黒く塗りつぶすだわさ!!」

魔女は開いた本のページへと黒い絵の具を容赦なく塗りたくった。頭上に同じ色の邪悪なエネルギーが渦を巻き、全体に巨大なクモの巣が張り巡らされる。魔女らしくなんと不気味な空間だろう、例によって気分が頗る悪くなる。あ、となると周りの人達も！

「——どうでもいいよ、こんなの」

集まった中に居た妹も当然の如くネガティブな言葉を呟いて意識を失った。マジかよ。

「こんな事をして、何の意味もありません……」

「れいか!？」

「ヒツヒツヒ！人間共の発したバッドエナジーが悪の皇帝ピエーロ様を蘇らせていくだわさ!!」

本のページへと吸い込まれていくバッドエナジーとやらを満足そうに眺め、そいつは星空さん達と対峙する様にして舞台から客席付近へ降り立つ。

「……あたしの名前はマジヨリーナ。バッドエンド王国の魔女だわさ！」

聞き慣れない場所からやって来たと思われるマジヨリーナを前にして星空さん達はスマイルパクトを取り出した。4人は声を揃えて叫ぶ。俺は舞台袖から彼女達の変身する姿を見詰める。

↑Ready?↓

「ニプリキュア・スマイルチャージ!!」

↑Go! GoGo Let, go!!↓

パフを叩き、コスチュームを纏い、姿を変えて並び立つ。

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりんじゃんけんポン♪キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!——・・・ホントに又変身した!」

「マーチ凄く格好いいよ!」

「グー!今日のぴかりんじゃんけんはグーだよ」

「ピース、毎回じゃんけんするつもり?!」

「私に勝ったら、今日一日スーパーラッキー♪」

なに設定作ってんだてめえは。お前らもつと緊張感持てよ、初見の敵だぞ。

「中々愉快だわさ。だがあたしや、今まで通りにはいかないだわさ!」
「えっ、何だか強そう・・・!」

マジヨリーナは自信満々で赤い玉を取り出す。アカンベエを生み出してプリキュア達に差し向ける。そしてこれまでに無かった方法で4人を翻弄し始めた。アカンベエが突如分身していく。何処ぞの宇宙忍者星人みたいにフオフオフオ・・・とは言わないけど正しく残像チックにアカンベエが増えてプリキュアを取り囲んだ。

「どうだい、本物のアカンベエは1体だけ。お前達に解るかなあ?」

魔女らしく意地の悪い笑みを浮かべながら挑発する。これは今までに無かったな、紛れた本体を見つけないと倒せないらしい。

「プリキュアの方で浄化するクルー!」

「!!「それだ!!」!!」

「なんだわさ!?!」

マジヨリーナもその異様な光景に啞然とした。一斉にスマイルパクトへの気合い込めが始まった。ええー、只今必殺技発動の為の準備中です。暫しお待ち下さーいっと。ゲームやってても要所で起きる読み込み作業と思えば・・・違うか。

「♪プリキュア・ハッピーシャワー!!」

分身したアカンベエの内、1体に見事命中する。しかし見ているこっちは何時もの手応えを感じなかった。何故ならそいつは囿に過ぎなかったからだ。

「そおんなあ!?!・・・力使い果たしちやった、ヘトヘト——」

「ほう、こりや傑作だわさ」

「次はウチや！」

続けざまにサニーが走り込み、宙に現れた炎の球目掛けて腕を振り下ろす。強力なスパイクが又別の1体を消し去る。

「プリキュア・サニーファイヤー!!」

彼女の必殺技も無駄打ちに終わってしまふ。アカンベエの本体は別にある、分身を一つ減らしたに過ぎない。こりやあやべエな、やたら使ったら疲弊するだけだ。

「次は私!——プリキュア……うわあ!?!……ピースサンダー——!!」

自分の必殺技だろうが、イチイチ驚くなよ。ピースの放つ電撃もやはり分身が食らって敵は命拾い。ここまで3人のプリキュアが体力を消耗して行動不能に陥った。残り5体、いよいよゲームオーバーに近付いたな。後は全てマーチに託すしかない。一先ず本体を見抜く術が見付かるまでどうか時間稼ぎを——

「考えたって解んないよ、直球勝負だ!」

「え、いやいや……」

「プリキュア・マーチシユート!!」

真つ直ぐで鋭い一撃、それはものの見事にアカンベエの分身を消し去った。本体じゃなく分身、これ重要。プリキュア達は無謀にも力を使い切ってしまった。敵の思うツボじゃないか、どーすんだよ!

「さあ、お前達の技は効かないよ。今度はこっちの番だわさ!アカンベエ!!」

後はご想像通り。全員が集中攻撃されて綺麗に吹き飛ぶ、でしょうねえ。誰1人考えも無しに突っ込むからこうなるんだよ。

「たわいもない。——ん」

煙が巻き起こり、その向こうにダウン状態のハッピー達。マジョリーナは足下に落ちた人形を見て鼻を鳴らし、踏み付けた。すると青木がそれに反応を示す。意識を取り戻したのかゆっくり顔を上げる。

「あつ青木さん!」

「……何。あなた達は?」

「とっ通りすがりのスーパーヒーローです」

「あつてんねんけど、なんかちやうつ」

「スーパーヒーローって、昨日黄瀬さんが言っていた……まさか、星空さん達なんですか!？」

「——で、お馴染みの流れに突入していく訳だ」

「灰谷君?」

こちらが独り言を呟いたので存在に気付き、正しく目を丸くして見詰め返してくる青木。結局こんな感じで本人の目の前でやって見せるのが手っ取り早い。

「あんたかい、下らない本の読み聞かせ会してるのは。……よくもまあそんな無駄なことが出来るだわさ。オマケにこんな下らない人形まで作って、ちゃんちゃら可笑しいだわさー!」

マジヨリーナは白雪姫の描かれた人形を蹴飛ばした。青木はそれを手に取り、静かに見詰める。……星空さん達が一生懸命に作つたに違いない。その場に居た訳じゃ無いけれど俺にだって想像はつく。彼女は黙って、ただ皺の寄った絵を見詰め続けた。

「アカンベエ、止めだわさー!」

「青木」

「あなた方が何処の何方か知りませんが、今すぐお引き取り願います」

立ち上がると目の前の怪物達へ堂々とそう告げる。その声は至って穏やかなものだったが、きつと未知の存在に対する恐怖だとかこの説明しがたい状況への困惑という気持ちも少なからずあつたに違いないのに。しかし彼女は冷静だった。同時に星空さん達との努力とか込められた思いを踏みにじられた秤か小学生達から笑顔を奪い去つた事に対する怒りの感情も伝わってくる様で、そんな青木は淡々と続ける。ハッピーの逃げるよう諭す声さえまるで耳に入っていないかの様に。

「はあ?生意気な小娘だわさ!何なのさお前は!？」

「——私は、この七色ヶ丘中学校生徒会・副会長、青木れいか。あなた方の校内での乱暴な振舞い、生徒会副会長として見過ごせません!……いいえ。私、青木れいかが許しませんツ!!」

何処までも凜とした、張り詰める様な声でマジヨリーナを一喝す

躍するとアカンベエの四つの拳を回避した。

「成る程。変身すると超人的な力が出せるんですね！」

「おお、やるう」

さっきの取り消すわ。頭の回転が早いのか何なのか、流石は我らの生徒会・副会長様。したらば、お次は――

「ちっ、だが鏡で分身した本物のアカンベエは解らないだわさ！」

マジヨリーナが再び指示を送り、空中に舞い上がる中ビューティは極めて冷静に敵の言葉に注目していた。ん、鏡か……。あー、待てよ？

「本物は――あなたですわね?!」

確信を抱いた彼女は鋭い眼光でそう叫ぶと、反動を付けて回転しながら接近しパンチを叩き込んだ。アカンベエが地上に叩き伏せられる。いやいや、お強い。あなたが驚く以上にこつちがビックリしてるから。で、ビューティは確り本体を捉えていた為に残りの分身はまとめて消え失せた。

「鏡は姿を反対に映します。詰まりこの中で、リボンの位置が違う方が本物です」

注意深く見てりや解ったんだろうけど、先の4人はでたらめつつうかヤケクソでやってたんで自滅したんすよねえ。あー、このチームにやつとまともなお人が来なすつたぜ。ようし、その悪党共を懲らしめて差し上げなさいキュアビューティ！

「スマイルパクトに力を込めるクルー！」

「良いぞ、必殺技だ」

……。いかんいかん、何で俺こんなノリノリなの。こんな空間の中に居るから頭おかしくなるんだな、きつと。

「今クルウ!!」

気合い注入。ビューティは右手に氷のエネルギーを凝縮し、かつ左手で三本線を刻んで雪の結晶を描く。それらを最後に合わせ、強力な冷気を浴びせ掛けてアカンベエに止めを刺した。

「プリキュア・ビューティブリザード!!」

凍てつく猛吹雪を前に浄化の力で怪物は倒される。代わりに新たなキュアデコルを残し、ビューティは必殺技による疲労を受けながらそれを手にした。いやあ、恐ろしい。雪女もまっつあお！・・・最後のは余計だった、うん。悪どい老婆が去って行くと重々しい空気が一変して妹達は意識を取り戻し始めた。

白雪姫の読み聞かせ会、結論から言って大成功だった。来ていた子供達は起きてみると何にも覚えておらず、というか何も見てなかったんで面倒な事態は避けられた。ああ無論、優輝も何にも見てなかったってさ。・・・引率の先生が一旦学校の前に連れてって話をしてから解散するらしい。星空さん達や生徒会メンバーは笑顔で帰っていく生徒達に手を振り返す。青木は改めて礼を述べる。しかも彼女はこれを機にプリキュアとしても仲間に加わると宣言した。

「勿論だよ！青木さんしかないもん」
「私で良いんですか？」

「青木さんが良いの！——だって私、青木さんの事・・・れいかちやんの事、大好きなんだもん！」

「ウチもや」
「私も」

「あたしもだよ」
「・・・みゆきさん、皆さん！よろしくお願いします！」

「いやいやお熱いことで。聞かされるこつちが恥ずかしいから。え、そういう意味じゃなくて？解ってますよ。友情でしょ、これ。」

「お兄ちゃん」
「お兄ちゃん」
「げっ、帰ったんじゃねえのかよ」

「お兄ちゃん？なんや、妹さん？」
「初めまして。真澄の妹の灰谷優輝です」

『初めまして』
「何か用かよ」

「お兄ちゃんにじゃなくてえ——ぶぷっ」

優輝はジロジロと5人のクラスメート達を見詰めてから俺の方へ向いてニヤリと笑う。

「良かったね、こーんなに沢山お友達が出来て。．．それともハーレムう？」

「——お前な」

あー!!云いやがったコイツ!とうとう本性顕したなマセガキつ。言うまいとした下品な言葉使いやがって。

「ひっ、真澄君、顔怖い．．．」

「まあまあ、落ち着きなよ」

「．．．ああん?何も慌ててねえけど」

「ふつつかな兄ですが、これからもどうぞよろしくお願いします」

「しつかりした妹さんやなあ」

「こちらこそ!よろしくね」

黄瀬は俺の表情を見て友達の背に身を潜め、緑川は宥めようとして苦笑いする。日野は何故か感心してるわ星空さんも確り挨拶しちゃってるしで好ましくないこの状況、迷惑なことこの上無い。

「はー．．．れ?」

「あー何でもない!何でもないっ」

「ですが——」

「青木、良いの!!止めろッ」

「はあ、解りました．．．」

頼むからそこ聞き流せよ、お願いしますから聞かなかった事にして下さいー!

「いい加減にしとけよアホんだら．．．!」

「あ、じゃあ失礼します!」

何しに戻ってきたんだテメエ!兄貴に恥かかせるとか許さねえ。帰ったら覚えとけよ、必ず仕返ししてやる。

続

6 君の名はキュアキャンディ

この日は何時にも増して穏やかな気分だった。明確な理由は無いけれど今朝目覚めてから一日を平穩無事に過ごせるとそう予感した。だから、この眠気に今こそ身を委ねようと思う。さて、これから退屈な授業に備えて惰眠を貪る準備は万端――

「はい、今日は小テストです」

「ええ・・・」

の筈、だった。あれえ、おかしいな。折角の転た寝気分も担任が発した言葉で一気に掻き消される。先生はクラス中にブーイングが飛び交うもどこ吹く風、テスト用紙がその手で容赦なく配られる。生徒はただそれを受け入れるしかない訳だが、無論こちらとしては横暴極まりないというか止めて頂きたいもんだ。いやあ先生、何もそんな嬉しそうにしないでしょ。手元に行き届いたそれを凝視しながら小さく溜め息する。こうなったら悲惨な結果が目に見えていたとて覚悟して挑まなければなるまい、流石にテストだけは放棄出来ない。

「星空さん、授業に関係ない物はしまいなさい」

「わわわ！ハイっ、すいません!!」

左を見るとあのぬいぐるみ然としたキャンディが星空さんの机で確り顔を覗かせていた。指摘されて慌てて引っ込めたけど遅かった。いや、それは不味いだろ。見ろよ、佐々木先生すっかり顔がひきつってるぞ。

「先生！それより早くテストをっ」

「時間が無くなってしまいます・・・!」

そこで緑川と青木が透かさず気を逸らしてその場はどうにか事なきを得た。言う通り、テストが始まると皆あれだけブツブツ文句を言っていた割には黙々と挑む。この俺も格闘すること数分、あつという間に時間は過ぎる。終了したところで全てのテスト用紙が先生の下に回収されていった。悪い結果を想像してか何人かは解りやすく頭を抱えたり苦い表情。そう、言うまでもなくそれはもう散々たるも

の。すると答案に目を通していた先生の顔付きが一気に強張った。あれ、そんなに酷かったのか。

「ほっ星空さん。．．．これは一体——」
「げえっ」

一枚のテスト用紙を目に思わず変な声が漏れる。ありやあー、これはクレヨンか何かで落書きされてるんじゃない。見た感じ何かの絵みただけどそんな事はどうでもいい。あんたこんな描いたのか、正気かよ星空さん。

「キャンディクル、とつても上手に描けたクル♪どうクル？」

どうって、ねえ。幾らテストが嫌だったからってこんな事しちゃあいかんだろ。何自慢してんだよ。先生だってこんな事されてそりやあ黙っちゃいない。

「——後で職員室に来るように」

怒るといふよりは戸惑ってる様子でそう伝える。これは恐らく、怒りを通り越してもはや呆れてるんだな。前代未聞でしょ、テストにクレヨンで落書きして。クラスメート達も反応に困って苦笑いを浮かべたりしながら教室中がすっかり静まり返り、何だか凄い空気に。．．．が、今日の星空さんはまだまだこんなもんじゃなかった。続く国語の授業でも彼女の態度というか雰囲気みたいな、そこに妙な違和感がある。

「ええ、では星空さん」

「解ったクル！」

指名を受けて立ち上がった星空さんは教科書を手に自信満々に胸を張る。ん、クル？

「我輩は猫である」．．．キャンディは猫じゃないクルウ」

知ってるよ、何でそこでキャンディが出てくるよ。一体どうしちゃったあの娘。怖いよ、え、怖いよ。

「名前はまだ無い」．．．名前はキャンディクル!!」

「星空さん、何をくるくる言うつとるのかね」

何をとち狂ったか意味不明な発言ばかり——やっぱり、どっかに頭でもぶつけたか。国語の先生は眉を寄せて怪訝そうにしている。

そりやそうだ、序でにこの場の誰もが同じ気持ちだよ。

「くるくる・・・苦しいんじゃないでしょうか！」

「え、それなら保健室に行くかね？」

「ホケンシツ？それはナニ・・・」

「ハイハイハイハイっ！大丈夫！座って安静にしてたらへっちやらです多分っ」

変な奴ら。黄瀬も日野も不自然というか、何かを必死に誤魔化そうとしているみたいそんな感じ。なんかスゲー怪しい。星空さん、一体何があつたか知らんがどうぞお大事に。にしても、こうも賑やかではオチオチ授業へ集中もしてられない。そのうちに休み時間になると星空さんは先程の一件が元で早速職員室へと向かったらしく姿を消した。あー、居眠りも出来なかつたしとんだ災難だ。

「何」

「ちよつと来て」

「お願いします」

この上、気を抜いていたところに緑川と青木が突然声を掛けてきた。なんだなんだ、2人共表情が妙に怖いんだけどこれって断る事は出来ないのかな。呼び出される理由が何一つ思い当たらないが着いていくしかないのだと腹を括る。教室から連れ出されて人気の無い階段の踊場に足を運んだ。そこには既に日野と黄瀬までが居て、その顔触れを見たら益々不安だけが増す一方。・・・スツゲエ嫌な予感。

「——真澄君、実はね・・・」

「ええー、やだ」

「まだ何かも言っていないのに!?!」

「そっちこそ、いきなり連れてきて何の真似だよ。兎に角ぜってえイヤだかな」

「お願いします。話だけでも聞いて貰えないでしょうか」

それを丁重にお断りしたい。ところがこの人らときたら何処までも強引で、黄瀬は胸に抱いたキャンディを鼻先にまで近付けて戻ろうとするこちらの動きを止めた。

「実は、みゆきちゃんとキャンディが・・・」

「入れ換わってしもうたんや」

「——え？」

日野が言った次の言葉に思考が一気に停止へ追い込まれた。イレカワツチャツタ？は、何それ。いやマジで解らない。

「ウチらも最初は信じられんかった。けど、ほんまの話やねん」

「ほら、よく見て。よく、見て！」

「アハハ、どうもー・・・」

「こいつがどうかしたのかよ」

「真澄君！私、星空みゆきなぞ！」

「・・・なぬ」

キャンデイっぽいのに確かにその口ぶりからして星空さんみたいだ。え、詰まり入れ換わったってそういう事なのか、いやいやいやいや！まさか。一体何がどうしてそうなった、魂みたいなもんが入れ換わるなんてそんな事があり得るのか？気持ち悪ッ。そういや、キャンデイの耳のところが何か星空さんの髪型っぽくなってるし。

「どうやらこの指輪が全ての原因みたいなんです」

「は？指輪・・・」

「今朝、空から落ちてきたのを拾ったんだけど填めてみたら——」

星空さん、いやキャンデイの手にあるそれを青木が示す。こんな物のせいで魂が入れ換わるなんてどんな仕組みでそういう事になるんだ。あの星空さんは実はキャンデイであって一方でそいつの体には星空さんが入っていて・・・ええいややこしいなッ！

「さつさと取ればいいじゃん」

「それが問題でね。あたし達もやってみたけど全然取れなくて」

「どうしたら良いかな」

黄瀬があからさまに困った顔して上目遣いに尋ねてきた。そんな事この俺が解るわけねえだろ。様子がおかしいと薄々感じてはいたが要するにこれを必死に誤魔化してたってワケか。星空さんになっってしまったらしいキャンデイ、今朝から奇行を繰り返しているのもそれなら領ける。あのう、こんな相談を突然されたって困るんですけど。

「じゃあな」

「つて、それだけ!?嘘やろ!」

「いやいや、それだけつて。他にどうしようも無さそうだし」

「真澄にもフォローするの手伝って欲しいねん、クラスの皆とかにバレたら大変やろ!」

「解ってるよ、だからそんな事に巻き込むなよ」

「巻き込むも何も、あたし達は・・・その——」

緑川はそこで言葉に詰まる。まあしょうがないね、俺に出来ることは何もないんだし。

「勘弁しろよな・・・」

彼女達の様子からもう特に何もなさそうだったのでさっさとその場を後にして教室へ戻った。

次の授業が始まる為、その準備をしている間にチャイムが鳴る。社会科の担当である女性教師の堀毛は何時も通りに授業を始める。星空さんとして席に着くキャンディはきつと何にも理解していないのだろう、ただボーツと口を開けて正面に視線を向けていた。

「・・・では、星空さん。前に来てここに答えを書いてください」

よりにもよって本日二度目のご指名となる彼女に全員の注目が注がれる。日野を始めとした4人は黒板に向かうキャンディを不安な気持ちで見詰めてるに違いない。そして案の定、彼女達のその悪い予感的中する。先生も周りの生徒達も徐々に星空さんが答えではなくお絵描きをしている事に気付いて呆然とした。出来上がった物を見た堀毛は敢えて冷静に尋ねる。それが又おつかないのなんの。

「星空さん、これは何かしら」

「メルヘンランドのお城クルウ」

わあ、やつちやった。黒板にデカデカと広がる謎の絵、しかもご丁寧に黄色とか赤とか色まで使い分けたこの幼稚な落書きは本当に取り返しがつかないぞ。へえ、こんなのどうフォローしろっつうんだい。しかし緑川が咄嗟に発言し、青木が更に付け加えた。

「先生! 星空さんは答えを敢えてメルヘンで表現したんだと思いま

すっ」

「それも又、一つの答えの形ではないでしょうか」

「アホか・・・」

敢えて表現する意味が無いと思いますけども。どう考えたって2人の主張は無理がある。日野も頭を抱えちゃってるし黄瀬なんて机に顔を伏せたまま微動だにしない。気持ちちは解る。

「それは美術の時間にやりなさい」

「美術？それ何クル!?それっ、やりたいクルやりたいクル——」

「・・・いい加減にしなさい!!」

ヒャー!我慢の限界に達した堀毛の怒鳴り声が二組の教室中に、いや恐らく隣のクラスにまで響き渡った事だろう。さて、こうなるともう誰にも止められはしない。キャンディはその後も次々とやらかしていく。化学の授業にて理科室を訪れた俺達は指示に従ってグループ分けを行い、薬品と器具を用意して化学反応を見るという実験に取り掛かった。早い話、別々の薬品同士を混ぜて様子を観察する訳だが、くれぐれも量を間違わない様に注意しなければならない。だが――

「おい、何してんだよ」

「クルウ?」

「入れ過ぎだよっ」

キャンディはそれを一切無視してドバドバ放り込んでいた。やっぱり何一つとして理解しちやあいなみみたいで日野達はこれに気が付き、止めようとしたが遅かった。危険を察知したので俺は巻き添えになる前に速やかに離れた。

ポオオン!!

爆発騒ぎにクラス中が大パニック。開いた窓から黒煙が立ち込め、それを見て他の教師が駆け付けたりして火災報知器が鳴るだとか消防の出勤だとかは無かったものの大騒ぎ。当然、先生に叱られるし事情を知らないクラスの奴らからは変な目で見られるし体を使われてる星空さんにしたら心底いい迷惑だろうな。とんだなりすましの濡れ衣だ。この後は昼休みを挟み、午後の授業は先ず家庭科。キャン

デイには既に細心の注意を払って、日野達が丁寧にミシンの扱いを教える事になった。

「兎に角、皆で絶対乗り切ろう」

「お互いに注意を払って気を付けなければいけませんね」

「せやな」

「うん、これ以上は不味い事に・・・」

「不味いって、もうとつくに不味い事態だろ」

「真澄、頼むよ！お願いだから手伝って！」

絶対に気が抜けないと彼女達は一カ所に固まってヒソヒソと話をする。緑川が顔の前で両手を合わせながらそう頼み込んでくるが困ったもんだ。そしてキャンデイの体になっている星空さんは見つからない様に身を隠して陰ながら様子を窺い続ける。

「きゃっキャンデイ!!」

「あーあ、又か」

少し目を離れた隙に速攻で暴走を始め、何メートルになろうかという長さを縫い尽くしていく。もう何も止めるものは無い。思わず叫んだ星空さんは直ぐに俺の背中に身を隠した。

「どうしよう・・・!」

これはもうどうにもならないかと思えますけど。そうして最後の体育では男子と女子とで別々だったのでその場を見てなかったが、後で聞いたところによればバスケットをしていたキャンデイがボールを持ったまま何処かへ走り去っていき、探す為に一時授業が中断したんだとか。——彼女は今頃、今日一日にしかした件で再び職員室にてお説教されてるものと思うが果たして。

「あいつ、マジでヤベェよな」

「テストに落書きしたりさ」

「先生すげーキレてたし、ヤバかったなあ」

放課後にクラスメート達が話すそんな声を耳にする。真実を知らない周りからしてみたらイタイ奴みたいに思われちゃってるんだろ。うな。星空さん、御愁傷様。俺は頼まれてキャンデイを連れてくる必要があったので職員室まで向かった。何でそんな事しなくちゃなら

ないんだと納得は一切してないが、それを頼んできた時の日野達の疲労感満載の顔が妙に怖かったんで断るタイミングを失い、致し方なく引き受けた次第だ。少し待っているとキャンデイとは職員室を出てきた所で顔を付き合わせ、直ぐに声を掛けて同行させた。

「何処に行くクル？」

「屋上。皆が待ってる」

「見てクルウ、こんなに貰っちゃったクル！」

この期に及んでやっぱり理解してないみたいだ、沢山の紙の束は補修のプリントであって喜ばしい代物ではない。しかし当人とくれば、それはそれは嬉しそうに見せつけてくる。無視しとくがチラリとだけ目の端に映ったあれは0点か。そういうのはあんまり人に見せちゃいけないだぞ。とまあ、屋上にやって来るとそこには完全グロッキー状態で少女達がぶっ倒れているんだが本当に悲惨だなこれは。

「あれ、皆どうしたクル」

「誰のせいだよ、誰の」

成る程。これじゃ、確かに迎えに行く気力すら湧いてきそうになり。誰一人として動く気配が無いもんな、何だか話し掛けづらい。

「疲れたあ」

「今日は何とか乗り切ったけど・・・」

「これ以上はちよつと——」

「無理い」

このままだと多分、注意とかでは済まなくなつて停学処分みたいな事にもなりかねないんじゃないか。でもキャンデイはそんな事お構い無しに補修のプリントを見せびらかす。いや、だから喜ばしいものではないんだって。

「いい加減にしてよ!!キャンデイのせいで私の学校生活メチャクチャじゃない!」

「何でそんなに怒るクル?」

遂に怒り爆発の星空さんに対し、状況を理解していないキャンデイはムツとしながら聞き返す。緑川が窘めるも2人は互いに納得して

ないといった様子。まあ、とにかくにも先ずは元に戻る方法を見つけないければ解決しない。青木のその意見は最もだった。だが、日野が続いて言うように手掛かりすら掴めないのでは話にならないのも確かで、彼女達は手詰まりに陥っていた。

「・・・まさか、私達ずつとこのまま」

今のぬいぐるみみたいな体で星空さんは小さな手にあるリングを見詰めながらすつかり落ち込んでいく。

「あれ、キャンデイ——」

「ちよつとお、何処に行つちやつたのよー!？」

「今出ていったぞ」

「探しましょう!」

やれやれ、次から次に忙しいんだから。一緒に居るだけでしんどい奴らだ。

「何してるん、真澄も来るんや!」

「えっ、俺も?」

「せや!手伝わんかいっ」

こうして不本意ながらキャンデイの搜索へと駆り出される事にも、探すつたって何処を。——え、つべこべ言うなって?だって・・・

「もうっ、ほならみゆきを頼むで!」

日野、黄瀬、緑川、青木、4名は各々手分けして探すべく別々に散つた。残り2人は近くのベンチへ腰を下ろすとこの場で待つ事を約束する。ぬいぐるみの様な小さな体になってしまった星空さんが街中をウロチヨロするのは不味いと考えたんだろう、一先ず乗り気でない事を理由に探させるのではなく彼女の側に残していったのは咄嗟の判断みたいだ。まあ、早い話が俺はお守り役ってことらしい。キャンデイの姿をした星空さん、今はただ黙って遠くを見詰めており、その隣で気不味いなどか思いながらこちらは空を眺めていたがふと溜め息を漏らす。それは星空さんだった。

「どうしてこうなっちゃったんだろ」

「その指輪のせいだろ」

「うん、まあ、そうなんだけど・・・」

いや、星空さんが言いたいのはそのうということではない。兎に角、今はこんな成りをしていても中身は彼女だし、いつになく落ち込む様子に何をどう言えば良いのか解らなかつたのだ。

「・・・もう一度見せてみるよ」

こちらの呼び掛けに膝の上へ飛び乗り、小さな手を差し出してくる。そいつにそつと触れてみて、改めて角度を変えながら確かめるがこいつの手には指がないからどちらかと言えば腕輪っぽい。恐る恐る摘まんでみてやや力を込めて引っ張る。・・・成る程、確かにこりやあ取れそうにない。何か特別な方法を使って外すしか無いのだろうか。ガツツリ填まってびくともしない。彼女は再び並んで座りながら遠くを眺めたまま会話する。

「大丈夫か？」

「私は何とか平気。それよりキャンデイが心配。この世界に来てからずっとプリキュアの為に頑張ってたんだって思う。きつと、どうしたら良いのか何も解らないのに、学校の事もよく知らないのに——」

「厄介だよな」

「・・・キャンデイはキャンデイなりに精一杯やってたんだよね。私、それなのに酷いこと言っちゃった。・・・キャンデイに謝らなきゃ」
彼女は深い溜め息を吐いて再び黙り込む。こういう時って何かしら励ます様な言葉の一つも掛けてやるべきなんだろうが生憎と何も思い付かない。

「ほんなら、はよキャンデイ見つけなな」

「皆・・・キャンデイは!？」

顔を向けるとそこにはいつの間にか日野が居て、同じく黄瀬達も戻ってきたらしいがキャンデイの姿は無く。

「あかん、さっぱりや。でも、もう一回探しに行くで！」

「「うんー」」

諦めてはいない様子で再度別方向に足を向ける4人、星空さんはそ

れを見て自分もと思ったのか日野達と違う場所へ探しに行こうとして駆け出した。あんな小さな体でよくやるな。でも案の定、小石か何かに躓いて呆気なく数メートル先で転んでしまった。・・・やれやれ。「あれ」

「何やってんだ、勝手に行くなよ」

「真澄君？」

急に掴まれて体が浮き上がったからなのか驚いた様子の星空さん。持ち上げた時、嘘みたいに軽くてやけにフワフワしていて、それでいて生物的な温かさがあつてこつちもビックリだぞ。うん、まあこの姿ならあんまし触るのに抵抗は無いかな。

「どうして・・・」

「人に見られたら何て説明すんだよ、事態を余計ややこしくする気か」
冷静に考えて彼女が今この状態で探しに行くのは望ましくない、だとしたらここは付き添うしかないだろ。いやマジで、素直じゃないとかそんなんでなくてな。まあどう思われようと構わないんだけど。要は俺としてもさっさと家帰りしたいしね。

「ほら、取り敢えずここに入ってるよ。早いとこ見つけるぞ」

「真澄君。ありがとう」

星空さんを拾い上げて通学カバンに入れる。さて、町内を出たりしてないと良いんだけど。探す範囲が広がると厄介だ。因みに言わずもがな探すとは言っても手掛かりらしいもんは何一つ無い。宛てもなくその辺をしらみ潰しにするしか思い付かない。

「心当たりとかないのか」

「解んない。キャンデイの行きそうな場所か・・・うん、何も知らないから」

「さっきの話か——」

「私もキャンデイの事、まだ全部知ってるわけじゃないから」

「・・・だったら、後で本人に直接聞けよ。知りたいこと全部」

「——うん」

住宅が並ぶ通りやもしかしたらと商店街の方まで足を伸ばしてみたがどれも無駄足だった。そうしてる間に時は過ぎていき、気付くと

日もすっかり暮れ始めている。結局見付けられず仕舞いかと落胆ムードの中、それは前触れなく訪れた。人気の少ない道、背中に妙な気配を感じたので意を決して振り向き様に手刀を繰り出した。

「むう、見破られたかあ。気付かれない自信あったのになー」

「どーゆーつもりだお前。下らねえ事してんじやねえよ」

「お兄ちゃんだつてこの前やつてたじゃん！」

妹は兄の一撃を眉間で受け止めながら口先を尖らせる。変な絡み方してきやがって、一体いつの間に着いてきてたんだ。つて、今構ってる暇はない。

「あ、何それ。スツゴい可愛い！」

「テメツ」

「どうしたのコレ？買ったの？」

軽くあしらつてやろうとした優輝に星空さんをふんだくられた。だああもうっ！見つかつた！ガツツリ玩ばれるが微動だせず星空さんは耐えた。直ぐに妹の手から彼女を取り戻し、急いでカバンの奥へと押し込む。

「ほら、早く帰れよ」

「お兄ちゃんこそ。帰つてこないと思つたら今まで何してたの」

「何でもいいだろ」

「——ま、別に興味ありませんけどね。・・・あー、そうだ。さつき

ね、お兄ちゃんの友達見たんだよ」

「友達？」

「うん。ええつと——ほら、こうつ髪がクルクルつてしてる人・・・」

そのジェスチャーからピンと来て、何処に居たのか聞き出して早速走つた。優輝が見掛けたつて言う公園は大通りから入つた住宅街の中にある。近所つてことで何処と無く安堵しながら、まだそこに居る事を願う。ところが、道中である方角の空模様強い違和感を覚えて思わず立ち止まつた。夕焼け空にただ一カ所、異様な濁つた色が広がるといった光景。・・・待てよ、何か同じのを前に見た気がする。

「真澄——！」

呼ぶ声がして我に返り、空から視線を落とすと向こうからやつて来

る日野達の姿があった。息を弾ませて走ってきた彼女達にこっちらも近付く。

「あれはバッドエンド王国に違いありませんね」

「兎に角、行こう！」

青木や他の皆も空模様気付いていたらしく、カバンから出てきた星空さんの一言に全員でそっちへ急ぐ。

「あ、居た」

「待ちなさい!!」

「皆!——みゆき、来てくれたクル?」

「もう、当たり前でしょ」

近所のとある公園、やっとキャンデイを見つけたと思えばそこにはもう1人別の存在が居た。

「出たねプリキュア!」

小高い山の様な遊び場に立つローブ姿の老婆、あれって確かいつぞやの魔女じゃねえの。公園一帯が薄気味悪いクモの巣に囲まれ、中では小さな子供達が意識を失う様に倒れている。魔女は続けざまにキュアハッピーの名を呼んで、今は変身出来ないとかなんとか言い出す。

「そうだったあ・・・」

「あー、成る程」

いやいや、納得してる場合じゃない。日野達はコンパクトを取り出して一斉に臨戦態勢を取った。ヤバツ、戦いが始まるのか。緑川がこちらに振り向いて俺達を遠ざけようとする。

「真澄、みゆきちゃん達をお願い!」

「おっ、おう」

キャンデイの体をした星空さんを、星空さんの体になっているキャンデイへと手渡して急いで可能な限り後ろに下がる。日野、黄瀬、緑川、青木は声を揃えて叫んだ。

↑Ready?↓

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

↑Go! GoGo Let, go!!↓

飛び出すパフを手に火の粉を纏い、リズミカルかつ吹き抜ける風を浴びて淡い粉雪の舞う中、等と各々のやり方で4人は姿を変化させていく。最後に並び立ち、順に名乗り上げていく様まで敵と共にこちら側も確りと見せつけられる。

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりんじゃんけんポン♪キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降りつもる清き心！キュアビューティ!!」

一先ずサニーからビューティまでが変身を終えた。星空さんが参加出来ない中、魔女は例によって赤い玉を取り出し頭上高くこれを掲げる。

「出でよ、アカンベエ!!」

禍々しいエネルギーと共に生み出される凶悪なる道化。プリキュア達に襲い掛かる怪物はこれが又実に・・・

「ちつつちゃ」

拍子抜けしたと言わん程に俺とサニーは同時に声をあげる。いやだってこれまでと比べてもホントちつつさい。サイズ的にあの小柄な魔女と大差ないくらい。とは言え――

「見た目で嘗めると痛い目見るだわさ!」

その言葉通り、アカンベエは“跨がるとバネで揺れ動く”あの遊具の姿をしていながら、機敏に動き回って翻弄していく。先制攻撃を仕掛けたサニーの拳をかわし、彼女をバネの力を利用して地面に叩き付けるとピースの背後を通り抜けてビューティを狙う。彼女も咄嗟に攻撃をかわしていたが食らってしまった。

「ビューティ!?!」

「おいっ後ろー!」

「えっ——」

こつちとしては早めに言ったつもりだったがピースもその瞬間にやられる。これを受けて今度はマーチが正しく暴れ馬を攻略しようかという勢いでアカンベエに飛び乗った。上手く抑え込めれば良いけど。

「こんのっ、大人しくしなさいッ．．．きゃああああ!!」

「うおっ、飛んだ!」

マーチはサニーの隣に着地。一方アカンベエはその間に高く跳躍し、発射したバネで2人を捕らえてしまう。グルグル巻きで身動き取れない彼女達は文字通り手も足も出ない!

「避けるー!」

しかし間に合わないんだこれが。今度はピースとビューティまで戦闘不能にされてしまう。えーっと、この展開つてもうお約束なの。おうっと、そしたらこつちから先はどうなるんだよ。え?

「後は、お前達だけだわさ!」

「だよね．．．」

「お前達はその指輪を拾ってくれてラッキーだわさ」

「は、指輪?」

「これはあなたの仕業だったのね．．．!?!」

星空さんとキャンディ、その中身を入れ換えてしまった謎のペアリング。全ての元凶であり妙ちくりんなこのアイテムのそもそもの持ち主はあの魔女。と、すると魔法の指輪なのかこれ。

「どうすれば外れるクル?!」

「絶対に外れないんだわさ．．．」

絶対?そんなのマジかマジでマジックか。あれ、今なんか変なの混ぜたぞ。

「——これを使わない限りね」

「それは?」

魔女が得意気に取り出したのは一つの小瓶、見るからに怪しそうである。

「魔法の指輪．．．イレカワールを外せる唯一の薬!——その名も、

「モトニモドール!!」

「そのまんまやん」

「センス無いわね」

「以下同文」

「うるさいだわさー!アカンベエ!」

ネーミングセンスはともかくとして、あの薬があれば星空さん達は元に戻るのだから超ラッキーじゃね。いやあ、自分から種明かししてくれるとかなんてお優しい事。うん、実に解りやすくて良い響きだ。『モトニモドール』。：魔女の指示でアカンベエが襲い掛かる。するとキャンディはそこで敵を前にしながらまるで臆せず堂々とする。

「みゆきは、絶対傷付けさせないクルウ!」

「キャンディ、無茶しないでっ」

「今は・・・!今はキャンディがみゆきクル!」

「だから変身出来ないんだろ。それなのに戦えるかよ、早く逃げろよ・・・」

「イヤクル!みゆきならこんな時絶対諦めないで・・・諦めないでキャンディを守ってくれるクル!!」

勝てる術も無ければ本当は怖くて堪らない筈なのに。それでもキャンディは星空さんを守ろうと一歩出る。

「ふん、そんな姿のお前が何をやっても無駄だわさ」

「——無駄じゃないツ!!・・・キャンディは必死なの、必死に私の代わりになろうと頑張ってるの!そのキャンディの優しい気持ちをも、馬鹿にしないで!!」

「っ何だわさー!」

とても眩しかった。キャンディがスマイルパクトを取り出すとそれが強い光を放っていた。星空さんと2人、頷いて光の根源に手を触れる。

「キャンディ、さっきは言い過ぎちゃった。ゴメンね」

「キャンディもごめんクル」

「・・・行くわよー!」

「え、行くつて——」

↑Ready?↓

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

↑Go! GoGo Let, go!!↓

キャンディの体を使ってパフを取り、その上からピンク色のコスチュームを身に纏う。ええー!ちよつ待て!そんな事出来んのツ。

「クルクルきらめく未来の光!キュアキャンディ!!」

そ、そーなんだあ。うん、なんつーかアレだよ。これつてキュアハッピーのコスプレしたキャンディつて感じ。それから俺もだけど何より本人も変身出来た事に驚いてる。

「耳を使うクル!」

「・・・あ、そうか!」

何がそうかなのかこっちはさっぱりだけど2人の間では成立してららしい。〃キュアキャンディ〃にアカンベエが反応する。威力の高いバネ足で攻撃を仕掛けるアカンベエ、だが対するキュアキャンディも負けじとそれをかわして、なんと本当に耳で叩き伏せた。又、空中へ飛んだ両者は激しく互いの攻撃をぶつける。・・・でもそこに緊迫感は全然無いんだよなあ。キュアキャンディは仲間からの声援を受けて、只でさえそれ程広くもない公園の中を所狭しと駆け回る。地味にアカンベエも追い掛けっこしてバテ気味、魔女は痺れを切らして怒鳴り散らす。そこにアカンベエの放った攻撃が——

「危ないだわさ!!」

「よし、真澄!」

「ホントに良いんだな?」

「かまへんツ」

「・・・解つた、よ!!」

サニーに呼ばれて駆け付け、自分を蹴飛ばすように言われて思い切

り彼女を転がした。その先には魔女が居る。体当たりを見舞って吹き飛ばすと手放したモトニモドールが宙を舞う。それをキャンディが見事にキヤツチした。

「ナイスキヤツチ！」

「序でに俺もナイスシユート、だよな」

「今クルー!!」

投げ飛ばし、叩き付けて止めを刺す。キュアキャンディはアカンベエに向けて必殺技を撃つ。それはハッピーと同様に、両耳を使って大きくハートを描く。

「プリキュア・ハッピーシャワー!!」

あ、そこはキャンディシヤワーとかじゃないんだ。．．．とか気にしてはいけない、きつと。小さいながら威力は十分、アカンベエは瞬く間に浄化されて倒された。戦いは終わり、空からクモの巣が取り払われて本来の夕焼け空が姿を現す。魔女から手に入れた小瓶を傾けると中身の液体が指輪に掛かる。そのイレカワールは途端に消滅し、これを受けて星空さんとキャンディは元に戻った。端からは解りづらいが本人達が喜んでいいるのだから間違いない。

「しっかし、今日は大変な1日やったなあ」

「でも、ちよつと楽しかったね」

「この期に及んで馬鹿なこと言ってるじゃねえよ」

「だって．．．。もう少し入れ換わったままでも良かったかも」

「それは嫌」

「．．．だよな」

笑えない冗談はそのくらいにしとけての。———星空さんとキャンディはすっかり仲直り出来たらしい、これで一件落着か。

「ところで、あんた。何だかんだ言うてキャンディ探すの手伝ってくれたんやな」

「そうですね、ありがとうございました」

「いや、だから——。そっちが勝手に巻き込んで．．．」

「はいはい、巻き込みました。ほら、序でに一緒に帰ろうよ」

解せない、これは全くもって解せない。こいつらのペースに一度捕

まったら最後、底無しで何処までも抜け出せなくなる気がしてならない。・・・いや、もしかするともうとつくにそうなってるのかも知れない。ううん、まさかな。

続

7 嘘みたいな本当の話。

昇降口で何時ものように靴を脱ぎ、それを上履きへと履き替える最中だった。そこへやって来た黄瀬が挨拶もそこそこに突然切り出した一言に、同じくその場に居た星空さんは激しく動揺した。

「私、転校する事になったの」

「ええー!!本当!?!」

「てんこう?——ああ・・・!」

余りにいきなりの告白だったもんでこちらとしてはなんのこっちゃ、しかし直ぐに黄瀬が伝えようとしている言葉の意味が理解できた。えーと、朝っぱらから凄い事を聞かされたもんだ。さてと、そういう話なら俺はさっさと・・・

「真澄君!!やよいちゃんがッ」

「んだよー」

ハイハイ解ってますよ、転校するっていうんだろ。でもさ、それ聞かされたってどう反応すりや良いのかな。要は黄瀬とはただのクラスメートってだけだし、どう声を掛けたら良いか解らないんだもん。

「寂しいよね?・ね?」

「なんつうか、大変だな」

「い、いつ転校するの・・・?!」

「それが、本当に突然の事だけど・・・明日——」

「えええー!?!」

「マジか」

そりゃ又偉く急な話。星空さんと彼女の鞆の中に居たキャンデイは揃って絶叫する。無理もないだろ、何の前触れも無くこんな事になっちゃってしまつて納得しろつっつう方が無理だ。

「どどどっとうしよう、ねえ真澄君?!・ね!」

「解った、解ったから兎に角落ち着けよ」

まあどうせ無理なんだろうけど。先ずそんな激しく揺さぶんないでくれるかな、イテーよおい。

「・・・うーんと、頑張れよ」

「そつそれだけ？もつと他にあるでしよ〜!!」

「ねえよ、つたくイチイチうるさいな」

「——あ、それでね。実は・・・あれ」

そこまで言うとは黄瀬は首を傾げて立ち尽くす。おい、どうしたんだよ。まだ何か言いたそうだったのに。

「あの・・・みゆきちちゃんは？」

「もう行っちゃったけど」

「ええ!!」

すると今度は彼女がいきなり叫んで心底驚いたみたいな表情をする。いやいや、さつきから2人してうるさいな。周りの視線とか集めちゃうからマジ止めてくんないか。で、何気に話の続きが気になったので試しに聞いてみると。俺としてはなんつーか、どうにも馬鹿らしくて開いた口が塞がらないって言うんだらうか。黄瀬は恐る恐ると真実を打ち明けてきたのだが余りに下らなくて呆れてしまった。

「あ、居た」

「やよいちゃん」

一先ず教室へ向かうとその前の廊下に星空さんは居た。直ぐ側には日野の姿もあって、こつちに気付くと2人して近付いてくる。

「やよい、おはよー。お、真澄もおったんかい」

「よう」

「あかねちゃん、おはよう。・・・みゆきちちゃん、さつきの話なんだけど。あれは——」

「やよい、もうええんやで。実は今みゆきから聞いたんや」

この時、黄瀬の顔つきを見ていると徐々に強張っていくのが解った。あちやー、そう来たかあ。これは少々厄介な事になりそうだな。

日野は小さく耳打ちするように転校の言葉を付け加える。

「ゴメンね、どうしても黙っていられなくて」

「そうじゃなくて・・・」

「ええねんええねん。解ってる！ウチも転校が決まった時、中々友達に言い出せんかったんや」

「私もそうだった・・・」

良かったじやん、理解者が2人も居て。星空さんと日野もそういや同じ経験があったんだものな。それなら間違いない、黄瀬の今の心境が手に取る様に――

「わかるわかる！わかるでえ、その乙女心・・・！」

「無い無い、そりゃあ無いって」

「転校が決まった時ってたった1人で胸に悲しみを抱えて寂しい思いをするのよね・・・！」

「可哀想クルウ」

彼女らはきつと黄瀬の考えや気持ちを理解した気にいるんだろうけど・・・生憎と全く違うんですよ。

「真澄、あんたからも何か言うたり」

「うーん・・・って言ってもなあ」

「ほら、教室入って。ホームルームを始めますよ」

そこに佐々木先生が現れた為に話は一時中断。で、ホームルームが終わると星空さんと日野は緑川や青木にまで黄瀬の転校の話を伝えてしまう。見るからにご当人の表情は物憂げ、だがそれは転校が故に皆と離れ離れになる悲しみから来るものではない。移動教室で縦笛を手に音楽室へ向かう最中、他の4人が先に行ってしまった一方ですういう訳か黄瀬とタイミングを同じくして肩を並べて二組を後にする。

「どうしよう、言い出せなくなっちゃったよう。私、こんなつもりじゃなかったのに・・・」

「下らない嘘つくからだろ」

大袈裟な表現かも知れないが黄瀬は過ちを犯した。具体的に言うと彼女は嘘こいた。転校なんてのは実は真つ赤な嘘であって、本人が言うには今日が4月1日であったから軽い気持ちで皆を驚かせてやろうとしただけだったそうだ。ね、しようもないだろ。

「しっかし、エイプリルフルなんてすっかり忘れてたなあ。多分、星空さん達もそうなんだろうな」

「私・・・ううっ」

「おっおい」

えええー、これは嘘であつてくれ。どうしてこんなところで泣き出すんだよ、マジ意味解んないから！落ち着けて本当に。

「兎に角、後でちゃんと説明して謝れば良いんじゃないやねえの。まだ間に合うって、多分」

「——つぐす、うん……」

何で俺が励まさないやいかんのだ。そうして音楽室へ辿り着いたが……

「やよいちゃん？」

「え、泣いてるの？平気？」

「あ、うん。何でもないから……」

「真澄！やよいに何かしたん？あんだ。今一緒に来たやろ」

「ち、ちが……！」

いやいやいや、どうしてそうなつちやうのかな。——それからというもの、星空さん達に誤解されたままなのがどうも気掛かりでことのほか授業にまるで身が入らない。しかも集中出来なかつたもんで縦笛の合唱中にミスしようの無いところで盛大に音を外した。お掛けで大恥かいたじゃないか。こうして地獄みたいな時間は過ぎ去り、戻ろうと席を立つと例の5人が一カ所に固まっていた。

「やよいちゃん、元氣出して！」

「もしかしてプリキュアの事でも悩んでいたのですか？」

この様子から察するにまだ言い出せて無いんだな。さつき二組でも何とかして謝ろうとはしていたみたいだが、もう何か黄瀬も黄瀬なんだけどこうなると星空さん達が言わせまいとしている風にも見えてくるんだよな。さーて、このままズルズルと一日を終えてしまうのか。そんな雰囲気プンプンだぞ、あの馬鹿どうすんだ。

「私達はプリキュアとしてこれまで5人で力を合わせる事で困難を乗り越えてきました。でも——」

「……そっか！もう5人じゃ無くなつちやうんだ」

「その事に責任を感じていたんだね」

（何かすげえ事に……）

落つこととした消しゴムの搜索に手間取っていたら何やらとんでも

ない展開を見せてるみたいだ。彼女達は居なくなろうとしている友人の為に真剣だった。ところが事情を知っていて、かつ部外者と位置付けられる俺からしてみたら最早聞いちゃいらんない。黄瀬、早く何とかしろ。こっちまで気不味いじゃねえか。

「わかるわかる、わかるでえ！」

(またか)

「でもそんな風に一人で悩みを抱え込んだらアカン！」

「プリキュアの事なら心配しないで」

「やよいさんが抜けた分は私達が頑張りますから・・・！」

頼むから早く終わってくれて、出て行きづらいだろ。机の下でしかも同じ体勢で長く居るのはしんどい。因みに消しゴムは、もしかしてプリキュアの事で悩んで・・・の辺りで既に見つかってました。タイミング見失っちゃった。

「大丈夫や、真澄かて居るしな！」

「は」

「なーんてな」

和ませうとかしたんなら一つも笑えなかったなあ今の。さぶつ、止めて下さいよ日野さん。ここに本人居るんですからね、ホント。

「——例え、離れ離れになっても私達の気持ちは一つです」

「ウチも」

「私も」

「あたしも」

「キャンディもクル」

「「ええええー！！」」

って黄瀬も思ったに違いない。感動的な場面だなあ、いや、実に。星空さん達は黄瀬一人をそつと優しく包み込んでいた。よし、この隙にっつと。

嘘か。考えてみると幾つかしよーもない嘘をついたもんだと今でもその時の過去の記憶が甦る。ある時、宿題やってなかったのについ流れでやったとか言ってみたり、この間なんて妹の読んでた漫画すり

替えたり。まあ、流石に直ぐ気付いてしまったんだがやってないって言い張った。無論バレバレ、元はと言えば奴が先に読み掛けの小説に挟んだ葉をこっそり動かしたりしたからだ。そりゃあ俺だって読んでて気付いたよ、一章分くらい読み進んだところで。ホントに心底くだらないのだが、一番古い記憶だと実は去年の夏休み終わりだったかな。どうしても翌日から学校行くのが嫌になってしまった俺は取り敢えずその場凌ぎに腹が痛いだの頭が痛いだのと仮病では定番とも言うべき症状の数々を訴えて布団に潜り込んだままその日から一日中部屋に引きこもった。だがそうまでするくらいマジで行きたくなかったんだなあ。・・・とか、今となっちゃ懐かしい思い出の一つかも知れない。——屋上で一人、ただポーツとそんな事を考えていた時である。気配がしたので後ろを見ると黄瀬が居た。いつの間に、てゆうか彼女だけみたいで後の奴らはどうやら居ない。すると黄瀬は俺が座るベンチの隣に静かに腰を下ろした。

「え、何これえー」

「——『何これえ』、カンコレー!・・・なんちやつて」

「お、おう。その・・・うん、一旦落ち着けよマジで。てか、多分だけど俺が悪かった、んだよな?よく解らないけど・・・」

「あ、ちっ違うの!!緊張してなんか変なこと言っちゃった・・・。だから!今の忘れて、うん。絶対だよ!・・・もう、ホントにやだあ・・・!」

一人で随分と忙しいな、どうしちやつたのさこの娘は。いきなりやって来たクラスメートはどうやら錯乱状態、それに静かな屋上に2人きりとか今ここに人の目があったとしたら俺達ってどんな風に見えるんだろう。決して自惚れるつもりは無いんだけど、このシチュエーション?それはもう・・・ねえ、多分。で、何で緊張してんだよ。ところで『カンコレ』って一体何の事だろう。いやいや、どうでもいいか。

「何しに来た、目的は?」

「あのね・・・真澄君。その・・・実は私、お願いがあつて・・・」
「やだよ」

「だから、まだ何も言っていないよ！」

さーてこのやり取りも流石に飽きてしまった。しょうがねえから真面目に聞いてやるかな。

「何」

「———お願いします！真澄君も一緒に考えて下さい！どうやったらみゆきちちゃん達に本当の事を打ち明けて謝る事が出来るか」

「却下。そんなの俺が知るか」

「ううう……！」

解ったよ！解ったから泣くのは止めろ。こいつ、泣けば大概の事は上手くいくとか考えてんじゃないだろうな。そんな甘い考えじゃ将来ろくな大人にならないぞ全く。

「ゴメンね。いきなりこんな事、頼んだりなんかしちやつて」

「ったく、そう思うなら相談してくんなよ。……ううんと、直接言えないなら何か別の方法とか」

「別の方法？」

「むう………手紙でも書いてみたら」

「手紙、か」

面と向かって言えないとなるとそれぐらいしか無いのでは。この俺の意見に黄瀬は俯きながら顎に指を添えると暫く考え込む。そして———

「そうだ！絵にしよう！」

「え」

「私が得意な絵にしたら上手く伝わるかも」

彼女は手元の鞆から普段より持ち歩く自慢のスケッチブックを取り出すと早速そこにペンを走らせた。俄然やる気になった様子で黄瀬は黙々とイラストを描き出す。

「直接話す勇氣は無いけど、漫画なら正直な事が言える……！」

本当は自分の口から言うべきだし、それが一番手っ取り早い事であるというのは彼女自身もきつと自覚はしている筈。けれどその上で彼女は彼女なりのやり方でどうにかしたいと頑張っているに違いない。得意のイラストという形で嘘を正直に伝えようと黄瀬はこの放

課後の時間に絵を仕上げていった。

「出来たー!!」

「へえ、それが漫画か」

キユアピースが仲間達に謝るといふ姿に吹き出しを付け、謝りたい内容を台詞としてそこに書き込んでいる。しっかし思い付きにしては中々凝ってるな、自分を描くのも上手いのかこいつは。

「真澄君、ホントにありがとう。お陰で絵を描く事を思い付いたし・・・」

「別に、何もしてないけど」

「——それからね、真澄君から皆には言わないでね。これを切っ掛けにして、皆へはちゃんと自分から本当の事を打ち明けたいから。自分からきちんと謝りたいんだ」

「う、うん」

ヒユウウウー・・・

「あああああ?!」

「えっ」

風のイタズラって奴か、気紛れにも黄瀬の渾身のイラストを空の彼方へ拐って行ってしまった。あらー、万事休す？

「——あ、新しいの描けば・・・」

「やよいちゃん!」

ナイスタイミングとは程遠い時に彼女はやって来る。どうやら黄瀬の事を探していた様でそのまま引っ張っていこうとする。もうこうなったら今言っちゃえよ、本当の事。

「真澄君も一緒に教室に来て! 大事な用があるの」

「へーい」

一体何をしようというのだろうか、俺的にこれは嫌な予感しかない。そ、こういう勘だけは基本的に外したことないんだ。・・・星空さんに連れられて二年二組へ。日野に呼び止められた俺だけは教室の後ろの戸から入らされる。——おうっと、ヤベエ。黄瀬より一足先に教室に入るとそこで凄い物を目にしてしまった。次の瞬間、黄瀬が入ってきた途端クラス中から拍手が巻き起こる。桜の花弁まで散

らせるという憎い演出、加えて黒板に書かれた温かいメッセージ。ひゃあ、オワタ。

黄瀬への気持ち秤のサプライズ。この状況、ただ呑み込まれていくしかない。わ、笑えねえ。嘘が肥大して取り返しつかない状態だわ、正しく。クラス委員として、いやそれ以上に友達として青木は急遽転校するっていう黄瀬の為に率先してお別れ会をこうして開いてくれたんだとか。ううーヤバイ！事情を知ってるだけにこの先の展開を想像とかしちやったら俺も黄瀬と同じくらいここから逃げ出したい気分だよ。生き地獄って言葉はこういう時の為にあるんだって、まさか実感する機会にこうして恵まれようとはねえ。

「急な事でしたので、学校で育てたお花しかご用意出来ませんでした
が・・・」

「あのお花、れいかちゃんの花壇に水やりして育てたものなんだよ」
「へえ」

星空さんがさらりと伝えてくる。いらんいらん、んな情報。わざわざ摘んできたって？くうくこれは・・・！

「私達の気持ちだよ」

「忘れんといてや」

「あの、あの・・・」

こうなってしまうたら今更嘘でした等とは口が裂けても言えんだろう、況してやこんなクラスの皆の前で。そんな事したらどうなるか容易に想像つくな、黄瀬は総スカン食らって誰とも口利いて貰えなくなるんじゃないだろうか。そんなの幾らなんだって辛すぎるし、でも嘘の代償って奴なのかなこれも・・・けど何も悪気があった訳では無いらしいし、どうにか上手いこといかないかな。

「これは皆からのメッセージです」

「寄せ書き」

「時間が無くて全員には頼めなかったけど、でも後で皆でちゃんと挨拶するんだ。真澄君もお願いね」

トドメじゃあ！そんなもんまで受け取ったらいいよ終わりじゃんつ。ズルズルと来るところまで遂に来てしまったか。あーあー、もうどうにでもなっちゃえ。

「では、やよいさんから皆さんにメッセージをお願いします」

但し、黄瀬には酷かも知れんが俺はこの場から消えてやるからな。この先の修羅場を見届ける根性は生憎と持ち合わせてないんでね…

「真澄、どこ行くん」

「真澄君？」

気付かれたー！放せえ、放してくれえい！頼むから行かせてくれえーい。

「…俺、こうゆうの駄目だから」

「え——」

「真澄…知らなかった。あんたほんまはこういう時、一番涙脆いやな」

日野は肩に手を置いて引き止め、もう一方の手の人差し指で鼻の下を擦る。

「そっか、そうだよな。真澄君だって本当はやよいちゃんとお別れるのが寂しくて…」

「——ちげえよ」

何勘違いしてんだよ！まあこんなムードじゃ無理もないか。いいから一先ずトイレにでも行かせてくれ、ほとぼり冷めるまで隠れていたいんだから。

「ええんやで、何も恥ずかしい事あらへん。ウチかて今、必死で…」

「だから、違うっつうの…！」

「…真澄君！泣かないで——」

「だーからちげーよお!!」

我ながら苛立った末にみつともなく大声を出してしまった。クラスの連中皆が今度はこっちへ一斉に振り向いた。しくじったな、くそ。でもって人ってのはついつい一言余計に口走ったりしてしまうもので、自分でさえその例外ではなく。

「こんな下らねえ事に付き合せんよ！いい加減にしろ、嘘なんだ

よ！」

「・・・ま、真澄？」

「灰谷君？」

緑川と青木だけでは無い、その場に居た誰もが呆然と立ち尽くした。突然叫び始めた一生徒の言葉に。

「あんな今、何て」

「——ああ、いや・・・その・・・」

「うわあ、酷い」

誰かがそう呟くのを確り耳にしてしまう。これ以上、余計なこと言う前にさっさと帰ろう、うん、それが良い。

「やよいちゃん！」

そこで黄瀬が堪らず花束と寄せ書きを手に教室を飛び出した。皆を騙してしまつて耐えられなくなつたのが理由なんだろう、だがこんなタイミングでは誰がどう見たつて俺のせいに思える。——ああ、どうしてこうなつた？・・・それを見た日野が詰め寄ってくる。

「何であんな事言うてん!!」

「あかねちゃん・・・!」

「どうしてなの?」

2人の問いには答えなかった。クラス中が折角のお別れ会をぶち壊しにしたそいつを睨んでいる。当然だよな、いやあつくづく参つたね。

「皆さん。兎に角、今はやよいさんを・・・」

彼女の一言で星空さん達4人が追い掛けていく。後のクラスの奴らは学級委員である青木の指示で黄瀬を連れ戻すまで待機となつた。俺は無論、そこには居られる筈もないので今日はもう帰ろうかと校舎を出た。ところがグラウンドに足を向けてみると学校の体育倉庫の裏から啜り泣く声があったので忍び寄つて覗いてみた。花束と寄せ書きの色紙を側に置いて膝を抱える白いカチューシャを付けた頭。それがこちらに気付くと顔を上げた。

「逃げてどうすんだよ」

「だって——」

「後、さつき無視して振り切つただろ。呼んだのに」

「・・・ゴメン」

「ちゃんと謝れよ、俺にじゃなくて星空さん達に」

実はここへ来たのはこいつの姿が見えたからだだった。2人して今度はグラウンドの隅の体育倉庫の裏手で並んで地べたに腰を落ち着けている。同じクラスの男子と女子、だからどんなシチュエーションだよ。

「今度こそ駄目・・・きつともう許して貰えないよ」

「じゃあ本当に転校するとか」

「ええ!?嫌だよそんなの・・・!」

冗談のつもりだったのに、イチイチ真に受けんなよ。こんな時にそんなことを言う俺も俺だけだ。

「やよいちゃん」

そうこうしていたら遂に星空さん達がここまでやって来た。取り敢えず黄瀬に関してはこのまま教室へ戻る事になりそうだな。4人は当然ながらこの俺にも気付いて――

「・・・真澄君」

「あんた、やよいに言うべき事があるんとちゃうの」

「あかねちゃん、実は――」

「真澄。どうして下らないだなんて言ったの?・・・今、そうやってずっと黙ったままだけどそういうのって筋が通らないんじゃない?」

緑川の問い掛けにも正直言って上の空。何故なら空模様が突然に変化したから。赤く染まる光景に星空さん達も異変に気付いたらしくてその原因が何かも解っていた。案の定・・・

「あんたは!」

「皆、急いで変身クルウ!」

校庭のフェンスに立って大きく高笑いする大柄な赤鬼の姿。バツトエンド王国とか言う所から来たらしいそいつを前に、俺は星空さんに促されて巻き込まれんようにとこういう時には何時もながらその場を離れる。黄瀬も涙を拭って立ち上がり、5人は変身アイテムを手取る。

〈Ready?〉

『プリキュア・スマイルチャージ!!』

〈Go! GoGo Let, go!!〉

光と炎、雷に風と氷、これらが恐らく各々に与えられた属性という力であり、変身する際にも色濃く反映されているのだろう。最後に両頬をパクトで軽く叩き、彼女達は順に降り立つとそこで名乗っている。

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりんじゃんけんポン♪キュアピース!!」

「勇気りんりん、直球勝負!キュアマーチ!!」

「しんしんと降りつもる清き心!キュアビューティ!!」

カラフルな色彩を帯びて光輝きながら漆黒の空へ光をもたらず。

——てな感じの表現が相応しいかどうかは別にして、こいつらは更に決め台詞みたいなものをしれっと用意していたりする。

『五つの光が導く未来!!——輝け!スマイルプリキュア!!』

……という事みたいなのでよろしくお願いしますってか。直後、赤鬼はそれが終わるのを待っていたみたいに赤い玉を取り出して頭上高く掲げた。邪悪な色のエネルギーが注ぎ込まれ、グラウンドにある整備用に使われているローラーからアカンベエという怪物を生み出す。そうそう、一応アカンベエってもうそんな風に叫ぶから正式な名前で間違いないみたい。とことんふざけてるよな。

「行け、アカンベエ!」

「アカンベエ!」

ほら、やっぱり。今度の奴はローラーを使って走ってくる様なのであつという間にプリキュアとの距離を詰めてきた。そこで赤鬼は堂々と次の攻撃の指示をするんだけどこっちまで丸聞こえなんだよなあ。だからハッピー達もそれが解った上で防御を固めて備えていたんだけど——

「うっそー!」

うわあしようもねえし幼稚、でも赤鬼の言葉にすっかり騙された5人は回し蹴りされて吹き飛ばされてしまった。続いてローラー攻撃だとアカンベエも追撃しようかと再び迫ってくる。・・・いや、待てよ。この流れならそれも嘘なんじゃね?

「うっそおー!」

「やっぱり」

ホント低レベルでガキっぽい真似しやがる。可笑しくて可笑しくて仕方ないと大笑い。確かに卑怯ではあるが上手いこと隙を突いて攻めてくる。

「さっきから嘘ばかりついて!」

「嘘つきは泥棒の始まりって言うやろ!」

「あたしは嘘は大嫌いだ!!」

「嘘ではなく、正々堂々と勝負しなさい!」

流石に頭にきてそれら数々の言葉を赤鬼に対してぶつける。しかしながら当の本人はどこ吹く風、はなつから気にしてないから何を言われたとて怯まない。と、赤鬼はそれに加えてある1人に同意を求めてきた。

「馬鹿め!嘘は最高オニ。・・・そうだよな、キュアピース!———これを讀んだオニ」

おうつとつと、この展開は一体なんなんだろう。遠目からだったので俺にはそれがよく見えなかったのだがピースや他の仲間の反応から、赤鬼が取り出した紙切れが何か漸く解った。

「私の描いた漫画・・・!!」

「何であいつが拾うんだよ」

よりにもよって何故あいつが持つてるのかについては偶々拾ったとかそんなところだろう。ハッピー達4人は状況が呑み込めなくてただピースを見詰めるばかり。

「何でお前、嘘をついた事を謝るオニ!嘘はどんどんついて良いオニ。騙された方が悪いオニい!!」

「止めて!」

「ピース、嘘ってなんの事や？」

「もう白状しろって、仕方無いし」

「真澄君。何か知ってるの？」

いい加減に焦れたいという気持ちもあつてかついその場に口を挟んでしまった。こればかりは本人の口から直接聞くべきだからハッピーに尋ねられても敢えて無視する。

「お前の嘘に騙された仲間を笑ってやるオニ！ウハハハハツ!!」

「私の大切な友達を笑わないで!!」

「アカオーニは何を言っているんですか？」

「ピース」

「何かあるなら正直に言っ」

いよいよその時だ、望ましい状況ではなかったがここで言うべきなんだとそう思う。だから俺はこちらに視線を向けてきた彼女へただ頷く。

「私、例えどんな事があってもピースの事、大好きだよ。・・・転校してきた私に優しく声を掛けてくれたでしょう、あの時とっても嬉しかった」

中々言い出せずに居たピースにハッピーがそう優しく言葉を掛けた。——それが切っ掛けになったんだと見ていて思った。ハッピーの気持ち伝わってピースは改めて全てを打ち明ける覚悟が出来たんだろう。転校する話がエイプリルフル故に付いた嘘であったとこの場を以て仲間に告白した。一つの嘘が時に些細な要因から膨れ上がってここまでの騒ぎに発展する。これはちゃんと教訓として全国の視聴者にも伝えなきゃならない。・・・あ、これはなんつーか一種の物の例えです。

「エイプリルフル？」

「そう言えば——」

「ええ、嘘についても良い日だ！」

「コラー！ハッピー、何でそんな嘘を真に受けたんや！」

「ごめんなさい。でも、サニーだって“わかるわかる、わかるでえ”って言ってたじゃない」

あーそうだ、言つてた言つてた。乙女心まで持ち出してすっかりそんな気分浸つてたよな。てか2人してアホなの。

「・・・で、詰まり転校・・・」

「しないしない！絶対したくないよ・・・！」

あーあ馬鹿らしい、けど一件落着したつつう事で良しとしようじゃないか。

「それが一番嬉しいです！」

「——え、皆、許してくれるの」

「許すも何も・・・」

「ちよつとハッピーのせいやしな」

「よく正直に言つて下さいました」

思いがけない展開にピースは泣いていた。が、心の底から嬉しくて涙を流しているんだし好きだから泣かせてやったら良いんでねーの。でもそんな中、感動的なシーンだったのに空気読まねえ奴が若干二名。いや、そもそもこんな状況でこういう事になってる方が寧ろおかしかつたりして。兎に角、赤鬼とその命令を聞く怪物共が痺れを切らしているみたいだから、危なそうなんで俺も退避しておかないと。

「たかが嘘でうるさい奴らオニ。行くぞ、アカンベエ！」

「——私、皆から一杯優しさを貰つた。その優しさが私に本当の事を言う勇氣をくれた！」

「意味解らんオニ。アカンベエ、パンチ攻撃オニ!!」

赤鬼の命令でアカンベエが拳を振り翳し、ハッピー達は防御の姿勢で身構えた。ただ1人、ピースだけが前に出て仲間達を驚かせる。

「うっそー！」

やはりフェイントを掛けてきた。パンチと見せかけてのローラー攻撃、だがピースは一切怯まずに敵を正面に捉えて見据えた。

「私、解つた。皆を悲しませる嘘なんて、絶対ついちゃ駄目なんだつて!!」

これ以上同じ手は通用しないと連中は思い知らされる事だろう。彼女は高くジャンプして頭上から力強い飛び蹴りをアカンベエ目掛けて叩き込む。動きを食い止めたところでスマイルパクトへ気合い

を込めて共に力を集束させていく。さあ、例のものが来るぞ。掲げたピースサインに落雷が生じ、その受け止めたエネルギーを一気に放出する。

「プリキュア・ピースサンダー!!」

雷の力をめい一杯お見舞いしてアカンベエを浄化、でもやっぱり黒焦げの消し炭になりそうでおつかねえ技だよ。……こうして無事、赤鬼を追っ払った上で黄瀬達は教室に戻った。他のクラスメートまで巻き込んでしまった訳だからこれから散々謝らなければいけない。道中、黄瀬が何かを思い出した様に星空さん達を呼び止めた。

「あのね、真澄君は転校の話が嘘だって知ってたの」

「なんやて! そうなんか」

「私が黙ってって頼んだの。皆には自分からちゃんと打ち明けて謝りたかったから。……さっきも教室を出たのは皆に申し訳なくって、それで——」

「成る程、そういう事でしたか」

「それから真澄君にどうしたら皆へ本当の事がちゃんとと言えるか相談してたの。それで一緒に考えてくれて……」

「あーもう、面倒に巻き込みやがって」

「とか言っても何だかんだ優しいんだよねえ? 真澄は。だってやよいちゃんの相談にのってあげた訳でしょ」

「ほんまやな。ええとこあるやん、このこのっ」

「うっせーよ」

その後、二組の教室で黄瀬本人の口から伝えられた真実に皆は呆れ果てて罵詈雑言の嵐。中には怒りを頭に彼女へ向かって詰め寄ろうとする奴も……ってのはうそうそ。皆かなり驚いてはいたけどエイプリルフルってのと星空さん達のフォローもあつて少なからず納得してくれたんだろう。黄瀬はさぞ安心したろう、それにもう十分懲りたと思う。——何より彼女が本当に転校するんだと疑いもなかったその分、大半のクラスメートは嘘と解って良かったと思つたか

も知れない。

「・・・でもウチ、今回の事でやよいのことちよつと嫌いになったなー」
「えー！」

「うん、あたしも好きじゃないね」

「ええー!?!」

「私も、やよいさんのこと嫌いです」

「ええつとえーと・・・私も！」

いやいや、この期に及んでそーゆー流れ?・・・星空さん解りやすいなあ。後、青木の場合は笑顔でさらりと言つてのけたんで妙に怖かったぞ。黄瀬はまたまた涙目でうーうー言い始めた。

“なーんて、うっそでーす!”

「嘘つてことはその反対で、詰まり大好きつて事だよ！」

「「うん！」」

これでおあいこや、と言う日野の声に続いてクラス中が笑顔に湧く。黄瀬も一緒になって笑う姿を窓際で見ていると目の前を一枚の花弁が掠めた。何気に手を伸ばして掴むと淡いピンク色をした白に近い桜の花弁だった。

続

8 隠し味の秘密

お好み焼き。肉や野菜、魚介類といった材料を加えて焼き上げた生地の上からソースとマヨネーズを掛け、最後に青海苔や鰹節を散らしたこの食べ物には広く日本人の間で親しまれる。・・・午後の閑散とした教室で居眠りから目覚めるとうつつすら話し声がしていた。机から顔を上げると何時もの5人組が何やらお喋りの真っ最中で、唯一聞き取った料理の名前に一番馴染みがある「関西風」テイストがふと頭に思い浮かんだ。

「やっ」と

「真澄・ちよつとええ？ すこーしだけ、付き合ってくれへん？」

十分な睡眠も取れたのでさっさと帰ろうとすると日野が突然呼び止める。この場合の「付き合ってくれ」というのは単純な誘い文句と捉えたら良いんだろう。別に何にも勘違いするつもりは無いし、丁重にお断りさせて頂きたい。

「あなたにもウチのお好み焼き、ご馳走したんで」

一瞬だけど考えてしまった。いや、ちよつと腹が減っていたし、おまけに寝起きだったからってのもある。思考が鈍って正常な判断が出来なかったんだよきつと。でも彼女のその言葉で僅かでも心が揺らいだのは不味かったかも。お陰で断る隙を失い、取り敢えず俺達は一旦帰宅してからある場所へ集合と相成った。うーん、やっぱし行くの止めようかな。

「真澄君。こつちだよー！」

「星空さん」

・・・とか考えながら何だかんだ、気付くと向こうからやって来た彼女と出会っていた。しかも、帰る前に教えてもらった通りの道を進んでいたらどうやら目的地に辿り着いてしまったらしい。まあ、結局のところ引き返しもしせずこうしてやって来ちゃったな。そこは町の商店街に軒を連ねる一軒の店である。見ると黄瀬、緑川、青木もバツチリ先に揃っていて、更に日野がわざわざ出迎えてくれる。まあ、この集まりの言い出しっぺだし当然か。

「何や、着替えてこんかつたの？」

「別に良いだろ、面倒だったし」

「まあ、そらええけど。・・・さて、これで全員揃ったな」

5人は私服で自分だけが制服、別に気にする事でも無いのでそこはスルーしとくとして。早速お邪魔してカウンター席に座ると日野は1人、厨房へ一旦回ってからエプロン姿で向かい側に立った。彼女は慣れた手付きでお好み焼きを作り始め、鉄板の上に広がる生地を見て星空さん達は今か今かと出来上がるのを待ち遠しそうにする。確かにこれは腹の虫が騒ぐ。ヤバい、ついつい見入ってしまう。

「あかねさん。お店の名前、もしかして・・・」

「ああ、うん。ウチの名前から取ったんやて。ウチが産まれた年に店始めたらしくって。娘の様に大事にしようって意味なんやて」

「素晴らしい由来ですね」

青木が店先の暖簾に気付いてそれを口にする、日野は何処か照れ臭そうに説明した。そう、ここは彼女の親が経営する店であって自宅でもある。

「あれ、日野ってこつちに転校して来たのが・・・」

「去年やな。——ほな、ぼちぼちひっくり返そうか。焼き方にもコツが要るんやで」

詰まりはこつちに住む前から既に店をやっていた訳か。勝手に納得してると日野は得意気にそう言っ手にしたへらを器用に取り回した。何かすげえな、とか思ったがそれを思うのはまだ早かったと次の瞬間に気付かされる。生地と鉄板の間へ「へら」を滑り込ませ・・・

「ちゅー、ちゅー、たこ、かいな！」

——謎めいた呪文みたいな言葉と共に彼女は手早く引っくり返していく。次々に宙を舞うお好み焼き、星空さん達はそれを見て驚きの声を上げた。うん、こういうのって下手な奴がやると大惨事だからやっぱ慣れた人がやるべきなんだよな。

「お見事」

「どや！日野家奥義・小手返しスペシャル！お好み焼きは任しときー！」

「あーハイハイ、そういうのはいいから」

ドヤ顔。取りあえず、スルーしとくとしてだな。・・・人数分の皿に移された出来立て生地の上では鯉節が踊り、鼻先に漂うソースやマヨネーズの匂いも相まって空腹は今この時から最高潮に達する。

「うーん、これは良いんじゃないの…ボソツ」

「え、何て？」

しまった。何時だったか夜中に見た変なドラマの真似を…：…：…つて、なんて言うドラマだったか。

「・・・美味しい。うん、マジで」

「ほんま？良かったあ。さつきから仏頂面やったから “不味い” とか言われるんか思うとつて」

「いや、そんな事ねえよ。ちゃんと美味しい」

「うんうん、流石あかねちゃん！」

皆から一頻り感想を受け取って本人も満足しているだろう、こつちも腹を満たせたから万事OK。生地はフワフワ、良い具合にしんなりしたキャベツとか豚肉も美味かった。・・・ああ、まさか誘いにのつてまんまと食事するなんて。でも、今はどうでも良いや。———そういや、何時か学校の屋上で日野が作って持ってきた事があった。その時も正直に美味くて貰った分を全部平らげたんだったつけかな。

「ソース付いてるよ真澄君。ほら」

「え」

「ここだよ。取って上げようか？」

「いいよつ、自分で拭くから」

「へえ、もう食べ終わったんだ。それだけ急いで頬張るくらいだから余程美味しかったんだねえ」

「ほんまやなあ、綺麗に食べてくれたやん。素直になることもあんねんな自分」

「うっせーよ」

緑川と日野は驚いたと言わん秤、そりゃあ不味けりや完食なんてしないだらろつつの。やっぱり来るんじゃないやなかったとか早くも後悔の兆しを感じ、俺は星空さんの手から紙ナプキンを取り上げて口の周りを拭うとゴミ箱を探した。そこに “ただいまー” と言って店の裏から

入ってきたであろう何方かと目が合う。

「・・・どうも」

「どうも。それじゃ」

「げんきー」

日野に呼び止められた少年は嫌そうな顔をして立ち止まる。彼女は俺達の前にその彼を立たせると紹介した。

「弟のげんき。・・・ちゃんと挨拶しい」

「いやあ、お調子者の姉が何時も迷惑掛けてすんません！」

そんな姉に負けないくらいというか、こつちも随分ノリが良さげな日野げんき君。歳は一つ違いで同じ中学らしい、彼は俺の方を見て会釈すると一言。

「姉ちゃんの・・・彼氏い？」

「あほう、何言うてんねん！そんなわけ無いやろつ」

これはこれは。アハハハハ、と乾いた笑いしか出てこなかった。前にもこんな感じのがあったと思うんだけどデジャヴかな。弟の冗談に付き合う気はない姉、透かさず否定。うわあ、流石に絵に描いた様なやり取りだなあ。

「これ、姉ちゃんが焼いたん？いったただつきまーす」

「あ、コラー！行儀悪い！」

「————まあまあ美味しいやん。父ちゃんのとはちよつと味ちやうけど。まあ、姉ちゃんっぽい味やな」

弟は手掴みで一切れ食べるとそう感想を述べた。すると姉も一口、そして表情を変えて箸を置く。

「あかん」

「え、何で？」

「何でもへちまもあらへん。会長さんは父ちゃんの味を楽しみにしてくれてんねや。・・・これじゃあ、喜んで貰われへん」

全く話が見えてこない、これって自分だけ？日野は何か悩んでる様子だがさっぱり解らない。

「あ、そっぴや父ちゃんが秘密の隠し味があるって前言うった」
「秘密の隠し味？で、何やのそれ」

「それは……知らん！」

げんきは自信満々に胸を張る。日野はこれを機に「父ちゃんの味を再現する」とか言い始めて、おまけに星空さん達も協力するとか言い出して。で、何故か俺までこのまま店に残って手伝う流れにされたんだけど誰かせめて説明しろよ。

「食事会？」

「びしょ……グルメな町内会長さん達が今度の日曜日にここで食事会をするらしいんだけど……」

「あかねちゃんのお父さんがギックリ腰になっちゃって、だからあかねちゃんが代わりなんだって」

星空さんと黄瀬から説明を受けたところで漸く理解に至った。日野が急病の父親に代わって食事会でお好み焼きを作るらしいのだが、何とかそれまでに同じ味が出せる様に秘密の隠し味を突き止めるって事らしい。早速、手伝う為にエプロン姿となって緑川と青木は厨房に立っている。

(で、これは俺も手伝わなければいけないんだろうか)

さつきご馳走になった手前、何か帰りづらい空気というか。食欲に負けたあの時の自分が恨めしいよ全く。とは言え、自分に何か出来るとも思わないから今は黙って大人しくしとくかなあつと。

「甘いものには辛いもの、辛いものには甘いもの等を程よく加えると味が引き立つとお祖父様が」

「うちじゃあ、カレーに擦り卸した林檎を入れるよ」

厨房では材料を並べてあれこれ相談する声が聞こえる。それを耳に入れながらトイレを借りようと探していた時だった。同じくその話を聞いていたんだらう、星空さん達は何を思ったか徐にスマイルパクトを取り出して変な事を始めた。

「何してるんだよ」

「これがホントの焼プリン」

「美味しそう！真澄君も食べる？」

「いい、止めとく」

鉄板の上に揺れるバケツサイズのデカイプリン。んなもん出して

どうするんだよ、さっさと片付けないと焦げ付くぞアホ共。そういう事に使つて良いのかよ変身アイテム。

店に来たお客用とかに置いてあるんだろう、本棚に並べられた漫画を読んでいる間に皆はせっせと料理に励んでいた。あれこれアイデアを出し合いながら試行錯誤してるみたいできつちり役割分担が出来上がっている。こうなると俺がこの場に留まる理由というものは皆無であつて、尚且つ肩身狭い気がして何時しか隅っこに体育座りしながら息を殺していた。

「手伝つて言うたやん」

「いや、料理とかしたこと無いし。てか手伝うなんて言つてないし」

「あーもう、そない言うんやつたらせめて味見くらいして。ぎょうさん焼いたからまだまだあるで」

日野はそう言いながら人差し指で人の額を小突く。やれやれ、やつと出番らしいですよ。各々、焼いたのは日野なのだが材料を切つたりと下準備したのは確か青木で、生地を混ぜていたのが緑川だったと思う。そうすると星空さんと黄瀬、後序でにキャンディも何かしていた様子だがよくは知らない。さっきのプリンはきつちり平らげたみたいだが。

「——これ、何入れた？」

「みかんだよ。甘いものと思つて・・・」

「・・・ほう。で、この一瞬マヨネーズに見えたそうじゃない奴は？」

「はーい！生クリームを掛けてみましたー！」

「おい、ふぎけんよ。えらいもん食わせてくれたなお前ら」

多分、よく考えもしないで適当に放り込んだんだな。よし、口直しに別のを。・・・うん、後のはまともだな。普通に美味しい、ちゃんとしたお好み焼き。焼き加減なんかも悪くない感じだ。

「美味しい」

「それだけ？もつと他にないんか」

「いやあ・・・うん」

「あかん、作り直すで。これじゃ父ちゃんの味にならへん」

そしてこの後も試食と称してしこたまお好み焼きを食う羽目になった。それはもう腹一杯に詰め込んだからこの後の晩飯が果たして入るかと不安が過るけど多分手遅れだろうなあ。ふう、味見係も楽じゃないぜ。一方、日野はあれだけ山の様に作ってもまだ納得していないらしい。

「十分美味しいけどなあ」

「やっぱり、秘伝の隠し味ですから——」

「そう簡単には見つけられない、か。・・・あかね？」

「やっぱり、父ちゃんは凄いなあ！照れ臭くつて言うたこと無いけど・・・ウチな、父ちゃんのこと尊敬してんねん」

父親が作るお好み焼きを食べると誰でも笑顔になる。心底そう感じていられるらしくて尊敬の念を込めて話すそんな日野の顔は生き生きとしていた。

「そんなお好み焼きを焼けるんは世界中で父ちゃんだけやって思ってる。そんなお好み焼きの隠し味、ちよつとやそつとで解るわけないもんなあ。——よつしや、意地張つててもしやーない。ちよつと父ちゃんに聞きに行つてくるわ」

・・・という訳で彼女のこの一言から本当にその病院へとやって来た。ただ、身内でもないのに全員で押し掛ける訳には無論いかないので病室へは日野1人が赴く。取り敢えず星空さん達と大人しく待っていたが俺は携帯を手に席を立った。確認すると妹からの着信だった。

「もしもし」

『お兄ちゃんてき、信じる？』

電話口の唐突な質問に眉を寄せると続けて押し殺すような小さな声で更に問い掛けがある。

『ねえ、信じる？』

「何をだよ」

『さつき見ちやっただよねえ、本当にヤバいの見ちやっただよ』

「・・・だから、何を」

『狼男!!さつき見たんだよ、あれは間違いない!』

「へえ、良かったな。そんじや」

やっぱりな、薄々解ってただけどたまにずば抜けておかしなことを言い出すのが我が妹だ。一体誰に似たんだか、まあ何時もながらにこういう時は何も聞かなかった事にして無視するに限る。

『本当だもん！青い服着て歩いてたんだよ、ブーツ履いてて尻尾とか生えてたしっ。ひまりちゃんも見てたもん！ね！』

「知るか、そんな下らない事で電話してくんなよ」

何か向こうで友達と2人、あれこれ言い合ってる声もしてくるのだがもう切つても良いんだよなこれ。——エントランスに戻って少しした頃、日野が病室から帰ってきた。

「え、駄目だったの？」

「そんな自分で見つけるって啖呵切つてもうた・・・！」

「でも食事会まで後三日だよ？」

「——しゃーない。後には退かれへん、ここはビシツと決めたるしかないわ！」

半分やけくそなんじゃねえかとも思う、本人のこの決意を前に他の4人は付き合う気満々といった様子。病院を後にする際、携帯に又着信があつて今度はメールを受け取る。『これが狼男!!』とタイトルが加えられたそれを開くと中には本人が携帯のカメラで撮影したらしき画像が添付されている。正直ばやけてて全くハッキリしないし、しつこいんで絶対相手にしない事にして無視を決め込んだ。で、下へスクロールしていくと文章が続いていた。こっちが序でなのかよ。

「外食？」

ついさつき母さんと話していたらそういう風になった、と実に簡略な内容。たまには良いかもなとか思つて確認した旨、返信してから再び歩き始めた。

日野に引き連れられ、次に足を運んだ先は近所にあるスーパーだった。さつき使つた分と今晚の開店の為の分、お好み焼きの材料の買い出しという事らしい。いや、どうやらそれだけでなく隠し味研究に使

う分も買い溜めるみたいだ。

「全部買うのかよ」

「必要やからな。後は——」

スーパーのカート一杯に小麦粉とか調味料だとか、材料を一通り積み込む日野。一応、値段を確認したりとか適当に選んでいるんではなさそうだ。……ってあれ、何でここまで着いてきたんだろ俺。自覚する頃には両手に袋抱えて日野家の店に戻ろうとしていた。

「……ちよい待て、待ってくれ」

「灰谷君、大丈夫ですか？」

「どうしてここまで付き合わなきゃいけないんだよ」

「あかねにご馳走になったでしょ。ほら、男の子なんだから率先して重たいの持つてよ」

むう、それを持ち出されたら何も言い返せねえ。普段から大家族分の買い物をしている緑川は涼しい顔して前を進んでいた。手に持った量は大体同じくらいある筈なのに。主に彼女と日野、自分とで店まで運んでこの日は解散となる。帰る頃には日もすっかり傾いて夕方になっていった。

「あかねちゃん、大丈夫かなあ」

「お店の手伝いもあるし、大変そうだね」

星空さんと黄瀬がそう言いながら後ろを振り向く。店は今夜も平常通りにやるらしいが母、弟と3人では負担が大きくなるに違いない。

「何かお手伝い出来ることがあれば良いのですが」

「そうだね。……で、真澄はどう思う？」

話を振られるとは思っていなかったので気を抜いていたが緑川の言葉に反応してあれこれ答えを考えた。

「日野の手伝いか、頑張れ」

「ええ、随分と他人事なんだね。真澄は心配じゃないの？」

「何て言うか——。ただ、力になってやれば良いんじゃないかって」

「真澄君。……うん、そうだね。やっぱり私達に何か出来ることがあったらそうしたいよね」

星空さんがそう言うのと後の3人も頷く。帰り道、話し合う彼女達を横目に家路をゆつくり歩いた。夜には家族3人で外出し、夕食の為の店を探す。

「腹減ったよう〜」

「おい、解ったからいい加減にしがみつくの止めろって」

今宵、俺たち家族は久方ぶりに外食する運びになった。妹の優輝は妙なテンションで疲れるし、まだ昼間食べたお好み焼きが胃に残って重くのし掛かっている。とても外食を喜ぶ気にはなれないのでどうにかして腹を空かさねば。母さんはさつきからこれといって当てもないみたいだし、こっちも歩き続けていればその内に多分減ってくるだろう。

「ねえねえ、ここにしようよ」

「どこどこ」

「ほら、このお店!」

・・・とか思った矢先、一軒の店を前に優輝がそこを指差した。おうつと冗談じゃない、確かこの赤い暖簾には覚えがあるぞ。割りと最近だ、えーつと確かあれは今日の昼間。よし、絶対ここには入らないからな。

ガラガラガラ

「いらつしやいませー!」

妹は迷わず引き戸に手を掛けた。共に母さんが入っていくと中から威勢の良い声がする。ああ、遅かったか。渋々後に続いた俺は店先に立ったクラスメートと顔をつき合わせた。

「いらつしやい。また来てくれたんや」

「その娘、お友達?」

「同じクラス」

「どうも、こんばんわ。日野あかねです」

「真澄の母です。よろしく」

2人は挨拶してそのままの流れでカウンター席に腰を下ろす。自分の親とクラスメートが対面して話す姿というのは何とも言えない恥ずかしさがある。くそ、よりにもよってな。

「あかねさん上手だねえ」

「優輝ちゃん、おおきに。何時もやってることやし、軽いもんや。――はい、お待ちどうさま」

注文した豚玉を手際よくひっくり返す姿に感心しきりの妹。何かしれつと名前で呼んじやってつけけど急に距離縮め過ぎじやねえかと思ふ。

「お兄ちゃんて学校だとどんな感じですか？」

「うーんと・・・何て言うたらいいか、寝てばっかしやな。ハハハ」

否定はしない、敢えてね。何やら俺の話をし始め、こつちを見ながらコソコソと耳打ちし合うそいつらの姿は全く穏やかならない。止めてくれねえかな、きつとろくでもない事に決まってる。そして日野はこちらが食事をしている間も当然ながらテキパキと働いていた。人当たりよく客と言葉を交わして笑いを生む彼女は正にこの店の看板娘といった具合。喋り掛けてくる馴染みの常連客らしき人なんかを相手にしている辺りもすっかり板についているって感じだった。

「ご馳走さまでした」

「あかねさん、美味しかったよ」

「また何時でも来て。真澄、ほなな」

「うん、じゃあな」

やがて食べ終わったので席を立ち、母さんが会計を済ませている内に店の外へ出ようとする。日野は自分達にそう声を掛けてから又忙しなく別の客の面倒を見始めた。そういや食事会の準備なんかもあるんじゃないかったか、本当に大変そうだな。・・・にしても、きつと今夜はお好み焼きの夢でうなされるに違いない。

翌日の学校で日野は授業中も何処か上の空だった。先生から名指しされても反応はなく、漸くすると慌てて教科書のページを捲る。そんな彼女は休み時間になり、星空さん達が教室に居ない事を知って尋ねてきた。

「隠し味、解ったのか」

「色々試してはいるんやけどイマイチ同じ味にならんくてさ。一度自

分で見つけるって言った手前、やっぱり教えてー・・・なんて言えへんしい」

こちらもししに聞いてみると案の定の答えだった。やはり、彼女の頭の中はその事で一杯らしい。

「もういいんじゃないの、そのままです。・・・昨日食った、あの感じで十分だと思うけど」

「おーきに。・・・でも、あかんねん」

ギツクリ腰で入院している父親に代わってお好み焼きを焼かなければならないのに、その肝心の隠し味が突き止められずにいる彼女は浮かない顔で溜め息を交えた。自分の席に戻って頬杖をつくとき再び遠くを見詰める。すると間もなく、星空さん達が両手一杯に本を抱えて戻ってきた。

「それは？」

「図書室で色んな料理の本を探してきたの。参考になれば良いなっ
て」

「『そぞい』・・・『料理の鉄人』——」

4人は手当たり次第に見つけてきたそれらを運び込んで日野の机にどっさり積み上げた。黄瀬は何やらスイーツ関係の本を薦めているが青木なんてどうやって見つけてきたのやら巻物みたいな古めかしい物まで持っている。

「終わったぞー」

「お疲れー」

「こつちも終わったよ」

学校が終わると店に集まって開店準備を手伝い、俺は店の前の掃き掃除を済ませた。何かもうすっかり手伝っちゃってるんだけど別に自分から引き受けた訳じゃない。どうせ放課後は暇なんだろうからって連れてこられてしまった。妙な事に、どうも日野が作るお好み焼きを食べてからこいつらの誘いをかわせずにいる。

「手伝ってくれてありがとう」

「別に。どーせ暇してたんで」

「せめてこれくらい出来ないかなって思ったから」

「あー、はいはい解ってるよ。まあ上手くいけば良いけど」

この日も試作品とされるのを幾つか作って日野は弟に味見をさせた。しかし結局のところ、隠し味とやらの発見には到らなかった。――そして、いよいよ迎えた食事会の当日。駅から程近い広場に向かってみると既に沢山の人で賑わいを見せるそこには食べ物売屋台がズラリと並んでいた。その中で「お好み焼きあかね」と掲げた一角を見つけて近付くと星空さんが手を振った。

「いやあ、こんなイベントやってたんだね」

「はい。商店街を盛り上げるって、地域振興って奴つす」

「でも良かった。げんき君が手伝ってくれるから、あかねちゃんも隠し味探しに専念出来るよ」

「で、俺にもそれを手伝えって言うんだろ」

「ゴメンね、急に呼び出しちゃって」

「そう思うなら遠慮しろよ。朝っぱらからいきなり電話なんかしてきやがって」

「エへへ、昨日すれば良かったんだけど忘れちゃって。という訳で今日もよろしくお願いしまーす！」

どういう訳だよ、納得するか。でもまあ、どうせ何言っただってこの人達は聞き入れないだろうし。俺は早速、材料の数を確認したりだとか直ぐ側のテラス席の片付けをしたりと任された雑用をこなしていった。星空さんは接客に専念してお好み焼きを調理するげんきの横では黄瀬がせつせと次の生地をかき混ぜる。緑川と青木は店の方で日野を助けていて、ちよつと前にこつちに来るといふ連絡が姉から弟の方へあった。屋台の裏で空っぽの段ボール箱を畳んでいた時、何か異変めいたものを感じて見ると広場はとんでもない有り様になっていた。例によって活気に溢れていた町の人達がその場へ経たりこんで身体中から禍々しいエネルギーを発している。空には昼間だというのに満月が浮かび、果たしてこれが何を意味するのかは直ぐに解った。

「食欲湧かない」

「何も食べたくない」

「お好み焼きなんて——」

「人間共の発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピエーロ様を蘇らせていくのだああ!!」

数々のネガティブな声に混じってこだまする雄叫びと共にその存在が地上へ降りてくる。おお、あいつは確か「オオカミもどき」。何か凄い久しぶりかも、あの青い服装でブーツ履いた姿……あれ?でもやっぱり、つい最近も何処かで見た気がするなあ。

「あれは!」

「ウルフルン」クルウ!皆、変身クル!

星空さんと黄瀬、更に今しがタイミングよく到着した日野達3人も合流。一斉にスマイルパクトを取り出して変身する。

↑Ready?↓

『プリキュア・スマイルチャージ!!』

↑Go! GoGo Let, go!!↓

光、炎、雷、風、氷と属性の力を纏った各々が伝説の戦士となってそこに並び立つ。

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりんじゃんけん♪キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負!キュアマーチ!!」

「しんしんと降りつもる清き心!キュアビューティ!!」

〃五つの光が導く未来!!——輝け!スマイルプリキュア!!〃

「プリキュア……!俺の食事の邪魔はさせねえぜ!!」

「何言ってるんだあいつ。飯食いに来たのかよ」

オオカミもどきは謎の主張をしつつも手にした赤い玉を使ってアカンベエという怪物を生み出す。何だ、やっぱり戦うんじゃねえか。で、あれはえつと——確かお好み焼きのソースを入れてた奴だ。アカンベエはそれを胴体にして手には刷毛を装備していた。そいつは先に仕掛けてプリキュア目掛けて飛び掛かったがハッピー達は咄嗟

に回避する。

「うおっ！」

「コラー！ソースの使い方間違つて・・・うわあああ!？」

アカンベエの着地による振動に思わずしやがみこむ。加えてアカンベエは続けざまに思い切り刷毛を振るつた。ソースの塊が飛び散つてサニーはそれが原因で足を滑らせたのだが、どういう訳か彼女は全く立ち上がれなかった。サニーの体に付着したソースが変色していく。

「固まつた?！」

「皆さん、気をつけて!！」

その様子に気付いたビュートイが仲間には注意を促す。しかし直ぐに又、アカンベエが刷毛を振り回してソースをばら蒔くとハッピーやピースへ向かつて降り注ぐ。・・・って、それ不味いだろ。詰まりはこつちに向かつて飛んで来たって事じゃねえか!

ビュンツ!

「マーチ!!！」

「つぶねえ」

「大丈夫?・・・真澄、危ないから離れてて!！」

「り、了解」

瞬足で駆け付けたマーチがテラス席にあつたパラソルを掴むとソース攻撃から守ってくれた。いやー、助かった。即座に距離を取つて安全そうな物陰を探し、一先ず花壇の陰に飛び込むとそこにはキヤンデイも居た。

「クルウ、ウルフルンが!！」

「どうした?！」

「——ああ!!ウチが焼いたお好み焼き!！」

サニーの声に視線を向けてみると、あのオオカミもどきが戦いそつちのけで山の様にあるお好み焼きを貪り食つていた。どうやら本当に腹は減つてたみたいだな、っーか食べるの早。でもって今度はハッピーの方からも叫び声があったので続いてそつちを見ると・・・

「デカー!きつきより絶対巨大化してるだろあれ」

「ウルフルンがお好み焼きを食べたせいクル！」

「そうなの!?!」

マジかよー、仕組みは知らんが要はオオカミもどきが腹一杯になったんでそいつが操るアカンベエもでかくなつたと。いやいや、何かずるい。

「やれえ、アカンベエ!!」

「アッカンベエ！」

「皆さん！」

ハッピー、ピース、マーチが吹き飛ばされた挙げ句にあのソースみたいなののでせいでビルの壁面にくつついて身動きを封じられた。アカンベエは次にビューティへと狙いを定める。

「ウルツフフフ・・・人間の食い物も中々だったぜ」

「え、ホンマー！おおきに！」

爪楊枝片手にふんぞり返る奴の言葉にサニーが嬉しそうに反応した。仲間が大変な事になってますよー、喜んでる場合じゃねえだろ。

「ハッ、おおきにちやうわ！」

「そうそう、気付いたか」

「・・・ああ？何でお前が礼を言うんだ」

「それ作ったん、ウチやからな」

ビニール袋に入れられていたそれらは大方さつき店で焼いてきたであろう食事会の為の試作品に違いない。町内会長達が楽しみにしているからと父親の隠し味が何かを突き止めようと作った物。

「はあ。ま、こんなもん誰が作ってもおんなじだけだな」

「おんなじちやう！どんなに頑張っても、父ちゃんと同じ味にならんから悩んでんのに・・・！」

「そんなしょうもない事で悩むなんざ下らねえなあ！」

「下らない?!」

「あかねちゃんの一生懸命さを馬鹿にしないで！」

「一生懸命とかどーでも良いんだよ。腹ん中に入ったら全部一緒じゃねえか。・・・大体これ、失敗作なんだろう？偉そうな事言ってるじゃねえよ」

オオカミもどきの言葉に反論するもまるで意に介さない。そいつは見下す姿勢で青海苔が付いた歯を剥き出して笑う。そしてハッピーはそんなオオカミもどきに怒りを爆発させた。

「——止めてツ!! 失敗作なんかじゃない! 絶対に美味しいもん! . . . だつて、その好み焼きにはあかねちゃんの気持ちがい! 一杯詰まってるんだからああ!!」

彼女の叫びを聞いていたサニーは表情を変える。ハツとした様子を眼に見開いて、更に大きな声をあげた。

「解つたでー!!」

「え、何が」

「. . . 父ちゃんの隠し味!!」

「何」

「食べた人に元気になって貰いたい。 . . . その気持ちをギュウギュウ詰めに入れて! それがお父ちゃんの “好み焼きあかね” の隠し味や!!」

どうやら何かの閃きがあつてその答えに辿り着いたらしく、それまでと打って変わつて吹っ切れた様に宣言した。

「何言つてんだ。アカンベエ、さっさと片付けろ!」

「. . . ビューティ! ウチに向かってビューティザードや!」

「え、どうしてですか?」

「いーから早く!」

「——解りました!」

何をとち狂つたかサニーがそう要求し、当然ビューティは躊躇つたが仲間の様子から何かあると踏み、自らの必殺技をサニーへ向かつて放つた。

「プリキユア・ビューティブリザード!!」

氷のエネルギーから繰り出される強烈な冷気は触れたものを凍てつかせる。サニーは気合いを込めてこの技を受け止め、身体中から炎を発してエネルギー同士をぶつけさせた。二つが合わさつて水蒸気となり、シャワーでも浴びるみたいに全身のソースを洗い流す。この場に居た仲間達、無論遠くから見ていた俺もそれを見て成る程と納得

する。サニーは滑る様に急接近してアカンベエに炎を纏わせた拳を打ち込んだ。敵が空中高く投げ出され、透かさず彼女はスマイルパクトへ力を集中させて必殺技を見舞う。

「プリキュア・サニーファイヤー!!」

スパイクが生む豪速球、命中と同時にアカンベエは成す続べなく葬り去られた。浄化された怪物は消滅して、オオカミもどきはあつという間に姿を消した。

お好み焼き。関西風や広島風等といって地域により種類も様々なこの食べ物は広く日本人の間で親しまれる。水に溶いた小麦粉生地にも色んな食材を入れて、熱い鉄板の上で焼き上げるそれは多分誰が作っても美味しい。いや、お好み焼きに限った話でなく正しい作り方を知ってさえすれば基本的には料理として成立するんだと思う。ところが自分なりに工夫して納得のいく味を出そうと努力した結果、そこに新しく見えてくるものがあるらしい。

「——美味しい！何て元気が湧いてくる味なんだ。流石、あかねちゃん。とつても美味しいよ！」

「やったね、あかねちゃん。町内会長、お墨付きだ」

ガラガラガラ

「ただいま！今帰ったで！」

その一口に見せる笑顔に固唾を呑んで感想を待っていた日野達も嬉しそうに笑った。町内会長を招いた食事会の場は貸し切りになっていて、次に店へ入ってきたのは日野の両親だった。

「日野さん。美味しいお好み焼き、頂いてますよ！」

「ほんまでつか！えらいおおきに！——何や何や、めっちゃ評判ええやないか」

「フフン、ウチはこの店の看板娘やで。父ちゃんの隠し味くらいお見通し〜」

お礼の言葉を受けて、おじさんも上機嫌で椅子に腰を落ち着ける。娘の方も鼻を鳴らして余裕の顔つきで胸を張った。昨日まで悩んでいたのがまるで嘘みたいだ。

「お、解ったんか。言うてみい」

「——それは、父ちゃんにも内緒や」

「……そこに見えてくるもの、やっと突き止めた秘密の隠し味。思うに一番大事なのは食べる相手に対しての気持ちなんだろう。」

「隠し味……の秘密、か」

「ふええ、安心したら何だかお腹空いてきちゃったあ」

「確かに、皆美味しそうにお好み焼き食べてるし……」

星空さんと黄瀬の声に俺の独り言は掻き消される。その声を聞いた日野が振り返って言った。

「ほな、皆にも作つたるわ!」

「「「やったー!」」」

「ようし、それなら……ぐおお?!」

「お父ちゃん!」

「もう、あかんやろ。まだ本調子とちゃうんやから」

立ち上がろうとしたおじさんは腰の辺りを押さえながら苦笑いを浮かべる。おばさんが支えてゆつくりと椅子に座らせた。

「そや。……「まーくん」も食べてくやろ?な」

「——は」

「あれえ、聞こえんかった?まーくん」

おおよそその呼び名を知る者はごく限られる筈だった。日野は悪戯っぽい笑みで再度、忌々しくも強調する。さては優輝だな、下らない事を教えやがって。帰ったらぜってー容赦しないからな。

「おーい、まーくん」

「……止めろよ。アホが」

「まーくん、甘えん坊まーくん」

「てめえ……!」

続

9 小さな世界

穏やかな午後。今日の授業も無事に済み、何時もと特に変わらないありふれた放課後を迎える。だが、この平和は長くは続かず、唐突に覆された。

出来事の始まりは何気なく通り掛かった裏庭からだった。突然耳にした悲鳴の様な声に向かつてみると、地面に座り込んだ緑川の姿が目に入る。と、彼女は何かをその手に持って不思議そうにそいつを見詰めていた。

「何、これ」

「なんか、“打出の小槌”っぽいな」

「なあに、それ？」

「昔話の一寸法師に出てくる、不思議なアイテムだよ」

日野の例えにキャンデイが素直な疑問を口にする。と今度は星空さんが代わりにある昔話を語り出す。俺はちよつとした興味本意からそこで彼女達に声を掛けた。

「・・・何してんだ？」

「真澄。何やよう解らん、なおが変なもの踏んづけて転んだんやけど。ほれ」

言われるがままに見ればそれは確かに、うん。所謂、小槌だった。で、星空さんがキャンデイに解りやすくあらすじを聞かせ始めた物語とは。お椀の船に乗った主人公が都まで流れ着き、最終的に針の刀で鬼を退治するといった余りに有名なストーリーの昔話。日野が例えた打出の小槌はその中に登場したアイテムである。誰かの落とし物か、さもなきやただのゴミだな。で、本物の打出の小槌では無いにしても皆の注目が自然に集まっていた。

「———最後にお姫様が“大きくなあれ”って打出の小槌を振ると、一寸法師は大きくなるんだよ」

「クルウ・・・！キャンデイもやるクル！」

「まあ、おとぎ話だけどね」

そう言いつつ緑川は持っていたそれをキャンディへと手渡す。キャンディは星空さんの言葉でその気になったみたいで瞳を輝かせてまじまじと小槌を見詰める。確かに言う通り、期待しても何も起こらないと思うんだけどね、一応。ところが、この妖精はすっかりお姫様気分で役にでもなりきってしまったみたいは何処かノリノリ。

「大きくなあれ！」

ブオンツ

「あ」

ゴチーンツ!!

「イタツ?!」

うーん、だからなのか。お約束的な流れの下に悲惨極まりないこのオチが成立。キャンディが何の配慮も無く力一杯小槌を振り上げてしまい、結果それが星空さんの顔面に直撃という、下手をすれば大怪我の貰い事故に。決定的な瞬間を見ていたこっちまで痛々しいの何のつて。そりやあもう・・・ね。音といい視覚的にもちやーんと痛いなあれは。——そして、このちよつとしたハプニングに次いでとんでもない出来事が俺達の身にまで振り掛かる。鈍い音と共に小槌がめり込んだ瞬間、とてつも無く眩しい光が発せられた。

「あれ・・・」

強い光に襲われて思わず目を閉じた。が、やがて恐る恐る開くとその光はもう既に止んでいて、今しがたそこで起こった事が何だったのかさっぱり解らない。暫く呆気に取りられて突っ立っていたが、間も無くして俺はその声で我に返った。

「ま、まままま真澄君！」

「何」

「あ、あれ・・・！」

「は?」

星空さんのやけにひきつった声に思わず訝しい気持ちを抱く。何をそんなに怯えてるんだ、顔がちよつと怖いぞ。まあ、それでも仕方

なく彼女が指差す方に視線を向けていく。・・・で、思わず固まってしまう。他もずっと凍り付いたまま、誰も微動だすらない。今、自分達の見ているものが果たして現実と言えるのか自信が無い。いやいや、てゆうかこんなの絶対に認めたくない。だっておかしいもん、そんな馬鹿な。

「「「キャンデイが大きくなっちゃったああ!!」」」

「ま、まさか。——待てよ、そうじゃないだろ」

「え、何が?」

「・・・は!せや、ちやうわつ。これって、ウチらがちつさくなつたんやあー!!」

うん、これはこれでマジかー!目の前は見上げる秤のサイズ差となつてしまったキャンデイ。正確にはこつちの方があいつよりもうんと小さくなつてしまい、例えば裏庭の花壇なんかもそれを形作る煉瓦の一つ一つが高い壁と化している。こんなのってアリか、もう叫ばずに居られない。

「うおーマジかツ!!」

「私達、一寸法師になっちゃった♪」

「・・・え、何かこの人嬉しそうにしてる。おい、そうじゃないだろ」「いやあ、何だか楽しくなっちゃって」

やっぱり黄瀬の奴は1人はしゃいでいた。そんな場合じゃないのは誰の目にも明らかだろ。

「確かに、ちよつとそうかも」

「星空さんよ、お前もか」

これ以上バカを増やしても意味は無い。それなりに現状は把握したつもりだ、後はこの先どうするかというのが重要なんだが。もう、取り敢えずこの際だから何で縮んだのかなんてじっくり考えるより行動しようと思う。・・・と、その一方で5人は何とか助けて貰おうとして大声でそいつの名前を呼ぶ。

「「「おーい!キャンデイいい!!」」」

——ドオオン!

「つぶねえ・・・!!」

待て待て待て！今の俺達にとってキャンディは怪獣映画そのものなんだ。あんなのに来られちゃ敵わんつ。

『どおこおおくううるううう』

「わあああ!!」

「きやあ?!」

走り回るキャンディ相手にこっちは四苦八苦、命懸けで回避しまくって星空さん達も散り散りに。あ！こっち来る!?!・・・地面へ思い切りダイブ。我ながら見事な緊急回避だったと思う。

「へ、真澄」

「緑川」

俺が死に物狂いで飛び込んだそこには先客が居たのだ。ぶっ倒れたまま、お互いを見詰め合いながら無事を確かめると、ふと、こんな近くから顔を見た事ないなあ、なんて思ったりして。

「あ、大丈夫?」

「うん。何とか」

しかしまあ、これは何?気まずかった。別に何がどうって訳でも無いのに2人して距離を取り、地面に正座までして。

「そうだ、他の皆は——」

「緑川?」

「イーーーーヤーーーー!!」

ドーン!!

「ぐえっ」

変だな、何か気に障る事でもしたかな俺。緑川はいきなり悲鳴を上げたかと思えば人を突き飛ばし、何やら怯えた様子で掴み掛かってきた。あのー、怖いんですけど。一応、謝つといた方が良いのかなこれ。

「ばばばばっバっ・・・・・・・・・・・・・・・・バツタ!!」

「バツタ?」

錯乱気味に今度は突如として掴み掛かってきた。だから怖いって、何か知らんがもう許してくれ。で、よくよく事情を聞くと虫がどうか言うもんで、あんまり騒ぐから仕方なく振り向いてみた。直ぐ後ろには・・・特に何の変哲もない学校の花壇があるだけ。こっちが周り

より小さくなつたせいでそこに咲いた花も自分達より遥かに大きい。でも、そこには他に何も無かつた。

「あのさ、そろそろ放してくれない？」

「ご、ゴメン！あたしツ・・・!？」

ハツとして緑川はヘッドロック状態を解除すると一気に俺から遠ざかつていった。うん、まあ別に良いけどさもう。

「あー！キャンデイが行っちゃうく！」

「追い掛けましょう！あの小槌を調べれば、元に戻る方法が解るかも知れませんが」

「ウオツホン。張り切つて追つ掛けるよ皆！」

「仕方ないか・・・」

こうして俺達は思いがけずに過酷な大冒険へ歩み出す羽目になった。小槌を持ったまま移動したキャンデイの後を追いつけ、何時もとは違って見える周りの風景に何処か新鮮さを覚えながら険しい道程を進む。

「ご、これは——」

その星空さんが一瞬言葉を失つた。目の前の大きな水面を見てこれは多分、最初の試練というか障害になり兼ねないと考える。

「・・・湖だ！」

「水溜まりや」

「どうやって進めば」

日野が突つ込んだ通り、普段なら何てことはない水溜まりは跨ぐなり避けるなりすればそれだけで良かった。今は小さくなつてしまつたからそれが出来ず、早速立ち往生する。

「・・・とはいえ。急がば回れ」だな」

「何処行くん？」

この体のサイズでは面倒だけど仕方無いだろう、迂回しようとして回り込む事にして再び歩き出す。

「水がプヨプヨしてる！」

「多分、これは表面張力ですね」

黄瀬のこのちよつとした発見が切つ掛けとなり、星空さんは閃く。

彼女の案に賛同して水溜まりの上をスイスイと進む。手頃な葉っぱを運んできてそれを浮かべれば・・・成る程、ちよつとしたボート代わりになる。乗り込んで向こう岸を目指す俺達。

「うわー！」

「アメンボー！」

「へえっ?!」

緑川は驚きの余り一瞬にして凍り付いた。まあ、そりやあ驚くよな。今じゃ大体おんなじスケールなもの。

「到着ー！」

「キャンディは何処だ？」

「あ、居たー！おーい！」

星空さんが叫ぶ一方、その妖精はこつちになど気付きもせずピョンピョンと軽快に階段を駆け上っていく。という訳で続く障害に出会したのだがこんなのどう上ればいいんだよ、マジで不便だな。

「なんて高い山！」

「階段でしょ」

「よっしゃー！肩車大作戦やー!!」

お次は日野の提案。その作戦名からしても内容は明らかだ。一番上の奴が下の奴を引き上げて・・・というのを繰り返して階段を上りきろうという大胆にして単純なもの。ただ、そうなると問題が一つ。

「・・・じゃあ、行くよ？」

「お、おう」

一番上から日野、黄瀬、星空さんと来て青木、緑川。俺は男子だつて事で最下層にて土台にならなければならず、体力面とか体重の関係から判断したんだらうけど。この背には責任が重くのし掛かる。女子でも5人分だし、崩れたら彼女達が怪我するかも知れない。だけど、それとは別に――

「振り向くなああっ・・・！」

というか見上げるな、俺。直ぐ上には緑川が立っているし、なんなら更にその上にも女子が居るから微かでも見てはいけないものが見えてしまうぞ。

「真澄、平気？」

「大丈夫、断じて覗いたりしてねえから！」

「——へ、覗く？・・・真澄、あんたまさかつ」

・・・ドシーーン!!

「「「わー！」「」」」

スマプリタワーは敢えなく崩れ去った。いや、それよりあんたまさかつて何だよ。何か動揺した緑川辺りからグラついて一気に倒壊してしまった。これって俺のせいか？うわ、また気まずい。

「こつ、今度はなんだよ!？」

運動部の連中だ。直後に物凄い振動と共にユニフォーム姿の一団が俺達の直ぐ側を横切っていく。危うく踏み潰されるところだ。全く、踏んだり蹴ったりだな。・・・階段はそれからどうにかこうにか攻略し、キャンデイの背中を追い掛けて極小サイズのまま校舎の中にまで足を踏み入れた。何時もの廊下も大回廊と思う程に長く、必死に走って行き着いた先では途方もなく広く感じる教室を目の当たりにする。この時、黄瀬は又しても嬉しそうに辺りを見渡していた。イチイチ喜ぶなよ、ちよつとは悲観しろ。

「感心してる場合ちゃう、キャンデイ追い掛けんで！」

「むちやくちや広いじゃねえか。ああ、マジでキツイ」

「キャンデイはあつちに行つたよ」

「で、どうすんだよ」

「取り敢えず、これ上るで！」

「えっ、いやいやいや——」

見上げた断崖絶壁を前に日野が先行してよじ登る。それは・・・：机から釣り下がった体操服をしまう袋か何かだとは思った。日野も他の皆も次々としがみついて上を目指す。

「こんな番組見たことあるぞ。確か、筋肉自慢が障害物を攻略してつて、それで」

「ブツブツ言っていないで来なよ、キャンデイ追い掛けなきや」

「っ解ってるよ！」

必死にしがみついて這い上がった時、緑川が差し出した手を掴んで

とあるテレビコマーシャルの文句が頭を過る。しかしふざけている場合では無いとちやんと自覚しているので決して真似はしなかった。

「ひろーい！運動場みたい」

「だから、何ではしゃいでるんだよお前は」

「だって、何時もと全然違って見えるんだよ？ほらほらー！」

「あのなあ・・・」

黄瀬を睨んでいる間にキャンディは窓から外に飛び出していた。やっとの思いで教室に来たのに、又外かよ。

「高いですね・・・」

青木の言葉に全員が息を呑む。そこは机の上、縁に近付いて覗き込んだ途端に足がすぐむ思いだ。こんなところからもし落っこちでもしたら軽く死ねるじゃん。

「———そうだ！」

「何する気」

「向こうに渡ろう。これを使って」

目を付けたのは机に置かれていたプラスチック製の定規。黄瀬がそれを指差し、運んで来てこっちの机からその隣の机まで橋渡しにした。成る程、これで先に進めるね♪・・・・・・・・いや、ふざけんちくしょうめ。

「本気じゃないだろ」

「仕方ありません、灰谷君。行きましょう」

「・・・下は見えない方が良いな、絶対」

やっぱり無理だ。見るなっただってこの橋、下が透けてるんだもの。透明な定規の上を俺達は慎重に進む。

「おおー高い」

「凄いねー！」

「足下、めっちゃ透けてるう・・・!!」

日野の声が震える。無理もない、こんなの高所恐怖症でなくたって怖いと思うし。まあ、一部楽しんでそうなアホもちらほらいるみたいだけど。要するに何とかと煙は高い所が好きって、あれ、星空さんと黄瀬は少なくとも“あれ”なんだ。

「下見たらアカン下見たらアカン下見たらアカン——」

「ああ・・・！」

「つなおー!」

「おい、早く進めよ」

「せやかて、なおが！」

「どうやら恐怖の余り気絶したらしい。こんな橋のど真ん中で？勘弁してくれよ。」

「て、手伝ってや！」

「くうつ、絶対に死にたくない。こんなの嫌だからな」

日野と2人で緑川に肩を貸し、定規の上を渡って最後まで辿り着く事は出来た。ふう、一気に力が抜ける。

「で。この後は」

「キャンデイが下に・・・」

「もー嫌、無理。ムリムリムリ！」

「そうだ。いい考えがあります！」

お次は青木のプランが炸裂する。彼女はおもむろにスマイルパクトを取り出すとキュアデコルをセットした。軽快なリズムと共に何が起こったかと言うと、青木はデコルの力を使って傘を取り出した。

「これで——」

「成る程！」

星空さん達は各々、傘を手にしてそれを広げると窓の縁から思いきって飛び降りる。傘をパラシュートの要領で利用して地上に着地しようという試みだった。でもって、傘は確り人数分用意される。

「下見たらアカンでえー！!!」

日野は両手に一本ずつ、彼女に緑川はしがみついて落下していく。俺はその後に続いたが、何せ他と違ってビニール傘なのは明らかだったのでここでも恐怖しかない。・・・あ、キャンデイが居た。

『どおおおこおおくううるうう』

ブオオオンツ!!

こーこーくーるー。そいつが振り向いただけでこっちは大惨事。強烈な突風になす術なく吹き飛ばされる。こういう時、悲鳴すら出ない。しかも冷静に死を覚悟してみたり。あー、もう駄目——

フアサアア

「・・・助かった？」

下は草地だった。裏庭の雑草がクッション代わりになって俺達を救った。・・・もう、これ以上は勘弁してくれ。

「あ、トノサマバツタ！」

葉が揺れたと思ったら顔を覗かせたのは一匹の虫。余りに大きい。がそれも自分達が小さくなっているから。

「イーーーーヤーーーー!!」

緑川の悲鳴が轟く。彼女はバツタを見た途端に1人走り出す。おーい、何処に行くんだー。すると向こうでも叫び散らし、途方に暮れる俺達の目の前を物凄いスピードで横切る。その後、緑川はアリやチョウなど様々な昆虫に出会す度に騒いではバタバタ走り回った。・・・クモの巣に引掛かったところを助けてやると漸く彼女は疲れ果てた様子で立ち止まる。

「なおちゃん、どうしたの？」

「・・・だって——てんとう虫イイ!!」

星空さんの背後を見て再び声をあげた。側に居た青木にしがみつき、身を隠しながら震えていた。

「こわーいいい・・・!」

「なおちゃん？」

「なおは虫が大の苦手なんです」

一連の様子から、うん、それはハッキリしている。どうりで大騒ぎする筈だな。確かに、あの目はマジだ。

「どうして?こんなに可愛いのに」

「可愛くなんか無いよツ!!」

てんとう虫を撫でる黄瀬の言葉に緑川は強く否定する。てんとう虫は羽根を広げるなり飛び始め、緑川に向かって近づく。当然……
「わあああーごめんなさあああい!？」
「あーあ」

果たして、てんとう虫が本当に怒ったのかそれは解らない。だが、追い掛けられた末に緑川はこれ又凄い勢いで茎を登っていくのだから驚きだ。早ツ!

「「「なおちゃん!!」」」

彼女は足を踏み外して落下した。誰もが助けもままならずに見ている事しか出来ない。

「なお……!目が覚めました?」

「なおちゃん、大丈夫?」

仲間が心配する中、緑川は静かに目を覚ます。結論から言って彼女は無事だった。怪我もなく、ただショックな出来事があったので気を失っていた。星空さん達はホツと胸を撫で下ろす。一時はどうなるかと思っただけど取り敢えず良かった。

「あたし……」

「高いところから落ちて、あの子らがクッションになってくれて助かったんよ」

そう。あの時、間下に偶々居たとある虫が命を救った。日野が指し示す先にはダンゴムシが居て、大きいのが二匹、周りに小さいのが居て差し詰め家族の様にも見える。緑川は見るなり震えた。

「何や。どうした?」

「来ないで、お願いだから——」

ダンゴムシ一家の長男、とは断言のしようもないが怯える緑川の側までその小さい奴がやって来る。

「もしかして、なおちゃんに持ってきてくれたの?君、優しいねえ!」

「そうなのか?」

「そうだよ」

星空さんが断言するに、ダンゴムシは落ち葉を持ってきたらしい。緑川が気を失っている間に葉っぱで布団を作ったところ、手伝わてるみたいだ。それを知って彼女は複雑な表情をする。

「おおー蝶々だ！おつきいねえ」

「あつちではアリさんが飴を運んでいるよー」

「私も運ぶの手伝うー！」

彼女達はイチイチ感激してはしゃぐ。成る程、普段は見もしなかった世界だ。でも、こうして小さくなつてから初めて見てみると色々新鮮な気分だ。・・・へえ、ああやつて餌を運ぶんだなあ。

「つて、みゆきが運ばれてるやん!!」

思わず感心していると見逃せない事態に。あいつは馬鹿なのか、手伝うどころか気付かなかつたら危うく巣穴に連れていかれてたぞ。

「なおは知っていました？身近にこんなに沢山の昆虫が住んでいた事」

「知るわけ無いよ。虫が居そうなどころには近付かなかつたし・・・」

「私は感動しました。ここは昆虫達の町なんですね」

青木がそう表現した様にそこにある光景は正しく一つの小さな世界だった。・・・うん、凄いつちや凄いだらう。けど、本当はこんなのにびりしてる場合じゃない。

「何——」

余りに突然だった、それで驚きの余り尻餅をつく。あれ、何処かで見えた様な。

「・・・痛いだわさ」

「だわさ？」

「ああープリキュアー！」

緑色のフードを被ったそいつ。特徴的な語尾もそうだし、あの突き出した大きな鼻・・・おおっと、嘘だろ。

「プリキュア？クル?!・・・ええ！皆が小さくなってるクルウ!!」

そこに探していたキャンディもやって来た。うん、知らなかったとはいえ、こうなったのはお前のせいだけだな。

「はっはーん。さてはお前達、あたしのチイサクナールを使ったね」

チイサクナール？詰まり、あの小槌はこの魔女が作った発明品か。うわああ、前も変な指輪のせいで大騒ぎしたつてのに又かよ。

「自分達で小さくなるのは手間が省けただわさ。——世界よ！最悪の結末・・・バッドエンドに染まるだわさ！・・・白紙の未来を黒く塗りつぶすだわさ!!」

そしてこの流れに突入する。禍々しい空気がいつぺんに立ち込めると空には不気味なクモの巣が張り巡らされ、清々しい青は澱んだ色に染まる。

「大変！虫さん達が・・・!」

まるで事切れたかの様に周りの虫は動かなくなっていた。おいおい、虫もバッドエンドになったりするのか。てな訳で、悪の皇帝とやらに捧げるみたいだから十分な量に至ってるらしい。本日のノルマは達成しましたつてか。

「もつともつと絶望するだわさ!」

「そんな事させない!!——皆、行くよ!!」

虫一匹からだつてバッドエナジーとか言うエネルギーを搾り取るうとする魔女へ向かつて、星空さん達はスマイルパクトを取り出す。

↑Ready?↓

『プリキュア・スマイルチャージ!!』

↑Go! GoGo Let, go!!↓

5人はキュアデコルをセットして一斉に変身していく。

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりんじゃんけんポン♪キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降りつもる清き心！キュアビューティ!!」

“五つの光が導く未来!!——輝け！スマイルプリキュア!!”

だが、それでも圧倒的に不利である。魔女が地面を一步踏み締めただけでそれは大地震の様に感じる。草むらに棲む昆虫と大差無いま

で縮んでいては、向こうは正しく天まで届く程の巨人。これだけでも非常に不味い、が、加えて魔女は更に繰り出す。

「出でよ、アカンベエ!!」

この上、赤い玉を取り出して怪物まで登場させた。アカンベエは草むらのタンポポから生み出され、それはもう恐ろしくデカくて――

「あれ?・・・アカンベエも小さいよ」

「私達に合わせてミニサイズにしてくれたのかな」

「しー!マジョリーナは気付いてへん。黙つとこう」

あー、本当だ。向こうは何時もの調子でやってしまったらしい、これはラッキー。これなら勝ち目があるんじゃないか、よーし。

「逃げないと!」

アカンベエが頭からミサイルらしき攻撃を放った。巻き込まれない内にその場から離れ、物陰に身を寄せて様子を窺う。ハッピー達は攻撃をかわし、草むらを駆け回る。魔女とキャンディの声が飛び交う中、プリキュアの反撃が始まる。ビューティの蹴りに続いてピースが、その後の下からサニーが拳を突き上げる。アカンベエが頭上高く吹き飛ばされ、そこにマーチの一撃がヒットした。・・・が、弾き返されてしまう。アカンベエの花弁の様な頭から四方にミサイルが飛ぶ。そいつの軌道はもう滅茶苦茶であちこちに降り注ぐ。草むらの葉っぱが散っていき、動けなくなっている虫は下敷きになった。

「虫さん達が!・・・止めて!ここは虫さん達の大事なお家なんだよ!」

「虫?・・・へっ。虫けらなんざどうでもいいだわさ!アカンベエ、纏めて始末してやるだわさ!」

「だめえええ!!」

ハッピーは叫び、一匹の青虫を庇ってミサイルの直撃に遇う。サニーとピースが向かう中、一方マーチはビューティの手を借りて立ち上がった。

「虫けらと一緒に皆くたばるだわさ!!」

魔女の声にアカンベエが動く。マーチは一人、敵に向かって素早く

駆け出していくとアカンベエ目掛けて飛び蹴りを叩き込んだ。タンポポの細い茎の体がグニヤリと折れ曲がる。その勢いに乗せて、アカンベエは魔女の顔に叩き付けられた。無論、小さなアカンベエがぶつかったところで大した事は無い。怪物は虚しく地面に落下する。

「虫けらって言うな!!」

「はあ? 何だわさ?」

「——私は凄い虫が苦手だけど・・・小さい虫達だつて一生懸命生きてる! それを踏みにじるなんて、この私が許さない!!」

マーチの怒りの声が草むらを通る。魔女は全く意に介さず、アカンベエをそこに置いて命令する。ミスイルが次々に発射され、マーチへ向かって降り注いだ。マーチは回避し、飛び退いて追撃を蹴り飛ばす。弾かれた一発がアカンベエを直撃する。すると煙の中から更にミスイルが・・・ビューティがマーチを救い出す。ピースは手刀で飛んできたミスイルを切り裂く。

「ハッピ―!」

「——はあああつ!!」

サニーは怪力を発揮して物体を放り投げる。それをパンチして仲間がアカンベエに命中させ、魔女は飛んできた空き缶を顔から受け止めて大きく仰け反った。完全に貫い事故だ、又しても。

「今クル!」

「うん!」

キャンデイの呼び掛けにマーチが答える。スマイルパクトに力を込め、彼女は力強く叫んだ。

「プリキュア・マーチシュート!!」

風のエネルギーを凝縮したそのボールを蹴り飛ばす、キュアマーチ渾身の必殺技がアカンベエを消し去る。プリキュアの技による浄化作用で赤っ鼻の怪物は葬られ、魔女は如何にも悔しそうにジタバタする。でもって、そのせいで地震が起きてこっちはスッゲー迷惑だ。おい、止めろつてんだよ。あ、これはもう面白がつてるぞ。魔女は明らか

かにこつちの反応を窺って楽しんでいた。

「あー!!ちつちやいんだからアカンベエ出さなくても倒せるだわさ
!」

「今更かよ。そんなの始めっから解るだろ、普通」

でもヤバイ。兎に角、これで気付かれたからにはいよいよ不味い。
魔女はキャンデイからチイサクナール・・・という名の小槌を取り上
げ、透かさず俺達に向かって振り翳した。

「纏めて叩き潰してやるだわさ!!」

グチャツと、いや、プチツとかも知れない。どうでもいいけど、そ
れこそ虫けら同然に――

ピカーーン!!

眩しい光が目の前を包んだ。小槌を地面に叩き付けた瞬間、強い輝
きに目蓋を閉じる。・・・あれ、この感じはもしかして。

「――やったあー元に戻った!!」

「しまったー!」

使い方が完全によめたぞ。一度使うと小さくなり、そこから又使う
と元通りという訳だ。チイサクナールという単純な名前だけに扱い
も極めて単純。ふう、やれやれ。

「っ今日はこの辺で勘弁しといてやるだわさー!」

「それが良いだろうな」

魔女は捨て台詞を吐いて一瞬の内に姿を消す。共に、バッドエンド
空間も消滅して全てが何事も無かった様に元に戻った。うん、もう虫
けら呼ばわりさせないぞ。

「良かった」

安堵の言葉を漏らすマーチの視線の先にはあの虫達の姿がある。
アリやダンゴムシは再び動き出し、蝶は羽根を飛ばたかせて何処かへ
飛んでいく。

「一時はどうなるかと思った。こんな事は二度とごめんだな」

「でも面白かったね。大冒険だったよー」

「今にしてみたらな、そう言えるんだろうけど。何度死にかけたと思うんだよ」

でも、とは言っても。さつきまで見ていた景色は普段と違う新鮮なものであったのは違いがない。虫だってあんなに間近で見たのは初めてだったと思う。しかもやたらデカイ。

「・・・何してるの？キャンディ」

「ありがとうって言ってるクル」

「解るのかよ」

「虫さんもお喋りするクル。とつても嬉しそうクルウ」

バツタやアリ、ダンゴムシ。花壇でそれらに耳を傾けていた妖精曰く、虫達は星空さん達に感謝しているらしい。まあ、そういう事にしておくか。それにしたって虫の言葉が理解できるとか、いや、そもそも喋るんだとかファンタジー過ぎんだろ。・・・待てよ、妖精といいバッドエンドといい、もうとつくにそうか。

「そうなんだ」

「虫さん達も、私達と同じという事ですね」

「ところで、なおの虫嫌いは直ったんか？」

「・・・少し直った様な・・・直ってない様な——」

まあ、そうそう苦手なものを克服出来たら苦労は無い。という訳だから、言おうか止めようかと思っただけだ。

「あ。・・・緑川」

「ん、何？」

「なんて言ったら良いのか。そのー・・・」

「どうしたの。はつきり言っよ」

「んー。いや、背中に」

「背中？」

「そうそう、背中に引っ付いてる」

「え、何が？」

「・・・てんとう虫」

恐る恐るとそう伝えた。そして彼女はきつと大騒ぎすると思ったから、まあ落ち着けと付け加えて。

「へえっ、とっ取って・・・」

「お、おう」

そーっと指で摘まんで、優しくてんとう虫とバイバイ。緑川は溜め息をつけて肩の力を抜いた。

ブーン、ピトツ

「あら」

「——あああああ!!」

飛び立って、どっかに行く筈が何故か緑川の鼻先に。これは俺のせいでも何でもないからな。

「やはり、駄目な物は駄目みたいです」

「ですねー」

この日、彼女の何度目かの悲鳴が放課後の学校の裏庭に響き渡った。てんとう虫さん、あの時の失言はもう許してやったら。

続

10 新しい力

今朝のホームルームで担任が連絡事項を告げた。共に最前列から一番後ろまで同じプリントを行き渡らせ、生徒は手元に来た端から内容に目を通していく。見てみると学校行事に関しての細かい日程だとかその他、保護者向けのお知らせやら注意事項やらが記載されていた。

「どーでもいいや」

つい口を突いて出た独り言に小さく咳払いし、一先ずそれを折り畳んで鞆に押し込んだ。

「うわあ！流石やよいちゃん！」

昼休み、屋上に集まっていた星空さん達は黄瀬が描いたイラストを見ながら盛り上がっていた。チラリと見せられたのだが、確かに彼女の絵は感心せざるを得ないクオリティーだ。本人は何時かのポスターコンクールでの一件から自信をつけたのか、今回は自ら進んでそれを描くことを選んだだけある。休み時間中にあつという間に仕上げたらしいが凄いな。

「やよい、何描いてるクルウ？」

側に置いてあつた鞆の中からキャンデイが頭を出した。何時にも増して楽しそうな雰囲気気付いたのかそう尋ねる。

「修学旅行のしおりよ」

「シユウガク・・・何それクル？」

「学校の皆で二泊三日の旅行に行くの！」

そういう訳だからこいつらは揃いも揃ってもう楽しみで仕方ないといった様子。中学校生活に於ける行事の中でも二学年になって迎える修学旅行と言えば一、二を争うイベント事。二泊三日の旅、行き先は定番でありながら人気に名高いかの京都。翌日は大阪へと足を運ぶ。観光気分であちこち見て回り、夜には滞在先の旅館で一晩中お喋りに花を咲かせる、帰りには土産物を物色して・・・と、そうやって想像を膨らませていく4人。別にいいんだけどさ、少し落ち着けよ。

「コホン——修学旅行とは『学問』を『修める』旅。即ち勉強なんですよ。お忘れなく」

「『はい』」

仲間がはしやぎにはしやぐ中でただ1人、何とも冷静な辺りはさすが青木か。まあ大半の生徒は勉強の意識なんてしないだろうけど。そして我らが学級委員は更に一言付け加える。

「因みにおやつは500円までです」

「おやつクルウ？キャンデイも楽しみクル！」

「はいはい、良かったな」

その言葉に若干一名、いや一匹もすっかり浮かれ気分。ところが――

「キャンデイ。お留守番よろしくね♪」

「え……ええええー?!ど、どうしてクルウ！真澄、何でキャンデイはお留守番クル！」

「まあ、そうなるだろう」

もし周りに見つかりでもしたら、星空さん達はそれこそ修学旅行を楽しむどころでは無くなるだろうし。てな訳で確り釘を刺されてしまい、キャンデイはあからさまな膨れっ面で何故かこちらを見返してきた。いや、俺を睨んでも仕方ねえからな。……その日の夜、風呂から出ると母さんが修学旅行の件を口にした。そういやまだ話してなかったと思うが。

「さつき先生から電話があったの。ちゃんと気に掛けてくれてるのよ。……えっと、最近どう？」

「どうって、別に——」

馴染めてるかで言えば確かにその筈。当たり障り無く、不用意に注目を浴びないよう心掛けてもいるし。うん、空気として馴染んではいるだろう。

「大丈夫」

「そう。取りあえず、修学旅行は行きなさいね」

「修学旅行！それって何時なんだっけ。もうすぐ？良いなあ、新幹線乗りたいなあ。旅館の温泉ってどんな感じなんだろ。あ、お土産忘

れないでね！八ツ橋と・・・」

優輝が通り掛かりに会話へ割り込んできた。そして早くも土産物についてごちゃごちゃとリクエストを並べ立てるのだが一切を無視して部屋に戻る。はあ、明日はクラスで班決めだの話し合いだのって具合だろうなあ。

「では。修学旅行3日目の自由行動について、何処に行きたいか意見を出して下さい」

という事で翌日。早速、修学旅行の予定についてクラス全員での話し合いの場が設けられた。クラス委員の仕切りで当日の行動先に関する意見を求め始める。そうすると案の定、待ってましたと言わん程にその口火を切ったある男子が居た。彼の至極素直な意見を皮切りに続けて教室のあちこちから行き先の候補がこれでもかと思える。

「大阪と言えばたこ焼き!!皆で食いにいこーぜ！」

「よっしゃ！うちの知ってる店、案内したるわ！」

「——それより、あたしはシヨツピングがしたいなあ」

「やっぱり天王寺動物園でしょ。動物可愛いし」

「・・・丁度その日に、難波で太陽マンショーがあるんだけど——」
「前から行きたかった、絵本だけの本屋さんが大阪にあるんだけどなあ」

眠気半分で聞き流していると中にとんでもないものが混ざっていたりする。聞き間違いか。は、太陽マン？なに言ってるんだ。

「大阪と言ったらやっぱり大阪城だろ！豊臣秀吉！」

「いや、通天閣が見てみたいよ」

「万博記念公園に行きましょうよ」

3日目の自由行動は大阪だ。ここでも知り得る限り、数々の名所が挙がる。

「いや、てかどーでもいいつつうの」

一応、それが俺としての意見。まあ、聞いて貰おうなどとは思っていない。それから皆、大体の候補を出し尽くしたんではと思ったが新し

い行き先が際限無く浮かんでくるらしく徐々に収集がつかなくなっていた。青木は騒がしい教室に向かって大きく呼び掛ける。

「意見のある人は手を上げて1人ずつ発言して下さい!」

「れいかが困ってるクル」

「だなあ。委員も楽しやな——て、何してるんだよお前。出てき
ちや駄目だろ」

いつの間にやら足下にそいつの姿があった。キャンデイはどうやら星空さんの鞆から抜け出してきた様で堂々と教室の中を彷徨いているみたいだ。

「早く戻れよ。見つかったら不味いだろ」

「クルウ、キャンデイ、れいかのお手伝いするクル」

「お手伝い?」

ぬいぐるみ然とした姿の妖精はあろうことか教壇へ向かって走っていく。え、おおいっ不味いだろあれ!・・・駄目だ、星空さん達は全く気付いちやいない。

「皆れいかの言うことを聞くクルーー!!」

次の瞬間、教卓の上に飛び乗ったキャンデイの声が教室中に響き渡った。やつちやつた。一応、クラスは静かになったけどな、何処から途もなく響き渡った声にみんな呆然としている。すると、しんと静まり返る中に青木が一言発した。

「——と、言うのは冗談です・・・クルウ」

「クルウ・・・」

青木はキャンデイを隠して何とかバレない様にと苦笑いを浮かべる。えーっと、流石に無理があるんじゃないかなあ。ところが、直ぐ側には先生とか居るのにことのほか上手くいったのだった。本当、間一髪だったなあ。

「では、グループに分かれて下さい」

「始まった」

ああ、今日一番の厄介事。自分の席で顔を伏せている間、教室のあ

ちこちでグループ形成がされるのをそれとなく肌を感じる。ほんの少し、チラツと覗いてみると案の定。しかもこれが見事に男子と女子とで綺麗に分かれていたりして。——さて、どうしたもんかなあ。いくらなんでもここですつと息を殺してる訳にもいくまい。多分、何時かは気付かれたりして声を掛けられるかも知れないし。そうなつたら、余計な注目を浴びる事になるんだろうし、正直ゴメンだな。因みに先生は今、何かの用事で教室を抜けているのでここには居ない。青木達、学級委員に任せているという状態だ。

「真澄君。どうしたの、大丈夫？何だか辛そうだけど・・・」

振り向くと星空さんが俺の肩に手を乗つけていた。この時、咄嗟にある考えが頭を過つて言葉も無く彼女を見詰め返す。——この際、折角だから調子を合わせるか。

「あの、どうかされたんですか」

「えーっと・・・具合が悪くて、俺」

青木にまでそういう事情を聞かれ、咄嗟に口を突いて出たのはそれだった。この場を逃れる為にはもうこれで良かったと思う。教室を出ると1人保健室へと向かう。委員の付き添いの申し出は断り、二年二組の教室を離れてふと廊下の窓から空を眺める。ここ最近の清々しい青空と比べて、今の気分は何時にも増して浮かないと自分でも感じていた。

保健室のベッドの上でウトウトしていた頃、すっかり気が弛んでいたせいか割りと大きめに腹の虫が鳴った。壁掛けの時計を見ると丁度昼休みで我ながらこういう時の体内時計の正確さには驚かされる。「お腹が空くぐくらいだからもう平気ね」

カーテン越しの声にそつと開けると、いつ戻ったのか白衣姿で机に向かう保健室の先生の姿がそこにあつた。女性教師はこつちに振り向いて微笑むと俺の額に優しく触れる。

「やっぱり熱は無いみたいね。頭痛も無いってことだったし風邪じやなさそうね。大丈夫？」

「はい・・・大分、良くなりました」

「そう。どうする、元気そうならお昼食べてきたら」

「はい、ありがとうございます」

「あなた、五月病じゃないでしょうね。フフ、お大事に」

まさか、仮病とは言えないよな。ベッドから降りて引戸に手を掛けると声を掛けられ、そこで再び一礼して保健室を後にした。教室に戻ると青木が様子を窺って話し掛けてきた。

「もう大丈夫なんですか?」

「まあ」

「灰谷君。お話がありました、先程の修学旅行のグループ決め的事で・・・」

「あー、ハイハイ。それなら別に」

半ば強引に話を切り上げ、鞆を手にして教室を出ていこうとして星空さんと出会う。

「具合良くなった?」

「お陰様で」

「そう、良かった。ねえねえ修学旅行楽しみだね。真澄君は自由行動は何処に行きたい?」

「さあな。迷っちゃうよな」

答えたい質問ではなかったのだからやはりはぐらかしてやった。俺は普段以上に彼女達を避ける意識を強めて昼食を済ませ、午後からの授業にも挑んで放課後にはさっさと帰宅した。——今日は特にしんどかったかも。床に鞆を投げ出し、敷きっぱなしの布団に即ダイブ。枕に顔を埋めて叫ぶとかは無いけど、妙に腹立たしい気がしてならない。何故だ、そして短く呻く。

「漫画、買い忘れた」

学校帰りにコンビニに寄ろうとしてたのをうっかり。思い出した以上は買いに行かねばなるまい。今月号は特段見逃せないとか別に無いのだがこういうのは習慣だ、続ける事に何かしら意味がある・・・多分。兎に角、要らない理由をつけて外に飛び出すと一番最寄りの店まで足を伸ばした。

「おう」

「クルウ」

「ここで何してんだよ」

本日二度目となる台詞。近付いちゃいけないかとか関わらない方がいいかなとか過ったけど話し掛けてしまった。一般常識の範疇を越えた生命体・・・妖精がこんな町中のそれも公共の場で何してるんだろうって考えたらいても立っても居られず。近道のように利用するつもりで入ったとある公園の噴水、縁にちよこんと座るキャンデイの姿は置き去りにされた忘れ物のぬいぐるみみたいだった。

「・・・何でも無いクル」

「あれ、星空さんは？」

「みゆき？」

「近くに居るんじゃないのか？」

「今は、キャンデイ1人クルウ」

浮かない顔、それは見て解る。キャンデイの事は大きくして知りもしないけど何だか何時もらしくもないテンションの低さだ。果たしてどうしたものか、このままこいつをこんな所に置いていくのもどうかとは思う。そうして、気付くと俺はキャンデイの隣に腰を下ろしていた。キャンデイの方はそれから俯いたままだったが、やがて暫くすると沈黙を破る様にぽつりと小さく呟いた。

「真澄。真澄は修学旅行楽しみクル？」

「寄りにも寄ってその話題かぁ。——いや、別に」

「どうしてクル」

キャンデイは顔を上げるとファンシーな目をして不思議そうにこつちを見る。黙っているとキャンデイは再び同じ事を尋ねた。

「何で楽しみじゃ無いクル？・・・みゆき達は皆楽しみにしてるクル。すっごくすっごく嬉しそうだったクル」

「さあな。どうしてだと思っ？」

これについて答えたくないのが本音だった。だから、少しずるい気はするけどはぐらかす為に質問に質問で返した。キャンデイはきよとんとなつて、それから考える素振りでも黙り込む。こうして奇妙な時間だけが流れ続けた。

「キャンディ。．．．灰谷君？」

「れいか」

「あれま」

そこに登場したのは青木れいか。キャンディは「1人」だと言っていたから偶然だろうか。彼女はわざわざごっこちへ丁寧に一礼してからキャンディに話し掛ける。優しく、それから静かに隣へ腰を下ろす。

「キャンディはれいかみたいに皆に頼りにされてないし、失敗ばかりで駄目な妖精クル」

「そんな事、無いわ。さつきだってキャンディは教室で私を助けてくれたじゃない」

フォローしたつもりが迷惑を掛けてしまった、多分そういう話なんだろう。やはりキャンディはすっかり落ち込んだ様子だった。

「でも、キャンディは役に立って無いクル。．．．．．キャンディは駄目な妖精クルウ!!」

「キャンディ．．．」

そいつは物凄いジャンプ力で何処かへ飛んでいってしまった。すると青木は振り向き様、こう言った。

「今日、灰谷君が長いこと学校をお休みしていたと先生から聞きました。．．．それで、もし何かあったら遠慮なく仰って下さい。修学旅行のグループ決めや他にも何か困っている事があれば是非、相談して下さい」

「は、はあ」

そう、春の遠足も完全にすっぱかした。別に知らなかったとかいうんでなく敢えてそうしたんだ。それにしたって、青木の口からその事が出てくるとは思わなかったんで不意を突かれた感じ。まあ、要するにクラスの輪に溶け込めないでいるこの俺の力になりたいって言うんだろう。成る程、クラス委員としては放っておけないか。．．．．．彼女には礼を述べてその場を別れた。辿り着いたコンビニではお目当ての漫画雑誌は難なく手に入れられた。その帰り――

「助けてクルーラー!!」

住宅地に差し掛かった時、聞き覚えがある様なそうでもない様な・・・いや、やっぱりこの特徴的な語尾については自信あり。兎に角、まあ気のせいでも良いけどなんて思いつつ寄り道感覚でそこへ入っていく。

「クルウー！そこに居るのは真澄クル!?」

「よお。そこで・・・いや、もう何も聞かまい」

キャンディだった。神出鬼没とでも言わせたいのか、ただ今度は鳥籠みたいな物に入れられて屋根のアンテナ辺りからぶら下がっている。おお、やっぱり何があったのかこれは気になる。

青木の下を離れてキャンディは民家の屋根伝いに移動していた。すると恐ろしげな声に話し掛けられ、そこには屋根に腰掛けた悪い狼の姿が。——キャンディの話を聞きながらその時の光景を頭に思い浮かべる。

「よう、その妖精！俺様とお茶しないか？」

「違うクル。そんな事言われてないクル。キャンディがプリキュアの役に立ってないって言ったクル・・・」

失礼。だ、そうだ。で、兎に角キャンディはいきなり因縁を吹っ掛けられたらしい。しかも相手はこう豪語したそうである。

「今日でプリキュアはおしまいだ」

悪い「オオカミもどき」は不敵な笑みを浮かべながらその手に青い玉を取り出して見せると同時にこう言ったとか。

「こいつで生み出したアカンベエにはプリキュアの技は効かねえんだよー!」

だからその「青っ鼻」とやらを使ってプリキュアに技を無駄打ちさせてから弱ったところを一気に——という流れの作戦内容を打

ち明けてきたらしい。

「だから早くみゆき達に知らせたいクルウ！」

「でも、星空さん達が今どこに居るか解るのか？」

「それは・・・！」

キャンデイが今のこの現状に陥った理由とは想像していたよりもずっと緊迫したものだった。オオカミもどきに籠の中へ閉じ込められて身動き出来ない状況では先ず星空さん達の行方を探す事さえ困難だ。

「・・・は！そうクル。みゆき達、修学旅行のしおりを作ってたクル！」

「そうか。何処で？」

「『ふしぎ図書館』クル」

はて、聞いたことも無い。そんな場所、ここら辺には絶対無かった筈。うーむ・・・

「は！思い出したクル！しおり作ったらその後で皆でお菓子買いに行くって言ってたクルウ！」

「お菓子？修学旅行に持つてく奴か。・・・だとしたらコンビニかスーパー、或いは——」

そこで記憶を辿った俺はこの辺りから行けそうな場所に駄菓子屋があつた事を思い出した。しゃーない、一緒に探してやるかな。

「・・・でも、その前にそっから出さないと」

「キャンデイの事は大丈夫クル、何とかするクル。だから真澄はみゆき達にウルフルンの事を伝えてきて欲しいクル！」

「仕方ない」

民家の塀によじ登って更に屋根まで上がっている暇も無さそうだ。もし当てが外れた時は一旦キャンデイの様子を見に戻ろう。勘を頼りに走り続け、それなりの距離を走り続けたところ。真っ昼間の空には似つかわしくない不自然な色を認めた時、多分その下に星空さん達が居るんじゃないかと又しても勘が働く。

「『プリキュア・ハッピーシャワー!!』」

桃色の一筋の光だった。巨大な敵は戦士の叫び声と共に繰り出された一撃を受け、爆発に吞まれた。既に戦闘が始まっており、駄菓子屋から直ぐ目と鼻の先にある公園の中で星空さん達……いや、プリキュアがバッドエンド王国と戦っていた。

「必殺技が効いてない……」

「ふええ!どうしてえ?!」

キャンディの話の通り、そのアカンベエはこれまで見てきたのとは異なって鼻が青い。そしてハッピーが今しがた食らわせた必殺技を諸に受けてもまるでピンピンしている。ハッピーの悲鳴にも似た声がこつちにまで響いてくる。早く知らせないと!

「皆さん、冷静に!」

「プリキュア・サニーフアイヤー!!」

「プリキュア・ピースサンダー!!」

「プリキュア・マーチシュート!!」

必殺技のオンパレード、怒涛の連続攻撃。しまった、遅かったか。駆け込んでいったつもりが間に合わなかった。サニー、ピース、更にマーチまでもが次々に必殺技を放つ。炎と風の球、電撃、一度に3人の属性を宿したエネルギーがアカンベエを捉える。だがアカンベエは全てを受けても尚、まるで無傷だった。

「おーい!」

「……真澄君?」

「え、何してんねん!」

「来ちゃ駄目!危ないよ!」

「キャンディから伝言が……」

「え、キャンディから?」

マーチが首を傾げる。時既に遅し、とは言え伝える事はきちんと伝えねば。キャンディから聞かされた通りに5人へ説明する。

「やはり、そうでしたか」

「そんな、どうして」

「……ウルツフツフ。何だか知らねえがそいつの言う通りだ。冥土の土産に教えといてやる。お前達の技はキュアデコルを浄化する

んだろ？だが、この青っ鼻はキュアデコルで作ったもんじゃねえ！」
即ち、プリキュアが必殺技をぶつけようが無意味とオオカミもどきは人を指差して嬉しそうに言い放った。それを耳にするやハッピーは嘆いた。

「そんなのどうしたら良いの!? キャンディ!!」

「俺、キャンディじゃねえし」

「あつ、そうだった・・・! ごめん」

「ハッピー、キャンディは——」

「行けえ! アカンベエ!」

「あ! 来るぞ!」

青っ鼻アカンベエがこちら側に対して口から何かの物体を吐き出してくる。球体のそれは複数、地面を弾んで転がっていくと俺達に対して襲い掛かった。間一髪、我ながら見事に紙一重でかわす。

「ええつ、出られないよー?!」

「何なんこのカプセルう?!」

「どうしましょう・・・!」

一方、ビューティを除いたプリキュア4人は得たいの知れない透明なカプセルへ完璧に閉じ込められてしまった。

「どんどん行けえ、アカンベエ!」

「っ灰谷君!」

「真澄君!!」

「真澄っ!!」

4人のくぐもった叫びを背にして、アカンベエの追撃に動けないまま思わず身を屈める。咄嗟に間に立ったビューティが盾になってカプセルを弾き飛ばす。

「このままではちが明きません、せめて動きを止めないと・・・!」
彼女は攻撃をかわし続け、自らのスマイルパクトへと力を集中させる。敵の攻撃が止んだ隙に近くの木に身を寄せ、そこから続きを窺う。

「プリキュア・ビューティブリザード!!」

ビューティが繰り出す必殺技、強烈な冷気を帯びた極寒の猛吹雪

だった。

「馬鹿め、効かねえんだよっ」

「はあああ!!」

鼻で笑うオオカミもどき、しかしビューティは技の軌道を操ってアカンベエの足下を凍りつかせるという気転を効かせた。アカンベエは足止め、が、体力を使い果たしたらしいビューティは力無く膝から崩れる。

「ウルッフッフッフー! いい様だなプリキュア。・・・止めだ!」

「プリキュア!」

「——ん?・・・小僧。今の内にさつきと逃げた方が良いぜ? プリキュアはもう動けねえ。詰まり、お前を守ってもくれないんだぜ」

声をあげた俺に気付いてオオカミもどきが静かに笑う。と、一転して口をぽかんとさせてじつとこっちを見据える。

「そーいや、お前どうして動けるんだ? このバッドエンド空間じゃ、どいつもバッドエナジーを発してぶっ倒れるつてのによ。むう・・・こいつあ妙だぜ」

「そう言えば——」

オオカミもどきの突然の疑問にビューティが呟いた。そんなこと言われたって知るもんか、まあ確かにそう言われりやそうなのかも知れないけど。・・・クーラーラー! あ、何か降ってきたぞ。

「キャンディ! どうしたら、あのアカンベエを倒せるの?」

「それが解らんから打つ手が無いんや!」

「キャンディ!」

「・・・知らないクルウ。ごめんクル」

打開策を求めたプリキュアは漸く駆け付けたキャンディへ集中する。一方、キャンディは申し訳なきように答えて下を俯き、そこにオオカミもどきの独特の笑い声加わる。

「ウルッフッフッフツツ・・・アツハツハツハ! やっぱりお前は役立たずだなあ!——おまけに間抜けで、足手まといだ。・・・この、役立たずめ」

いたぶり続けた末にそいつは最後にそう吐き捨てる。執拗な言葉

の数々にきつとキャンディは耐えきれない。

「お黙りなさいッ!!」

それはビューティの怒りに満ちた一喝だった。普段から落ち着き払った彼女からはとても想像が出来ない迫力ある声。

「どんな時でも、キャンディは私達の為に一生懸命です!・・・仲間の為に一生懸命になる。これ以上、大切な事はありません!!——キャンディはずっと1人で悩んでいたんです。どうしたら私達の役に立てるか、仲間に入れるかを」

仲間達は初めてキャンディが抱えていた悩みを打ち明けられた。

「ウルツフツフツ、そんな役立たずを庇って一体何の徳があるんだよ」

オオカミもどきは尚も不快な笑みを止めない。が、そこでハッピー達プリキュアは声高に否定した。

「損とか得とかじゃない!私はキャンディと一緒に居るだけでウルトラハッピーになれるの!」

「明るくて元気なキャンディがウチは大好きなんや!」

「一生懸命なキャンディの事を悪く言わないで!」

「キャンディが居て初めて私達は一つになれる!キャンディが居なきゃ始まらない!」

「キャンディを傷つけるのは、絶対に——」

『許さないッ!!』

共に居る事が、側に居る事が幸せであると。周りを照らす明るさ、一生懸命さを持っていて彼女達自身を結び付けたという存在はその本人が思っていた以上にそれ程までに重要だったらしい。目には見えない力が沸き起こり、プリキュア達は自らを閉じ込めるカプセルを粉々にした。それ程か敵を勢いよく吹き飛ばした。

「——キャンディも、プリキュアの力になりたいクルー!」

そんな時、キャンディが自らの力でアイテムを生み出した。プリキュアはその新しいキュアデコルを手に入れ、迷わず各々が自分のスマイルパクトにセットしていく。ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの頭に眩しい輝きを放つ冠が備わり、5人は声を揃えて力強く叫ぶ。

『プリキュア・レインボーヒーリング!!』』

虹色の輝きに包まれたアカンベエは見る間に浄化されていった。個々の力が及ばなかった相手を合体技によって消し去る。プリキュアへの新しい力——それをもたらしたキャンディでさえ今度の事は不思議だったらしく、厳密には何が起きたのかは誰にも解らなかった。一先ずは一件落着、か。夕方の帰り道は実に穏やかだった。

「不思議と言えば、真澄。ほんまや、あんた何でバッドエンドにならないのやろ?」

「うーむ、確かに謎だね」

黄瀬がそれらしく腕組みして難しい顔をする。だから、聞きたいのはこっちの方だって。いや、やっぱり特に知りたいとは思わないけど。

「青っ鼻」のことを星空さん達に伝えてくれて。キャンディが」

「そうだったんだ。ありがとね、真澄」

「うんうん、本当にありがとう!」

結局は無駄足になったから意味は無かったろうけどそこはこれ以上、余り考えない事にしようと思う。

「修学旅行、楽しみクルウ♪」

「大変な目に遇った割には切り替わり早いな、お前」

「真澄も一緒に行こうクル」

「行かないよ」

その時、ぽかんとするキャンディや5人の視線を感じても一切無視して帰り道を歩き続けた。

非常にゆったりした雲の流れに視線を向ける内に欠伸が漏れる。ふと外の風にあたりたくて訪れたそこが物静かで丁度良く、放課後の人気が無いこの屋上は他に誰も居ない。ところが、誰かがやって来るのに気が付いて折角の独りぼっちは残念な事にここで終わりを告げる。それでも、あえて無視しようとするのはみだがしつこく呼び続けるその声が直ぐ側まで迫り、どうにもそういう訳にいかなくなった。「ちよつといいかな」

駄目って言ったところで多分無駄なんだろうから頷いた。彼女は静かに腰を下ろし、備え付けのベンチで隣に肩を並べ、そして特に前置きも無く話を切り出した。

「真澄君。修学旅行、行きたくないの？」

そう、行く気になんかならない。質問に頷くと星空さんは驚く様な表情に加えて不思議そうに首を傾げた。——クラスメートだのなんだので親交を深めようとか、あからさまな目的が見え隠れするこんな学校行事は出来ることなら避けたい。況してや修学旅行は集団行動に身を置く事が前提、その上寝食だつて共にする。しかも丸一日、逃げ出せる隙は微塵もない。こっちは普段から学校の中で周りと距離をおく事に専念し、それでいてクラスの中では目立たぬよう意識しているくらいなのに。

「昨日、キャンデイから聞いたよ。真澄君は修学旅行が楽しみじゃないの？」

「そうだよ。面倒だし、疲れる。正直どうでもいい」

「でも…皆で京都や大阪に行くんだよ、思い出が沢山できるし、きつと楽しいよ？」

ハッキリと認めた、が、それでも星空さんは食い下がる。いや、マジで行くつもり無いからな。余計なお世話なんだよなあ。

「何が思い出だ。———そんなの、俺には………」

「一緒に旅行して色んな事して、みんな笑顔でウルトラハッピー！真澄君も行こうよ」

「いや、意味わかんないし。はああ、どうしろつつうんだ」

「そうだ。真澄君、もう買った？」

「・・・はっ。」

「ほら、お菓子。修学旅行に持っていく。用意した？」

急に話を変えてくる、と。ええっと、それって確か1人500円まで——って、だから修学旅行の事なんてどうでもいいつつつてんに。

「まだ・・・」

「そうなの？・・・よし、それじゃあ一緒に買いに行こう」

「いや、何でそうなるんだよ」

「あー、おったおった！みゆき・・・と真澄」

そこにやって来た日野達は星空さんを探しに来た様子。でもって、ここから話は勝手に進んで例の駄菓子屋へ行く事になった。待てよ、こんなの理不尽じゃないか？

「何にするか決めた？」

「うーんとねえ。私は・・・これ！」

「おー、それええやん」

「あかねちゃんは何にしたの？」

「ウチはこれ」

「なおちゃん、どれにするか決めた？」

「うん・・・へえ、やよいちゃんはそれかあ。あ、れいかも決めたの？」

「はい。私はこれを」

5人はあれこれと悩みながら、思い思いに棚からお菓子を手に取る。こういう時、女って買い物が長くなるよなあとか考えていると――

「二「はい、どーぞ」」

「・・・いやいや、何でそうなるかな。ちげーよ」

「え、これじゃ嫌だ？違うのにする？」

「あーもうー！」

そうじゃないだろーがっ。種類が気に食わないとかでなくて！何でお前らが俺が持っていく分の菓子を決めちゃうんだよ！

「待てよ、いや、そうじゃない。・・・だーかーら、行く気もねえ修学旅行の為に買う気は――」

「やっぱ、ポテチは外せんやろ」

「チョコレートも忘れないでね。甘いのも欲しいし」

「皆でさ、分けられるのが良いね」

「れいかちゃん、それ何？」

「酔昆布です」

うわー、渋いねえ……じゃねーよ!!こいつら、自分の好み押し付けようとしてないか?さては人に買わせてから寄越せとか言う気なんだろ。俺の言葉に日野と緑川が観念して白状した。

「……アハハハハ、解った?」

「ふう、もういい。じゃあな、俺は帰る」

「待って!——真澄君がどうして修学旅行に行きたくないのか、それは解らないけど……」

背中越しに星空さんは喋り続けた。少しずつ、ゆっくり。足を止め、彼女の声に耳を傾ける。

「でも、きつとウルトラハッピーな事があるって思う。だから」

イマイチよく解らない曖昧な表現、だがそれ以上に理解出来なかったのは星空さんそのもの。何故、そうまでしつこくするのかという事。ずっと考えてみたが夜になってもそれは解らなかった。……5人を振り切って帰宅した後、晩飯を食ってから何時もの様に湯船に浸かった。一旦頭の中を空っぽにしてからリビングでテレビを見ていと妹と母が話し始める。テーブルの上に置かれたお菓子に優輝の奴が目敏く気付いたらしい。

「それ、お兄ちゃんのなんだ」

「そう。修学旅行に持っていく奴だから」

「へえ。……え、すこんぶ?何これ」

あの後、見事に全部買わされたんだよなあ。//噛めば噛むほど味わい深いです。だとか言ってたっけ。

「必要な物は揃った?ちゃんと確認しておきなさいね」

「あー、ハイハイ」

……でもっていいよ、と言うべきか。修学旅行を明日に控えた前日の晩。寝る前になり、ボストンバッグの中身をチェックさせられ

た。替えの下着、学校指定のジャージだとか衣類を手渡され、渋々それらを詰め込んでいく。因みに、この瞬間も何とか行かないで済まないかと思っている。ダラダラ、時間をたっぷりと掛けながらしおりを片手にチェックリストと照らし合わせた。星空さん達が昨日作ったという冊子。黄瀬のイラストが踊るページを眺め、我に返って時計を見る。既に夜中の12時を過ぎていた。途中まで整えながら入れていた荷物の残りは適当に放り込む。最後に土産代やらに使う「お小遣い」が入った財布をしまい、バッグのファスナーを閉めた。

「まだやってたの。明日早いんだから、もう寝なさい」

母さんが部屋のドアから漏れる灯りに気付いて覗きに来たのでさっさと寝る体勢に入る。

「おやすみ」

「おやすみなさい。——真澄」

「んー」

「楽しんできなさいね。中学校生活で唯一の二泊三日の旅行なんだから」

それを言ってくれるな、母よ。余計プレッシャーに感じる。何せ、本音じゃあ行きたくないのだから。

「向こうでたくさん思い出作ってきなさいね」

最後に一言、そう残して部屋を出ていった。思い出か、またそれかよ。星空さんも言ってたよな、しつこいくらい。

「だから一緒に行こう、私達と。友達みんなで、一緒に」

「灰谷君。当日、一緒に行動するグループを決めていますよね。宜しかったら、私達と是非」

「そうだね。真澄さえ良かったらだけどさ」

「あの、私達はその方が良いなあって・・・思ったりして」

「どうする。因みに大阪はウチの生まれ故郷やし、ホームグラウンドの案内やったらバッチリ任しときー」

・・・何を考えてるんだかさっぱり理解できない。どうするべきか

——いいや、もうどうにでもなつてしまえ。灯りを消してやけくそ気分のまま、布団を被つて次第に深い眠りについていった。そして、目を覚まして枕元の時計を見てとうとうその時が来たのだとより強く実感する。俺は起き上がり、着替えを済ませてポストンバッグを手に取りビングへ下つた。

「おはよう」

「おはよう。じゃあ、行くから」

「朝ごはんは」

「要らない。遅刻するから」

こんな時でさえ寝坊ギリギリ。玄関で靴を履き、集合場所となる学校の正門へ向けて走り出した。

続

11 修学旅行騒動記 — 京都 —

駅のホームから新幹線に乗り、暫くして車窓から視線だけを外すと周りを見た。この日の一部車両は貸し切り状態。ワイワイ、ガヤガヤ……多分、そこに居るクラスメートは普段にも増して騒がしい。今、俺達のはかの京都に向けて移動していた。今日、七色ヶ丘中学二年は晴れて待ちに待った二泊三日の修学旅行初日を迎えた。

「いっぱい写真撮ろうね!」

「うち抹茶ソフトが楽しみやあ!後、湯豆腐も食べたいわあ♪」

「食べよ食べよ!」

「私、舞妓さんと一緒に写真撮りたいな」

「撮ろう撮ろう!」

——で、この年一の学校行事に大盛り上がりしてる奴は隣にも。今日の旅行に対する願望を述べる日野や黄瀬のその言葉に星空さんはイチイチ大袈裟な反応をする。青木はそんな彼女の事をらしく窘め、緑川は例のチョコにコーティングされた細長いクッキー菓子を口へと挿し込んだ。そいつを一気に食い尽くした彼女は、今度は自分の鞆を漁り始めた。

「ありがとう!私もお菓子持ってきたから食べて♪……キャンデイ?!」

「美味しかったクル」

膝に乗せた鞆の中を覗き込み、絶叫する彼女。そこには膨れ上がった腹を満足そうに擦る現実とは思えない妖精の存在。キャンデイの奴、どうやら星空さんのお菓子を綺麗に全部平らげたんだな。

「——ニコッ。今日は私、怒らないもーん。何故かって?それは私がウルトラハッピーだからです!そして何故ウルトラハッピーかと言えば……これからスッゴク素敵な旅が始まるからです!!」
うわあ、スッゴいね。何か独りでに説明口調始めちゃったよ、怖い。星空さんの奴め、今日は何時にも増して鬱陶しい。

「星空さん。車内で騒がない」

「怒られてやんの」

そんな中で極めて冷静なのはこの俺くらいのもので。因みに周りの雰囲気染まらない自分が格好いいとかこれっぽっちも思っちゃいない。

「真澄君、今日一日よろしくね！これから楽しみだね！」

「全く懲りない奴だなあ。静かにしてろよ」

「たつくさん思いで作ろうね♪あーもう楽しみ〜！」

「聞けよ」

ハイハイいい加減落ち着けよ、そして絡むなよ。うわあ、しんどいつてそーゆーのは。はしゃぐなら1人でやれよ。どうせこんな旅行、疲れるだけで意味なんか無い。

「おー、高ーい！あれが『通天閣』かあ」

「ちげーよ」

「あれ、そうだったけ」

「京都タワーよ、みゆきさん」

そして到着。ここはまごうことなきかの京都。バカ騒ぎが続いた車内から降り立つと駅構内の喧騒に移り、新幹線を降りた俺達は駅前のバスロータリーへ荷物を引きずった。生徒全員が揃うのを見計らい、引率の先生達の口から注意事項などが告げられる。さて、こっから更にバスで団体行動に於ける最初の目的地へ向かう。周辺を見て回る時間が設けられるのだが、俺達が最初に訪れたのは――

「うわあ！金閣寺だあ！」

「お寺の正式な名前は鹿苑寺と言うんですよ」

京都旅行でも定番中の定番。池に佇む金箔に彩られたそれは余りに有名。因みに銀閣寺はどうかと言うと決して銀箔なんてことは無い。まあ常識だ。

「あれって本物の金やろ？・・・幾らかかったんかなあ」

「1985年から87年に掛けてのお色直しで約二十万枚の金箔を使用しました。かかった費用は、七億円以上です」

日野の実に率直であるそんな疑問にもまるでお手本の様な完璧な

答えが返ってくる。

「れいか、どんだけ予習してきたの！」

「・・・え。楽しみでしたから、つい」

緑川が思わず尋ねる。あの青木さえ浮かれさせるとは修学旅行、なんて恐ろしい子！・・・いや、ホントにその浮かれ具合は解らないね。

「あー！鯉が居る！」

「本当クルー？」

「うん、ほら——って！キャンディ?!」

「キャンディだけなんて、バスでお留守番なんて嫌クルー!!」

「修学旅行なんだからしようがないでしょ！」

「ちよつと、見られちゃうよ・・・！」

置いてきた筈の妖精が着いてきてしまったものだからみんな面食らった。バスで大人しくしている筈のキャンディは置いてけぼり・・・留守番が嫌だったらしい。心配そうな黄瀬の言葉を余所に大慌てでキャンディを隠そうとするが、しかしそれ故に周りの注目を集める事態が勃発する。

ドッポoooooooooooo!!

池を囲う柵から星空さんが身を乗り出す様にして落っこちる。・・・あーあ、やっちゃった。砂利で滑ったんだろうけど、本当にあつという間の出来事で誰も助けられなかった。

「いきますよー」

同行していたカメラマンが金閣寺をバッグにシャッターを切る。クラスの写真撮影——但し、それは決して残したくない思い出の一枚となった。

「・・・くそ。ずぶ濡れになっちゃった」

「そうだねえ。アハハハ」

池に落ちる寸前の僅かにあの瞬間、俺は星空さんの手を咄嗟に掴んでいた。その結果、2人仲良く鯉が泳ぐ中へ落っこちたという訳であ

る。何が悲しくて遙々やって来た修学旅行先でこんな目に遇うのか。水浸しの制服が乾ききるまでの間、俺も星空さんもジャージで今日一日を過ごす事になった。そして今は不動堂という場所の境内に居る。何でも皆しておみくじを引こうという流れになっているらしい。

「真澄はやらないの？」

「何でだよ。・・・て、お前らとは違う班だし」

「そう言えば。あれ、一緒の男子達は？」

そう、実を言えば星空さん達とは全く違う班だった。ギリギリになつて新幹線に飛び乗つたままでは良かったが、誰と当日に行動するとか全然決めていなかった為にその場で先生が無理やり男子の班の一つに俺を放り込んだのだ。

「ひよつとして、はぐれちゃつたの？」

「それは困りましたね」

「いや、向こうに居る」

「なーなー、おみくじやらんの？」

緑川や青木と話している所に日野が誘いにやつて来る。俺は一人でベンチに座り、同じ班の男子達が予定の確認をし合う姿を離れて眺めた。多分そのうち呼びに来るだろうと腰を落ち着ける。

「真澄もやらへん？」

「興味無い」

「なんでや、いけずう。やつたらええやん別に」

「何がいけずだよ。やだよ、どーでもいいんだよ」

「ははーん。さては自信ないんやな」

「は」

「やった！大吉！」

やり取りの真つ最中に黄瀬の奴が小さくガッツポーズする。続いて青木も同じく、で、緑川は中吉らしい。

「末吉って良いの？悪いの？どっちなん」

「微妙だな。中途半端っつーか、お前らしいよ」

「自分、何やねん偉そうに。あんたにウチの何が解るつちゅーねん。そんなに言うんやつたら真澄もやってみい！」

「やだね」

「ははーん。さ・て・は、これはウチに負けるんが怖いんやなー」

「こんな物に勝ち負けなんてねえし。負けるも何も」

「フーン」

「……」

無論、あからさまに見え透いたこの挑発に乗るのは本望では無かった。——ただ、とはいえ。取り敢えずこの関西弁女を黙らせるに足りるならばと俺は財布を取り出した。まあ、おみくじに払う額は大了なものにはならない訳だし。

「小吉」

「なぬっ」

「まー大したことないよな。でもこれは俺の勝ちで決まりだな？」末吉「さんよお」

「……うああ！何やねん！その顔止めえい！ちゅーか、こういうんは勝ちとか負けとかちやうしつ。大体、小吉で威張るのなんて自分アホちやうの」

お前が言い出したんだろうが。フン、まあアホでも何でも勝敗は決したのだ。因みに、小吉だから大した事は書いてなかった。強いて言うなら「誤解を招きやすい」ぐらいだろうか、何が招きやすいのかさっぱりだが。

「みゆきちゃんは？」

「フフフーン♪大吉に決まってるよ、大吉に〜」

星空さんは偉く自信があるらしい。小さく折り畳まれたそれを鼻歌交じりでニコニコしながら開いていく。自信満々、盛大かつ声高らかに結果発表である。

「ほらー見てー！ー！！」

〃大凶〃

それはそれは高く掲げたおみくじの紙、そこにはまごうことなき「大」と「凶」の二文字が。そうだ、これは「ダイキヨウ」だ。しっかし、なんてインパクトの強い字体なんだ。思わず息を飲む。

「足元、持ち物、食べ物注意……って不吉のオンパレードやなあ」
日野もそれらを読み上げる声が心なしかひきつる。成る程、これ全部がこれから自分の身に降り掛かると思えば決していい気はしない。「だって、修学旅行だし。スッゴい楽しみにしてたし。大吉意外、あり得ないし……」

大凶という一枚を引き当てた、それだけの事なのだが。別に信じなければそれでも良さそうだが、まあかと言ってあんなのは欲しくも無いけど。——しっかし、初めて見たぞこんな表情！うわ、この角度から見るとマジすげえ。自分の語彙力が足らなくてどうにもアレだが、うん。兎に角、星空さんの表情がそれはそれは凄いのだ。

「そう言えばみゆきちちゃん、新幹線で怒られてたよね」

「さつきは池に落ちたし……」

「正に大凶だな」

その時、この何とも言えない空気に仲間達は言葉を失う。普段からあんなだけハッピーを口にしていた彼女がよりにもよって大凶を引き当てたのだから皮肉としか言いようがない。——しかも。これ以降も星空さんを容赦ない不幸が襲い続けた。おみくじの結果に誰もが反応に困っている所へ、何処から途もなく聞こえるカラスの鳴き声。うんk……鳥のフンが星空さんの頭に目掛けて直撃する。境内に彼女の悲鳴がこだました。

「ここ、テレビでよく見るとこやー！」

「嵐山のシンボル、渡月橋です」

気を取り直して、続いて嵐山公園に辿り着いた俺達は自由に動く時間が与えられていた。そんな中、青木はバスガイドも顔負けなくらい聞く者を唸らせるトリビアの数々を披露する。もはや歩くガイドブックだ等と思った矢先、緑川が感心した様に代わりにそれを口にした。

「皆で写真撮ろうよー」

「又かよ、さつき撮ったろ」

「あれはクラスの集合写真だよ。私達だけで撮るんだよ、真澄君も来てね」

「うーん」

頭を綺麗にしてきた星空さんはそう言ってから通り掛かりのお婆さんに声を掛け、俺は渋々そこに加わる。

「」「ありがとうございます」「」

「ましたー」

「どれどれー・・・」

「あー、良いじゃん」

「何処が!?あかんやろ!」

よく見るとどうやら星空さんだけ半分見切れていたらしい。つーことで再度挑戦。次もとあるお爺さんが快く引き受けてくれたので難なく撮影完了。

「ブレてる」

「何でだよ。これデジカメだろ、補正があるだろ」

「また、失敗」

「どうしょ・・・」

「勿論、成功あるのみ!」

パシヤッ

「逆行」

パシヤッ

「照り返し」

パシヤッ

「おい、もう論外だろコレ」

パシヤッ

「いや、だから・・・」

パシヤッ

「あ、これ保存しとけよ。ウケるって」

「何で?!なぜ上手く撮れないのおおお?!」

京都・嵐山にまたまた星空さんの悲痛な叫びが木霊する。こっちが

聞きたいよ。どういう訳かさつきから一枚も上手くいかない。そうして終いには――

「あ、電池切れた」

「ふええーん……」

「な、なあ。ほら、あつちにカメラマンの人居るぞ。あの人に頼んで今度こそちゃんと撮ってもらってこいよ」

あまりに不憫だし、それくらい教えてやるか。てな訳で同行していたカメラマンの人を見掛けたので声を掛け、漸くまともな写真を撮影して貰った。因みに俺はずっと無表情で直立スタイルを貫いていたから一切ポーズの変更はない。

「土産物――チラツ」

「可愛いく!!」

猫の置物に女子らしく反応を示す日野と緑川の2人。手土産を購入する為に携帯を片手に一通り目を通し、続いて先程届いたメールをチェックしてスクロールしていく。

「買い物リストかよ」

それは妹から送られてきた。希望する修学旅行の土産をわざわざ羅列して送ってきやがった。……八ツ橋とかこの辺りはまだ理解できる。けど、十手〃って何だよ、このチョイスは謎だ。でもって、青木がその近くで何やら木刀らしきもんを見詰めている。

「大丈夫ですか!」

何やら近くの店員さんが慌てた様子で駆け付けてくる。こっちにでなく、どうやら星空さんの方へ向かっていく。彼女はこういう訳か頭を押さえてそこで踞っていた。一体何があったのか、いや、やつぱり別に知りたくないや。

「ほい」

「なに」

「何って、あんたの分でしょ。ん」

「ああ、どうも」

「立て替えた分、後でいいよ」

川縁の近くの店で緑川から抹茶ソフトを受け取った。ひよつとし

たら、未だに1人で行動している俺に対して気を回した可能性も……。ところで周りは女子ばかりが目立つのだが、今ここに居る男子は俺ぐらいじゃないかなこれ。そんな事を思いながら、既に日野達が座るベンチに何気に腰を落ち着けると自分の分を手にして戻ってきた星空さんがいそいそ近付いてきた。

「みんな先にずるーいい。私もー」

星空さんはその手の抹茶ソフトを頬張ろうとしていた。後ろから小さな子供達が走ってきて思い切りぶつかり、不意を突かれる。だが上手くバランスを取った星空さんは転びそうになるのを必死に我慢した。

「わ、わ、わッ!？」

「あ」

我慢して、そこで転びはしなかったのに。そいつは姿勢を保つことに集中し過ぎる余り、よりにもよって俺の方に向かって進み始めた。ドタドタ、そして迷わず真っ直ぐに突っ込んできやがった。ベチャツと冷たくて嫌な感触と共に視界が真っ暗になる。ああ、2人仲良く抹茶ソフトに顔を埋めた。待てよ、何か地味に星空さんの巻き添えを食ってないかさつきから。

「かぐや姫クルう!・・・みゆき、お菓子を持って参れクル」

——嵐山、竹林。周りは竹、竹、竹。確かに圧倒される風景が広がっていた。キャンディはすっかりその気で雅な雰囲気浸っている。因みに俺はやっぱり本来の班行動からはズレてしまい、偶々行き先が被っていた星空さん達の後を着いて歩く様な道程だった。

「キャンディ、私のお菓子食べちゃったじゃない」

「もつともつと持って来るクル」

「てゆうか、かぐや姫ってそんな話じゃないでしょ!」

「振り回すな——つだ?!」

何故だ、何故こんな事に。星空さんのブン回した紙袋は思い切りみぞおち辺りを捉える。

「おお・・・よくもッ」

「ヒイツ! まっ真澄くうん?!」

「大丈夫!?!」

「・・・殺す気か? オイツ」

「あ、大丈夫みたい」

「じゃねーよ!」

こっちはあからさまに痛がつてんのに気に掛けたのは紙袋の中身。ちよい待て、出来れば先にこっちを気にするべきだろうが。

パツカーン

「ヒィヒィ!!」

こけしの頭は真つ二つ、因みにこっちは幸い大した怪我は無かった。宿泊先の旅館に着く頃、この日の疲労感は一ピークを迎えていた。宿に着いたら割り当てられた部屋に各々向かう。今日一日、一緒に行動したとはおよそ言い難い男子グループと同じ部屋に足を運んだ。今更ながら急にこんな奴が来たら向こうもさぞかし迷惑だろうに。

「——あ」

「あ・・・ペコツ」

「・・・ペコツ」

ほーらね。部屋の外からはしやいでる様子が漏れ聞こえていたし、察しはついてたんだ。いぎ来てみるとやつぱりこうなった。男子が3人、盛り上がっている最中だったのに俺がこのこと現れたからシーンとしちやった。あー、申し訳ない。ぎこちなく会釈して、取り敢えず隅の方に荷物を置いた。ルームメイト達は直ぐに又、内輪での会話を再開する。さて、何とも気まずい空気だが慣れていかなばなるまい。

『いただきます!!』

少しして夕食時を迎え、皆これでもかと言うくらい旅館の食事を満喫した。一日歩き回ったのだから当然かも知れない。そして、うん、美味かった。——大浴場の露天風呂に浸かると全身からゆっくり

力が抜けていくのを実感し、今日あった事を振り返ってみてやはりと言うか星空さんの身の上に起きた数々の不幸ばかりが頭に浮かぶ。あんなに修学旅行楽しみにしていたのに本当に皮肉な奴。でもってインパクトある大凶の文字がふと蘇り、付随する様に星空さんのあの顔。

「そういや」

風呂上がり。一旦財布を取りに部屋に戻ってから旅館の自販機に立ち寄り、緑川に立て替えて貰った分をまだ返していなかった事に気付いた。こういうのはちゃんとしておくべきだし、女子の部屋は丁度ここから近い。

「灰谷君？」

「うあつ」

男子が女子の泊まる部屋の前を彷徨くという、高確率で誤解され兼ねない状況下に空気が張り詰める。やっぱり明日にしようか、なんて考えて引き返そうとしたら実にタイミング良く。着替えらしき物を手にとった風呂から出てきたからなんだろう、ほんのり頬を赤くしていた。青木は普段の長い黒髪を若干湿らせて自らの部屋に戻ろうと、その付近を彷徨く男子生徒を見つけて声を掛けた。何もしていないのに後ろから不意に名前を呼ばれ、思わず体が縮こまるそんな俺を彼女は真っ直ぐに見詰める。

「その、緑川に用が・・・あつて——」
「そうですか。どうぞ」

就寝時間まではまだ少しある。たった一人、男子がこのこと女子部屋に案内されるといふ状況だが決してやましい気持ちは微塵も無い。であるからして、何もコソコソしなくてもいいというのに何時も以上に自分でも声が何処かうわつっている事に気がつく。

「ふう。良いお湯でした」

「池の水、冷たかったです」

「お母さん、お土産喜んでくれると良いなあ」

「お母さん、怒らないと良いなあ」

星空さんがそう言いながら見詰めた先でこけしのつるつるつばげに

なつた頭が光を反射していた。青木がドライヤーを手に艶やかな髪を靡かせる間も不幸オーラを発して項垂れるその背中は何とも物悲しいというか不憫だった。黄瀬は花柄の櫛を手に眩くが、これがまた対照的でより落ち込み具合が目立つ。うーん、何からしくないな。

「大凶パワーって凄いかも——あいたつ」

「ため息なんかついたら、ハッピーが逃げてまうで！」

日野がいきなり枕を投げ付けた。星空さんは一瞬ハツとした顔を見せるとその枕を手にとって直ぐに投げ返す。ここから何処か見たことのあるベタな展開へと繋がっていく。修学旅行の夜、宿泊先の部屋で友達同士で枕投げとは正に絵に描いた様な光景だ。・・・星空さんの投げた枕を日野がサツと避ける。後ろには黄瀬が居て直撃すると二対二の構図が出来上がった。

「あーあ・・・」

「皆さん、そんなはしたない事は——」

こういう時、大体窘める役割を担うのは彼女。そして枕の一つが見事に青木の顔を捉えてしまう。偶然だったのは言うまでもなく、一体誰が投げたものかは判別し難い。

「ハッ！」

その目は戦うべき相手を定めた時のそれに違いないと感じた。ミイラ取りがミイラに、というこれまた何とも定番な。さーて、もうこうなつては秩序なんてものはない。無法地帯と化した一室で繰り広げられる戦いは果たして何を以て勝ちとし、又、負けとなるのか。——さてと。用はもう済んだんだし、さっさと部屋に戻るとしようつと。

「逃げるな真澄！」

「避けるな真澄い！」

「っおい、止めろつて」

「食らえ」

「マジかよっ」

ダメダメ、どいつもこいつもテンションがおかしい。次第にターゲットが切り替わつて集中砲火を受け、それらをかまし切ると日野達

が放った全部を回収してお返しする。・・・て、とうとう参加してるんですけど俺。

「ええいー!」

星空さんの一投が部屋に置かれた冷蔵庫の上のポットに命中した。そこに緑川がサッカーよろしく滑り込み、日野も得意のバレエを生かしたスライディングで捌き上げる。

「真澄!!」

「つてえい!?!」

俺は反射的にそいつをトスした。星空さん目掛けて落下していくポット、彼女への直撃が過るが上手くキャッチして事なきを――

バチャャー!!

蓋が開いて中身を盛大にぶちまける大惨事。又、こんな時に限って恐ろしい偶然が重なってしまうのだから。放心状態から暫しして我に返ると各部屋の様子を見回りに訪れた佐々木先生が佇んでいる。旅館が用意した浴衣姿に頭からポットの麦茶を被った先生は凄惨な相で全員を見据えた。直後、怒鳴り声と俺達の謝罪の声とが館内中に響き渡ったのは言うまでもない。

「灰谷君。とつくに就寝時間を過ぎてるから、早く自分の部屋に戻りなさいね」

「はい」

全く酷いとぼつちりだったなあ。あの一、もう少し話を短く済ませてくれればこんな時間にはならなかったんじゃない。先生が去った後、部屋はつい先程までと打って変わってすっかり静まり返っていた。日野は開口一番にお説教の長さをごちる。俺達は殆んど同時に正座を崩しながら自らの足をそつと揉みほぐした。

「ツイてないな今日は」

「あはは、だねく・・・」

俺が思わずそんな声を漏らすと溜め息混じりで星空さんは反応した。今日一日、嘘みたいな不運に遇い続けた彼女に対して今のは失言

だったか。口にしてから何となく罪悪感めいたものが過る。

「でもね、皆と一緒に楽しいよ」

星空さんはそう言つて笑顔を見せた。程無くしたら足の感覚を取り戻したので足早に自分の部屋に戻る。薄明かりの廊下から静かに襖を開けると同室のクラスメート達が丁度布団を敷くところだった。

「な、なあ。えつとき・・・あれ、名前なんて言つたっけ？」

「えーつと、はい・・・はい・・・ばら？」

「違うよ。灰谷」

「え、あ、うん」

「さつき先生に怒鳴られてたよな。何やらかしたんだよ」

いきなりそう尋ねられてつい曖昧に答えてしまう。眼鏡の彼はイマイチ要領を得ないと首を傾げる。

「女子の部屋に居たろ、そこで何してたんだよ」

「星空達と仲良いんだな。なあ、教えろよ」

お説教されている時に目の端で何人か覗きに來ていたのは気付いてた。・・・何つて、ただの枕投げだよ。

「なあ、好きな女子とか居る？」

消灯後、誰から途もなく始まったこの話題には無視を決め込んで布団を被る。本気でこんな質問に答える奴がいるのか。

「お前はどうかんだよ。・・・若林とか？」

「そりやお前だろ」

「ちげーよ。ほら、木角とか柏木とか。・・・まさか藤川？」

「尾ノ後とかな。金本・・・あ、岡田だな？そつちかよー」

「ハズレハズレ」

聞こえてくる名前はどれもピンと来ず、顔は一切浮かんでこなかった。なんだ、男子もこんな話題とかで盛り上がったりするんだな。この手のノリでする会話といえ大概「好きな人」についてとかで、しかもそういった話を始めるのはいつつも女子だとばかり思っていたのに。ドラマとかじゃ大体そうだって気がしていたが。

「じゃあ誰だよ。まさか、青木？」

あ、やつと知つてる名前が。いやいや、どうでも良いんだよ。全く、

煩くて眠れやしない。

「緑川、黄瀬、日野、星空——なあ、灰原は？」

「だから灰谷だよ。いい加減覚えろって」

布団に潜り込んだまま暫く目を閉じる。そうして寝たフリを続けているとその内に誰も何も言わなくなった。やがて周りから寝息が聞こえ始めると俺はさっきの星空さんの言葉をふと思い出した。あれは強がってたのか、それとも本気で今日の修学旅行を楽しんでいたのか。そして何時しか自分も深い眠りについていった。

二日目。かの清水寺を訪れた俺達はその舞台からの眺めを見詰めていた。ここでも遠巻きに青木のガイドを受けながら遠くの景色に目を止める。人間は覚悟を決める時の例えにやたらこの名前を出すのだが、間違いなく身投げしたら命はないからそういう事なんだろう、正しく後戻りは出来ない。目を細め、我ながらどうでもいいなど考えていると欠伸がこみ上げた。

「清水の舞台って傾いてるんだね」

「コケたら転げ落ちそうやなあ」

去り際に耳にした緑川達のこの何気ない言葉に漠然とフラグの様なものを感じた。そして同じくして今のをフリと捉えたかのように、そいつは鈍い音と共にバタバタと転がっていった。・・・ホントに期待を裏切らない奴だな。

「おーい、早くしろよー！」

「置いてくぞー」

それは同じ班のクラスメイト達の声だ。直ぐ側を躓いた星空さんが「清水の舞台」を転がり落ちていくというその有り様には流石に目を奪われる。間一髪で緑川に救い出されたところまでを見届けてから、そんな奴らを尻目に一足早く寺を後にした。この後は祇園の町を歩いて幾つか寄り道をするらしく、あわよくば通り掛かった舞妓と写真を撮るんだと1人はやけに息巻いてカメラを身構える。

「お前さ、言わせて貰うけど——影、薄いよなあ」

「え」

「・・・いやさ、なんつーか暗いし。もつとテンション上げてこーぜー」
彼は随分と馴れ馴れしい態度で人の肩に手を回すと力任せにバンバン叩いてきた。別に喧嘩売られていようが、馴れ馴れしかろうがまあ構わない。しかし、「テンション上げてこーぜ」なんて強要するのは二度と止めてくれ。いや、そっちはそっちで多分だけど何か気を遣ったのかも知れないとか一瞬でも考えは過つたけど、でもだからといってこの俺に何かを期待しても得られるものなんて無いんだからさ。

「真澄君」

「奇遇だねえ」

「ここで何してるの？」

同じ班の男子達が土産物らしき買い物を済ませる間に店の外をフラついていると例によって星空さん一行に出会した。後ろから声を掛けられて振り向くと星空さんと黄瀬が、後から残りの3人が追いついてくる。あれ、そういえばここは何処だ。

「多分そっちと同じ理由」

「え、ひよつとして舞妓さんを探してるの？」

「真澄君は見たの？舞妓さん」

「は？何それ」

「えっ、だから舞妓さんだよ。何処？」

「いや、知らない。何で聞くんだよ」

俺と彼女は互いに質問へ質問を返す無意味な会話をしてしまい、そこへ黄瀬が止めに入るように代わりに答える。

「私達はまだ会えてないんだ。えつと・・・」

「俺は見えない」

「なんだー、そっかー」

期待してたのにとでも言いたげな表情で口を尖らせる星空さん。なんだ、こいつらも記念写真目当てだったのか。

「何処に居るんやろ」

「さあ、好きナだけ撮るどすクルウ」

「少なくともお前じゃねえよ、絶対。滅茶苦茶な言葉づかいするなよ、それと早く星空さんのリュック戻れ」

確かにキャンデイがコスプレしたのを覗けば、そこには舞妓の“ま”の字も見当たらない。後さ、変身アイテムをそんな事に使っていないのか？

「舞妓さんは何時も居る訳じゃないからね」

「偶然会えることを祈るしかありません」

「運が良くないと駄目ってことかあ。——大凶の私が居ると、皆も舞妓さんに会えないかも・・・」

「みゆきってば、ここに来るまでにも色々大変やってん。お祓いとかした方がええよって言うたんやけど・・・」

聞かされるに清水寺での一件を経て犬に追い掛け回されたり溝に片足突っ込んだり、店の棚に並んだ“開運まんじゅう”が降り注いだりと最早ゴ○ゴムの仕業とか疑った方がいいかも知れないレベルで不幸続きらしい。星空さんはすっかり大凶の力を今日に引きずっていた。

「あれ何だ」

「何？ひよっとして舞妓さん・・・!？」

「今は舞妓から離れるよ。空だよ空！」

と、周りの様子に何か違和感めいたものを感じて立ち止まると日が傾くには余りに早い時間にも関わらず、既に空が夕焼けに染まっていた。この不自然さに星空さん達も真剣な面持ちで互いを見合うや何処かへと走り出した。

「プリキュア。何でここに居るオニ？」

「それはこっちの台詞やー！」

行き着いた先にはやっぱりなと言わざるを得ない奴が立ち塞がった。遠路遙々とまさか京都で遭遇するとはなあ。これって運命か？いやいや、ねえよな。これこそ偶然だよ偶然。トラ縞模様のパンツに金棒、角を生やした赤鬼。

「俺様は京都でこそ輝く男オニ。お前ら、運が悪かったオニ！」

「いや、意味解んねえし」

「キャンディは運が良いクル！」

「あのな、誰もお前に聞いてないぞ」

星空さんのリュックサックから妖精が再び顔を出す。共に、何やら紙切れらしきものがヒラヒラと飛んでいく。赤鬼の奴は馬鹿デカイ手でその小さな物を器用に拾い上げる。星空さんは何故か狼狽えた。

「・・・ダイキョウ？」

「ダイキョウ?・・・あー!」

「ツプウ!ぶっハハハ!!大凶オニいい!!」

そう、奴が拾った紙切れは星空さんが引き当ててしまった例の大凶おみくじ。———そういや来年の話をするとう鬼が笑うなんて言うけど、コイツの場合はどうやらプリキュアの癖に大凶引いたのがどうもツボつたらしい。おいおい、それよりその大凶を見た時の星空さんの顔の方が遥かに面白かつたぜ。地面に倒れ、もんどり打って腹を抱える敵を前に星空さん達は啞然。何ならドン引いてるんじゃないか。

「詰まり!俺様の『チャンス』オニ!・・・出でよ、アカンベエ!!」

勝手に納得してその手に青い玉を翳して叫ぶと禍々しいエネルギーを集めてお馴染みのアカンベエを生み出す。赤では無く、あの時の青っ鼻である。

「これは」

「大凶がアカンベエに?!」

「何かやだ・・・」

「うん、絶対に嫌だな」

「皆、行くよ!」

↑Ready?↓

『プリキュア・スマイルチャージ!!』

↑Go! GoGo Let, go!!↓

スマイルパクトを構えたのに合わせてこっちは自主避難する。・・・5人による一斉変身を完了し、彼女達は順に名乗ってポーズを決める。『五つの光が導く未来』という声を合わせてスマイルプリキュアは並び立った。アカンベエは直後にミサイルの様な一撃を放って攻撃を仕掛けてきたが、マーチはそれをジャンプして

無事に回避する。しかしミサイルが街灯に弾き飛ばされ、運悪くハッピーの下に落ちていく。煙の向こうから彼女の悲鳴が轟く。

「アツカンベー!」

「うわああ?!」

アカンベエは気を取られた隙を突いてピースに襲い掛かる。おみくじに見える武器の様な物を力一杯、頭上から振り下ろす。これをピースは咄嗟に受け止めたが、へし折れた棒が後方に飛ばされていくと――

「うわああああ!!」

「ハッピー!」

「ハツハツハツ!なんてツイてない奴オニ!!」

全くだ。星空さんはプリキュアに変身しても尚、不運に見舞われ続けている。ことごとく仲間が避けた攻撃の巻き添えを食らって地面に手を着く。

「プリキュア・サニーファイヤー!!」

サニーの放つ炎の球、必殺技ではあるがアカンベエには通用しなかった。そうだ、青い鼻だから通用しないのだ。

「プリキュア・レインボーヒーリング!クル!」

今キャンデイが言った必殺技ならアカンベエを倒す事が出来る訳である。ハッピー達は自身の変身アイテムを一斉に取り出す。・・・と、ここでもアクシデントが起きてしまう。ハッピーの手をすり抜けたそのスマイルパクトが真つ逆さまに側の川の中に消えていった。うわあ、いよいよ笑えないぞこれはよ。

「一気に決めるオニ!」

「つて、ヤバいだろ」

恐らくだがアカンベエの奴は現在、エネルギーを充填している真つ最中だ。スマイルパクトを探す間にアカンベエの右腕にはそれらしく怪しげな光が集まり出す。そして一瞬の内に起きた激しい爆風に思わず身を屈めた俺は、次に地面へ倒れるハッピー以外のプリキュア

達の姿を目にする。

「フハハハ！馬鹿な連中オニい！大凶の奴なんかと一緒にだから巻き添えを食うオニ」

「私の、私のせいで皆が・・・」

アカンベエは次の攻撃を始めようと右腕を巨大な鉄球に変化させて飛び上がる。透かさず川から離れたハッピーがそれをたった1人で受け止めた。

「皆ごめん！・・・ごめんね、私のせいで。私、皆と一緒に居てくれるから大凶でも楽しかったし、頑張れた。——でも、一緒に居たせいで皆まで大凶に巻き込んだじゃった！こんな事なら・・・」

「ハッピーー！」

そこまで続けるとマーチは脚に力を込めて立ち上がった。女はフラつきながら真っ直ぐにハッピーを見据える。

「巻き込まれてなんかいないよ。あたし達だって同じ、ハッピーと一緒にだから楽しいんだよ。一緒に頑張れるんだよ！」

「そうです。この程度のピンチ、大凶ではありません！」

「私達は何時だって」

「一緒にあったら大吉や!!」

俺は目の前の川に向かって走った。段差を飛び降りて水面に目を凝らし、気づくとハッピーの落としたスマイルパクトを探していた。そうして声はいつの間にか聞こえなくなり、やがて目の端に強い輝きを捉えて俺はそこに足早に駆け付ける。間違いなくそれはスマイルパクトだった。拾い上げたそれを握り締めて持ち主に大きく呼び掛ける。

「ハッピーー!!」

力一杯、スマイルパクトを彼女に向けて放り投げた。ハッピーはそれを確かに受け取ると再び仲間の下に加わり、アカンベエを前にキュアデコルをパクトにセットした。

「皆の力を合わせるクルーラー!!」

キャンディの力強い声にキュアデコルが五つ、5人のプリキュアの手に渡る。ハッピー達の新たな力がアカンベエに炸裂した。

『プリキュア・レインボーヒーリング!!』』

七色の強烈な光に呑み込まれ、アカンベエは邪悪な力諸とも消滅していく。・・・バッドエンド空間なる状態から解放された人々が続々と意識を取り戻す中、俺は星空さん達と共に祇園の町に居る。

「みゆきちゃん、清水寺で転ぶ話した途端に転ぶんだもんっ」

「みゆきさんが池に落ちた時、鯉が驚いて飛び上がってました」

「ジャージで集合写真で」

「ソフトクリームが顔にペチャツて」

「もう、皆ったら。・・・でも、それだけ運が悪いと返って笑うよね」

星空さん達はそんな事を言いながら笑った。こいつらにはもうとつくに思い出の一つらしい。どうやら星空さんの不幸もここまでみたいだ。

「舞妓さん!」

「私、大凶なのに。どうして」

「笑う門には福来る。笑っている人には幸運が訪れると言います」

「何時もみゆきちゃんが言ってる事じゃない」

「そっか」

彼女達は念願だった舞妓との記念撮影に漕ぎ着けた。撮影を引き受けてデジカメのシャッターを切った時、5人満面の笑みを広める。笑う門には福来る。・・・可笑しくもないのにどう笑えばいいんだ。

「さつきはありがとう」

「え?」

「ほら、スマイルパクト。探してくれたんだよね」

「別に——」

「行こう、真澄君」

一瞬だけ立ち止まり、彼女の呼び掛けに俺は再び歩き出す。

続

12 修学旅行騒動記 —大阪—

おみくじで運悪く引き当てた大凶による数々のアンラツキーを乗り越え、念願だった舞妓との記念撮影も済ませた星空さん達は満足そうだった。こうして修学旅行の二日目も終わりを迎えようとしており、平穏とまではいかないものの今日一日を無事に乗りきった様なそんな達成感めいたものを感じていた。・・・夕食後、この消灯時間までの間、他の生徒は互いの部屋を往き来したりしてあちこち忙しい。仲の良い友達同士で集まってバカ騒ぎしたり、ただ他愛もないお喋りに夢中になったりと様々だ。俺はその中を大浴場に向けて1人足を伸ばす。一応は旅館に泊まれるのも今夜一晩が最後だし、そう思うとゆつくり風呂に入りたいと考えて自分だけ周りとはタイムミングをずらす事を思いついていた。単独行動もこういう時であれば誰にも文句は言われなと解っていれば尚更だ。さつきは同じ班のクラスメート達に嫌味を言われてしまった。

「ふう・・・」

脱衣所に入って着ていたジャージと下着を詰め込み、旅館のタオルをぶら下げて引戸を開ける。温かい湯気が立ち込める風呂場は広々としていて誰も居ない。やはり時間をわざとずらしたのが良かったんだろう、そこには俺しかいない。

「——しっ！誰か来たぞ！」

「お、早速か？」

そんな声に気付いて、と周りを見てみるが人気は無い筈だ。無視してシャワーを浴びながら先ず旅館のシャンプーを手早く泡立てて髪の毛を洗った。

「どうだ、見えるか？」

「イマイチ。ってか押すな」

次にボディソープで体を洗い始めるとどうにも何処からか視線を感じて気掛かりだった。まさか誰かが居るのだろうか・・・む。やはり何か居るな。

(何なんだ)

備え付けられた鏡にチラリと映った人影に気付いた俺は手で曇り
を取って目を凝らす。確かにそこには別の存在が隠れていた。一体
どういうつもりなのかさっぱりだが特に気にする必要もないと思い、
無視してそのまま外風呂に向かう。するとシャワーの陰から4人組
の男子達が姿を見せ、こちらに近付いてきた。

「ビビったー！んだよもう」

「なーんだ灰谷じゃん」

「隠れて損したー」

「・・・は」

彼らは同じ班のメンバーだった。露天風呂に浸かりながら夜空を
眺めていたところへ声をあげてやって来ると隣に腰を下ろして肩を
並べる。

「俺、てつきり女子が来たもんだとぼっかかりさー」

「・・・女子?」

「いやーまさか君までお仲間に加わるとは思ってたぜ」

そう言いながら1人は手を回して馴れ馴れしく俺の肩に手を置く。
この時、こいつらが何を言っているのかさっぱりだったが後でとんで
もない事が解ったのである。——妙にフレンドリーなところ悪い
けどな。こちとら「ぼっち」でのんびり風呂に浸かりたかったんだ
けど台無しだ。

「いやさ、誘うとは思っただけどいつの間にか居なくなってるしさ」

「あ・・・そう」

「なあ、もうそろそろじゃん?」

「だな。多分・・・お!」

「どうした?」

「来たぞー!」

こつちが全く意味を理解できないまま彼らはソワソワしながら何
かを待っていた。そして遂にそれが訪れたのか途端にテンションが
上がる中、1人がダダダと走ってきて合図を送った。どうやらそれに
巻き込まれた俺は男子達に連れていかれて露天風呂の大きな岩場に
身を潜める羽目になる。

「来るぞ——来た！」

「マジかよ」

「ホントに?!」

「お前ら静かにしろ、気付かれるだろうっ」

間も無くして数人の楽しげな声が出てくるのがハッキリと解り、何処か不安を感じながら恐る恐る顔を出す。自分の目を疑わざるを得ない衝撃の光景を目の当たりにした。余りに突然のことで思考が追いつかないまでも目の前にあるものが何かということだけは瞬時に理解する。

「お風呂く気持ちー！」

「んああああ・・・！ええお湯やー」

紛れも無く星空さんがそこに居る。彼女の声、続けてもしかしくなくてもこの関西弁は日野に間違いない。一体何がどうなっているのか、しかも彼女達は裸だった。これが何を意味しているのか暫く整理する時間が欲しい。

「誰が来たんだ？」

「えつと。星空と日野——あ、黄瀬も見えた」

「あ、青木は？」

「緑川居たぞ」

そうだ。4人は今、直ぐそこに見える女子生徒の裸を見るために必死に頭だけを岩場から出たり引っ込めたりして覗いている。俺はこの集団に混じって星空さん達と同じ風呂に入っているのだ。けどそんな馬鹿なことがあるか？ここは先ず、男湯の筈だぞ。

「こ、ここって女湯？」

「どうした、もうちよつとそっち寄ってくれよ」

「い、いや。あれ、何で？」

「は、何言ってるの？ここは“今は”女湯だよ」

“その言葉”に引っ掛かりを覚える。即ち、現在は女湯で間違いないのである。詰まりはこの旅館では時間帯によって男女の区切りを切り換えていた。掃除なんかの関係なのかどうかは知らないが、兎に角このルールについて先生が注意事項として食事前に話をしてい

たのをふと俺は思い出した。

「旅館のお風呂って広いから泳ぎたくなっちゃう」

そんな声が聞こえてきて遠い彼方から意識が戻ってくる気がした。黄瀬はそう言って背泳ぎでも始める様な仕草をする。

「くらくら、駄目だよー」

「ふふふ。やよいさんたら」

すっかり脱力した緑川と微笑ましくする青木。・・・決して覗いている訳ではなく、岩場の陰に縮こまって多分そんな感じなんだろうと想像しながら内心ひやひやしながら焦った。こんな所を見つかれば悪ふざけなどでは済まされないのでから。一方、グループの男子どもはこの馬鹿げた遊びを止める気は無い様で、代わる代わる覗き込んで勝手に盛り上がっている。

「背中ぐらいいしか見えないな」

「いや、さつき少しだけど胸見えたぞ」

「マジ?!」

無論、ここで大声を出せばとんでもない騒ぎになることは自覚した上で高いテンションに比例して音量は落としている。まさか男子に覗かれているとは知らず、星空さん達は心行くまで露天風呂を堪能しているらしい。

「キャンデイも連れてくれば良かったなあ?」

「しゃーないわ。よっぽど疲れたんか先に寝てしまったしな」

「本当、楽しかったね。途中、みゆきちちゃんが色々大変だったけど・・・」

「もうあんな風に転んだり落ちたり、しないでよね?」

「大した怪我もなくして何よりでした」

「アハハハ、全くだね!」

今日あったことを振り返っている様子だった。誰かが「キャンデイ」の名前に反応を示したが仲間は無視した。

「誰が一番胸あるのかな」

「どーだろ、あんまし解んなくない?」

「なあ、灰谷はどう思う?」

本気なのか、何考えてるんだ。待てよ、わざわざ女湯に潜り込んで

まで覗きをやるくらいだもんな。ってか俺にそんな質問するな、知るもんか。

「さあ・・・」

「何だよ、お前興味ないの?」

「そーだよ。なんかいつつも星空達と一緒にじゃん? てつきりそーゆーことかってさ・・・」

何がだ、そーゆーことかとは。 “何時も一緒”か、そんな風に周りから見られていたのか。まあ確かに何かと一緒にになることが多々あるよな。でもそれらは意図せずしてというか不可抗力というべきか。望んでそうなった訳ではない筈だ。

「おい、今度は俺に交代しろよ」

「わっバカ! 止めろッ」

健全な男子中学生が決してしていないことではないにしろ、いわゆる思春期とされる多感な時期において異性に対して興味を持つのは決して悪いことではない。が、これは常識の範疇を大きく逸脱する行為に他ならない。多分、いや絶対止めてやるべきかかも知れない。そんな風に迷ってみるのだが如何せん冷静な思考を妨げる不毛な争いを見て、俺は巻き込まれまいとして何とかして距離を取ろうとした。だが1人がバランスを崩してもう1人に寄り掛かり、つい物音をたててしまう。

「どうかした?」

「・・・何でもない」

間一髪、と秤に息を押し殺して上手く誤魔化せるかに思われた。1人が気を抜いた瞬間、こともあろうにくしゃみをしてしまうまでは。

「誰か居るの?」

「みゆき?」

星空さんと日野がゆつくりと近付いてくるのが声で解り、とうとうお陀仏かと覚悟を決める。

「ニヤ〜オ・・・」

その時、1人が鼻先を摘まんでベタな手に打って出た。もうこれしかない追い詰められて渾身の猫の鳴きマネを彼は繰り出した。

「なんだ、猫か」

その一言に今度こそと秤に皆が安堵しながら声無き声で喜びを分かち合う。そろそろ退散しよう、別の1人が言い出したのを機に仲間が賛成する。もちろんこの俺もであった。しかし星空さん達が長風呂をすればする程、待っていては先に来ていたこちらがそのままでは逆上せてしまう可能性がある。ではどうやって脱出するのか、皆の視線は一カ所に集まった。

「静かに行くぞ」

1人、また1人と竹垣によじ登る事で隣の男湯に避難するというもの。取りあえずそつちで時間を潰してから着替えを取りに行くという話になって、1人が登るのを後の仲間を支える形になった。男湯にも誰も居ない事を確かめてから柵の向こうに降り立ち、次に降りてくる相手を支える。

「・・・ようし、後ちよつとだッ」

「頑張れ！」

4人目を支えるのが俺であり、詰まりは自分こそ一番最後になってしまったので彼にもさつきと登りきって貰いたかった。しかし、支えていた足がまさにこの顔面を捉えたことによって俺の死亡フラグとやらは成立してしまう。——ザッパーン！盛大に尻餅を着いて飛沫を上げながら顔や尻の痛みよりも勝るものがあつた。

「え・・・」

放心状態で立ち竦む姿に目を奪われて立ち上がる事が出来ない。彼女はタオルで肝心な所を隠してはいたが紛れもない裸であり、女湯である筈がなんと男子が堂々と紛れ込んでいることに愕然としていた。そこに日野や黄瀬が加わり、ギョツとした様な面食らった様な表情で硬直した彼女らはどうとう一斉に悲鳴を上げる。修学旅行の平穏な一夜を覆す騒動に発展するのは言うまでもなかった。

翌日は旅館からバスに揺られて最終日の目的地である大阪に向かう事になっていた。起き抜けにトイレと洗顔、歯磨きを済ませて一通りの身支度も整え、朝食の為に広間に行くと何とも言い難いただなら

ぬ空気を感じた。俺が顔を見せた途端にある者はヒソヒソと耳打ちし、また別の誰かはこちらを睨み付けるとそんな感じ。言うなれば軽蔑だとか好奇の目とか、主に異性からの視線が強く突き刺さっていて今朝から気が重たい。それもその筈、昨夜は大騒動だったからな。あの叫びを聞き付けた旅館の従業員だとか先生達が一斉に集まり、そこに野次馬と稱に生徒まで来て文字通りの一騒動だった。女湯に忍び込んだ前代未聞の問題児、はたまた女子の裸を覗いた変態。俺はあつという間に二学年の間で噂になるだけの存在となってしまうのだ。擦れ違った見知らぬ女子の口から「キモい」の一言を浴びせられたのは流石に堪えるなあ。

「どうしてこんなことをしたの？」

担任にそう聞かれた時、どう答えるべきか迷いがあつた。結論、間違えて入ってしまった事が事実である。しかしあの状況を最後まで説明してみたところでどうなるものでもないと思つた。不可抗力でも覗き見に加わつたことは紛れもない。

「すみませんでした」

だからか、そう謝ることが自然に出来ていた。何をどう説明したところで言い訳にしかならないのなら、星空さん達が傷ついたのだとすれば。謝ることが一番であると思えたからだろう。

「もういいか・・・どうだつて」

七色ヶ丘中学の生徒を乗せたバスはやがて目的地に辿り着く。——大阪城。戦国時代に築かれた立派な城は1630年代頃に再建されて、今もこうして観光に訪れる者を圧倒している。さて、ここが最終日一発目の目的地。この辺り一帯は「大阪城公園」として整備され、沢山の観光客で賑わっていた。

「星空さん」

「つま、真澄君」

「・・・ゴメン」

彼女の背中を見てそれだけは言っておこうと思ひ、声を掛けると彼

女はすっかり怯えた様子だった。無理もない、裸を見られた筈の相手とまともに口が利けるだろうか。ただそれだけを伝えて足早に遠ざかっていった俺は自分の班に加わって大阪城を目指した。道中、1人が例の一件について如何にも申し訳なきそうに手を合わせてくる。要するにこの俺を1人にして逃げた事に対しての罪悪感を抱いているという話なら昨日も聞いたし、だから今の話も殆どを聞き流した。すると他の仲間もつられる様に謝ってきたがやはりそれも半分上の空だ。天守閣に到達したところでポケットに突っ込んでいた「旅のしおり」を取り出す。今日一日の行動スケジュールとして各目的地をそこに記入してある。大阪城から中之島、天王寺動物園という流れになっている。

「この大阪城は1583年、豊臣秀吉によって築城されました。沢山のお金が使われとても豪華なお城だったそうです」

そんな淀みない青木のガイドを背に何となく景色を眺めていた俺は同じ班の男子が近くに見当たらないことに気付いた。辺りを探してみるもこの場に既に居ないのか、はたまた他の観光客に紛れてしまっているかで目視では見つけられそうにない。と、こんなタイミンで出会い頭に気不味い相手がやって来た。

「真澄君……、こんなところで何を——」

「いや、同じ班の奴ら探してて……」

「実は私達もあかねちゃん達探してて」

当然と言えば当然だが星空さんは普段と違って目も合わさないし、黄瀬はあからさまに怯えた素振りでそんな友達の中で背中身を隠している。そしてこの俺だって彼女達を見ることであの光景が蘇りそうになって振り払うのに必死だ。不幸中の幸いは肝心な部分が記憶にないことぐらいか。

「みゆきがちゃんと着いていかないから迷子になっちゃったクルう」

「キャンデイがお洒落したいって言うからでしょー」

ソフトクリームを思わせるとぐる巻きのキャンデイが星空さんとの言い合いを始めた様に、彼女達も仲間とはぐれて迷子になってい

た。俺達は各々の班のメンバーを探して共に行動を余儀無くされてしまった。

「嬢ちゃんらどっから来たん？」

そんなこてこての関西弁と共に現れたのはパンチパーマに虎の顔がプリントされたTシャツと金のド派手なネックレスをした見知らぬお婆さん。余りにも自然な流れだった為か断る暇もなくバツグから取り出した何かを気付くと握らされていた。

「アメちゃんあげるさかいに持っていき」

「うまいでえ」

小さな包みの飴玉を前にしてこれが噂に聞く「大阪あるある」なのだ納得しているとお婆ちゃん3人組はあつという間に去っている。大阪のお婆ちゃんは常にバツク等に大量の飴玉なんかを常備しているとされていたが本当だったとはな。まさか自分がこれを体験することになるとは、等と唾然とすると黄瀬がぼそりと呟いた。

「勇者やよいは飴を手に入れた」

「え？」

「ロールプレイングゲームみたい！」

通称RPGと呼ばれるジャンルのゲームの事だが、彼女は大阪駅周辺の地図を広げるとテンション高く張り切り出す。

「町の人から情報やアイテムを貰ってMAP片手に旅するの！——そして、我々勇者が迷子のお姫様達をお助けするのだー!!」

妙なスイッチが入ってしまったのは見るに明らかだったがこの謎テンションには星空さんでさえ着いていけない様子だ。先行き不安しかないのだが黄瀬の奴は現実逃避のつもりなのか迷子の立場をすり替えてやしないか。そういう訳で我々は「勇者やよい」をリーダーにこの大阪という未知の領域に挑むことになる。さて、無理ゲー感が半端じゃないがどう攻略したものか。

「取りあえず、こっちもスケジュール通りに行動していれば間違いないか」

「ハイ、チーズ！」

よもや昨日の今日で星空さん達と大阪を巡ることになろうとは。

しかもこいつら、呑気にあちこち写真を撮ったりして全く危機感がない。

「ねえねえ、真澄君も写真撮ろうよ」

「お前な・・・」

「さあさあ、勇者真澄よ。次はあっちに向かおうぞ！」

「誰が勇者だよ、寝ぼけんな」

「あれ、勇者じゃなくて魔法使いが良かった？」

「ちげーよ、何でだよ」

「じゃあ吟遊詩人とか盗賊でも良いよ」

「ポジシヨンの話なんかしてねーよ！」

こういう黄瀬を相手に話していると何故か妹を思い出す。何となく波長というか重なるところがあるんだろうか。

「次の目的地は中之島って所だよ」

しおり片手にその名を口にする星空さんと自分のグループはどうやら次の目的地が同じらしい。大阪城を後にしたもののルートが解らず、地図とにらめっこをしていた彼女達の近くで俺は調べる為に携帯を取り出した。

「いやあー嬢ちゃんら、また会ってもうたな！」

「あ、さっきの飴の」

「おばさん達」

——次の目的地を目指す我々の前に現れたモンスター・・・級の迫力と勢いを持ったTHEE大阪のおばちゃんズしかもリターンズ。偶然の再会を皮切りに俺達は近くのうどん屋で昼食を共にして同じテーブルで各々が注文したうどんを啜った。関西特有の普段食べ慣れた味とは異なり、関東に比べてこちらでは汁が薄味である。新鮮でいて優しい甘さと厚揚げ、コシのあるうどんは想像した通り美味い。ため息混じりに星空さんと黄瀬も一杯を完食していた。

「ええお出汁やろ？」

「これでたったの、630万円やで！」

「ええええ?!」

何でやねん。これも又、教科書に載るくらいの見事なお手本と言わ

ざるを得ないお決まりのやり取りだ。何でも大阪人のかますボケの一つらしいが、恥ずかしいので突っ込みは心の中で済ませよう。星空さん達2人のリアクションを見ておばさん達は満足そうにゲラゲラ笑った。

「あんたら、中之島行くんやったら船がええで」

「船？」

思わず貴重な情報を入手したと黄瀬を筆頭に「勇者パーティー」は喜び勇んで移動再開である。大阪の水上バスであるアクアライナーに飛び乗り、大阪市内を流れる川に沿って行くと中之島に辿り着けるらしい。大阪府大阪市北区の町、立ち並ぶビル等の町並みを眺めつつ食休みを決め込んだ。

「あんたら修学旅行なん？」

「元気でええな。アメちゃんあげようか？」

「ありがとうございます！」

「アイテム貰ってパワーアップ♪」

直ぐ後ろの席に座っていた別のおばちゃんまでもがそれを差し出す姿に、最早こちらも何の疑念も抱かずに受け取る始末である。すっかり馴染んできたところで無事に目的地へ辿り着くや星空さん達は

「豚玉くださいーい！」

「なあ、こんなんで良いのか？さっきから飴玉貰うわうどん食ったばっかだわ……」

「まあまあ、折角の大阪観光なんだから。お好み焼きも食べちゃお？」

「お好み焼きなら日野の店で食えるだろーに」

「真澄君、生地混ぜた？」

「……今やってるよ」

本番大阪で食すお好み焼きもまた格別、言うところの場合か。注文してしまった以上はしっかりと食いきらねばなるまい。クエスト絶賛進行中の折、名物お好み焼きの為に商店街に面した飲食店にやって来た。

「めっちゃお腹いっぱい」

「めっちゃ美味しかったクルー」

「あかねちゃん家のも美味しいけど、やっぱり本場のお好み焼きは美味しいなあ」

「エセ関西弁止めろよ。・・・っく、しっかり食っちまったあ」

「あれもめっちゃ食べたいねんクルー！」

「だから不自然な関西弁止めろって。しかもまだ食うのかお前は」

お好み焼き屋の直ぐ目の前にはたこ焼き屋、キャンディの食欲も尽きないらしいがそろそろ次の目的地に向かうべきじゃないのか。

「——今は止めとこう」

「どうしてクル？」

「たこ焼きは後のお楽しみ。早く動物園に行って皆に会おう」

「よし、なら急ぐぞ」

「ところで真澄君の方は良いの？一緒のグループの人達も何処に居るか解らないんでしょう？」

そういえばそうだった。星空さんと黄瀬とついでにキャンディ、こいつらと共にここまで来たのもそれが目的の筈だ。再びしおりを手に取り、次の目的地を確認する。

「いやあー、嬢ちゃんらまた会うてもうたなー！」

「でっ、出たー」

もはや顔馴染みと化した3人組との再会に何処か納得さえする。二度あることは三度ある、である。

「お友達が嬢ちゃんらのこと探しとったで」

「ホントですか！」

どうやら日野達に出会したらしく、向こうもやはり後を追うようにスケジュール通りのルートを辿っているらしいと分かる。でもって、道中が同じであるとおばちゃん達が案内すると言い出した。・・・よもや、偶然とは恐ろしい。しかも星空さんの口から聞いた目的地が俺の旅のしおりに記した最後の目的地と一緒にだった。

「ありがとうございます」

「ええてええて。気にしんなや」

「あ、そうや。話題の『納豆餃子飴』さつき買うてん」

「ボクちゃんも遠慮せんと貰っていき」

「ど、どうも・・・」

初めに貰った可愛らしい包みとは異なり、透明のフィルムに包まれた茶色いそれはネーミングを聞いた途端に地雷臭プンプンなのが断るのも今更と感じてそいつを受け取った。おばちゃんズは三度、何処かへと去っていく。

「あれ何クルー?」

「通天閣!」

「京都タワーじゃないからな」

「っ解ってるよ!ハップププー」

「あの天辺に登ったらお姫様達も見つけられるかも!」

黄瀬の提案に納得して俺達は通天閣の展望エリアへ足を伸ばす事にした。一方、時を同じくして大阪の町中をクタクタになりながらはぐれた仲間を探す“お姫様達”とは別に遥々ここまで“箒”に跨がってひとつ飛びしてくる物好きな奴が居た。

大阪のシンボルとも言うべき通天閣タワーの五階に展望台フロアがあり、もっと上れば屋上フロアが存在する。ビリケン像を背にしてガラス張りの中に広がる町並みに目を凝らし、星空さん達は真剣にはぐれた仲間の姿を見つけようとしている。さて、今回の旅に於ける最大の目的を達成するべく2人は真剣だ。

「おい」

「どうかした?」

「空が——」

特に注視もせずただ景色や空を眺めていた俺はその空模様に違和感を覚えて星空さんに声を掛ける。だが、それ以上の異変に見舞われてどころでは無くなってしまう。足下からフロア全体が激しく揺れ始めたのだ。

「大丈夫!」

「一体何が起きたんだ?」

「これは、バットエンド王国の仕業クル!みゆき、変身クル!」

奇妙な空模様、周りにいた人々がただならぬ様子で倒れ込んでいるこの状況は正しく違いなかった。星空さんは黄瀬と共に変身アイテムを取り出して変身する。

↑Ready?↓

『プリキュア・スマイルチャージ!!』

↑Go! GoGo Let, go!!↓

眩い光に包まれていく2人の姿はやがて毎度のように見間違う変化を遂げる。キュアハッピーとキュアピース、今この場に居るプリキュアは彼女達だけだった。

「アツカンベエエエ!!」

何処からか響き渡る声と共に再び通天閣全体が傾いた。まともに立つてはいられない程の揺れに壁に手をつけて支えを得る。思うにこの通天閣そのものがまるで意思を持つように動いてはいないか。即ち俺達が居るこの場所そのものがアカンベエなのだ。だからなのか、町中のどこにもアカンベエの姿が見えないのは。アカンベエが動く度に足下は揺れて体は前後に傾く。これはいわばアカンベエの体内から覗く風景そのものであり、それが近づいたり離れたりするものも動いているからだ。

「うわぁ!」

「危ない!」

ガラスに頭から突っ込む寸前で引つ張られ事なきを得る。ハッピーとピースに引き戻されて元の位置に引き戻されると近くにあったビリケン像の台座辺りにしがみつく。

「大変クルう、キュアデコルの力を3人に届けるクル!」

「何それ?——兎に角やってみる!」

キャンディの言葉に引つ掛かりを感じ、ガラス張りに自ら近付いて地上を見た。そこには確かに変身した日野達らしき姿があった。

↑Let, go!ちようちよ!↓

ハッピーが自らのスマイルパクトにキュアデコルを追加した。す

ると真つ直ぐに一筋の光が地上へ向けて飛んでいく。放物線を描いて光を受け取った様子のキュアサニー、マーチ、ビューティは……ちようちよデコルというアイテムの力を受けて飛翔した。背中に光の羽根を備えて自由自在に空を飛ぶ。アカンベエはサニー達を追い掛けると、ヒラリヒラリ目の前を飛ぶ3人のプリキュアにまんまと翻弄される。高さ100m以上の巨体は動きが鈍い故に追い付かない。大阪の町並みの中をあちこち動き回る中、そいつの体内と化している展望台で振動に耐えながら様子を見守る。

「アカンベエ!!」

マーチを捕まえようと走り出したアカンベエはそれをかわされて思い切りズッコけた。当然、中でどういう事になっているかはお分かりだろう。空中に放り出された体は受け身も許されずにもろ叩き付けられた。……くそ、勘弁してくれよ。

「大丈夫、真澄君?!」

「……多分な。って、また動き出したぞ!」

単純な思考しか持たないアカンベエは馬鹿正直に目の前を飛び回る存在をただ追い掛け続ける。だが休む暇無く体力を消耗して遂にバテたのか漸く動きが止まるのを感じた。

「何か……臭い」

安堵する鼻先を悪臭が漂う。そう感じたと思えば、次に俺達は展望台フロアから空中高くに放り出される始末だった。さつきから色々展開が早すぎやしないか、頼むから一息入れさせろって。このまま地面に墜落――

「キャンディ!……と灰谷君。ご無事ですか?」

「なあ、もうちよつと穏便に助け出してくれないか」

俺はキャンディを抱えながらビューティに抱えられていた。ハッピーはサニーが、ピースはマーチが各々にキャッチしてくれたらしい。

「……なんや。納豆と餃子の臭いがするうツ」

「納豆と餃子。はっ、通りで何かくせーなと思った」

「アハハハハ……あれのせいかな」

「おい、マーチ。何かしたのかお前」

「何か、さつき変な飴玉を拾ってさ。それをアカンベエの口の中に投げ入れたんだ」

「これは納豆餃子飴・・・」

マーチが取り出した包みを受け取って鼻先に持つていくと中からほのかに香るニンク&納豆臭。多分これにやられてアカンベエの奴は俺達を吐き戻したんだな。助かったとはいえ複雑でしかねえ、しかも臭いが体に染み付いてしまったのか制服まで臭い。

「プリキュアめ。こないなったらこの町全部めちやくちやにしたんねんだわさ！」

「お前まで不自然な関西弁使うなよ」

今回アカンベエを操っていたのはマジヨリーナ。地上に下ろして貰い、ハッピー達はアカンベエを止めるべく最後の戦いに挑んだ。キャンディが生み出す五つのキュアデコル、それを受け取って自らのスマイルパクトに5人はセットする。

↑Let, go!!↓

誰が呼んだか煌めくプリンセスティアラを頭に飾り、そこへ更に小さな羽根が備わる。

『プリキュア・レインボーヒーリング!!』

重ね合わせた手を高く掲げ、天に向かって真っ直ぐ伸びていく七色の光の渦に青っ鼻のアカンベエを包み込む。塗料が剥がれていくかの様に消滅し、アカンベエは浄化されて通天閣は元の位置に収まった。やがてバッドエンド空間から解放された人々が目覚めて、大阪は元の活気を取り戻し始める。まさかあのタワーが独りで動き出して町中を暴れまわったことなんて初めから無かったかの様に。

「良かった。町の皆にスマイルが戻って」

グウウウ...

「お腹空いたあ・・・！」

「そうだった！れいかちゃんの——」

「初たこ焼き！」

「そうでした！」

星空さん達は目の前の店で人数分のたこ焼きを注文した。あの時、彼女が我慢したのは5人揃って食べる約束をしていたからなのだよ。驚いたことに青木はこれまで一度もたこ焼きをというものを食べた経験が無かったらしく、修学旅行でたこ焼きを買って皆で食べようという決まりだったらしい。・・・手の中の容器の上に六つ並んだ出来立てのたこ焼き、その上で揺らめく鰹節を見詰めて5人とキヤンデイは一つずつ仲良く分け合った。特に青木は感動した様子でその一口一口を味わっている様子だ。

「皆で食べると美味しいね」

「次は串カツ行くよー！」

ここまで昼飯も抜きだったらしく、緑川は人一倍の食欲旺盛を見せつける。

「おーい！良かったあ、見つかったんだね！」

「たこ焼き食べた？すつごく美味しいよ！」

同じクラスの別の班が通り掛かったらしく、星空さんは女子達とお喋りを始めた。一方、その中には例の同じ班の男子4人も居て、こちらを見つけると皆して駆け寄ってくる。

「何処行ってたんだよー！」

「ずっと探してたんだぞ？」

「お前、また1人だけ女子どもと一緒に居たのかよ」

そんなこんなで俺を探している間の道のりに何があつたかをとくと聞かされる道中の先に、皆で串カツ屋に寄ることになった。ソースの二度付けは禁止という決まり文句を日野の口から聞かされながら、座敷に腰を落ち着けて串に刺されたカツをたっぷりのソースの中に浸ける。と、それを一口噛って飲み込んだ俺は彼女に向かって話を切り出した。

「星空さん」

「え、何？」

「・・・その、昨日のことなんだけど」

聞きたくないかも知れないけれど、そんな前置きを挟んで意を決した。

「ホントに悪かったな。ただあれはわざとじゃなくてさ、何て言うか。間違っただ」

事の顛末を自分の口で正直に説明した。但し、他にも男子が居たとかその辺りはまたややこしくなりそうだから割愛したが。まあ、俺なりに一応は謝っておこうと考えてのことだ。別に許して貰おうだなんて思っていない。星空さんは俺の話聞いてきよんとした顔つきだった。が直ぐにこう返した。

「わかった。もういいよ、私気にしてないから」
「え」

「真澄君、私ね思うの。修学旅行の間、色んな事があつたでしょ。色んなところを見て回って、美味しいものを食べたりして。それに大凶引いてツイてなかったり——」

星空さんは目を見て真っ直ぐにそう話し続ける。周りの喧騒の中で俺達は互いに静かに向き合っていた。

「・・・でもね。それって全部ウルトラハッピーな思い出になるんだよ」
「思い出に？」

「そうだよ。だって後で楽しかったなとか辛かったなとか、きつといつか思い出したりするんだよ。それって素敵なことだって思うんだ」

星空さん曰くそういうことらしい。確かに何時かは笑い話にでもなつて懐かしむ時がくるのかも知れない。いまいちピンと来ないが、彼女はそう言いながら本当に笑顔だった。——二泊三日の修学旅行も終わりを迎え、帰りの新幹線の車内では一部旅疲れからか眠る者もいる。俺は紙袋の中にある幾つかの土産物を妹がメールで送りつけてきたリストに照らし合わせる作業に追われた。どうにか大体の物を揃えた辺り良い兄貴と言えるだろう。チエックを終え、近くの席で背もたれに身を預けている星空さん達は寝息を立てていた。彼女の顔を見て、串カツ屋での話を思い出すと修学旅行の出来事を振り返る。思わず、ひっそりと口角が上がってつい笑ってしまった。成る程、既にもう面白い思い出の一つが出来た気がした。

続

5. 7 特別編 序章

青い空に飛行機雲が横切るのをしばらくの間ただじっと見詰めた。やがて息を深く吐き出すと制服の汚れを落としてゆっくり起き上がり、辺りに散らばった教科書やらノートやらを俺は静かに手に取る。折れ曲がったページを適当に直して手早くかつ無造作に鞆へ放り込んだ。

「大丈夫？」

視線の隅に少女の脚が見えた。スカートへ手を当てながらしゃがみこむと一緒に拾い集める。無惨に折れ曲がった数学のノートの表紙を直す彼女の表情は何処か気まずそうだった。そして俺は何も言わずに受け取り、他の教科書と共に踏みつけにされた跡の残る自分の鞆にまとめて突っ込んだ。・・・何とも寝覚めの悪い嫌な夢である。あれはあくる日、出来れば二度と起きて欲しくないこの上なく最低の出来事だった。

横浜・みなとみらい。神奈川県に位置する歴史あるこの地を訪れる者は決して少なくない。横浜ベイブリッジからビルの並び立つ街並みを眺め日本メモリアルパークに観光客が集う。そしてこの日も何時ものように行き交う人々を見下ろす様にランドマークタワーがそこに――

「我が名はフュージョン。全てを破壊し、闇に染める・・・！」

一瞬の内に街を破壊と恐怖が襲った。空一杯に広がる闇と突如響き渡る不気味な声に人々は足を止める。すると間もなくしてあちこ

ちから聞こえてくる爆発音と悲鳴。得たいの知れない何かが平和だった横浜の街を混乱に包み込んだ。立ち込める黒煙の向こうからその姿を現したのは、高層ビルと肩を並べる程の巨大な鉛色の正しく怪獣だった。口一杯に溜めた炎の塊を街並みへと向かって吐き出した。もう駄目だ、誰もが咄嗟に我が身の最後を覚悟する。

「おい、観覧車の上に何かいるぞ」

「人だ。ゴンドラの上に」

「1人じゃない！・・・5人・・・10人・・・まだまだいるぞ！」

——が、しかし。怪獣の放った炎は彼らには届かず、やがて誰かがある方向を指差した。周囲も次第に気が付いて口々に声をあげた。大観覧車コスモクロック21に釘付けになる。ゴンドラ一つ一つに誰も遠くからでも人影の様なものを捉えたからだ。

「おお、そうだ、そうに違いない・・・！」

「えっ？」

「世界が闇に染まる時、必ず現れると言われている。伝説の戦士——」

人々はその言葉に耳を傾けた。そして理解したかの様に皆は声援を送る。

『謎の怪物が横浜に現れ街が危機に曝されましたが、十数人の少女達によって救われました。彼女達はこう呼ばれています。』
『伝説の戦士プリキュア』と』

危機として迫る表情で今朝のテレビに映し出された信じ難い映像と共にアナウンサーはそう伝えた。これはほんの始まりに過ぎなかった。突如として街に現れた怪獣とそれをやっつけたというプリキュア達。今、こうして一つの物語が動き出そうとしていた。——
——っていうところだろうか。だとするならこれは何かのほんの始まりでしかないのだろう。ただ俺は何となくそんな気がしていた。

続
I 序章・プリキユア 対 フュージヨン I

一章

一章

街を襲う大怪獣、逃げ惑う人々、悲鳴を聞き付けたかのように何処から途もなく現れる伝説の戦士。これら数々の出来事は空想の世界——その筈だった。しかしどうやらあのニユースで見た光景は全てが実際の出来事の様である。そう、俺の知る限り5人組という認識だった伝説の戦士・・・即ちプリキュアとは正確にはこっちが知らなかっただけで、まだまだ沢山いたとそういう訳か。あの彼女達はこれまでも何処かで何かと戦ってきたんだろうか。えっと、確か俺が知るところでは星空さん達五人組のスマイルプリキュアだけだった筈。バッドエンド王国から世界を守るべく戦っているあいつらの事だ。

「でも、ここにはどうみたって——」

パラパラ：捲ってみた雑誌の追加ページに目を通す。急遽追加されたとかいう見開きのカラーページで号外扱いとして大々的に取り上げられ、様々なプリキュアの姿を捉えた幾つかの写真が掲載されていた。

「お兄ちゃん的にどの人がお気に入り？」

「そーだなー、この娘かなあ・・・ってオイ。朝からベタな事させんじやねえよ。何で折角の休日だったのにお前と出掛けなきゃいけないんだよ」

「仕方ないじゃん。じゃなきゃお母さんが駄目って」

妹は俺の手から雑誌を取り上げた。学校が休みなのに早くも叩き起こされて何処に向かっているかというかと電車に揺られて横浜である。妹は昨日のニユース番組で見たプリキュアのニユースに大はしゃぎし、それだけなら良かったが実際に行きたいなんて言い出したのだ。本当なら自分の友達を連れて行く予定だったらしいが、生憎と都合がつかなかった為に諦めようとしないう妹は母さんに言われてこの俺を同行させたしだいだ。優輝はまだ小3だし、てか行くのを諦めてくれればいいのに。ちえ、貴重な安息の日が。

「本気で見に行くつもりかよ。寝みい」

「ここまで来て今更違いますなんて言うわけないじゃん。——プリキュアさんに絶対会うんだから」

「そーかよ。物好きだなお前は」

それでも兄としてこいつの妙な拘りやそれに対して頑として譲らないところを理解している。だがしかし、会うも何も全く面識が無い上にそもそも本当に居るのかも正直なところ疑わしいのに俺にはそこから辺ハッキリ断言するのはよくわからん。

「会ってどうするんだよ」

「そりゃサインして貰うとか、握手しちゃうとか」

「ふう、それなら今から東京のど真ん中で芸能人でも探す方がよくなるか?」

「もう!なんで何時もお兄ちゃんはそのなに後ろ向きなの」

「常識的と言え。それでいて現実主義者なだけだ。お前みたいに毎日お気楽じゃないんだよ」

「はー、お兄ちゃんは少し想像力つてもんを持ちなよ。そしたらポジティブになつてきつと友達とか1人ぐらいは出来るんじゃない?」

カチーン。どうやったらそんな話に繋がるんだよ、欲しいなんて言つてねーよ。

「・・・口が減らないな」

「いやいや、お兄ちゃんには敵わないよ。だつてもつとガキだもんねえ」

「よーし、もうそのくらいにしとけ。後悔するぞ」

「こらこら君達。こないなここで兄妹喧嘩したらあかんで」

「すみません」

間に割って入ってきたその声に咄嗟に俺達は互いに頭を下げる。

——つて、おいおい。ちよつと待つて。

「何」

「よっ!奇遇やな自分ら」

「」「どうもー」」

日野あかね、そして残りの奴らもお揃いだ。偶然同じ日にこうして同じ電車に乗り合わせたというのは妙な気もするな。

「優輝ちゃんだったよね」

「あ、ハイ。えっと、緑川さん」

「なおでいいよ」

「青木れいかです」

「で、あかねちゃんとかやよいちゃん。私は——」

「ところでお前らはどうして？」

すると遮られた星空さんが若干むくれっ面になったみたいだが別に気にならないので俺は無視した。

「実はこれから横浜に行くの」

「横浜！私達も行くんです。同じですね」

「へえ、そうなんだ。本当に偶然だね」

「遊びに行くの？」

黄瀬の問い掛けに対して優輝は瞳をキラキラさせながら答えた。

「プリキュアに会うんです！」

「！！プリキュア!?!」

「はあ………全く」

「へえ、そうなんだ。私達もプリキュアだから——」

「え、みゆきさん達もプリキュアを見に？」

「あー！ハイハイ、せやねん！ウチらもプリキュア見れたらなーつて……アハハハハ」

星空さんのうっかり発現を誤魔化すために大袈裟でわざとらしい口調をしながら身振り手振りする。優輝、実は目の前にいるこいつらもそうなんだよ。まあ、本当の事を言うわけにはいかないからな。兎に角、そういうしていると俺達を乗せた電車は遂に目的地に到着した。

七色ヶ丘市を出て遂に横浜に降り立った。駅から暫く歩き、道中に星空さん達は俺だけにそっとこの場所へやって来た理由を詳しく明かした。

「フュージョン……」

「うん。他のプリキュアの皆が倒したあの」

「後でわかったみたいでさ。フュージョンはバラバラになって横浜のあちこちに散らばったかも知れないんだって」

ニユースから流れてきた映像を見ていて大まかには知っている。十数人のプリキュア達は一齐に攻撃を仕掛けて応戦し、巨大怪獣の様相を呈したそいつを跡形もなく消滅させた。だが実際にはフュージョンは倒されたものの体の一部というべきか欠片として横浜の街にどうやら散らばったらしい。多分プリキュア達にとってこれは想定外だったのだろう、星空さん達は早速そのフュージョンの欠片って奴を探しに来たのだ。

「この街の何処かに？」

「そうなんだ。でも欠片っていつでも何処にあるんだろう」

「待てよ。じゃあ今ここに居るのは危険じゃないか。だったら・・・」

善は急げというだろう、呑気に観光なんかしてる場合じゃない。巻き込まれない内にとっとと家に帰るべきだぞ。

「それさえ解つてたらなあ」

「兎に角、今は早くフュージョンを探すクル」

星空さんのバッグからキャンデイが顔を覗かせる。こいつが他の妖精から話を聞いたのが今日の発端らしい。ん、他の妖精か。へえ、キャンデイだけじゃなくてこんな生き物がまだ他にいるんだな。

「真澄、今からみんなでフュージョンを探すクルウ。だから邪魔しちゃ駄目クル」

「俺が？まさか。そんなつもりは一切無いから、まーそういうことなら頑張れよ」

「真澄君はもう帰るの？」

「まあな。あ、お土産とか別にいいからな」

さてと、後は優輝をどうやって説得したもんだろう。それともこの辺りを適当にブラつかせて観光気分でも味合わせてから適当に連れて帰ろうか。

「おーい！フュージョン!!」

声高らかに怪物を呼ぶ星空さんの叫びだった。行き交う人々は何事だろうと歩みを止めて彼女を見詰める。日野達はそんな様子を見て直ぐ様に止めさせようとした。彼女達の姿が周囲の注目を集めている間に俺は妹に声を掛けようと振り向く。

「優輝？」

妹が見当たらないと知ったのはその時だった。ほんの僅かでも目を離すべきではなかったが。一先ずあいつの番号に掛けて呼び出せば――

「・・・無い。こんな時に限って」

更に迂闊な事に携帯を自宅に置きっぱなしで来てしまったとはツイてないの言葉に尽きる。探して辺りを見回しながら俺はその場を歩き始めた。

「真澄君。ここで何してるの？」

「優輝が迷子なんだよ」

赤レンガ倉庫の中にある様々なショップが並ぶ中を進んでいるとフュージョンを探し始めていた星空さんに再び出会った。

「はぐれちゃったの？大変」

「で、星空さんはさっき言ってたのを探してたのか」

俺達は成り行きで行動を共にする事になり、あちこちの店を覗きながら妹の姿を黙々と探した。目を離してそんなに経ってはいない筈だが、優輝はすばしっこいというか行動力も人一倍な上に足が早い。もしかすると既にこの周辺を離れてしまったかも知れない。手元に連絡手段が無い事も災いして発見は困難を極めそうだ。一方、隣で星空さんは同時にフュージョンと呼ばれる存在を真剣に探していた。特に足下を注視する姿勢からして、欠片と聞かされているからこそ地面に落っこちているのではないかと考えていそうである。

「ムグッ」

「あー」

突然の出来事に彼女は啞然として暫し固まった。探す事に集中する余りに目の前の少女の存在に星空さんは気付いていなかった。注

意する様に声を掛ける間も無く相手の背中に頭をぶつけ、暫し相手と見詰め合う。先に行動したのは髪を二つ結びにした制服姿に通学用鞆を肩から提げた少女だった。一言謝ると走り去っていくその様子を見送る。

「待ってー！」

「星空さん？」

彼女はいきなり駆け出して今しがたぶつかった相手を追い掛け始めた。何が何やら、思うより先に出口へ向かっていく彼女に俺も咄嗟に後へ続く。唐突な追いかけてこがこうしてスタートした。制服の少女を追う星空さんはこちらの呼び掛けもまるで無視してただひたすら突っ走る。途中、派手に躓いて星空さんは顔面から倒れたが、めげずに即座に起き上がった。

「待ってー！」

「おいおい、なに考えてるんだよっ」

「待ってー！」

「あ？増えた!？」

何とこの追いかけてこに新たな参加者が現れたのだ。目の前に突如フレームインするやたら足の速い誰かさんが加わってやがて街中にまで迫り着いた。そして、俺達は遂にゴールを迎えるのだった。謎の参加者が一気にごぼう抜きして立ち塞がる。慌ただしく急停止するが星空さんただ一人は間に合わなかった。

「止めてえええー?!」

叫びも虚しく、星空さんは勢いそのままに突っ込んでいくと又も倒れ込んでしまった。今度は他人も巻き添えにしての重大事故にただ見ているしかない。

「あ、あの。大丈夫——」

「うわあああー！」

「あ、起きた」

弱々しく声を掛ける制服姿の少女。すると2人の少女、星空さんと

やはり見慣れない何処かの誰かさんは険しい表情で近付いた。

「さつきはごめんなさい!!」

「え?」

殆んど同時に彼女達は往来のど真ん中で頭を下げて謝った。想像していなかった意外な行動ゆえに俺も制服姿の少女と同じくきよんとする。

「私、ちよつと余所見してて。ぶつかっちゃってごめんなさい」

「私の手がブレスレットに当たっちゃって、壊れなかった?」

もう1人がそう言つて指差したブレスレットは手首に確りと巻かれていた。どうやら壊れている様子は無く、すると今度は矢継ぎ早に怪我が無いことを確かめて星空さん達は漸く安堵したのか肩の力を抜く。

「それを言う為にわざわざ追い掛けてきたの?」

「うん!」

それを言う為にわざわざ追い掛けてきたのを俺は追い掛けてきたの?という気持ちで一杯なのを余所に、問題は俺の目の前で解決した。制服の少女は苦笑いを浮かべながら今度こそ立ち去っていく。ここまで夢中で走ってきた2人はお互い納得した様子でそれを見送った。

「ところで、ここ何処?」

「あいな」

自分達が置かれている状況に漸く気がついたらしい2人は同時に疑問を投げ掛ける。だが生憎と聞く相手を間違えているし、それを聞きたいのはこの俺もだよ。そんな訳で一旦場所を変えて状況を整理する時間を設けることにしたのだった。

「これからどうしよう」

見上げた空に掛かる一筋の飛行機雲――。

「真澄君、聞いている?」

「おう、そうだな」

その声に返事すると意識を地上へと戻し、山下公園の一角にある噴水近くのベンチで腰を落ち着けている状況を再認識した。俺と星空さん、そしてついさっき偶然出会った少女も一緒にこれからの事を考えていたところである。飛行機雲が真っ直ぐに伸びていく様に、見覚えのある忌々しい出来事を思い出して俺は溜め息つく。安堵からか疲れからか、或いはその両方。初対面の相手と視線が合い、何か気まずくて小さく会釈した俺は別の方に顔を逸らした。

「どう？みゆきちちゃん。……他の場所も探してみる？」

「そうしよつかなあ。でも、響ちゃんも友達と一緒に来たんでしょ。探さなくていいの？」

既に互いを名前で呼び合うまでになったらしい。長い茶髪に黒い服を着たこの少女は北条響といい、自己紹介を済ませると話し始めた。彼女も又、友達とはぐれてしまったという。しかし不安そうにしている星空さんと違って至って穏やかな落ち着いた様子だ。

「うん。多分、会えるから」

「どうして？」

今度は星空さんが聞き返す。理由について尋ねられると彼女は頭を掻きながら曖昧にそう答える。俺は公園の噴水に視線を戻して考えた。先ずどうするべきか、一旦あの赤レンガ倉庫に戻ってみようか。

「いや、やっぱり——」

あいつならこういう時どうする。優輝の奴、たぶん今頃は俺とはぐれたと気付いて連絡を取ろうとしているかも知れない。その携帯を家に置いてきたから繋がらないと解ったら、戻ってきて探し始めるんじゃないか。

「お一つどうぞニヤーン」

待てよ、一つの事に夢中になって周りが見えなくなる優輝のことだからな。案外プリキュア探しとかに夢中になってたりして。

「それはどうもクル」

「頬つぺた落ちるニヤ？」

そうだ、きつと。それ“ニヤ”ら今頃は——ん？何だ。星空さん

でも北条さんでもない声に気を取られてそつちを見ると2人は青ざめた顔で固まっていた。側にはキャンディと一匹の白い猫。但し、こいつらは普通に人間の言葉を交わしながらお喋りしている。

「猫がッ！」

「小豚がッ！」

・・・喋った事に彼女達は立ち上がって叫んだ。正直、俺はキャンディが小豚でも驚きはしないが猫の方まで口を利いたのはまったく予想だにできなかった。

「キャンディは小豚じゃないクルう！」

「ハミイとキャンディはお友達ニヤ」

いやいや、マジでキャンディが小豚でも何でもいいけど。白い猫はハミイと名乗るとそうはつきりと伝えてきた。その相手はどうやら北条さんの様だ、つまり。彼女と星空さんはお互いに見詰め合って暫し沈黙した。すると2人の間を何かが素早く飛んで横切っていく。

「フュージョン」クルー！」

「フュージョン」ニヤ！」

キャンディとハミイが同時に叫ぶ。星空さんは慌てたが北条さんはハミイに呼び掛けると走り出す。彼女はまるでそれを追い掛ける様にダツシユしていった。

「マジかよ」

「待ってええ!!」

それを追う星空さんと俺、何故だか状況は悪くなる一方。妹からは遠ざかり、やがて俺達は公園から街中へ場所を移した。——横浜中華街、そこは沢山の店が並ぶ人通りも絶えない有名スポットの一つだ。

「みゆき、もつと急ぐクルー！」

「そ、そんなこと言っただって・・・！」

キャンディを抱えた星空さんは遙か先を行くもう1人の背中を見失わない様にするだけでも精一杯だろう。フュージョンは欠片と叫ばれるだけあって確かに小さかった。このちっこい奴は殆んど影みにたいに素早く、人通りの中を人々の足元を次々にすり抜けていった。

あの北条響という少女は躊躇いもなく一目散に追い掛ける。興味本位、そういう類いじゃない。つられて星空さんについていく中で俺は何処か不思議に感じていた。

「また出た!!」

星空さんが頭上に新たな欠片たちを見つけた。蠢く塊が一つ二つと増えた、と――。

「響!!」

「奏、エレン、アコ!!」

3人の少女が目の前に現れた。どうやら北条さんがはぐれた友達であるらしいのだが、再会した彼女達は並んで走り続ける。

「フュージョンを探してれば奏たちと会えると思ったからさ」

「んもう・・・!」

「話はおと!フュージョンの欠片が集まってきてる!」

北条さん、そして彼女の友達と聞くにフュージョンを知っているようだ。赤縁の眼鏡をした一番小柄な少女が言うとおりに、こうしている間にも確かに欠片は寄り集まっていた。

「前みたいに大きくなったら厄介だわ」

「じゃ、まだ小さい内に」

「「ええ!!」」

察したと秤に頷くと4人は建物と建物の間の狭い路地に入った。星空さんと俺も後に続くと北条さん達は何かを手にして立ち止まる。

『レッツプレイ!プリキュア・モジュレーション!』

眩しい光が一杯に薄暗い路地を照らした。同時に叫んだ北条さん達がある中で見る間に姿を変えていく様子にただ呆気に取られた。側の水色のゴミ箱の蓋から野良猫が慌てて飛び降りるのに漸く気付いた時、4人の少女はカラフルかつ派手で可愛いそんなお馴染みのコスチュームに身を包んでいた。そう、この雰囲気には見覚えがある。というか、初めに思い切り言っていたじゃないか。ああ、彼女達は間違いないそうなんだ。

「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

北条さん始め、次々にポーズを決めて並び立つ。名乗った彼女達を前にして俺はふと思いついた。昨日の朝、ニュース番組のテレビ画面一杯に特撮も顔負けの大バトルを繰り広げていた複数の中にこの4人が居たことに。

『届け、4人の組曲！スイートプリキュア！』

新たな出会い。初めて訪れた場所で偶然にも星空さん達ではない伝説の戦士プリキュアが目の前に現れた。謎の怪物騒動によって明らかになったまだ見ぬプリキュア達の存在は今や現実以外の何物でもない。

「スイートプリキュア」

俺と星空さんはほぼ一緒に口にした。殆んど呆然とした状態ではあったが見間違いないのではないと自覚していた。

「おおおー！！プリキュアだあ〜！」

「っ見られちゃった!？」

「大丈夫だよ」

感激でもしたのか近寄る星空さんに自分達の姿を目撃されたと動揺した様子を見せる。やっぱりこの人達も正体を知られなくなかったらしい。だがそんなキュアリズム達に対して北条響さんことキュアメロディは既に察していたらしく1人気にしていなかった。

「よおし、私も！」

てな訳である。星空さんがスマイルパクトを取り出して見せると意気揚々として変身し始める。

「Ready?」

「プリキュア・スマイルチャージ!!」

「Go! GoGo Let's go Happy!!」

「キラキラ輝く未来の光！キュアハッピー！」

星空みゆき、又の名を。これにはメロディ以外の仲間達は驚きを隠せない。プリキュアがこれで5人、追うべきはフュージョンと呼ばれた怪物の一部である、意思を持って集まった欠片。

「何」

欠片——それが一つの大きな塊と化して向かってきた。ほんの僅かの間の出来事に身動きする事なく、俺は気付くと高く高く空を飛んでいた。

「真澄君!!」

「ほ、星空さんっ」

咄嗟に手を伸ばしたものの掴めなかった。フュージョンはこの俺をどういう訳か連れ去ろうとしている。直ぐ後ろをキュアハッピーとスイートプリキュアの4人が追い掛けてくる。中華街の路地裏から程なくして沢山のコンテナが並ぶ景色が視界に飛び込んだ。

続

二章

二章

フュージョンは物凄いスピードで空を飛んだ。そいつに捕まったまま強い衝撃と共に急降下を始めた俺の身体はなす続べなく地上に叩き付けられる。ところが、そう思ったまま何も起きないことに恐る恐る目を開くとそこはまだ空中だった。やがて今度こそ静かに地面の上に降り立つと間一髪で命拾いした事を安堵した。俺を救ったのはピンク色の派手な髪の毛をしてコスチュームに身を包んだ彼女――プリキュア。

「大丈夫？」

「・・・うん」

「危ないから離れてて」

キュアメロディ、スイートプリキュアの1人。彼女の水色の瞳がこちらを見詰める。港に面したとあるコンテナヤード、直後にこの場所で戦いが始まった。火の玉の様な複数のフュージョンの欠片を前にしてメロディは仲間に加わるとそれらを相手に攻撃を仕掛けた。素早い動きで四方に散らばった4人はフュージョン各々を相手取り、コンテナが積み上げられた狭い通路の中を駆け回りながら反撃の機会を窺う。メロディはフュージョンの吐き出したエネルギー攻撃をかわしつつ上空へと飛び上がる。一方、白いコスチューム姿のリズムが気迫と共に再びパンチの連続攻撃に転じていた。それに続けと秤に青いコスチュームのビートも又、矢継ぎ早に蹴りを叩き込むと一番小柄な黄色いコスチュームのミューズは冷静に対処する。しつこく狙って飛んでくる敵に対して的確にこれを避け続けた。

「あれ、星空さんは？」

ふと見上げた視線の先でスマイルプリキュアのキュアハッピーはというと見るからにオロオロしている。出遅れてしまったのか、コンテナの上に1人取り残された様子であった。

「危ないッ」

周りに遮る物が無く状況を見渡せる一方、敵からも丸見えの状態に

ある。フュージョンの一匹がハッピー目掛けて飛んで来た。不味い—— そう思ったのも束の間、攻撃を食らった彼女は吹っ飛ばされるだろうと考えた。

「ええいつ?!」

ハッピーは咄嗟に自らの頭をぶつけた。勢いよく迫ったフュージョンに対抗して一か八か、彼女の見事な頭突きだった。こちらにも確り聞こえる鈍い音、メロディの表情が明らかにひきつる。ハッピーはずつきをおぼえた!しかしこんらんした!。 . . . そんなログみたいなもんが一瞬頭の中を過つたが今は気にしない。フュージョンも目を回したものの、直ぐ様キレ気味にハッピーを襲おうとしたのが解った。そこにメロディがダイブしてドロップキックを決めた為に救われる。あ、ヤバい!なんかフュージョンが今度はこつちに飛ばされてきたぞつ。俺もコンテナの陰に身を隠した。

「プリキュア・ハッピーシャワー!!」

彼女の叫びに強い光が溢れた。ハッピーが必殺技を放って見事に命中させたらしく、一匹のフュージョンが倒されたのを確認する。

「でも油断は禁物よ」

「あ、ハイ!」

「残りのフュージョンも片付けなきゃ」

ハッピーへ釘を刺すミュージズに続いてリズムの言葉に同意すると残党を目視した一同は再び臨戦態勢に。フュージョンは合体して緑色の個体から一つの紫色をした禍々しい姿となった。が、怯むハッピーとは違いスイート組は一切構えを崩さなかった。これは一つになったなら纏めて倒すチャンスでもあるだろうし、もちろん騒ぎにつられて人が集まってくる前に蹴りをつけようというのだろう。メロディ、リズム、ビートが声を揃えると後にミュージズが続く。

「三翔けめぐれ、トーンのリング!」

「シの音符のシャイニングメロディ!」

初めの3人が武器と思われる物を手にして目の前に大きく輪を描

き、1人はその輪から沢山のシャボン玉を発生させる。

「プリキュア・ミュージッククロンド!!」

メロディがオレンジ色のエネルギーリングを飛ばす。それは真っ直ぐに向かつて飛んで行き、同じくリズムも叫びながら黄色いリングを飛ばした。

「プリキュア・ハートフルビートロック!!」

「プリキュア・スパークリングシャワー!!」

ビートは先とは異なったギター形状の武器を手にして構えながら、青緑色のやはりエネルギーリングを発射する。そしてミュージアの叫びで一斉に音符の形をしたシャボン玉が放たれた。迫るフュージョンにこちらも4人のプリキュアの攻撃が迫った。三つのリングが重なり、周囲をシャボン玉が覆い尽くす。これらが敵を捕らえて中に閉じ込めてしまうと完全に動きを封じた。

『三拍子ー1・2・3ー——ファイナーレ!』

掛け声を合わせてまるで指揮者の様にシンクロ。僅かな間を置いて凄まじい爆発が起きるとエネルギーが拡大してフュージョンは跡形も無くなる。きつとプリキュアの浄化の力が消滅させたんだろうな。勇姿ここにありと言わんばかりのスイートプリキュアの活躍にハッピーだけでなく陰ながら見ていた俺も彼女達の見事なチームワークは正直圧巻した。

「何だったのかしら、今の爆発」

「こつちの方から聞こえてきたよ」

「あ!居た!」

「何やつとんねんこんなところで!」

「あかねちゃん、皆!」

人の気配がして咄嗟に隠れると聞き覚えのある声が揃う。ハッピーが返事する相手はやはり日野達で、今の騒ぎを知ってここまで辿り着いたみたいだ。間も無く、スイートプリキュアが残りのフュージョンの欠片を見つけ出すために立ち去ったと俺達は知った。

「兎に角、無事で良かったよ」

「大丈夫？怪我とかしてない？」

「俺より星空さんだろ、頭大丈夫か」

「アハハハハ・・・」

あの衝突事故は多分暫く忘れないだろう。当の本人は何事も無かったように笑ってはいるが、いや、こいつの頭が大丈夫かについては以前から疑問だったっけな。黄瀬は気遣っていたが続いてスイートプリキュアの話を知りたがって尋ねてくる。

「どうだった？あー・・・何か凄かった」

「って、それだけかいな」

「例えば、何処がどう凄かったかとか」

「そのままだろ、スゲー強くて凄い。うん」

しごく簡潔かつ解りやすい感想のつもりだったが日野には突っ込まれるし、黄瀬も不満そうに眉を寄せた。確かに多少大雑把かも知れんが。文句あるなら星空さんに聞けばいいじゃねえか。

「んー・・・」

「真澄、どうしたの？」

「いや。なーんか忘れてる気がする」

「忘れてる？」

俺の態度に緑川が気付き、青木が首を傾げて言葉を繰り返す。忘れた——携帯を家に置いてきた。・・・ハツとしてコンテナヤードを後にする道すがら、俺は立ち止まってベタな反応をしよう。

「うおー・・・忘れてたー！！」

はぐれた妹の存在を思い出して叫んだ。星空さん達はぎよつとして1人駆け出す俺の背中を見詰めたまま突っ立っていたが直ぐに着いてくるのが解った。時間をかけて元来た道を引き返していくと赤レンガ倉庫まで戻ってくる。今度は優輝を探してあちこち見て回る羽目になってしまった。

「お兄ちゃん！」

「優輝」

「もーどこ行ってたのさ？」

お前の方こそと言いたいが目を離した俺も悪かったと思っただけで何も言わないでおいた。因みに妹は近くのカフェテラスでジュース飲みながら大人しくしていたみたいだ。聞けばはぐれて暫しは気づかなかったとか、んで見失ったとわかると近くを探して俺の携帯に掛けたらしい。やっぱりな、基本的に優輝はこういう時に至っては実に冷静だ。

「心配したんだからねっ。いい歳して迷子にならないでよ」

「・・・へいへい」

ついでにやり取りを見ていた日野が小さく吹いた気がするがスルーしとく。兎に角も妹を無事見つけたので今日はもう早いとこ帰りたい。何せ横浜の街中を全力疾走して怪物に連れ去られてマジ一生分の疲れが溜まっていそうだ。こうして俺達は再び電車に乗って家路につき、星空さん達と別れて真っ直ぐ帰宅した。この時、既に日は傾いてすっかり夕焼け空に変わっていた。

「何だよ、その目」

「ナメてんの、マジ？」

別に舐めてはいない。生憎とそんな趣味は無いし、この時は確か気持ちがいいくらい晴れていて陽射しもそれなりに強くて眩しかった。だから決して睨んだりしていない、ただ目を細めたそれだけだった。残念なことにそれを伝える暇もくれなかった相手は胸ぐらを掴んでグイと自分の方に引き寄せてくる。・・・あれ。そう、これは夢だ。本当なら今頃は自分の部屋の布団の上だから、これはただの夢。

「いや、別に——」

「あー？聞こえねえー」

「やっちゃえよ」

俺が発した言葉を被せ気味に掻き消してくる奴と面白がって煽りを入れてくる仲間ども。因みに学校の屋上に居るのだが、面倒な連中に捕まって非常に厄介な状況にある。まあ、飽くまでこれは一度経験した事を再び夢に見ているだけだ。ところが理解はしていても思っ

た様になかなかいかないとほもどかしい。とつと逃げ出してあの屋上の扉に向かうなり、いつそ柵を乗り越えてしまおうなりすれば覚めるやも知れない。胸ぐらを掴みながら奴はニツと笑うと思いい切り突き飛ばした。

「正義の味方気取りか？関係ない癖に引つ込んでろよ。てかさ、お前も一緒に遊びたいってことか」

「・・・」

よし、これで身動きとれそうだ。いや、どうしても立ち上がれそうにない。待て待て、一旦落ち着こうじゃないか。——よし。少しずつではあるもののどうにかいけそうだぞ。俺はとつと夢から覚める為はこの場から抜け出そうとそれだけを考える。屋上への出入口の為の扉に視線を向けた。

「どうした？来いよ」

「これは夢、夢・・・よし！」

勢いよく走って正面突破。その筈が意に反して俺の足は動き出す気配が無かった。詰まり、これを夢として自覚しながらに自由に目覚めることが出来ない。

『大きくなりたくない』

何処から途もなく何者かが語り掛けるような声。まるでこの場を包むようなそんな響きで声が耳に届いた。

『大きくなりたくない・・・大きくなりたくない・・・』

その声は繰り返し続ける。同じ事を何度も何度も言い聞かせる様に。心からそれを望んでいるのだろうか、大きくなりたくないのか。

『・・・なりたくない。大きく、強くなりたくない——・・・りたくない!!』

最後辺りはよく聞き取れなかった。俺はそこで目を覚ましたので

安心する。でもって悪い夢から覚めたところで時計を見ると今は夜中。帰ってから飯食って風呂に浸かつて、そんなごく当たり前の流れで眠りに着いた。散々動いてクタクタだったので爆睡必至は当然と言える。

「大きくなりたい」

夢の中で聞こえたあの声は一体何だったんだろう。思わず口にしたこの言葉にはどんな意味があるのか、夢分析なんて全くしたこと無い。

「大きくなりたい・・・大きく・・・強く・・・」

「なりたい。大きくなりたい、強くなりたい」

「え」

まさか、あの声だ。おいおい、夢から覚めたらそれも実は夢だったよとかいう二段落ちパターンか。ふと天井辺りを見てみると影が浮かんでいた。それは波打ってフワフワと宙に浮かぶ様子を見せ、こっちが微動だせずにいると静かにゆっくりと降りてくる。

「ふ、フュージョン・・・」

「大きくなりたい。フーちゃん、もっと大きくなる」

自らをそう呼び、目の前で漂うこの塊はアレだと思った。どうしてまた俺の部屋にそいつが現れたのかさっぱりだが、流石に自分が寝ぼけてなどいない自覚がはつきりある。てな事で今は俺、我が家にしかも部屋に侵入した危険生物を前に下手に動けない状況に陥っているんだ。えー・・・これこそ夢であってくれよ。

「大きくなりたい・・・大きく・・・」

(さつきからそればつかだな)

「・・・なりたい、強くなりたい」

(強く・・・強くなってどうする気なんだ?)

「あゆみ、あゆみ、ともだち・・・」

「え」

フュージョンはどうやら名前らしき言葉を伝えてきた。そして「友達」という言葉が後に続いたことでそいつへの疑問が増す。

「お前は——大きくなりたい」

「大きくなりたい・・・俺が？」

「大きくなつて、強くなりたい」

「大きく、強く・・・」

まるで直接に頭へ入つてくるように声が響いた。フュージョンの発する言葉、その一つ一つが自分の中へ届く感覚とでも言うのか。大きく、強く、それから——なりたい。一体何になりたいたんだ、どうしたいんだ。

「大きくなりたいたい？」

最後は自分に向けて問われている感覚がした。大きくて強くて、そうしたら自分はどうすればいいのか答えを見つけないといけないような気が始めていた。・・・あれ、もう朝か。時計を見た俺は奇妙な気分で布団を出ると今朝も淡々と一連の習慣を済ませる。トイレ、歯磨き、着替え、朝食と経過して部屋に戻る。真夜中にフュージョンがこの部屋に居たのは間違いない。習慣を終えた時、どういう訳か折角の休日に朝も早くから出掛けることにした。向かう先を既に決めて俺は最寄りの駅を目指す。改札を抜けて丁度よくホームでドアを開けて待つ横浜行きの電車に乗った。

ベンチに腰掛けて遠くの景色を眺める。ランドマークタワー、コスモクロック、中華街、山下公園——さて、今再びここ横浜をわざわざ訪れたが実は明確な目的があるわけじゃない。これは観光のつもりだったのか何なのか、ぶっちゃけ自分でもよく理解しない内に足を運んでしまったからだ。強いていうなら昨夜のあの声だろう。多分、声が俺をここへ来させたのかもしれない。

「フュージョン・・・」

頭の中に奴の声が残った。大きくなる事を望み、自らに言い聞かせるように何度も繰り返していた言葉。大きくなつて強くなりたい、それで？ 奴は最後に問い掛けていなかっただろうか。こちらに對して

そう尋ねたのはどんな理由からだったのか。俯いて一人考えに耽っている側から何やら妙に賑やかなしい気配が近付いてきた。

「きつとこっちじゃないかな、多分」

「んもー適当なんだから。これじゃあ昨日と変わらないっ」

「だって見つけるの大変なんだからあー！しょうがないじゃん」

長い茶髪、その少女に見覚えがある。言い争うようにオリーブ色の髪をした同い年のもう一人の少女は呆れたような素振りをしていた。暗い紫色のサイドテールの娘と一番小柄で眼鏡をした娘と計4人。

「取りあえず落ち着いてね、二人とも」

「本当にこっちの辺りに逃げてきたのよね？」

「んニヤ、間違いないニヤー！」

茶髪の彼女に抱えられた白い猫は自信満々に頷く。人の言葉を堂々と喋るその猫にもまた見覚えというか見間違う筈もなかった。スイートプリキュア、フュージョンを何体か倒したプリキュアがそこを歩いている。

「あー！あなたは確かみゆきちちゃんと一緒に居た・・・！」

「どっ、どうも・・・」

「ひよっとして、あなたもフュージョン探してるのか？」

北条響がこちらにやって来て声を掛けた。咄嗟に否定してみせたが返事はやや曖昧になってしまった。何せ夜の事が頭から離れないのでフュージョンの事を考えていたのは本当だったからだ。

「あ、こんにちは。挨拶がまだだったよね。私、南野奏」

「黒川エレンです」

「調辺アコ。よろしくね」

突然始まる矢継ぎ早の自己紹介にも上手く反応しているといつの間にか北条さんは隣に座っていた。南野さん、黒川さん、調辺さんからも注目を浴びて妙に落ち着かない雰囲気味わう。

「ハミイだニヤ。よろしくニヤ、猫じゃないニヤ。ハミイはハミイだニヤ」

(いやいやいや、どの口が言うんだよ)

ある意味で一番厄介なのはその妖精だった。先ず、どんなに否定し

てみせたとしてこいつは猫である。誰が何と言おうと、語尾に“ニャ”とかつけてるしゼツテー我輩は猫だと思う。星空さん達が相手だったら即つっこむところだな。後、更に北条さん達の周りを飛ぶ小さい妖精がいてフェアリートーンとかいうらしい。これはドレミの音階を奏でるのだがお○ヤ魔女の奴とごっちゃんにしちゃいけない。

「もしかして、あなたも・・・プリキュア？」

「違います」

「そうよね。そんな感じじゃないってどうか？」

南野さんが恐る恐るした質問に首を横に振り、黒川さんは何処か気を遣ってか苦笑いを浮かべた。まあ、確かに一緒に昨日は行動していたし、けれど変身や戦う事は出来ない。それでいて一応プリキュアや星空さん達の正体を知ってはいるからややこしいかも知れない。いや、別に好きで関わってるつもりなんか無い。何度か巻き込まれてしまっただけで決して望んだ事ではない。

「それじゃあ、今日はみゆきちちゃん達と一緒にじゃないのね」

「はい・・・」

「どうかしらね。この辺りは一応見て回っているけどまだフュージョンは見つかってないの。今のところ安全ではあるかもだけど」

調辺さん、背丈は丁度妹ぐらいである。ということとはひよつとしたら歳が近いのだろうか、優輝と比べると大分しつかりしている印象を受ける。彼女は考え込んで少ししてから続けた。

「兎に角、気をつけて。私達も残りの欠片を探してる最中だから、もし見掛けても近付かないようにして」

「あ、ハイ」

「それじゃあ、そろそろ行くね。あ、そうだ。あなた、名前は？」

別れ際に北条さんは尋ねる。名前を伝えると彼女達は笑顔でこちらに手を振った。ベンチから立ち上がった俺は軽く会釈を交えて控え目に手を振り返した。

ヒュンツ!!

ほんの僅かの空を裂くような風の音。反対方向に体を向けたところで直ぐ目の前を素早く何かが横切った。最初は虫か何かだろうと

立ち止まるとそうでないことがはつきり解った。もつと大きい、塊のような物が宙に浮かぶ。フュージョンの欠片がいきなり目の前に姿を現したんだとわかった。

「大きくなりたい、大きくなりたい、大きく……」

何処かからする声だがそいつからではない。塊が形状を変えながら何やら触手の様に飛ばしてくるのを反射的に捉えた俺は身体ごと反応した。——いや、正確には俺は押し倒された。それで避ける事が出来たので間一髪と命拾いする。助けてくれたのは別れの挨拶を交わした秤の彼女だった。

「真澄君、怪我は無い？」

「大丈夫、多分」

「全く。言った側からこれなんて、ねえ。うん、無事で良かった」

覆い被さる体勢だった北条さんが笑う。彼女の長い毛先が頬に当たってこそばゆい、手を借りて地面から起き上がる。流石に足早に助けて貰ったのは感謝の言葉に尽きる。

「あなたは離れてて。ここは私達が——」

「ええ！」

「行くよ、皆！」

変身アイテムを手を取った彼女達は光を纏う。服装や髪型、色まで変化して4人はプリキュアに変身した。

『スイートプリキュア！』

メロディのパンチにリズムのキック、ビートのギター型の武器から繰り出される攻撃にミュージズの追撃。フュージョンは怯みながらも反撃を起こす。

「ビートバリアー！」

エレキギターの音色と共にエネルギーバリアを張って防ぐビート。その向こうから飛び出したメロディとリズムが同時に仕掛けて追

詰める。そこに先回りしていたミューズが出迎えて、敵は見事なチー
ムワークに成す術が無かった。

「ちょっと待って！何か変」

「メロデイ？」

「どうしたの？」

「——見て！フュージョンが、あっちに。あの彼のところに！」

離れた位置から戦いを覗いていた俺目掛けてフュージョンが飛ん
で来る。今度こそ自分の力で動くと思える為に走った。そこにメロ
デイが急降下してきてフュージョンに飛び蹴りを食らわせた。堪ら
ずかフュージョンは俺を諦めて逃げ出していく。スイート組が逃が
すまいと一目散に追い掛けるのを見送り、そのまま自分も惹き付けら
れたみたいにならぬ様に後を追いつけた。

「私達の攻撃が全然効かない……！」

「どうしよう………」

「諦めちゃ駄目！」

「メロデイ！」

そこには既に変身した星空さん達と別のフュージョンの姿があつ
た。但し、他とは見るに異なる様相を呈していることは明白でまるで
巨人の様な姿である。逃げたフュージョンはその巨人に合流して取
り込まれていた。偶然にも別の場所で戦っていたスマイルプリキュ
アとこちらも再会して9人の姿が揃う。

「この方達が」

「先輩プリキュアや！」

「は、初めまして！私たち、この前プリキュアになった秤でまだまだ未
熟者ですが……」

「挨拶は後！」

「力を合わせてフュージョンを倒しましょう！」

サニーやマーチの感激の声にピースが挨拶を交えるとミューズが
制し、メロデイの呼び掛けにプリキュアは一丸となった。

「あいつらも来てたのか。……あれは、誰だ？」

「………」

木の陰に身を隠すように少女が見ている。彼女は逃げるでもなく次第に立ち尽くしてプリキュアと怪物の戦いを目撃していた。

「やめて!!」

その時、少女がいきなり叫んだ。プリキュア達の動きが止まり、戸惑いの素振りを見せてハッピーだけが盛大に前のめりになってコケてしまう。しかも先輩プリキュアであるメロディを思い切り巻き浴いにした。叫びの主が駆け寄って行って目の前で止まる。少女はプリキュアとフュージョンの間に割って入るように立ち塞がったのだ。俺は少女が次に発した訴えを耳にして歩を止める。

「フーちゃんをいじめないで!お願い・・・!!」

言葉通りであれば、その行動と合わせるに少女はフュージョンを庇っている。決して嘘には思えない彼女の訴えを前にプリキュア達はただ戸惑った。

「いじめって、そんなつもりじゃ・・・!」

「フーちゃんって、フュージョンのこと?」

「私の大切な友達をこれ以上傷つけないで」

少女の背中越しにフュージョンはみるみると縮こまって、遂には巨人の様な姿から小さなキャラクターじみた人形の様になってしまう。少女はそんな怪物を如何にも大切そうに抱き締めた。複雑そうな表情でリズムはフュージョンを知っているのか尋ねる。

「この前、街を襲った怪物っていたでしょ。フュージョンて言うの」

間違いなく、あの時の大怪物とも言える鉛色の怪物の一部。ハツとした様子で抱き締めていた、今は小さな人形の様な姿のフュージョンを少女は見詰めた。

「フュージョンをこちらへ渡して。街にも、そしてあなたにも危険が及ぶかも知れない」

「フーちゃんは私の友達なの。絶対に渡さない!」

ミューズの呼び掛けに背を向けて少女は言い返すと走り出した。

「待って！」

「ハッピーー！」

追い掛けようという彼女の手が届く前に少女に抱かれたフュージョンがハッピーを遠ざけた。吹き飛ばされる彼女の元にメロディ達が駆け寄る。プリキュアから逃げるように走り去る少女の背中を見ながら、俺は少女の言葉を反芻していた。

『いじめないで！』

少女の言葉に別の少女の声が重なり出した。それを聞いたあの日、空はとても青くて雲なんか一つも無かった。今の空はあの時の空に比べると不穏な気配を漂わせる。まるで嵐の前触れか真っ黒な分厚い雲が次第に空を覆い尽くして昼間にも関わらず気付くと周りは暗い。フュージョンと共に走り去っていく少女の姿を追い掛けた俺はそれを途中で見失い、住宅地の通りで立ち止まった。空一面が雲に遮られて陽射しが届かない。

『リセット——リセット——リセット………』

やがて不気味な声が響き始めた。街全体を蠢くその姿が徐々に明るみになるにつれ、フュージョンの欠片らしき塊があちこちから飛び出してくる。恐怖と混乱が横浜の平和な街を再び襲う。

続

三章

三章

街全体の状況が慌ただしく平穩から混乱へと様変わりしていた。住宅街から再び通りに出ると人々が血相を変えて逃げ惑う光景が広がる。更にその後を不気味な黒い塊が飛んで来て次々に触れた物を消し去った。フュージョンの欠片が様々な場所に散らばって潜んでいたものの遂に自ら動き始めたのだ。目の前の建物や車、フュージョンの欠片は触れたもの全てを容赦なく消滅させる。パニックに陥る群衆、俺自身もそんな騒ぎの中を走り続けた。けれど我先にと一斉に逃げ惑う多くの人混みの中を逆らって進むのは容易ではなく、早くもあつという間に流れに押し戻されてしまった。・・・こんな状況で何故だ。今一度自らに問いかけても答えが出せないまま、俺は当てもなく漠然とさ迷う。街が危険と知りながら何かに突き動かされる様にして俺は何処かに向かっていた。

『リセット!!』

スライムのような黒い塊が道から溢れ出た。フュージョン、そいつを避けようと咄嗟に曲がり角に身を寄せる。

「!!」

しかし振り向き様にフュージョンは方向転換した。直ぐに逃げ出したものの、やがて息も絶え絶えにこちらの走るスピードは見る間に下がっていく。このままでは追いつかれてしまう、逃れる為には何処かでやり過ごす他ない。俺は建物の陰に隠れる事で怪物が見失って諦めてくれる事を願った。慎重に辺りの様子を窺いながら耳を澄ませ、周りの静寂の中に自分の息遣いのみを感じる。一先ず胸を撫で下ろすと共に全身から力が抜けてその場にへたり込む。俺には星空さん達のように戦う術など無い。それに逃げることには慣れている。そう、これでも逃げ足には多少の自信がある。但し、まだあの日は何処に逃げるか冷静に考える程の余裕があったとは言えなかったが。俺は学校の昼休みに難癖つけてきた奴らに追い立てられるまま中庭に辿り着いた。上手く逃れたつもりでその時は連中にあっさりと思つ

けられてしまい、後はあつという間に取り囲まれた。

「いじめないで！」

だが運良くその場は事なきを得る。礼を伝えた時、彼女は眩しいくらいに笑顔を向けた。忘れもしない、あれが見られなくなったのは逃げることに慣れてしまったからだ。それしか出来なかった俺自身の弱さがあの娘を追い詰めたからに他ならない。それからというもの今も変わらず俺は逃げて隠れてただそれだけなのである。

「あの、大丈夫ですか？」

「えっ」

「具合が悪いんですか？それとも怪我しているんでしょうか？あ、手を貸しましょうか」

暫し体育座りしていると見知らぬ誰かが覗き込んでいた。少女が心配そうに尋ねてくるので慌てて地べたから腰を上げる。

「何でもないです、大丈夫です。平気です」

「そうですか。良かった」

ハッキリそう答えると彼女は納得してくれたのか去っていく。この騒ぎの最中にわざわざ心配して声を掛けてくれたというのか。何処と無く少女の背中にある人の姿が重なった気がした。遠ざかっていく彼女の、いや、離れていったのは俺の方だったな。

『守れなかった』

「?!」

『守れなかった・・・弱かった・・・だから——!!』

急に目の前が真っ暗になった。何が起きたのかわからないまま、ただ視界の全てが覆われてしまう。フュージョンの声が鳴り響き、俺は体の自由を失った様に指一つ動かせなくなる。

「フフ、あなた見たことない生き物ね。名前は何て言うのかな？」

微笑み掛ける少女。ふー、ふー、その小さな体が彼女の肩の上で静かに息づいた。後に「フーちゃん」と名付けられた生物と少女——
| 坂上あゆみとの出会い。彼女は葉っぱの下で蠢いていた不可思議

な生物を拾って横浜の街へと向かう。それがフュージョンという怪物の一部であるとは知らず、あゆみは父親の都合で引越してきた事を打ち明けると自宅まで連れ帰った。そう、これは記憶だ。フーちゃんはあゆみに吠えかかった近所の犬を睨む。守る様に間に立ち塞がる姿に感激して少女は声を掛ける。

「でも、あんな大きな犬に近付いたら危ないよ」

あゆみも又、自分を庇おうとした様子のフーちゃんを心配していた。

「フーちゃん、小さいんだから」

この言葉が切っ掛けになって一つの意識が芽生える。・・・欠片と成って散らばっていたフュージョンが密かに動き始め、集まっていく光景。町中の陰に身を隠していたが確固たる意思の下に少しずつそれは現れる。

『小さいから危ない・・・大きくなれば・・・大きくなりたい・・・』

願望は目的になり、全てはその為に。移動したフュージョンの欠片が人の目に触れるところとなった。一部がプリキユアに発見されて倒される。するとフーちゃんは少女の預かり知らぬ間に次の行動を起こした。大きくなる為——犬を襲った。一夜にしてフーちゃんは直接として言葉を交わすようになり、自らの思いを伝える。

「あゆみ、フーちゃん、助けてくれた。だから、友達」

それを聞いた彼女は笑顔で頷いた。瞬時に触れたものを消したり、見た物に姿形を変える奇妙な「友達」とあゆみ。フーちゃんことフュージョンが1人の孤独だった少女と築いた思い出、これは記憶なんだ。俺は多分、何らかの形でフュージョンの記憶を見ているんだ。「そうか、だからか。友達を守る為だったのか」

妙に納得してこれまでのフュージョンの言葉一つ一つを思い出した。坂上あゆみと友達になってフーちゃんは彼女を守ろうとした。小さい欠片のままでは弱い、だから再び集まって大きくなろうとした。あゆみを守る為に、例えばあの犬から。彼女の怯えた様子を見て咄嗟に庇った。フーちゃんはその犬を取り込んで少し大きくなる。だが、もつと大それた事を考えた。

『あゆみの為だ。リセット、全部リセット』

「友達の為に」

『お前も守りたいと思ってた』

「俺が？守りたかった？」

一体何を——ああ、そうか。青い空に飛行機雲、暫くして放心状態だった俺は制服の汚れを払い落としてから散らばった教科書やらノートやらを拾い上げる。視線の隅には先ほどやって来た同級生の姿があった。あくる日、学校の中庭で俺達はぶちまけられた鞆の中身を片付けていた。

「大丈夫？」

折れ曲がった数学のノートの表紙を直す彼女の表情は何処か気まぐすである。そして俺は何も言わずにそれを受け取り、踏みつけにされた鞆に教科書やノートをまとめて突っ込む。

「酷いね。先生に言いに行きなよ」

「いや、いいよ」

そこまでじゃないと言い聞かせた。告げ口は状況を悪化させるだけかも知れないし、相手にしなければそのうち止めてくれるだろうと思っていた。しかし実際はこうして手を出してきた、だからこれ以上やられない為に相手から逃げるしか無いと考えていた。努めて平然を装いながら俺は教科書の最後の一冊を手取る。

「あのさ、助けてくれてありがとう。ホントもう平気だから」

「・・・そう、なら良いけど」

いや、本当のところ言うて決して良くない。寧ろこんな時は最悪という他ならない。これ以上ないくらい最低な一日、彼女とは同じクラスでも口を利いたことはそれまでは無かった。こうして俺達は初め

てまともに言葉を交わし、気がつけば何時しか親しくなっていた。

「まつすー」さ、もしかして笑い上戸じゃん？」

そいつの言動一つ一つがいちいちツボだったからだ。兎に角、笑いを堪えるのに必死でよく腹を抱えたものである。でもってそう言う彼女もまたつられてよく笑っていた。——そうだ、この上なく最悪なのはあの顔を見れなくなったこと。原因はこの俺であること、詰まりは彼女の笑顔を守れなかったことだ。

「そうだ。守りたかったよ、俺も」

『一緒に守ろう。全部、リセットして。守ろう……』

そんな言葉がやがて頭の中で繰り返される。小さいから弱い、だから大きくなって強くなりたい。彼女を守るようになりたい。だから嫌なもの全てをリセットしよう、邪魔なものを全部無くしてしまえばいい。彼女を困らせるもの、悲しませるもの、みんなみんな。邪魔なものは全て消し去ってしまえ、フュージョンは更に意思を強めていく。

『リセット!!』

抗えない、この力には。フュージョンの何処までも深い闇の中に呑み込まれていくと自覚した。もう駄目だ、俺もリセットされて完全に消えてしまう。このまま何もかも——。……おしまい。

「諦めないで下さい!!」

何処かから別の声がして微かに光が瞬く。僅かでもはつきり、小さいながらも強い輝きがそこにある。俺はこの手を力一杯に伸ばし、意識が鮮明になるにつれて閉じていた瞼を開いた。そこはさつきまでの街中、既に暗闇は何処にも無い。しかも見馴れない4人の少女が地面に倒れる俺を側で取り囲んでいる。起き上がって暫く、こっちの困惑した様子を察したのだろう。内1人の暗いマゼンタの髪を左右二つに束ねた少女が口を開く。

「無事みたいですね。ここは今、とても危険ですから逃げて下さい」

差し出された手を取った俺を立ち上がらせて彼女は背を向ける。

歩き出す少女、同じ方向にある塔の天辺が怪しい霧を纏っているのに気づく。この先どうすればいいのか・・・ただ、分からないからこそ

「行くしかない」

少女達の背中を見送って俺は走り出した。ただ答えを求め、そして確証も何もなくあの横浜マリントワーを目指して。

「星空さん!」

「真澄君!」

その姿は正確にはキュアハッピーだった。仲間も既に变身しており、他にもキュアメロディ達「スイート組」も居た。

「こんなところで何してるの?」

「はよ逃げないと」

「分かってる」

ピースやマーチ、ビューティが沈黙を前に怪訝そうにこちらへ視線を送る。それ以上の言葉が見つからない。

「ただ——俺は知りたい」

ハッピーとサニーが首を傾げた。そう、知りたい。自分でも何となく心の整理がついた気がした。

「フュージョンは全部をリセットしようとしてるんだろ」

「そう、私のせいなんです。街も学校も、みんな無くなっちゃえばいいって言ったから・・・だから」

プリキュア達に混じって俯いていた坂上あゆみは言った。フュージョンとは知らずに「フーちゃん」と名付けて友達になったものの、今や街そのものを消し去ろうとしていた。横浜マリントワーの天辺、そこに居ると思われるフーちゃんの元に向かうべく彼女はプリキュアと共に行動していたのだ。

「行くう」

「嘘やろ、本気なん自分!着いてくる気!」

「ここで引き返す訳にいかない。——行くよ、リズム!」

「OK!」

女神橋に差し掛かったタイミングでフュージョンの欠片と思われ

る、黒い人型の怪物が立ち塞がる。合図して飛び出し、メロディは氣迫を込めて拳を叩き込んでいく。リズムがバク転しつつ接近して追撃し、ビートとミューズはその間に挟み撃ち。スイート組が相手をして隙を作り、坂上さんをフーちゃんの元に辿り着かせようとフオロ―する。が、フュージョンは次々にやって来て襲い掛かり、スマイル組も遂に応戦を始めた。

「もう私のこと忘れちゃったのかな・・・？」

「そんな事ないよ！」

「まだ離れているから、あなたの姿が見えていないだけだと思います。近くまで行けばきつとあなただつて分かる筈です！」

自信を失いかける坂上さんにも彼女達は諦める素振りはない。

ピースは寄り添うように声を掛ける。

「不安になる気持ち、凄く分かるな。私も怖くてよく泣いちゃうし」

「え、プリキュアなのにな？」

「プリキュアだからって何も特別なことあらへんで。みんな普通の女の子や」

確かに変身して戦う姿はそれはそれは凄いものだ。坂上さんにとって意外だったのだろう、何故なら普段の星空さん達を全く知らないから。変身しても中身まですっかり変わるわけではなく、例えばピース本人が言うように普段から彼女は他人より泣き虫かも知れない。因みに今、目の前でフュージョンに捕まって弄ばれている。あーあ、言ってる側からこりや泣いちゃいそう。おっ、待てよメロディが助けに入った。

「ぶぶっ、サニーが普通の女の子って・・・」

「失礼やな！マーチなんてオカンやないかい！」

「誰がオカンよ！」

笑いを堪えるマーチに言い返すサニー、こっちはこっちで盛り上がっていたり。うん、何て言うかどっちもどっちだと思うぞ。

「いいお母さんですね」

「ちよつとビューティまでー！」

実に緊張感の欠片もない様なこのやり取り、すると坂上さんは堪ら

ず吹き出した。

「あ、あゆみちゃんが笑った！良かった〜！」

「そりゃバカバカしくて笑うしかないだろうって」

「皆がついてるから大丈夫！頑張ろ！」

「——はい！」

一方、彼女の笑顔を見てプリキュアはフュージョンという敵に再び立ち向かう。そんな姿を横目に坂上さんと俺は目的の場所へと急ぐ。

「みゆきちゃん達・・・プリキュアとは友達なの？」

「いや、別に」

「あなたはどうして一緒に来るの？」

その問いに対して足を止め、同じく坂上さんはこちらを見詰める。

「どうしても知りたいんだ。多分、彼処に行けば答えが見つかるかも知れない。俺はそう思ったから」

「えっ、それってあの・・・フーちゃんのところか？」

黒く怪しい霧のようなものを纏う、横浜マリントワー。

「兎に角、行こう。先を急がないと」

それだけを考えて今は進まなきゃいけないんだ。言い聞かせて再び走り出そうとする。

「グルルルルル・・・！」

気配を感じて振り向くと犬の様な姿をしたフュージョンが牙を剥いて佇んでいた。案の定、唸り声をさせると迷いなくそいつは襲ってくる。

「あゆみちゃん、真澄君!!」

ハッピーの叫びが耳に届く頃、フュージョンは猛然と走ってきて俺達に大きく飛び掛かった。

「・・・ん？」

「ふう〜、間に合ったでしゅ〜」

フュージョンの餌食とは成らず。どういふ訳か悲鳴でなく、聞こえてきたのは幼い声。何とそれは小さな妖精と思われる存在。どうも

こいつがたった今バリア的な力で俺達を守ってくれたらしいのだ。

「よかった、よかった〜!」

「んもう、えりかが道を間違えるからだよ」

今度は別の声が出てそっちへ視線を向ける。近くの茂みの陰から徐々に人らしきシルエットが覗き、4人組の少女が並んで現れた。驚くべきは彼女達をさつき見掛けたからだ。

「つぼみちゃん!」

「えりか!」

メロディとリズムが反応する。と、向かって一番左端の背の高い少女が仲間呼び掛け、一斉にアイテムらしき物を手に取った。

「二プリキュアの種、行くですう〜!!」

『プリキュア・オープンマイハート!!』

強い光に包まれ、衣を纏う4人。妖精という存在から与えられる力で変身する。つまりはそう、コスチューム姿にポーズを決める彼女達は正しく伝説の戦士。

「大地に咲く一輪の花! キュアブロッサム!」

「海風に揺れる一輪の花! キュアマリン!」

「陽の光浴びる一輪の花! キュアサンシャイン!」

「月光に冴える一輪の花! キュアムーンライト!」

ピンク、水色、黄、紫を基調とした各々の姿。堂々と名乗り、声を揃える。

『ハートキャッチプリキュア!』

あの時の少女がプリキュア、俺は思い出した。フュージョンに捕まって深い闇の中に呑み込まれようとしていたのを助けてくれたのが彼女だった。光の中、キュアブロッサムが手を差し伸べてくれた。そうか、またプリキュアに救われてたんだな。

「ワイらのプリキュアもおるでえ!」

「行くよ!」

その関西弁は明らかにサニーのものではない。そこには更に別の

少女の姿がある。

『チェインジ・プリキュア！ビートアップ！』

もしかしなくても、これは変身。全く信じがたい話だが別のプリキュアが現れたらしい。光の中を飛び、胸に幸せの象徴とも言うべき四つ葉のクローバーを掲げる4人。ええっと、あなた達は何て言うの？

「ピンクのハートは愛あるしるし！ もぎたてフレッシュ キュアピーチ！」

「ブルーのハートは希望のしるし！ つみたてフレッシュ キュアベリー！」

「イエローハートは祈りのしるし！ とれたてフレッシュ キュアパイン！」

「真っ赤なハートは幸せの証！ 熟れたてフレッシュ キュアパッション！」

フルーツの名を冠した、その名をフレッシュプリキュア。そんな彼女達の掛け声は――

『レッツ・プリキュア！』

成る程、そこは何か変則的なのかな。ピーチにベリー、パインとパッション、フレッシュプリキュアか。しかし、よくもまあこんだけプリキュアが集まったものだ。

「良かったあ、間に合ったあ〜！」

「ピーチが道間違えるから」

バツチリ決めたかと思えば安堵から脱力するキュアピーチさん、ベリーさんに指摘されてますけども何かさっきも同じこと言っただけだったっけ？

「デジャヴか、これ」

「間違えるよね、道って」

「やっぱりそうか」

「「ねえー?」」

「もう、話は後!」

意気投合した2人をパッションが注意し、ブロッサムは仲間と共にフュージョンを一手に引き受ける。どうやらプリキュアの攻撃を全て受け止めて技を吸収してしまいうらしい。それでも慌てるスマイル組に対して先輩達は頼もしかった。

「♪プリキュア・ピンクフォルテウエイブ!!」

「♪プリキュア・ブルーフォルテウエイブ!!」

ブロッサム、マリンが召喚した武器を振るって大きなエネルギー弾を飛ばす。

「♪プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!」

続けてサンシャインは無数の向日葵の様なエネルギー弾を発射し、そこにムーンライトの同じく必殺技が続いた。

「♪プリキュア・シルバーフォルテウエイブ!!」

専用のフラワータクト、シャイニータンバリンなる武器を操って放たれるハートキャッチ組の個人攻撃技が次々に着弾する。標的のフュージョンは吹き飛ばされて海中に沈み、だが又直ぐに復活した。「力を飲み込むならより強い力の方に集まる!」

「フュージョンを私達の方へ引き付けるわ!」

全て承知の上で囿になろうというのだ。力を求めるフュージョンの注意を自分達に向けさせた4人は俺達から敵を遠ざけた。

「私達だって!」

「「ええ!」」

それを見てフレッシュ組も動く。武器を手にしてやはり彼女達も一斉に攻撃を仕掛けた。

「吹き荒れよ! 幸せの嵐!」

「「悪いの悪いの飛んでいけ!!」」

パッションの周囲に羽毛が舞い上がり、ピーチ達3人は「キュアステイック」を掲げる。

「♪プリキュア・ヒーリングプレーア」

「プリキユア・エスパワールシャワー！」

「プリキユア・ラブサンシャイン！」

ダイヤ、スピード、ハートマークを先端で描き、それらをエネルギー弾に変えて放つ。

「フレーツシュ!!」

「プリキユア・ハピネスハリケーン!!」

続けざまにパッションハープによる必殺技が加わり、フレツシュ組の攻撃を受けた別のフュージョンはエネルギーとして吸収する。力を増して彼女達を追いかけ始めた。

「今の内に！」

「大丈夫よ！」

「絶対に辿り着けるわ！」

「頑張つて！」

励ましの言葉に追い詰められていたハッピー達表情が変わった。ここまで来たら後には退けない、誰もがそんな思いに違いない。奮戦する仲間、俺と坂上さんは守られながらマリンタワーへ走り出した。ところが、行く手を遮る障害はまだ存在していた。海上に姿を現したフュージョンが巨大な柱を築く。そして一隻の船を捕えて高々と持ち上げたのである。総トン数11622トン、山下公園に停泊した横浜のシンボルの一つ、氷川丸が空中に浮かび上がった。

続

終章

終章

——例え苦難や困難を前にしようとも、どんなに絶望的な状況でも笑顔でいれるとすればそれはどんな存在なのだろう。戦うべき理由があつて、それをやり遂げるだけの意思を持つ者。自分の中にある強さを力に変える、きつと余程の術を身につけたほんの一握りにしかままならないのだろう。誰もが強い訳じゃない、特別な能力を持たない凡人なんか到底敵いつこない。そうだ、だから結局は逃げるしかなかった。自分の中には弱さだけが、他には何も無かつた。．．．だから。

「もう駄目だ」

何時もそう思う。何をしても努力なんか、全てが無意味に感じられたんだ。どうせ何も変わりはない、いつそ背を向けて逃げる方がいいんだと。あの時もそして今も、これからだって。キュアハッピー達の尽力も虚しく、俺達はこれ以上無いってくらいの絶望的な状況に措かれていた。海面から持ち上がった氷川丸は徐々にフュージョンが敷いたレールの上を滑り始める。それはまるで死のローラーコースターと言わんばかり、恐ろしい結末を迎えるだけの圧倒的な敗北の匂いを漂わせる。フュージョンはあの船を街中に放り込もうとしていたのだが、果たしてそれを食い止める事なんて出来るんだろうか？俺や坂上さんはただこの光景を黙って見ていることしか出来なかつた。駄目．．．遂にその言葉が口を突いて出てしまう、しかしそれこそが俺自身の答え。

「ピースは2人を守ってて！」

「う、うん！」

スマイル達が動き出し、レールの上に飛び乗った彼女達はそうはさせまいと立ちほだかる。あろうことか迫り来る巨大な船体をスマイル組とスイート組で受け止めた。少しずつ、だが街の上空付近で氷川丸は動きを止める。

「止まった．．．」

間違いない。だが、又直ぐに動き出さない保証はない。ハッピー達の体力がある内は抑えておけるだろう、後は何時まで持つかである。すると、案の定事態は万事休すと再び悪化した。フュージョンの攻撃を受けたプリキュアがレールから弾き出されてしまう。ストッパーを失った氷川丸が動き始め、より一層スピードを増してみなどみらいの街並みにそれは近付いていく。

「プリキュアアーーー!!」

妖精の声。戦いの行く末を見守っていた小さな仲間が声高に名を呼んだ。——ドーンという衝撃、地面すれすれに氷川丸が落下。

「ブラック、ホワイト、ルミナス!!」

誰もが諦めかけたその瞬間、寸前に破壊を阻止したのは新たに駆け付けた伝説の戦士達。そのたった3人が氷川丸を食い止め、更に妖精は多くの勇士を呼び寄せる。助けを求める声、希望を託す声援を受けて続々と横浜の地にプリキュアが集まっていった。光の使者に続いて精霊の力を宿し、縦横無尽に空を飛ぶ——

「ブルーム、イーグレット!!」

ふたりは Splash Star。互いのその手を繋いで何倍にも力を高め、フュージョンの攻撃をも防ぐ。

「ドリーム達も!」

暗雲に包まれた空から降り注ぐ五色の光、共に“奇跡の青い薔薇”の力を宿した戦士。

「プリキュア5と、確かミルクイローズ・・・」

妹に見せられたとある雑誌記事に僅かにあつた情報の中にそんな名前があつたと思ひ出した。閃光、フュージョンの集団を瞬く間に押し伏せる。一方、キュアパッションは自身の能力を使って氷川丸を瞬間移動するという芸当まで披露する。

「総勢28名です!」

「プリキュアのみんなー!このあゆみちゃんが彼処まで行きたいって言ってるの!力を貸してー!!」

坂上さんの為に伝説の戦士プリキュア、ハッピー達含めて28人は呼び掛けに頷いた。

「行こう、あゆみちゃん」

「うん！」

こうして危機を一つ一つ乗り越えながら目的地を目指して走り続けた。坂上さんはフーちゃんへ会いに行く為にただ前だけ見据えていた。俺は今はただそれに着いていくことで自分が求めるものに近付こうとする。

「あゆみちゃん、もうすぐだよ！頑張つて！」

息も絶え絶えの彼女をハッピーは励ます。と、行く手を遮るフュージョンの欠片達がまたもや現れる。

「ハッピーー！」

「あー！」

「そんな・・・！」

フュージョンが呑み込もうとした矢先、ハッピーを庇って代わりに坂上さんがその犠牲となつてしまった。

黒くて禍々しいエネルギーに坂上さんは包まれた。一体何が起こっているのか、彼女の名を呼び続けるハッピーの声に反応はない。俺は一步、また一步と自然に前へ進み出るとフュージョンの起こした闇に手を触れる。

「アカン！何してんねん!!」

「真澄君!!」

「真澄ー！」

「っ何を?!」

そんな後ろの声を無視して1人集中した。フュージョンの闇でなく、そこにいる坂上あゆみの声に耳を傾けた。いや、正確には彼女の思いに触れるというべきだろうか。そこにははつきりとした強い意思があった。

「私・・・ひとりぼっちだと思つてた。私の気持ちなんて誰も解つてく

れないって——」

「自分の気持ち……」

「でも違った。私は一人じゃない……！ちゃんと言えば、気持ちは伝わる。必ず。フーちゃん、私の本当の思いを知って欲しい」

坂上さんの心、真の気持ち、その全てが直に伝わってくる。

「絶対、絶対伝えるんだ……！」

そして思いをその意思を強い力に変えていく。坂上さんはフーちゃんへの思いを自らの言葉にして伝えていく。

「フーちゃんの所に行きたい!!」

眩い光が闇を掻き消すように、フュージョンの闇の力を払い除けて坂上さんは今、自分の力で奇跡を起こす。

「想いよ届け！キュアエコー!!」

真っ白なコスチュームと大きなツインテール、この姿は正しく坂上さんがプリキュアへと変身を遂げたもの。29人目——キュアエコーは新たなプリキュア。誰もが奇跡を目の当たりにして喜びを見せた。

「私、どうしてプリキュアに？」

「あなたにも私達と同じ熱いハートがあるからよ」

地上にゆっくり降り立ち、自ら驚きを隠せないでいるとビートがそう答えた。

「友達を守りたい、そんな優しい心があれば女の子は誰だってプリキュアになれるのよ」

守りたい、優しい心がミューズ曰くこの奇跡を実現したという……まさか、本当にそんなことが。

「行こう、フーちゃんの所に」

「ええ！」

横浜マリントワーに向けてハッピーとメロディ、エコーが走る。こ

これから先、フーちゃんへの思いを伝える為にもう一度走る。俺は答えかどうかも、果たしてここまでやって来て何を得たのかも定かではないが1人納得した。

「皆もキュアエコーを応援して欲しいクル！」

「キュアエコーを応援・・・？」

妖精達が掲げた手に光があった。それはフュージョンの闇に向かっていくエコーを真っ直ぐフーちゃんまで導く道標になる。ミラクルライト、とかいう代物はそれを使ってプリキュアに力を送る為にあるらしい。ミラクルライトの光が流れ星の様に降り注ぎ、エコーの前に光の道を作り始めた。

(頑張れ)

応援によって光の道は輝きを強める。エコーは感謝しながらフーちゃんの元に近付いた。

「フーちゃん、私の為にごめんね。でも、もういいの」

「でも、まだリセットしてない」

「違うの。悪いのは私なの。皆に自分の気持ちをちゃんと伝えなくて、学校や町のせいにして・・・」

「友達の望み、叶える」

「もう叶えてくれたよ。フーちゃん、私と一緒に喋りしてくれたよね。一緒に遊んで・・・ずっと一緒に居てくれた。私ね、そんな友達が欲しかったの」

彼女は全ての思いの丈を真っ直ぐに伝える。これまでの2人が過ごした僅かでも尊い時間、共に過ごした思い出を巡らせながら。

「友達になつてくれてありがとう」

「あゆみ、大丈夫か？怖くないか？寂しくないか？」

「大丈夫。だって私にはフーちゃんが居るから」

「あゆみ・・・」

「フーちゃん、大好き」

フーちゃんを抱き寄せると2人は淡い光に包まれる。やがて閃光を発して光の柱が空高く伸び、マリインタワーの天辺から黒い雲を貫いた。町中からフュージョンの闇の力が取り除かれていくと、消滅した

建物や人々は再び元に戻った。

「街が浄化されていく」

「きつと、これが本来のフュージョンなんだよ」

「フュージョンってこんなに綺麗だったんですね」

「すごいっしゅ」

他のプリキュア達も驚きながらこの奇跡を見届けていた。しかし

「リセット・・・リセット・・・!!」

「リセットはしない。あゆみの望みはもう叶った」

「リセットオオ!!」

意に反して一部の闇の力が燻っていた。フーちゃんの言葉にも構わず、坂上さん達へ襲い掛かる。

「皆!!」

「プリキュア、あゆみを守って・・・!」

「ハッピーエンドを邪魔しちゃダメエエエー!!」

スマイルプリキュアが力を合わせて抵抗し、フーちゃんはそんなハッピー達に協力して最後の力を見せる。プリキュア5人の攻撃が闇の力を消し去った。

「フーちゃんをあゆみが住むこの街にいる。ずーっと、あゆみの側にいる」

「ありがとうフーちゃん。ありがとう・・・」

力を使い果たし、消滅した友達に向けて最後の感謝の言葉を伝える。横浜はこうして再び平穏を取り戻した。——ところが、この話にはまだ少しだけ続きがあった。

プロローグ 奇跡の集合

もう「めでたしめでたし」で終わらせてくれ。・・・一騒動を終えてすっかり平和ムード全開の中、俺の後ろから聞き捨てならぬ話が

飛び込んでくる。

「真澄君も一緒に今度遊びに行こうよ」

「俺は別にいいけど」

「よし！決まりだね！」

「いや、そうじゃなくてな」

何ッ、そうか言い方が不味かった。そんな訳で彼女達の待ち合わせの約束に加わることになる。都合のいいことに今度の休日、なんとあのプリキュア全員が予定を合わせて集まるという。いやいや、俺は関係ねえじゃん。・・・ピンポン。そして当日、今朝も早くから家の電話が鳴り響いた。布団の中で丁度今、目を覚ましたところだった。母が応対するやり取りが微かに部屋の中に漏れ聞こえる。直後、俺を呼ぶ声がして二階への階段を上ってくる足音が迫った。

「お友達から電話。遊びに行く約束してたんでしょ」

「・・・あー、ハイハイ」

携帯の電源は切っていた。時計を見ると既に待ち合わせ時間、こりやあ完璧に寝過ごしたな。そもそも乗り気しない約束だったからな。母から渡された子機を耳にあて、寝ぼけ半分で日野の文句を聞き流す。一先ず身支度して家を飛び出すと俺は待ち合わせ場所に向かう。

「おーい！」

「遅いでー！」

「つたく、ハイハイ」

しかしここで疑問なのは駅前集合でなく、近くの商店街である事。しかも星空さん達は一件の古本屋の前で俺を出迎えた。

「ここで何するんだ？」

「フッフ、これから行くんだよ」

「いや、だから今から駅に行くんだろ」

わざわざ寄り道する理由がわからないが星空さんは店先に並んだ本棚をふと指差す。益々理解できないでいると今度はそこから本を一冊抜き取る。やつぱりまだちんぷんかんぷんであるが、ここで彼女は更に右へ左へ棚の中の本を移動させた。隙間を作って配置を変え

ているんだらうか。

「ほな、行こうか」

「だから、今から駅に急ぐんだろ」

「事情は後で説明するからさ」

日野と緑川が背中を押した。すると今度は本棚の辺りから強い光が発せられて星空さんも俺もその中に包まれていった。——何が起きたのか、目を開けるとそこは今見ていた景色とはまるで違っていった。古本屋も商店街も無く、そこか何処かの街並みだという事だけ把握する。

「なあ黄瀬、これは……」

「あつという間でしょ？」

要するに本棚を秘密の通路にした瞬間移動、いや、全く以て理解しがたい。図書館がどうか秘密基地が何とかかって話も頭に入っていない。そういうえばあの時、確か星空さんと一緒に変な場所に入り込んだ事があったっけな。彼女達は今、どうやら遅刻ギリギリらしくて電車でなくこの方法で七色ヶ丘からこつちまで移動した、因みに俺自身もだ。さて、こつちから直ぐ近い集合場所に向かう。

「おーい！みんなー！」

そこには大勢、そりやもう沢山のプリキュア達。山下公園の広場らしきところに集まっていた。星空さんが大きく手を振ると何人かが手を振り返した。スマイル組は合流を果たすと早速と秤に談笑を始める。やや離れて様子を眺めながら俺はなるだけ気配を消しておこうと考えた。しかし——

「こつちこつちいいい！」

「……」

「真澄くーん！」

放つといってくれないか。だーもうっ、呼ぶな！こつち来んな！ズルズルと引きずり出される俺を見て何やらプリキュア達の反応が気になる。

「おー、きたきたー」

「初めましてー!」

「よろしくね」

矢継ぎ早に挨拶の波が押し寄せるので顔はひきつったままだ。何だ、もうこれって逃れるのは不可能か。．．．ともかく、どつと疲れたので一先ず腰を落ち着きたい。直ぐ側にあつたベンチへ力なく座り込むで、そんな俺に北条さんが近付いてきて話し掛けるのだった。
「今のお気持ちを一言!」

そんな無茶振りをしてくる小柄な少女。一言も何も頼むからこんなのは止めてくれとそう言う他にない。今の気持ち? ああ、早く帰らせてよ。

「えりか、困ってるじゃないですか」

「だって気になるんだもん。少年よズバリ、そこんところどーよ?」

来海さんは人をジロジロ見る目付きで如何にも知りたそうにしていた。俺のような、つまりは何の力も持たない一般人が何故に星空さん達に同行していたか。——彼女達、ハートキャッチプリキュアは4人。花咲つぼみさんの他に明堂院いつきさん、そして何と高校生であるという月影ゆりさん。やたら大人びて見える容姿に加えて物腰も落ち着いた雰囲気である。明堂院さんは武道も嗜む生徒会長という、これがまた実に個性的なメンバーだ。

「騒がしくてごめんなさいね」

「今のはあまり気にしなくて良いからね?」

であればお言葉に甘えよう。よし、北条さんに呼ばれて挨拶も済ませた事だしさつさと引つ込むとするかな。

「こんにちは!」

「うおっ」

「みゆきちゃん達と一緒にいた子だよ。私、夢原のぞみ」

「桃園ラブです。改めてよろしく」

キュアドリームとキュアピーチだったろうか、この彼女達は。快活そうでグイグイ来る感じ、正に苦手なタイプだ。プリキュア5とフレッシュプリキュア、なかなか騒がしそうだ。

『いったただつきまーす!!』

俺はここに居る意味を見つけるとしよう。——大勢で一斉に中華まんへかぶり付く姿、主に大口開けて丸呑みにでもするんじゃないかという勢いを見せる何人かの女子。

「ムグツ!?!」

「ほらほらしっかりして!」

全くだ。案の定、お約束かと言わんばかりに喉に詰まらせて窒息寸前だ。そんな光景を眺めてつくづく何を見せられているんだと疑問に思う。

「つてお前もかよっ」

「ゲホツゲホツ・・・ありがどっ」

「なあ星空さん」

直ぐそばで目の前と似た状況をソツコー再現していたので、彼女を面倒見よく介抱してやってから尋ねた。

「何で俺を連れてきたんだよ。俺は関係ないだろ」

「そんなこと無いよ。真澄君だって皆と一緒に遊んだらきつと楽しいと思う」

「いや、だから一緒に遊ぶとか訳がわかんねえよ」

「わかつとらんなあ自分。関係、大アリや」

中華まんの包みを手にやって来た日野がチチチとこれ見よがしに人差し指を振った。

「どういうことだよ」

「どうもこうも。自分で確かめて来るんやな」

俺の背後に回ってグイグイと背中を押す時の表情で嫌な予感しかない。最前列に持つてかれた時の自分はどんな間抜け面なんだろう、きつと酷くアホっぽいぞ。

「本当にビツクリしたよ。あゆみちゃんもすごかったけど」

「あのフュージョンが襲ってくる中を走り続けるなんて」

えーつと・・・北条さんと調辺さん、何やら2人が話す言葉に耳を傾けていたその他の視線が集まる。

「あなた度胸があるね」

「あゆみちゃんを助ける為にそこまでするなんて」

誰かと思ったらひよつとして俺についての話なのかなこれ。美墨なぎさ、日向咲さんが驚きの声と共に関心を向けてきた。

「真澄君、だっけ。ホントに凄いね、ビックリだよ」

「いやあー……。凄いのはそつちじゃない?」

「え、私達が?」

自覚無しかよ、プリキュアなのに。あんな怪物と普段から戦ってる癖にそういえば皆そんな感じだ。そうだ、こうして見ていると大して違わない。何処にでもいる普通の人が、友達同士でお喋りしたり遊んだりしているだけだ。

「プリキュアなのに」

「うーん、そうだけど……。特別なことなんて何も無いよ。あたしとか美希たんやブツキー、せつなだって皆同じだよ」

「私達はただ、そうしたいから立ち向かうんです。どんなに怖かったり、ちよつぴり不安でも」

「大切なものを守るために。自分に出来ることを私達はする」

だけど変だやっぱりおかしい。その自信はどこからやって来るんだ、何でそんなこと言いきれるんだよ。——俺は守れなかった。何の力も無かったあの時がそうだった。たった1人で何が出来たっていうんだよ、逃げるしかなかったんだ。

「私は一人じゃない」

キュアエコーに変身した坂上あゆみの言葉。何故かそれが頭の中にふと浮かんで過る。青い空の下、俺を含めたプリキュア達の横浜探訪はその後もまだ続いた。楽しげで騒がしい、そんなどこにでもありそうなごく普通のありふれた時間はあつという間に過ぎ去った。